

高齢期リロケーション研究における

「場所」の構築過程の検討

—ケアハウス入居者を情報提供者とした質的研究—

坂上 真理

---

## 要 旨

本稿は、リロケーションをした高齢者の個別的で質の高い生活を支える今後の居住支援への示唆を得ることを目的としている。ここでは、高齢者が自分らしい生活を継続する際には、鍵となる「場所」が存在すると仮定し、ケアハウスへリロケーションした高齢者の「場所」の構築過程を、質的研究法により検討した。具体的には、鍵となる「場所」の意味、それらの「場所」の構築条件、そして「場所」の構築パターンや時間的変容の検討を行った。そしてリロケーション後の「場所」の構築過程に関する仮説モデルの提案を行う。

その結果、本稿では鍵となる3つの「場所」が見出された。すなわち、3つの「場所」とは、「馴染みの場所」、「受けとめられる場所」、「与え合う場所」である。3つの「場所」は、主体、物理的な場所、その場所を共有する成員、そして主体と成員達の行為や活動が空間的・時間的文脈性を帯びながら互いに織り合うことにより、構築されていった。また、これらの「場所」の構築にあたっては、「場所」の構築に関わる要因との日常的な接触を通じた、探索が重要であることが認められた。探索を繰り返すことによって、構築条件間の親和性を見出し、「場所」の意味を付与できるか否かが、「場所」の構築を決定づけるものと考えられた。さらに、「場所」の構築には、「場所」の構築に直接関わる条件の探索だけではなく、構築を妨げる干渉の見極めと対応を同時に行う必要があることが認められた。

「受けとめられる場所」は、情報提供者の受動的な関係の特徴とし、この「場所」を管理する成員によって偶然に構築される不安定な「場所」であった。また、「与え合う場所」は、互酬的な双方向の関係を特徴とし、「馴染みの場所」は、そこに関わる成員全てが能動的な立場をとり、その構築は定例化していることが多く、安定して構築されていた。

現在の高齢者支援では、高齢者に安心感や安全感を与える居住環境や活動の機会の提供を目的としている。しかしながら、物質的な場所、成員、活動をそれぞれ分離して捉えており、それらが相互作用して織り成す親和性までは考慮されていない。そのため、高齢者自身が、場所との接触を繰り返すことによって、自分自身にとって親和性の高いものを探索し、自分にふさわしい「場所」を構築することへの支援は現状では行われていない。しかしながら、本稿における「場所」の構築過程の検討では、個別的でより高次の欲求充足を図るには、親和性の探索が重要であることが見出された。そこで、個別性を尊重した居住支援を展開するためには、予め固定化された物質的な場所、成員、活動を提供するのではなく、探索しながら構築していく創出の過程を重視した支援を検討する必要がある。

# 目次

序章	1
第1節 本稿に係る背景	1
第2節 本稿の目的	3
第3節 本稿の構成	3
第1章 高齢期リロケーション研究と「場所」概念を用いた検討の意義について	6
第1節 我が国における高齢期の特徴	6
1. 見本なき高齢期とライフサイクルの変化	6
2. 高齢期の住まい方と移動実態	9
3. 我が国における高齢期居住施策の変遷	13
4. 現在の高齢期の住まい	14
第2節 高齢期のリロケーション研究と「適応」概念の再考	22
1. 高齢期のリロケーション研究の再考	22
2. 適応概念の再考	39
3. リロケーション研究と「適応」概念	44
第3節 場所論の省察と「場所」の定義	52
1. 場所概念の多義性	52
2. 場所と空間の経験	57
3. Uexkullの環世界とその多元性	61
4. 本稿における「場所」の定義	63
注 釈	67
第2章 質的研究方法の選択理由と調査設計	68
第1節 質的研究の特徴と選択理由	68
1. 質的研究の特徴	68
2. 質的研究の採用理由	70
3. 代表的な質的研究方法	71
4. 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの採用理由	76
第2節 本稿調査における調査設計	79
1. 本稿調査の研究設問	79
2. 本稿調査におけるデータ収集方法	79
3. 本稿調査におけるデータ分析方法	86
4. 倫理的配慮	87

5.	質を高めるための戦略.....	87
6.	本稿調査が目指す到達点.....	92
第3章	ケアハウス入居者の「場所」の構築過程.....	94
第1節	構造的側面からみた情報提供者の場所.....	94
1.	領域分類からみた情報提供者の場所.....	94
2.	Aケアハウスの概要と変遷.....	96
第2節	ケアハウス入居者の3つの「場所」.....	101
1.	「馴染みの場所」.....	101
2.	「受けとめられる場所」.....	115
3.	「与え合う場所」.....	125
第3節	3つの「場所」の構築と喪失の過程.....	138
1.	「受けとめられる場所」における専門的な職員達	140
2.	リロケーションによる入居者達のギャップ — 自己のゆらぎ.....	141
3.	「与え合う場所」の構築における成員の変化 — 入居高齢者から〇〇さんへ..	142
4.	「受けとめられる場所」の変遷 — 職員から〇〇さんへ.....	147
5.	ケアハウス内における「馴染みの場所」の構築.	150
6.	施設からの脱出— (「場所」の漂流).....	151
第4節	3つの「場所」を構築した典型事例の紹介....	158
1.	事例の選択理由とデータ収集・分析方法.....	158
2.	荒川さんの紹介と著者との関係.....	158
3.	荒川さんの「場所」の構築過程.....	159
第4章	考察と結論	
—	「場所」の構築過程検討の成果と高齢期の居住支援への提言.	173
第1節	本稿調査の成果と考察.....	173
1.	「場所」の構築過程の特徴.....	173
2.	リロケーション先行研究との対比からの考察...	184
第2節	本稿のまとめと今後の居住支援への提言.....	209
1.	本稿のまとめ.....	209
2.	今後の高齢期居住支援への提言.....	211

資料

## 序 章

### 第 1 節 本稿に係る背景

「... 引越し後しばらくの間，夫人はサービスハウスになじめなかった。ここでは，扉を開くといきなり他人にさらされるような感じがした。昔の家の 2 階に残してあった夫の部屋も失ってしまった。『このサービスハウスには夫はついてきてくれなかった』という気がした。夫人は寝室のチェストの上に，かつてはなかった夫の写真を置いた。引越しの頃はまだ冬であったが，夫人はストックホルム郊外にあるサマーハウスへ週末ごと出かけた。そこには依然として，夫とともに過ごした時空があった」(外山，1996，p.217)。

近年，高齢者個々が送ってきた生活を尊重し，その継続性を確保するための高齢期居住支援の検討が重要な課題となっている(早川，2005)。我が国における高齢期の居住施策は，1980年代の福祉改革以降在宅福祉の推進が施策の中核におかれてきた。1986年の老人福祉法の改正によってショートステイ事業とデイサービス事業が法定事業化されたことを皮切りに，高齢期の安心・安全な生活を保障するための支援として，主に住居や施設建造物，保健福祉の対人サービス，そしてそれを支える制度の面から整備が展開されてきた。その後，1990年代以降，特に2000年の介護保険施行以降は，「個人の自立と尊厳」が重視され，居住環境の質的充実に向けた本格的な取組が開始された。

さらに，2003年に出された『2015年の高齢者介護』では，在宅生活の継続が一層重視されると共に，これまでの「自宅」か「施設」か，といった二分類にとらわれない「新しい『住まい』」が提示された。この「住まい」は，自宅や施設以外の多様な「住まい方」の実現を目指すものであり，安心して住める「住まい」への「住み替え」という選択肢の提示や「自宅」同様の生活を送ることのできる「介護サービス付きの『住まい』」がこの中に含まれている。このような「住まい」の提示により，個人の生活を尊重した住まいの整備が居住施策の中に明確に位置付けられたと言えよう。ただし，この「新しい『住まい』」も未だ固定した，ある種画一的な器としての「住まい」の提言に留まっている。さらに，「住み替え」について言及されてはいるものの，生活拠点である住まいと活動拠点との関連性については触れていない。そのため，現状では施設での生活と地域での生活は分断されたままであり，これらの物理的構造の垣根を超えて，

「具体的にどう生活を営むのか」といった暮らし方の提案には至っていない。また、現在の居住施策や居住支援では、個々人の生活がどのように生じるのかといった点には触れていない。そのため、個人の生活を尊重した「住まい」の必要性が謳われてはいるものの、その実現には至っていない状況にある。『2015年の高齢者介護』における多様な「住まい方」の提言は、高齢期の充実した生活を支援すると同時に、高齢期にリロケーションする機会を増加させる施策でもある。そこで、「個々人が具体的にどう生活を営むのか」、あるいは「個々人の生活がどのように生じているか」を検討することが益々重要になっている。

ところで、冒頭の事例でも示したように、我々の生活は住まいやそこにいる人々と密接な関係をもっている。ある住まいで長年生活すると、その住まいに対する特別な愛着が生まれ、住まいと自分とが一体化していることがある。また、住まいに限らず、我々は、時として自己の経験が深く根付き特有の意味をもつ場所の存在に気づかされることがある。多くの人には、そこにいとホッとされている場所や、自分の時間を楽しめるお気に入りの場所というものがある。勿論、その楽しみ方は人それぞれである。1人になって好きな趣味に没頭していることもあれば、気の置けない仲間と共に時間を忘れておしゃべりに興じていることもあるだろう。さらに、同じ場所や空間が、そこに関わる人によって異なる経験をもたらすこともある。ある人にとっては心地良いと思われる場所が、違う人にとっては悲しい思い出を想起させる哀愁漂う場所になることもある。

そして、高齢者にとってもまた、長年過ごしてきた場所と切り離されることは、重大な影響になる。「ある人々が、新しいコートのために、形の崩れたコートを捨てるのをいやがるように、ある人々—特に老人たち—は、新しい住宅開発のために、古くからの隣近所を捨てるのをいやがるのである」(山岸, 2001, p.171)。

本稿は、このような人々の経験と一体化した「場所」に焦点をあてながら、高齢期の個別的で充実した生活を支える「場所」の構築過程を検討するものである。本稿における「場所」とは、単なる物理的な場所や地理的位置を示す概念ではない。ここで扱う「場所」とは、人々の態度や価値が凝結し、人々の内的経験による意味が付与された場所である。本稿における「場所」は、人々の生活に促進や抑制として作用する物理的な構造を超えた存在である。すなわち、人々の生活が営まれ、さらなる生活が生まれいずる舞台であり、これまでの生活が蓄積された歴史でもある。そして、これらの「場所」は私たちの日常生活の中にあまりにもよく溶け込んでいるため、人々はその存在に気付かないことが多い。これらの「場所」を失いかけて、その存在や意義に気付くことも決して稀ではないのである。

近年においては，高齢者と家族のライフスタイルの変化や，多様な価値観の出現，そして高齢者保健福祉サービスの充実によって高齢期にリロケーション（転居）を経験する者の数が増えている．このライフイベントは，住み慣れた居住環境を離れ新しい環境下での生活の再編を要するために，状況によっては高齢者や彼らの生活全般にネガティブな影響を与えうる出来事である．そのため，高齢期支援では，高齢者個々が送ってきた生活の継続性を確保することが重要な課題となっている．本稿では，先行して行った質的研究の分析（坂上，2004a）から，継続的な生活を実現するには鍵となる「場所」が存在すると仮定し，それら鍵となる「場所」の構築過程の検討を目指している．これにより，リロケーション後に充実した質の高い生活が継続できるための支援策を，「場所」の構築過程の点から提案できるものと考えている．さらに，本稿では鍵となる「場所」は，日常生活の中に繰り返し現われるものと考えている．しかし，時とともに変化することも考えられ，この時間的変化もまた，高齢期の生活の質に影響を及ぼすと考えられる．

リロケーション後の生活を「場所」概念を用いて検討する際には，生活拠点と活動拠点との有機的なつながりを重視している．さらに，「場所」概念を用いた検討では，住まいに対する基本的な見方も，従来の見方とは違っている．つまり，本稿では住まいを，物質的な器や物理的な構造として捉えていない．むしろ，高齢者個々の状況と連動しながらカスタマイズされていく可変性をもった住まいであり，個々の暮らしの再編成に関わる「可能性の源」として捉えている．

## 第2節 本稿の目的

本稿は，リロケーションをした高齢者の個別的で質の高い生活を支える今後の居住支援への示唆を得ることを目的としている．ここでは，高齢者が自分らしい生活を継続する際には，鍵となる「場所」が存在すると仮定し，ケアハウスへリロケーションした高齢者の「場所」の構築過程を，質的研究法により検討する．具体的には，鍵となる「場所」の意味，それらの「場所」の構築条件，そして「場所」の構築パターンや時間的変容の検討を行う．そしてリロケーション後の「場所」の構築過程に関する仮説モデルの提案を行う．

## 第3節 本稿の構成

本稿は，全4章より構成されている．

第1章は，本稿の視座とその意義を提示することを目的としてい

る。すなわち、この章では、本稿の中心概念である「場所」の定義と、この概念を用いて高齢期のリロケーション後の過程を検討することの意義を示す。そこで、第1節では、現在高齢期の特徴と我が国における高齢期居住施策の歴史的変遷についてまとめる。それにより、現在の高齢期リロケーションの特徴を理解する。続く第2節では、これまでの高齢期のリロケーション研究とその概念的基盤とされてきた「適応」概念の定義をレビューし、高齢期リロケーション研究の到達点と課題を明らかとする。さらに、これまでの「適応」概念に加えて、「場所」概念を用いることの意義を示し、この章の最後では本稿における「場所」概念の定義を行う。その際には、特に人文主義的地理学者の Tuan の「場所 (place) 論」(=1991, =1993) と Uexkull の「環世界論」(=2005, p.19-21) を用いる。現在、場所概念は、多義的な概念と捉えられているが、その多義性を巡っては、1970年以降アメリカの地理学者を中心にした議論が展開されている。Tuan は、場所や空間における経験について論じ、場所の多義性の議論に一石を投じた研究者である。特に Tuan は、空間と場所に対する人間の感情を理解し、様々な形態の経験(感覚運動的経験, 触覚的経験, 視覚的経験, 概念的経験)を考慮にいれつつ、空間と場所を複雑な感情の心象として理解しようとした(寺本, 2003)。

他方、Uexkull の環世界論は、「主体が主体として生きる固有の世界」(河本, 1999, p.240)を描くものである。環世界論では、感覚・知覚的経験を初めとする内的な世界と、行為や活動による実際の相互作用との連関によって環境に意味が付与され、主体それぞれに固有の世界が構築されることが示されている。さらに、主体の客体に対する関係は機能環(Uexkull, =2005, p.20)によって説明されている。Uexkull の理論を用いて我々の経験と一体化した「場所」を問うことは、人と環境がどのような機構によって固有の世界を作り上げているかを理解するうえでの糸口となる。さらに、Uexkull の理論では、感覚・知覚的経験といった内的な世界と、行為や活動による実際の相互作用、そして内的な世界と実際の行為を結ぶ「記号」といった次元の異なる側面が含まれている。つまりここで扱われる環境とは、客観的な環境の属性として説明される現実的な環境か、あるいは知覚や思考される環境として説明される想像的な環境かのいずれかに分類されるものではない。ここでは、その両者が有機的に連関することによって生じる多元的な環境を想定している。そして、本稿における「場所」の定義にも、この多元性を取り入れることとした。そうすることで、従来の支援のように、多数の人々に安心と安全を与えることができると予測される既成の「器」を提供する支援に代わって、人と環境の一体化によって生じる個々人の生活



の創出過程を支援することができる考えた。

第2章と第3章は、第1章の視座を用いて行った、ケアハウス入居者のリロケーション後の「場所」の構築過程についての質的研究の結果を述べる。まず、第2章では、質的研究法の選択理由と調査設計を示す。第2章第1節では質的研究並びに本稿調査で用いた修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの特徴と選択理由を述べる。そして、第2節では、本稿調査の調査設計を示す。今回採用したグラウンデッド・セオリー・アプローチは元々、GlazerとStraussらが手がけた大規模な研究プロジェクトの副産物として生まれたものである(木下, 1999)。その後、StraussとCobin(=1999)や木下(1999, 2003)によって分析手順も解説されている。他の質的研究と比べると、分析手順がより構造化されているという特徴を有する。ただし、この方法には批判的な指摘もあるため、今回その補完に用いる方法も示す。第3章では、本稿調査によって得られたケアハウス入居者のリロケーション後の「場所」の構築過程について述べる。具体的には、情報提供者にとって自分らしい生活を継続するための鍵となる「場所」の意味、それらの「場所」の構築条件、そして「場所」の構築パターンや時間的変容について得られた知見を提示する。

最後の第4章では、第3章の結果を先行研究によって再確認し、「場所」の構築過程に関する仮設モデルを提示する。さらに、この章の後半では、これまでの議論から、高齢期の個別的でより質の高い生活を支える今後の居住支援への提言を行う。

## 第1章 高齢期リロケーション研究と

### 「場所」概念を用いた検討の意義について

第1章は、本稿の視座とその意義を提示することを目的としている。ここでは、本稿の中心概念である「場所」の定義と、この概念を用いて高齢期のリロケーション後の過程を検討することの意義を示す。

第1節では、現在の高齢期のリロケーションの特徴を理解することを目的としている。この節では、現在高齢期の特徴と我が国における高齢期居住施策の歴史的変遷、そして現在の高齢期の住まいについてまとめる。第2節では、これまでの国内外の高齢期リロケーション研究をレビューし、リロケーション研究の到達点と課題を明らかにする。さらにここでは、これまでリロケーション研究の概念的基盤とされてきた「適応」概念のレビューも行い、今後のリロケーション研究において「適応」概念に代わって「場所」概念を用いることの意義を示す。そして、この節の最後では、本稿における「場所」概念の定義を行う。

### 第1節 我が国における高齢期の特徴

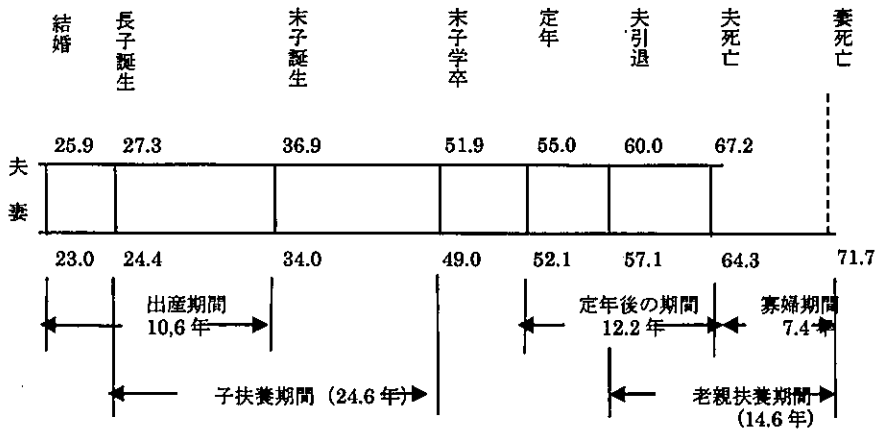
#### 1. 見本なき高齢期とライフサイクルの変化

1994年、我が国は65歳以上の人口が14%を超える高齢社会を迎えた。医学の進歩や公衆衛生の進展により平均寿命は伸び続け、平成16年には男性78.6歳、女性85.6歳となっている（厚生労働省、2004）。我が国の高齢化のスピードはほかの先進諸国に比べてきわめて早く、社会的にも個人的にも十分な準備がなされないまま高齢社会を迎えた。そのため、医療福祉の社会資源はもとより、人々の老いに関する意識にも大きな開きがある（竹中、2000）。

図1は、近年におけるライフサイクルの変化を、昭和25年と平成4年との比較によって表わしたものである（旧厚生省大臣官房政策課、1997、p.6）。現在のライフサイクルの特徴は、定年後の期間や、子供が独立した後に夫婦のみで過ごす期間が長くなっていることである。これには、長寿化の他に、人々の平均初婚年齢の上昇によって、合計特殊出生率が3.65人（昭和25年）から1.32人（平成14年）に減少し、出産や子育てにかかる期間が短縮している点に関与している。さらに、夫の死後に女性が1人で過ごす期間（寡婦期間）も長くなっている。このように、現在の高齢期は、社会的

な役割から離脱した状態で過ごす期間が長期化していることが理解される。一般的に、高齢期は加齢とともに経済状況や社会関係、心身機能の変化が生じ易い時期と言われている。例えば、社会関係の変化では定年退職の他にも、親と子の援助関係が逆転する「役割逆転 role reversal」等の報告がある（染谷，2000，p.6）。このような社会面の変化は単独で出現するのではなく、機能面や経済面の変化と一緒に生じることが多く、高齢者に深刻な問題を引き起こす可能性が高い。そのため、高齢者はこれまでとは異なる新たな状況の変化に再適応することが求められる。一方、現在の高齢者は、急激な高齢化のため、前人未踏の世界を生きる者である。言い換えれば、現在の高齢者とは、適応問題を抱える可能性を持ちながら、定年や子供の独立により社会的な役割から離脱した後、見本なき高齢期をいかに生きるかが問われている存在と言えよう。

〈昭和 25 年〉



〈平成 4 年〉

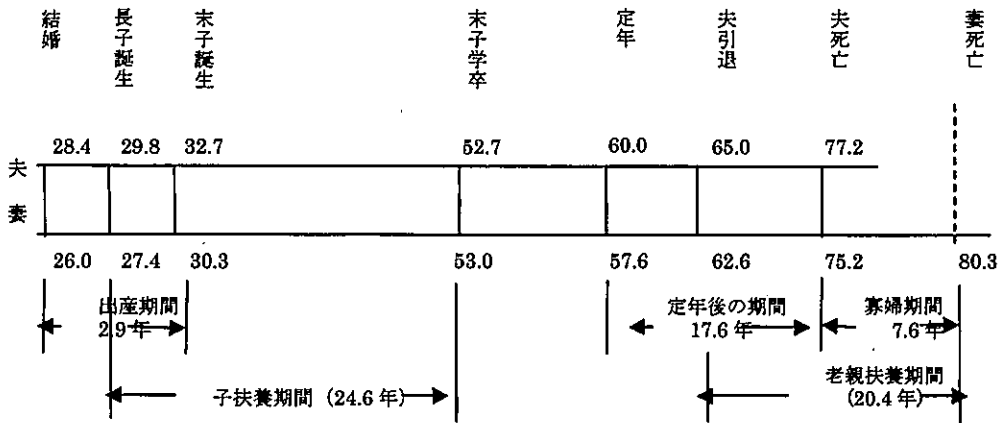


図 1 ライフサイクルの変化 (モデルケース)

(旧厚生省代印官房政策課, 1997, p.6 より転載)

## 2. 高齢期の住まい方と移動実態

ライフサイクルの変化とともに、我々の生活の土台とも言える人々の住まいに関わる実態も変化してきている。これまでの高齢期の暮らし方と言え、子供夫婦と同居することが極普通の生活であった。例えば、高度経済成長期に入る1960年以前には、65歳以上の人の8割強が子供と同居しており、その3分の2が長男夫婦との同居であった。しかしその後、同居率は1年でほぼ1%ずつ低下し、99年には5割を切るまでになっている(袖井, 2002)。表1は、1980年から2000年までの高齢者の家族との同居状況を示している(内閣府, 2002, p.10)。表1からは、1980年の調査開始時より、「配偶者あるいはパートナー」と同居している者の割合が年々高くなっていることがわかる。さらに同居状況の変化をみると、以前は高かった「既婚の子供」との同居率は減少傾向にあり、代わって「配偶者あるいはパートナー」との同居率や「同居人なし」の単身世帯の割合が増加している。この表からも、現在では核家族で暮らすことが1つの規範となり、核家族化が進んでいることが見て取れる。子供との別居理由としては、第2次大戦後の家制度の廃止による家族像の変化と、高度経済成長期以降の産業構造や就業構造の急激な変化の2点が指摘されている(袖井, 2002) 1)。

表1 高齢者の家族との同居の状況

(内閣府, 2002, p.10 より転載)

(複数回答) (%)

	昭和55年度	昭和60年度	平成2年度	平成7年度	平成12年度
1. 配偶者あるいはパートナー	65.4	69.5	77.4	69.8	72.5
2. 既婚の子供(男)	41.0	40.4	33.3	32.1	25.2
3. 既婚の子供(女)	9.2	10.2	8.6	9.6	8.1
4. 未婚の子供(男・女)	18.7	16.0	16.3	17.2	20.5
5. 子供の配偶者あるいはパートナー	34.0	34.8	26.8	27.3	21.2
6. 孫	41.0	38.0	33.3	30.2	23.2
7. 兄弟・姉妹					1.1
8. その他の家族・親族	2.9	4.8	4.3	5.9	4.8
9. 家族・親族以外の人	0.7	0.4	0.2	0.8	0.4
10. 同居人なし	5.7	6.7	5.6	8.0	9.6

注) 7は第1回～第4回までの質問はなかった

子供との同居や高齢期の住まい方に対する意識の変化は、若年世代にも現われている。加藤ら（2003）によると、満18～69歳の男女を対象に行った調査では、高齢期に1人になった時に同居を希望する者の割合は年々減少し、代わって近居を望む者の割合が増加していることが報告されている<sup>2)</sup>。さらに、介護が必要な状態になった場合については、子供宅での介護よりも、外部サービス・施設利用を望む者の割合が高いことが報告されている。このような変化は、家族介護志向から介護の社会化への志向性として特徴付けることができる（染谷，2000）。

そこで高齢者の移動実態をみると、核家族化の進行に伴い移動率にも変化が認められる。これまでの人口移動に関する考え方は、65歳以上の高齢期には移動がほとんどみられないというのが長い間の常識であった。しかし、1980年代になり、特に大都市圏で高齢人口の移動が顕在化しはじめたことが指摘されている（エイジング総合研究センター，1999）。平成12年の国勢調査における高齢者の移動率（図2）をみても、平成2年の調査結果に比べてその移動率が高くなっている<sup>3)</sup>。さらにその理由には、前期高齢者の場合には「退職」など職業上の理由や「家族との同居」といった家庭の理由を、そして後期高齢者の場合は「施設入居」「要介護状態」が指摘されている（児玉，1998，p.241）<sup>4)</sup>。これらから、現在は住まいの移動つまりリロケーションを経験する高齢者が増えており、今後も平均寿命の延びや住まい方に対する意識の変化によって移動の機会が増加していくことが予測される。

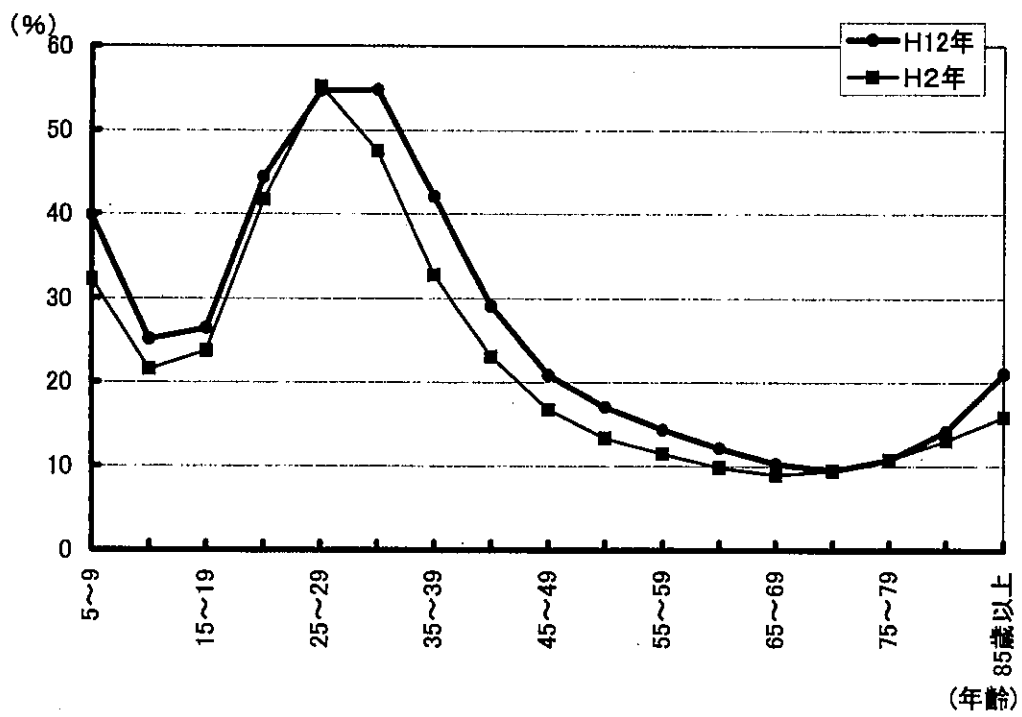


図2 年齢別人口移動（厚生労働省，2004より作成）



ところで、人々にとって住まいとは生きていくうえので基盤である。そのため、住まいが変わることやその後の適応状況は人々の暮らし全般の質にも多大な影響を与えるものと考えられる。しかも、前述したように、現在の高齢者は機能面や社会面等の変化を複合的に有しながら、見本なき高齢期の過ごし方を模索する存在とも考えられる。このような高齢者に対して、リロケーションは残された過去とのつながりの糸を切断しうる出来事である一方、リロケーション先は薄れゆく社会関係に新たな可能性をもたらすことも考えられる。リロケーションがより深刻な適応問題を起こすのか、あるいは見本なき高齢期の過ごし方に新たな示唆を与えるのかは、支援の方法に掛かっていると言っても過言ではない。

次に、我が国では高齢期の住まいに対して、どのような施策がとられてきたのかを把握するために高齢期居住支援の歴史的変遷と現状について述べる。

### 3. 我が国における高齢期居住施策の変遷

我が国では、1970年代以降の急速な高齢化に対応するため、1986年の『長寿社会対策大綱』を皮切りに政府による本格的な高齢社会対策が始まった。1988年には、旧厚生省と旧労働省より『長寿・福祉社会を実現するための基本的な考え方と目標（いわゆる福祉ビジョン）』が提出され、福祉サービスに関連しては「住み慣れた地域で安心してくらすような地域環境の整備」と、「ゆきとどいた保健、医療、福祉サービスを受けつつ可能な限り家庭や地域で生活できること」を目指す施策が具体的な目標数によって提示された。その後高齢期居住支援の重要性は、1995年の『高齢社会対策基本法』の中にも対策上の基本的な4つの柱の1つとして明確に位置付けられ、その基本方針は今日にも継続されている。

むろん、それより以前にも高齢期に対する居住施策が行われている。我が国における戦後の高齢者福祉は、1950年に大幅改正された生活保護法の制定など、生活に困窮するものに対する緊急対策から始まったと言われている。生活保護法では、被保護高齢者を収容保護する「養老施設」が規定されている。その後1963年の老人福祉法によって、養老施設は養護老人ホームとして引き継がれ、新たに特別養護老人ホームと軽費老人ホームが加えられた。さらに、1987年の老人保健法改正時には、必要な医療ケアと日常生活サービスを提供する老人保健施設が創設されている。他方、在宅サービスに関しては、1978年に老人短期入所生活介護（ショートステイ）が、そして1979年には通所介護（デイサービス）事業が創設され、これらは1986年の老人福祉法改正時にそれぞれショートステイとデイ

サービスとして法定化された。

さて、序章でも述べたように、1980年代以降の高齢期の居住施策は、在宅福祉の推進が施策の中核に置かれてきた。その節目となるのは、1989年の『高齢者保健福祉推進10か年戦略（通称、ゴールドプラン）』と1995年の『高齢者保健福祉推進10か年戦略の見直し（通称、新ゴールドプラン）』である。これらのプランによって在宅福祉対策や施設福祉対策に関する具体的な計画の推進が図られ、その結果高齢者保健福祉の基盤整備が急速に強化されていった。これ以外にも、1990年の老人福祉法改正時の在宅サービスを推進するための条件整備<sup>5)</sup>や、同じく1990年の在宅介護支援センターと1992年の老人訪問看護制度の創設により、在宅医療の推進や在宅ケアの向上など保健・医療・福祉にわたる総合的ケアの確立が推し進められている。その後、ゴールドプランと新ゴールドプランは、1999年の『今後5か年間の高齢者保健福祉施策の方向（通称、ゴールドプラン21）』に引き継がれ、これにより量的拡充後の質的整備に向けた取組みが行われている。居住施策関連では、施設の小規模化・多機能化という視点から居住環境の改善が志向されている。

2000年には介護保険法が施行され、我が国の高齢社会対策が当事者主体へと大きな転換を迎えることとなった。さらに、最近の取組みとしては、『ゴールドプラン21』後の方針として、2003年に『2015年の高齢者介護』が打ち出されている。ここでは、介護保険制度施行後に新たな課題として浮き彫りになった要介護認定者の増加や在宅サービスの脆弱性といった課題に対処するために、高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けた方向性が提示された。また、居住支援関連では、「生活の継続性を維持するための新しい介護サービス体系」として高齢期の住まいと住まい方に関する方策が示された。これらの特徴をみると、施策の中核はこれまで同様、慣れ親しんだ地域での在宅生活の継続である。ただし、『2015年の高齢者介護』では、住まいや住まい方に対する考え方が変わってきている。

すなわち、これまでの居住施策では、施設と在宅はそれぞれ異なるサービス体系として別個の方策が打ち出され、言わば平行線的にサービスの整備が進められてきた。しかし、『2015年の高齢者介護』では、施設の小規模化・多機能化を含む切れ目のない在宅サービスの提供や、自宅や施設以外の多様な住まい方の実現が提案される等、これまでの施設か在宅かといった二分類にとらわれない新たな住まいの考え方が広がっている。次に現在の高齢期の住まいの概要を示す。

#### 4. 現在の高齢期の住まい

現在の高齢期の住まいを述べる前に、高齢期の住まいの変遷につ

いて若干触れたいと思う。近代の高齢者福祉施設は、明治維新の窮民救済施設や、慈善事業施設の1つである養老院に始まったと言われている。後者の代表には、聖ヒルダ養老院や神戸友愛養老院などがあり、これらは貧困老人を対象とする施設であった。その後、1929年に救護法が成立し、日本の救貧法としてはじめて居宅保護原則が明記され、収容保護が位置づけられることとなった（山本、1999）。この養老院は、1950年の生活保護法の制定と1963年の老人福祉法によって、「養老施設」、「養護老人ホーム」へと引き継がれていった。その後の変遷は、前述の通りである。

図3には、施策の方針から見た高齢期の住まいの移り変わりを示した（鈴木、2005、p.562）。

～1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年以降
「放任」または、 血縁に支えられた 在宅生活	「在宅サービス」の登場と拡充 家族ケア+社会的ケアによる 在宅生活		社会的ケアを機 軸とし「個人の 自立と尊厳」を 重視した在宅生		
各福祉法に 基づく「施 設」の創設	施設の量的 拡充	施設の量・質 の拡充 (生活の場)	施設の「在宅化」 (小規模・ 多機能化)		
				「自宅でない自 宅」 グループホーム 等の登場	

図3 高齢者の「住まい」の変遷（鈴木，2005，p.562より転載）

我が国の高齢期の住まいは、先の養老院のように収容保護を目的とする施設から始まったと言われている（小笠原，1999）。収容の場から現在言われている生活の場へと施設の目的が大きく転換されたのは、1977年の『今後の老人ホームのあり方について』の答申からであり、この答申によって豊かな人生への保障を意図するような生活施設への脱皮が提言された。さらに、近年は、施設の在宅化やグループホームといった新たな住まいの出現によって、これまでスローガンとして扱われ、漠然としてしか捉えられてこなかった「生活の場」の意味が、本格的に追求され具現化し始めた時代と言える。

表2は、現在の高齢期の住まいの一覧を示した（藤ヶ谷，2004，p.25）。今日の高齢期の住まいの目的をまとめると、援助機能から4つの側面があげられる。すなわち、経済・住宅保障としての「生活基盤の保障」、医療（看護）・介護・家事としての「本人の固有の生活機能保障」、社会生活・趣味・文化の提供としての「社会生活支援」、家族関係不全・扶養困難の調整としての「家族関係支援」である（小笠原，1999）。

表2 高齢者の住まいの一覧

(藤ヶ谷, 2004, p.25 より一部改変)

種類		要介護 者可ナ	自立者 向ナ	対象者	サービス	費用
特別養護老人ホーム		○		要介護以上	日常生活世話 衛生管理 健康管理 機能訓練他	介護保険割 食費 日常生活費
老人保健施設		○		要介護以上以上 入院の 必要なし 施設費必要有	食事 生活介助 看護 機能訓練 レク	介護保険の割 食料 雑費 日常生活費
介護療養型医療施設		○				
認知症高齢者グループホーム		○		要介護以上 認知症 共同生活可能	食事 入浴 排せ介助 金銭管理 指導 健康管理	介護保険の割 家賃 食費 光熱費 共益費
軽養老人ホーム	ケアハウス	○	○	60歳以上 自炊でき ない程度の機能低下	食事 入浴 洗濯 生活相談 健康管理 レク他	管理費 生活費 事務費
	A型		○	60歳以上 在宅困難収入月34万以下	給食サービス 日常生活サービス	事務費 生活費
	E型		○	60歳以上 自炊でき 在宅生活困難	自炊	管理費
養護老人ホーム			○	65歳以上 日常生活 に支障がある人	日常生活の介助 レク 生活相談 指導 指導	扶養義務者の収入に 応じる
有料老人ホーム	介護付き	○	○			
	住宅型		○			
	健康型		○			
生活支援ハウス			○	60歳以上 家族からの支援 困難 一人暮らし不安	住居の提供 生活相談 緊急対応他	家賃(収入に応じて) 光熱費
シニアリビング			○	60歳以上	日常生活指導 安否確認	家賃 サービス費 (収入に応じて)
グループリビング			○	おおよそ60歳以上	住居の提供 自立支援	施設によって異なる
コネクティブリビング			○	おおよそ60歳以上	生活全般の支援	物件によって異なる
高齢者向け優良賃貸住宅			○	60歳以上	緊急対応 生活困り支援	収入による家賃補助
シニア住宅		○	○			
簡易保険 加入者ホーム	長期利用型		○			施設物件による
	終身利用型	○	○			
厚生年金ホーム	長期ホーム		○			
	終身利用型	○	○			
その他	有料老人ホーム類似型	○	○			
	高齢者マンションなど	○	○			

また、現在の居住施策の特徴としては、地域密着型サービスの展開、ユニットケアの推進、グループホームの量的充足と質的向上への転換、があげられる（村川，2006）。さらに、介護保険制度による新たなサービスには、特定施設入所者生活介護（以下、特定施設）もあり、新しい住まいの1つとして今後の展開が期待されている。以下に、現在の居住施策の特徴から、地域密着型サービス、ユニットケア、グループホーム、特定施設の特徴を簡単にまとめる。

### 1) 地域密着型サービス

介護保険の改正では、小規模多機能型居宅介護、夜間対応型訪問介護、認知症対応型グループホーム、認知症高齢者専用デイサービス、小規模（定員30名未満）介護老人福祉施設、小規模（定員30名未満）で介護専用型の特定施設が、それぞれ地域密着型サービスとして新たに位置づけられることとなった。このサービスでは、要介護者の住み慣れた地域での生活を支えるため、身近な市町村で提供されることが適当なサービス類型を創造することが求められている。その特徴は、①サービス利用の対象を、その地域の住民に限定していること、②地域単位で適正なサービス基盤の整備を行うこと、③地域の実情に応じた指定基準や介護報酬を設定できること、④公平・公正透明な仕組みを担保するために地域住民などが直接関与することである（小山，2006）。介護保険の改正で新設された小規模多機能型居宅介護は、基本的には「通い」を中心として、要介護者の様態や希望に応じて、随時「訪問」や「泊まり」を組み合わせるサービスを提供することで、中重度となっても在宅での生活が継続できるように支援するものである。

### 2) ユニットケアの推進

個室ユニットケアは2003年に完全制度化され、以後在宅に近い居住環境を整えてケアの個別性を高める取組みが展開されている。ユニットケアは、8～10人程度を一単位とし、小規模な人数による家庭的な環境の下で介護することを指し、こうした制度を採用する特養は「新型特別養護老人ホーム（以下、新型施設）」と呼ばれている（栗原，2005）。新型施設で用意されているハードに加えて、適切なソフトの組み合わせが行われるケースでは、入居者本人の願うその人らしい暮らしに近づけるための支援も実践されている。ただし、新型施設の中にも施設間格差は認められ、ハード面での条件を活かせず、個別ケアが実現できていない施設も存在している（山田，2006）。山田は、格差の理由として、①職員が入居者の障害に着目するという従来の視点を変えることができない、②職員のスキルのバラツキを緩和しようと、ローテーション勤務による集団ケアの仕組みをとる、③人件費コストの抑制のために集団ケアの方法をとる、

といった点を指摘している。さらに、職員に対しては、「～をしてあげなければ」という障害に着目した視点から、一人ずつの生活を支援できる視点への転換が必要なことが唱えられている。

### 3) グループホームの量的充足と質的向上への転換

認知症高齢者のためのグループホームは、介護保険制度の導入以降、急ピッチで整備が進行している。グループホームの生活を通じて、その人らしさを取り戻せることが可能となるなど、その効果が認められるようになってきている。グループホーム誕生の背景には、それまでの高齢者施設における介護の劣悪さからの解放、施設から在宅への施策の転換、ノーマライゼーション理念の具現化、そして生活の質を保障することで認知症の人の尊厳を守るということがあった（内出，2006，p.28-31）。また、内出（2006，p.28-31）は、グループホームの優れた点として、認知症の利用者に限っていたこと、住み慣れた地域に根ざした生活を基盤としていること、少人数であるため利用者の人間理解に基づく関わりが可能となり、個人に合わせた住み心地のよい環境を提供しやすい点をあげている。反面、密室性が高く、閉鎖的空間になる可能性がある点や、少人数の利用者を少人数の職員でケアすることによりリスクが発生しやすい点も指摘している。現在は量的に充足しつつあり、今後はその質的向上に向けた取組みが重視されている。そのためにも、グループホームのアイデンティティとも言える「家庭」とは何か、「生活支援」とは何かについてきちんと言語化して考える必要がある（内出，2006，p.28-31）。

### 4) 特定施設

このサービスは、介護保険制度で創設され、現在、一定の設備・人員を有する介護付有料老人ホームとケアハウスが対象となっている（厚生労働省，2003）。この施設は、良好な居住環境と介護サービスとの両方を高い水準で提供していこうとする新しい試みを行っている（特定施設事業者連絡協議会，2006）。施設数も確実に伸び続け、全国で有料老人ホームが1,533施設、ケアハウスが216施設となっている（2006年4月現在）。

以上、第1節をまとめると、現在の高齢期居住施策は、新たな転換期に入っていると考えられる。支援する際の視点も、一人一人の生活のあり方をより尊重する個別性重視の方向へシフトしている。そのため、これまで「生活の場」や「家庭（的な雰囲気）」として漠然に使われていた住まいの意味が、本格的に問われる時代に入ったと言える。個々人の自分らしい暮らしをどうやって実現するのか、今それが具体的に問われているのである。

内出（2006，p.28-31）は、我が国における1990年代の認知症



介護のパラダムシフトを指摘している。そこでは、「施設」から「家庭的な環境＝住宅」へ、「患者」から「入居者＝生活者」への先駆的な取り組みへのシフトが生じている。現在はこのようなシフトが、認知症高齢者に限らず、全ての高齢者を対象とする方向へと進んでいると考える。

また、現在は、慣れ親しんだ地域での在宅生活の継続が施策の中心に置かれている。その一方で、栗原（2005）は、現在の高齢者について、自宅や持ち家にこだわらない傾向の増加といった、興味深い指摘も行っている。「賃貸でもよし、住み慣れた地域でなくてもよし、それよりも自分自身が判断する住み心地の方に関心に移り、その住み心地を自分たちで構築していこうとする人が増加している」（栗原，2005，p.267）と述べている。本節第2項では、図2を用いて、リロケーションを経験する高齢者の増加を示した。栗原の指摘から、今後も増加傾向を示すことが予測される。

栗原はまた、「住まい」だけに重点を置くと、設備、広さ、利便性を重視しがちとなるため、自分の生活のテーマをもち「社会参加」に重点を置いた住まいの選択を行うよう提案している（栗原，2005，p.267-268）。この指摘は、個人の人生設計に従って、より高次の欲求充足を求めて高齢期にリロケーション（転居）を行う者の増加を暗示している。そこで、今後の住まいを巡る支援においても、高次の欲求充足を実現する生活を支える住まいのあり方を改めて検討する必要がある。加えて、見本なき高齢期を模索しながら過ごす高齢者が、これまでの生活との継続性を得るための道標となるような住まいや居住支援の提供が望まれる。

ところで、『2015年の高齢者介護』では、住み替えという選択肢の必要性について言及され、さらに介護保険の改正で地域密着型サービスが打ち出された。これらの施策により、高齢期の住まいの選択肢が多様化するとともに、高齢期にリロケーションをする機会も増加していくと考える。そのため、今後の居住支援では、リロケーションを視野にいたれた本格的な支援策の検討と取り組みが必要となる。

## 第2節 高齢期のリロケーション研究と

### 「適応」概念の再考

#### 1. 高齢期のリロケーション研究の再考

リロケーションは、高齢期の生活に影響を与える重大なライフイベントの1つである。これは、住み慣れた環境を離れることを意味し、高齢者には新たな環境への適応と生活の再編が求められる。一般的に、高齢期は身体的・経済的・対人的資源が減少する時期であると言われている。そのため、高齢期のリロケーションは、慣れ親しんできた環境への離別と新しい環境への物理的・社会的適応という点で非常にストレスフルな体験となる可能性がある（児玉，1998；安藤，1994；斉藤，1997）。

これをうけ、リロケーション研究が古くから行われている。欧米では1960年代より、我が国においても1980年代より老年社会心理学や保健福祉分野で多くの報告が認められる。さらに、1990年代からは、建築学分野からも研究報告されるようになっていく。我が国では、「リロケーション」の用語以外にも、「転居」、「環境移行」、「生活拠点移動」等研究分野によって様々な用語が使われている。ただし用語の選択にあたっては、高齢期の移動は単なる物理的空間の移動に留まらず、社会的関係や制度・文化等の幅広い変化に適応することを含んでいる点に留意すべきである。そこで、本稿においては、単なる物理的空間の移動と区別するために「転居」ではなく「リロケーション」の用語を使うこととする。

さて、これまでのリロケーション研究を概観すると、大きく3つのタイプに分類される。具体的には、①リロケーションによる生活環境の変化が高齢者に及ぼす影響を明らかにするためのもの、②リロケーションの影響とその要因を多角的に捉えることを目的としているもの、③転居の理由や転居者の特徴からリロケーションのタイプ分類を行うことを目的としているものがある（安藤，1994；斉藤，1997）。

このうち、初期の研究は、リロケーションによってもたらされる結果の検討に焦点を当てていた。そこでは、リロケーションの影響を死亡率や罹患率で測定するものが主流であり、リロケーションは高齢者に悪影響をもたらすものと考えられていた（Aldrich, 1964；Killian, 1970；Markus et al, 1971）。しかし、その後の研究では、リロケーションによって必ずしも死亡率や罹患率が高くないことが報告され（Miller & Liberman, 1965；Wittels & Botwinick, 1974）、多角的な視点からリロケーションの影響と介在要因が研究されるようになっていく（Brand & Smith, 1974；Storandt et al,

1975 ; Ferraro, 1982 ; Eckert & Haug, 1984).

表 3, 表 4, 表 5 には, リロケーション研究に関する我が国と欧米の先行研究をまとめた. 表 3 は, 我が国の先行研究であり, 社会老年学 (1975 年~1994 年) と老年社会科学 (1979 年~2005 年) のうち高齢者の転居 (あるいはリロケーション) をタイトルに含むもの, 医中誌データベース (1985 年~2005 年) にて「転居 (リロケーション)」と「高齢者」というキーワードで検索された論文を載せた. 表 4 には, 日本建築学会論文集または梗概集 (1985 年~2005 年) で「リロケーション」, 「生活拠点移動」, 「環境移行」をキーワードで検索した結果得られた論文を表示した. さらに, ここでは論文の中から特に高齢期を対象としているものを選択した. なお, 認知症等の特定の疾患を扱っている論文は, リロケーションの内容が限定されるため除外した.

また, 表 5 には, *Journal of Gerontology* で 1960 年から 2005 年までに発表された論文の中でタイトルに高齢期の「relocation」を含み, そのうち上記と同様に認知症等の特定の疾患を対象とした論文を除いたものを示した. この他にも, 近年では表の中で示した研究以外に, リロケーション研究を批判的にレビューした論文や高齢期のリロケーションを総論としてまとめたものが幾つか発表されている. そこで, 今回は, 表に示した論文以外にも Baglioni (1989), Liberman (= 1998), 児玉 (1997, 1998), 外山 (1996, 2003) の報告内容も検討に加えている.

表3 我が国におけるリロケーション研究の動向 その1

時期	著者	研究タイプ	目的	対象	結論
1982	前田	リロケーションエフェクトの存在の有無	入所期間(入居から死亡までの期間)と入所直前の居滞の関係	特養入居者後の死亡者 180名	日本のリロケーションの存在の否定。 入居期間に他のホームや病院から入居した者の方が入居期間が短い 認知機能・人格機能は施設間移動によって変化しない。移動先の違いによる差もない。 (ただし、年齢・健康状態等の個人的要因の影響が大きい)
1988	中里・下村・小栗他	リロケーションエフェクトの影響(結果)	施設から施設への移動が高齢者の心理的適応に及ぼす影響 (認知・人格・幸福・健康・活動性・対人関係)	養老老人ホームA90名 (新築型)50名、新築型→40名 従来の文獻	リロケーションが否定的な影響を及ぼすかという単純な仮説から、どのような条件により影響するかへと、研究の焦点は変化している 自発的而非自発的の間でリロケーション後の適応は差あり リロケーション後の適応にはリロケーションをもたらしただけで原因も重要である。
1994	安藤	リロケーションエフェクト研究の動向	地域老人の転居が転居後の適応に及ぼす影響 一介在要因:意思決定と転居理由、結果変数:抑うつ尺度、生活満足度	東京都の65歳以上、 転入後1年未満の在宅高齢者95名、 10~14年在住の施設入居者 北海道入居者の70歳以上の 全転入者161名	
1995	安藤・古谷野・矢重他	リロケーションエフェクトの影響(介在要因と結果)	寒冷広域地域の死亡者の死亡前・居滞所移動	北海道入居者の70歳以上の 全転入者161名	居滞所パターンは5分類。特に、「在宅→一時居滞院→病院死」が多かった。 死亡の場は病院でも自宅を主な居滞所としながら必要に応じて病院と自宅を移動。 リロケーションにより居滞所と地域社会関係の変化が認められた。
1995	工藤	リロケーションのタイプ分類	高齢者の住居移動が健康に及ぼす影響	大阪市の60歳以上の 公営住宅住居者40名	仮住まい」といふ言葉が住みこなしの消極性を生む リロケーションの形態、施設へのリロケーション、地域へのリロケーション、 リロケーションと適応に関する理論および構造モデルが少なく、その発展が期待される。 リロケーションした高齢者は運動でQOLが低い傾向にある。
1996	小野・鈴木	リロケーションエフェクトの影響(介在要因)	わが国と欧米の転居の文獻レビュー	ドイツ利用者80名	
1997	斎藤・吉田	リロケーション研究の動向	転居老人とコンドミニアム群の住んでいよう所に対する意識	東京都近郊4市の65歳以上の居住者と 同居家族98組	精神機能が中等度〜重度に低下してから、つまり移行以下の呼び寄せが多かった。 呼び寄せでよかった老人は女性より男性が多く、準備期間が6ヶ月以上あり、 人間関係が良好で、訪問看護をうけ、認知症がなく、歩行状態がよい歩きのレベル、 精神健康の関連要因として生活環境評価、社会活動性の比重が高い、 転居の背景要因(理由・意志)がリロケーションをした者の精神健康に影響。 リロケーションは社会的接続の低下を介して間接的に精神的健康を低下させる。 リロケーションは全体として必ずしもストレスの多い生活出来事ではない。 プラスとマイナスの影響を同時にもつたため影響が相殺した結果と解釈される。
1997	平岩・畑野	リロケーションエフェクトの影響(結果)	転居老人とコンドミニアム群の住んでいよう所に対する意識	193名と同居家族242名	
1998	水野・高崎	リロケーションエフェクトの影響(介在要因)	転居理由と転居意識が精神健康に及ぼす影響	全国60歳以上の在宅高齢者	
1999	斎藤・杉澤・園林他	リロケーションエフェクトの影響(介在要因)	転居が高齢者の精神的健康に及ぼす直接的影響と間接的影響(社会的接続)の検討	静岡県別荘地移転した65歳以上の 193名と同居家族242名	
2000	斎藤・杉澤・杉原他	リロケーションエフェクトの影響(介在要因)	転居の理由と転居意識が精神健康に及ぼす影響	全国60歳以上の在宅高齢者	
2001	川上	リロケーションエフェクトの影響(介在要因)	転居が高齢者の精神的健康に及ぼす直接的影響と間接的影響(社会的接続)の検討	神奈川県と東京都内に同居のため転居 した65歳以上の高齢者とその家族 特養新入居者15名、 すでの入居している17名 特養入所者・ケアハウス 計18箇所の入居者1321名 特養入居者26名	遷応しているケースは、リロケーション先の家族関係良好、リロケーションの必要性が高く、 生活行動が拡大できるレベルであり、効果的に資源を活用している者 新入居者は主体的能動的に資源に働きかけ、入居者がホームの環境や人、モノとの間に 「つながり」をつくり、自分なりの生活を形成している 特養に入居前にすでに転居を繰り返している。
2002	小倉	リロケーション後の適応プロセス	子供の近くに転居した高齢者とその家族の転居後の特性		
2004	安・小伊藤	リロケーションのタイプ分類	新しい環境で安定していく初期適応プロセスの検討		
*2006	小倉	リロケーションエフェクトの影響(結果) リロケーション後の適応プロセスの 阻害要因	転居の経路の分析と転居に伴う生活の変化の把握 入居後の初期適応後に不安や不満が拡大するプロセスの検討		自分なりの生活を構築しむ(個人生活ルーチン)ことによって安定。 入居者は、いろいろな原因で起こる個人生活ルーチンの混乱に対処する必要がある。 個人生活ルーチンの混乱は、環境からの擾動との相互作用が影響するなかで進行する。

\* 転居条件に強くと決まらないうが、2002年の小倉の報告の続きであるため掲載した

表4 我が国におけるリロケーション研究の動向 その2：建築学による研究

時期	著者	研究タイプ	目的	対象	結論
1996	藤永・片岡・鈴木他	リロケーションのタイプ分類	入居前の住生活条件とケアハウスへの入居要因との相互関係を捉えた転居のプロセス	ケアハウス4箇所入居者218名	入居理由は心理的な不安解消、家族関係解消、家事の負担軽減、生活問題解消、比較的家事負担が少なかった男性には、家事負担が発生するケースもあった。
1996	幸・片岡・鈴木他	リロケーションエフェクトの影響 (介入要因)	入居前後の住宅資源と問題点、住宅の処分形態が転居後の生活に及ぼす影響	ケアハウス4箇所入居者218名	入居前の住宅の所有形態は持ち家と賃貸、住宅の規模は現在のケアハウスへの厚層と薄層、以前の住宅の処分形態が入居後の捉え方に違いをもたらす。
1998	幸・片岡・鈴木他	リロケーションのタイプ分類	拠点移動を行った要因とそのプロセス解明、入居後の住生活資源の把握、前住居状況からの変化や関係性に注目した施設生活の分析	高齢者生活福祉センター 17箇所入居世帯108世帯	家事処理に対する負担と緊急時への不安感などの問題あり 心理的負担には前住居での居住期間、前住居の所有形態が影響、持ち家所有世帯では住宅を処分せず残存させている割合多い。
1999	幸・片岡・鈴木他	リロケーションエフェクトの影響 (結果)	入居前の拠点移動に至る要因とプロセス、入居後の拠点移動要因の解決状況と問題点を分析	高齢者生活福祉センター 17箇所入居世帯108世帯	拠点移動により家族関係の改善、全体の移動が、月1回以上の頻度で前拠点を訪問していた。
2002	古賀・高橋・外山	リロケーションエフェクトの影響 (結果と介入要因)	高齢者居住施設のある時間的断面における物品の状況把握、生活の質の維持・向上に対する「もの」の役割と問題点の理解、自己実現型高齢者と従来型高齢者の	特別養護ホーム1箇所入居者46名	所有物品をのちろちろ処分者が全体の74%を占めた。
2003	澤岡	リロケーションエフェクトの影響 (結果)	転居前後の社会関係や余暇目的外出活動の変化を検討	シニア住宅と修養老人ホーム 各1箇所入居者合計10名	所有される「もの」の置置や家の美観から考えるとそれらを使用した積極行動は豊かと言え難い ケア付き施設への転居、安全・安心の欲求充足のため入居、シニア住宅は自己実現型によって活動を維持するのに適した居住形態である。

表5 Journal of Gerontologyからみたリロケーション研究の動向

時期	著者	研究タイプ	目的	対象	結果
1966	Miller, D., Liberman, M.	リロケーションエフェクトの影響 (結果と介入要因)	心身面で問題のない高齢者の 物理・社会的環境変化の影響の把握 リロケーションは高齢者にとってストレスフルか否かの把握	州立住居へ転居した 高齢女性45名	入居時期かつ傾向にある者は転居後がタイプな影響を受けまい。 転居後に死亡し平均罹感度が高いとは言えない。 リロケーション後の死亡率は一律に高いとは言えない。
1971	Markus, E., Blenkner, W., et al	リロケーションエフェクトの影響 (結果と介入要因)	死亡率と心身状態、場依存の関係の検討	(人口調査を基盤として比較) 2施設の高齢者373名	年齢と性別別、転居後の死亡率は平均罹感度とほぼ等しい。 転居後の死亡率と心身状態、場依存の関係は必ずしも認められなかった。
1972	Markus, E., Blenkner, W., et al	リロケーションエフェクトの影響 (介入要因)	リロケーション群と対照群の有病率による 健康感と生活満足度の比較検討	都市西側郊外のため転居した 65歳以上の68名	転居群は生活満足度が有意に低い。強制的転居は転居後の適応に好ましくない影響あり。 転居の影響には、性別や人種による差が認められた。
1974	Brand, F., Smith, R.	リロケーションエフェクトの影響 (結果と介入要因)	比較的健康な高齢者の自発的なリロケーションでは、 リロケーションの影響はないことの証明	高齢者アパートの60歳以上460名 (非転居群193名との比較)	自発的なリロケーションはどちらからかと言えはリスクを低下させる。 リロケーション群では、モジュールの得点及び健康度に有意な変化は認められなかった。
1974	Wittels, L., Botwinick, J.	リロケーションエフェクトの影響 (結果)	リロケーションエフェクトのレビュート理論的分析	高齢者地域住居に住む 61~85歳の健康高齢者122名	リロケーションの形態には、家から施設、施設から施設、家から家への8タイプがあり、 それぞれに自発的と非自発的リロケーションが含まれる。 リロケーションには、予測性と制御性が関与している。
1975	Storandt, M., Wittels, L., Botwinick, J.	リロケーションエフェクトの影響 (介入要因)	リロケーションの意思決定の健康状態への影響の検討	全国調査の対象となった 低所得高齢者	健康に及ぼすリロケーションの質の影響は自発性の水準に影響されたい。 リロケーション後の意影響は認められない。リロケーション群は健康面で 否定的な変化を示さず、主観的幸福感は肯定的な変化を示した。 突如と地味の中で転居するのは身体機能が低下し、主観的幸福感や満足度が低く、 抑うつ傾向にある者であった。
1977	Schulz, R., Brenner, G.	リロケーションエフェクトの影響 (分類)	地域での自発的なリロケーションと 健康感や主観的幸福感への影響の検討	5箇所のボアールの滞在高齢者38名 (強制的転居群と対照群の比較)	転居者の死や子供の結婚、同居者の転居が家族の転居と関係があった。
1982	Ferraro, K.	リロケーションエフェクトの影響 (介入要因)	転居意向者は意向しない者よりも心身の健康状態が良いこと、 転居者の特性の検討	地域に住む高齢者3097名	
1984	Eckert, K., Haug, M.	リロケーションエフェクトの影響 (結果)			
1980	Colsher, P., Wallace, J.	リロケーションエフェクトの影響 (分類)			

以上の論文を先に示したリロケーション研究のタイプ分類に照らし合わせながらリロケーション研究の動向を検討すると、以下の点が指摘できる。

リロケーションの影響については、死亡率や罹患率（前田，1982）のほか、抑うつ状態、生活満足度や主観的健康感等の心理的変数（Brand, 1974; 中里ほか，1988; 安藤ほか，1995; 平岩ほか，1997; 斎藤，1999）、身体機能や健康状態（Eckert, 1984; 小野ほか，1996）、対人交流や行動範囲（小野ほか，1996; 斎藤ほか，2000; 安ほか，2004）からの検討が行われている。

例えば、中里ら（1988）は、施設から施設へのリロケーションが高齢者の心理的適応に及ぼす影響を検討するため、養護老人ホームから新築の養護老人ホームあるいは特別養護老人ホームへ移った者を対象に、移動前後の認知機能と人格機能をリロケーションの3ヶ月前、リロケーションの3ヵ月後、15ヶ月後の計3回にわたって調査をした。その結果、リロケーションの影響は活動性や幸福感情の変化に認められたが、変化のパターンは一様ではないことが示された。具体的には、活動性はリロケーションの3ヶ月後には低下しているが、15ヶ月後にはリロケーション前の水準に戻っていた。一方、幸福感情にはその逆のパターンが認められた。このことから、リロケーションしてから3ヶ月後が施設間移動への心理的適応において重要な時期であると指摘している。

また、安（2004）は、特別養護老人ホームとケアハウスにリロケーションした高齢者を対象に、リロケーションによる生活の変化をヒアリング調査にて検討した。結果では、リロケーション後も在宅生活時の趣味や楽しみ、友人との交流が維持できている人は少なく、特に特別養護老人ホーム入所者でその傾向が顕著であった。一方、ケアハウスの入居者は、入居後に施設内のクラブ活動など施設を中心に活動を行っている者と、入居以前の居住地に外出し以前の活動範囲を維持している者がいたと報告している。

リロケーションの結果に影響を与える介在要因については、心身の健康状態（Miller & Liberman, 1965; Markus et al, 1972; Brand & Smith, 1974; Storandt et al, 1975）、リロケーション時の意思決定（Ferraro, 1982; 安藤ほか，1995）、社会活動性（斎藤，2000; 古賀ほか，2002）、リロケーション後の生活環境に対する評価（斎藤，1999）、準備プログラムの有無（外山，1996, p 215）からの検討がなされている。これ以外にも、SchultzとBrenner（1977）は先行研究のレビューを行い、新しい環境の予測可能性とリロケーションに対するコントロール可能性がリロケーションの結果に影響すると述べている。

安藤ら（1995）は、地域に住む高齢者のリロケーション後の適応

状態を抑うつ尺度や生活満足度で測定し、その結果と、リロケーション時の意思決定やリロケーションの理由との関連を検討している。さらに、対象者の背景についても詳細に検討しており、性別や年齢、社会人口学的変数（配偶関係、居住形態、住居の種類、学歴、最長職の職種）、生活機能を尋ねている。結果では、自発群と非自発群にはリロケーション後の適応状態に差が認められたことを示した。ただし、両群間には生活機能や社会経済的地位の差があったことから、リロケーション後の適応状態には意思決定だけではなく、リロケーションをもたらした背景要因も影響していると述べている。

斎藤ら（2000）は、全国の60歳以上の在宅高齢者を対象とした縦断的調査によって、リロケーションが高齢者の精神的健康に及ぼす直接影響と間接影響を検討している。その結果、リロケーションは社会的接触の低下を介して間接的に精神的健康を低下させる可能性があったが、直接的には良好な影響をもつ可能性があったと報告している。このように、調査結果ではリロケーションが全体として必ずしもストレスの高い出来事ではないことを示した。さらに、この理由として、リロケーションが精神的健康に影響を及ぼさないためではなく、プラスの影響とマイナスの影響を同時に持つために影響が相殺した結果と解釈している。

この他、建築学的視点からの介在要因の検討も行われている。児玉（1997, 1998）は、リロケーションが在宅高齢者に及ぼす影響を、環境条件の変化、社会的行動、心理的側面から検討している。特に、環境変化の把握には、建築クレームチェックリスト（児玉, 1998, p.76）を用いて、建築の快適性、レクリエーション設備の充実度、身体機能低下への建築的配慮、建築内の情報の適切さ、建築の安全性、空間・設備の個別性、規模の適切さ、近隣地域施設の利便性等の8項目から調査を行っている。調査結果では、リロケーションにより建築クレームが著しく改善されたが、社会的行動や心理的側面の向上は認められなかった。また、社会的行動に関しては、リロケーション後には、居住者との対人接触は増加傾向にあったが、深い付き合いに至っていないことを示している。その上で、リロケーションが高齢者に良好な適応をもたらすためには対人交流の形成への援助が重要であると述べている。

外山（2003, p.23-37）は、地域で暮らしていた高齢者が、施設にリロケーションしたときに経験させられる落差を報告している。具体的には、「空間の落差（巨大で複雑な空間との遭遇）」、「時間の落差（集団のスケジュールに合わせる必要性）」、「規則の落差」、「言葉の落差（職員からの一方的な指示等）」、「役割の喪失」が生じることを指摘し、これらがリロケーション後の主観的満足感に影響することを示唆している。



さらに、リロケーションの影響とその要因に関する報告の蓄積に伴い、リロケーションの影響と要因の構造をモデル化する報告もなされている。Baglinoni(1989, p 119-134)は、先行研究のレビューをもとに、施設へのリロケーションが高齢者に与える影響と、そこに介在する諸要因を示した要因構造モデルを報告している。彼のモデルは、ネガティブな影響を与える要因とポジティブな影響を与える要因を同時に示していることに特徴がある。また、このモデルでは、罹患率、死亡率、主観的幸福感を結果変数とし、それらにネガティブな影響を与える要因として身体・精神状況や環境変化が、ポジティブな影響を与える要因として個人への配慮性(attention)、準備状況(preparation)、選択性(choice)がそれぞれ指摘されている。

リロケーションのタイプ分類に関する報告には、リロケーションの理由を検討したもの(森永ほか, 1996; 李ほか, 1998)やリロケーションの経路を分類したもの(Schultz & Brenner, 1977; 工藤, 1995; 安ほか, 2004)がある。

森永ら(1996)は、ケアハウス入居者の入居理由を調べ、心理的な不安解消、家族関係解消、家事の負担解消、住宅問題解消に分類している。類似の結果は、李ら(1998)からも報告されている。

リロケーションの理由に関連し、近年では特に「快適性」や「自己実現」を求めて行われるリロケーションに焦点をあてた研究(斎藤, 1999; 澤岡, 2003)も報告されている。

斎藤(1999)は、リロケーションの目的のうち、快適性を求めて別荘地域へリロケーションした高齢者の精神的健康(抑うつ度、主観的満足度)に関連する要因を報告している。結果では、リロケーション前の生活環境への不満やリロケーション先の生活環境への快適性への期待が直接的に、またはリロケーションの意志を介して間接的に精神的健康に関連していることを示した。さらに、別荘地域へリロケーションする高齢者は、サービスへの近接性、利便性、コミュニティの安全性を期待してリロケーションを行っており、これらが満たされない場合に精神的健康が損なわれる危険があると指摘している。

また、澤岡(2003)は、自己実現欲求の充足を目指してリロケーションする高齢者にとって、望ましい居住形態を検討するための調査を行った。ここでは、シニア住宅と軽費老人ホームへリロケーションした高齢者を対象に、リロケーション前後の社会関係や余暇目的外出活動の変化を検証している。その結果、シニア住宅には個々の価値観に基づいた活動を行う新しい高齢者(自己実現型)が多く入居し、一方軽費老人ホームには子供やホーム内の近隣関係を重視する高齢者(所属・愛情型)が多く入居していたと報告している。

そして、この結果から、自己実現欲求の充足を目指す新しいタイプの高齢者には、シニア住宅が望ましいことを示唆している。

リロケーションの経路に関する研究では、Shultz と Brenner(1977)のリロケーション経路の分類がある。彼らは、リロケーションの経路を①家から施設へ、②施設内あるいは施設から施設へ、③家から家へ(地域から地域へ)、といった3つのパターンに分類している。さらに、それぞれに自発的リロケーションと非自発的リロケーションが含まれると述べている。ただし、実際のリロケーションはこれらの分類以上に多様な形態と考えられる。例えば、Ferraro(1982)は、家から家へのリロケーションの中にも老人向け住宅のように年齢が均一の場合と、コミュニティのように多様な年代が共生する場合があると指摘している。

以上のようなリロケーション研究のタイプ以外にも、近年ではリロケーション後の適応を扱った研究が認められるようになっている。児玉(1998, p.249)は、リロケーション後の適応状態を把握するため「転居適応モデル」(図4)を考案した。

このモデルでは、リロケーション後に高齢者が抱くプライバシー欲求度（すなわち、生活にかかわる欲求）とコントロール感（すなわち、ストレス事象に対する克服の自信や制御感）の強弱の組み合わせが、リロケーションといった事象を認知・評価するうえでの土台となり、環境変化後の適応過程に影響を及ぼすと考えている。例えば、プライバシー欲求が高く、コントロール感が高い場合は、リロケーションを挑戦として捉え、施設へのリロケーション後もこれまでもち合わせていたプライバシー欲求を変えずに、自分に最も適した生活パターンを見出していくと述べている。反対に、プライバシー欲求が低く、コントロール感が低い場合には、本人がプライバシー欲求もコントロール感もないと考えているため、リロケーションを脅威と捉え、施設での生活に自分の生活パターンを合わせていこうとする。このタイプの高齢者は、訴えも少なく、「施設にお世話になっている」と恐縮することも多く、不安傾向が強いと述べている。

また、外山（1996, p.221-226; 2003, p.40-51）は、高齢者施設にリロケーションした入居者が、馴染みのない環境の中で個人的領域を形成していく具体的なプロセスについて施設内領域階層構成をふまえながら、3つの段階に分けて説明している。彼によると、第1の段階は、「身の置き所」の形成を行う時期である。個室のように一人になれる空間が確保され、そこに個人的な生活行為を成立させる「物」を「持ち込み」、「配置」、「掲示」することによって、自己のアイデンティティを空間内に外面化し、プライベートなテリトリーとしての領域を形づくる。この領域が形成されると、領域内のコントロールを自分のものにしていくことができる。続く第2段階は、「セミ・プライベート領域の共有化」の時期である。「身の置き所」に隣接したセミ・プライベート領域が、自然発生的に形成されたグループによる交流の場として定着する。最後の第3段階は、「施設全体の中での生活シナリオの定着」がなされる時期である。つまり、プライベート領域からセミ・プライベート領域、パブリック領域へとつながる領域分節の中での、1日の動き方、空間の使い方、時間の過ごし方のシナリオがしだいに定着していく段階である。以上のように、3つの段階を経て次第に個人的領域が施設内に形成されていくことが示されている。さらに外山は、このような個人的領域形成のプロセスの成立が、リロケーション後の適応過程を左右すると述べている。

小倉（2002, 2005）は、特別養護老人ホームへ入所した高齢者が「初期適応期」に施設に適応していくプロセスや、その後の「安定期」で不適応な状況に陥っていくプロセスを質的研究によって検討している。その結果、「初期適応期」には、入所者が馴染みのなかつ

た施設環境の中にあるモノやケア，人々と主体的・積極的に関わりながら施設環境と自分との接点を見つけ，「共にいる」という関係をつくることで適応していくことを見出している．さらに，「安定期」に入ると，入所者はそれぞれの楽しみや役割を作り，自分のペースを守って自分なりに安定した生活を営むと述べている．また，「安定期」で不適応な状況に陥るのは，心身状態の変化によって自分のペースが守れなくなっているにも関わらず，職員からの援助が得にくい状況になるためと説明している．

このように児玉（1997，1998），外山（1996，2003），小倉（2002，2005）はリロケーション後の適応に着目した報告を展開している．特に，外山と小倉は，高齢者がリロケーションをした後に，どのように適応していくかといったプロセスを説明している．そのため，このタイプの研究は前述した安藤（1994）や斎藤（1997）のリロケーション研究の分類とは異なる新たな研究タイプと言える．

以上，これまでのリロケーション研究を概観した．リロケーション研究は，生活環境の変化（リロケーション）によって生じた人と環境の相互関係のあり方を検討する研究である．ただし，そこには複数の研究タイプが存在し，その研究の動向が時と共に変化している．初期の研究では，リロケーションは否定的な影響をもたらすものと考えられており，死亡率や罹患率によって測定されていた．しかし，その後の研究では，リロケーションが高齢者に及ぼす影響として肯定的側面と否定的側面の両面からの検討が行われている．また，リロケーションの影響を示す結果変数についても，死亡率や罹患率の他，より感度の高い変数である心理的変数や精神的健康状態，対人交流・行動範囲といった社会的機能を変数とした検討が行われている．さらに，リロケーション後の影響と介在する諸要因の多角的な検討も行われ，影響を与える要因として，リロケーション時の意思決定，心身機能の状態，社会活動性，リロケーション後の環境に対する評価，新しい環境の予測可能性や状況のコントロール感等が指摘されている．

ここでリロケーション研究の到達点を確認すると，リロケーション研究において結果変数や説明変数となる概念については，多くの研究で共通した変数が用いられていることから，大枠はほぼ出揃った感がある．しかしながら，研究間で見解の不一致が認められ決定的な結果を提示するには今一步といった状況にある．例えば，これまでも，リロケーション後の心理的適応を分析した報告がなされている．中里ら（1988）は認知機能を，安藤ら（1995）は抑うつ尺度や孤独感尺度を主観的幸福感と併せて測定しているが，これらの研究からはリロケーション後の影響に関する統一した見解が得られていない．また，「在宅から在宅」へのリロケーションの健康影響につ

いても、否定的な健康影響があるという知見、肯定的な健康影響があるという知見、健康影響はないという知見が報告され、一致した見解が得られていない（斎藤ほか，2000）。このような背景には、先行研究の調査方法の問題と、リロケーションやリロケーション時の適応プロセスの複雑性があると考えられる。

先行研究の調査方法や計画上の問題は、批判的レビューを行う複数の文献の中でも指摘されてきた（Shultz & Brenner, 1977; 安藤, 1994; 斎藤, 1997）。これまでのリロケーション研究は、リロケーション群と非リロケーション群、リロケーション前とリロケーション後といった2群間の比較によって影響を明らかにしようとしている。この際、より正確な結果を得るためには、リロケーション群と対照群に対してリロケーション前後に調査を行う「事前一事後（非等価）対照群調査計画」で実施することが適切である。しかしながら、先行研究ではリロケーション群のみを扱った「1集団の事前一事後調査計画」や、リロケーション群と対照群に対してリロケーション後のみ調査を行う「静態的集団比較計画」が実施されている（安藤, 1994）。このような調査方法の不備により、結果の信頼性と妥当性の保障が難しくなっている。

さらに、概念の定義の曖昧さと、そのために生じる調査方法の問題も認められる。例えば、リロケーションの結果に重大な影響を与える説明変数の1つに、リロケーション時における意思決定のあり方が指摘されている。しかし、「意思決定（すなわち、自発的か非自発的か）」と言っても、リロケーションの理由によって複雑なパターンが存在すると考えられ、容易に二分類することはできない。実際、批判的レビューの文献では、先行研究の中で自発的と捉えられてきた研究が、必ずしも自発的な選択ばかりではないことが指摘されている（Lieberman, = 1998, p.161）。この点を考慮して、近年の調査の中には調査項目の中に対象者のリロケーションの納得の程度を評価する尺度を含めるものもある（池野ほか, 2004）。しかし、自己報告だけにに基づく評価は社会的に望ましい反応や防衛的態度が反映され易いこと（Lieberman, = 1998, p.161）が指摘されている。さらに、意思決定を規定する背景要因を含めた構造的モデルの検討の必要性（斎藤, 2000）等も指摘されており、今後も変数定義の吟味や調査計画のさらなる熟考が必要である。このことは、意思決定のみならず、他の変数についても同様の指摘ができる。

他方、調査方法上の問題とも重なるが、先行研究間の見解の不一致の背景には、リロケーション時の適応プロセスの複雑性があげられる。リロケーションの適応プロセスには、様々な要因が複雑に絡み合っており、単純な仮設では説明できない。斎藤（2000）は、リロケーションの影響を評価する分析枠組みに問題があると述べてい

る。すなわち、これまでの研究ではリロケーションの直接的な影響の検討に限定され、リロケーションの間接影響を検討した研究が少ない点を指摘している。高齢期のリロケーションのパターンが多様化していく中、複雑な適応プロセスをどのように説明するかは益々重大な課題となろう。

また、適応プロセスの複雑性と関連し、リロケーション研究の今後の課題には、リロケーション後の具体的な適応プロセスを扱った研究が少ない点もあげられる。つまり、「何が結果に影響を与えるか」ではなく、「どのように適応していくか」を扱った研究が非常に少ない。このような研究には、小倉（2002, 2005）や外山（1996, 2003）の報告があるが、よやく着手されたばかりであり、研究成果の十分な蓄積には至っていない。特に、これまでのリロケーション研究は、2群間の比較による量的研究が採用されてきた。このような研究は、説明変数と結果変数の因果関係の成立について示唆を与えることができる。しかし、何故そのような関係の成立に至ったかはブラックボックスに入ってしまうことが指摘されている（Popeほか = 2001, p 5）。そこで、リロケーション後の具体的な適応プロセスを扱うには、研究方法も含めた検討が必要となる。

ところで、今後のリロケーション研究には、現在のリロケーションの特性を反映する必要がある。特に現在では、高齢期の居住環境や住まい方が多様化し新しいタイプのリロケーションが出現している（斎藤, 1999; 澤岡, 2003; 栗原, 2005）。そのため、新しいタイプのリロケーションにあった研究を実施する必要がある。ここで新しいタイプのリロケーションとは、リロケーションの範囲に関連するものと、リロケーションの目的に関連するものがあげられる。

このうち、リロケーションの範囲や頻度に関するものとは、2003年の『2015年の高齢者介護』で明示された住宅か施設かの二分類に囚われない新たな住まいや住まい方を反映したリロケーションである。これまで、リロケーションの範囲には Shultz らの分類が多用されているが、彼らの分類は主に生活拠点の移動を扱ったものであった。そのため、彼らの分類は、長いスパンの中で行われるリロケーションを指していた。他方、近年においては、短期入所やミドルステイあるいは通過施設の利用等、短期間の中でリロケーションを繰り返す現象も認められるようになってきている。また、通所介護や通所リハビリテーションの利用も増え、1日あるいは1週間単位の中で、様々な環境を移動する者も多くなっている。さらに、本章第1節でも記述した通り、『2015年の高齢者介護』や2005年の介護保険の改正以降、施設サービスの小規模・多機能化や、地域密着型サービスの整備が進んでいる。これらのサービスでは、要介護者の様態や希望に応じて、「通い」・「泊まり」・「訪問」を組み合わせたサー

ビス提供が行われる。つまり、今後も益々、短期スパン内での環境移動の機会が増加することが予測される。そこで、生活拠点と関連し合っている様々な活動拠点もリロケーションに含めた包括的な定義をする必要がある。

他方、目的に関連する新しいリロケーションのタイプとは、自己実現を重視したリロケーションの出現である。斎藤（1999）と澤岡（2003）は、自己実現を目的にリロケーションする新しいタイプの高齢者の出現を指摘し、リロケーション研究を行っている。このような高齢者がリロケーションする住まいには、これまで重視されてきた安心・安全欲求の充足に留まらず、より高次の欲求充足に応える必要がある。

以上より、今後のリロケーション研究は、これまでのリロケーション研究の課題や新しいタイプのリロケーションをふまえて実施される必要がある。元来、リロケーション研究は、新しい環境へのリロケーションによって環境変化が生じ、これまでの人と環境の均衡が崩れてしまった危機的な状況と、双方の関係の再建を扱っている。そのため、リロケーション研究では、環境変化に対する人間側の反応として「適応」概念が使われることが多かった（南，1995，p.21）。しかし、「適応」概念の定義には、多様な意味が含まれている。そのため、今後のリロケーション研究を考えていく際には、どのような意味を概念的基盤としてきたかを交えて「適応」概念から見直す必要がある。特に、従来のように住まいに対して安心や安全欲求の充足を求めていた時には、恒常的維持を示す「適応」概念の適用がふさわしかったかもしれない。しかし、新しいタイプのリロケーションとして、より高次の欲求充足を求める高齢者にとっては、「適応」概念を用いることが適切かの疑問が生じる。そのため、「適応」の概念定義の内容を今一度確認する必要があるだろう。

そこで、現在のリロケーション研究の概念的基盤を明確にするために、「適応」概念の定義のレビューを行い、今後のリロケーション研究の方向を検討する。

## 2. 適応概念の再考

適応概念は、元来生物学の概念であり、生体が生きるために環境に適合することを意味していた。この概念は、老年学をはじめ、人間活動に関わる様々な研究・実践領域で用いられている。しかし、適応概念には多様な分野・領域で共有される明確な概念定義はなく、論者によって、また使われる文脈によって適応概念が意味する内容は同一ではない（小田，1991）。適応は、第5版『広辞苑』（1998，p.1824）には、以下のように書かれている。

「①その状況によくかなうこと。ふさわしいこと。あてはまること。②生物の形態・習性などの形質が、その環境で生活・繁殖するのに適合していること、あるいはそう判断できること。現存の生物の形質の多くは適応的であるが、そのすべてが適応しているとは限らない。主に遺伝的な変化についていうが、そうでないものがあり、狭義には後者を順応と呼んで区別することがある」

この記載内容によると、適応概念の意味には広義と狭義のものがあり、さらに広義の適応には遺伝的な意味と非遺伝的な意味が含まれることが理解される。また、狭義の意味においては、適応という言葉は非遺伝的な側面には用いられず、代わって順応という用語が用いられることが示されている。

では、適応 (adaptation) と順応 (adjustment) はどのように異なっているのでしょうか。両者の意味を Oxford Dictionary of English (1998, p.19, p.22) で確認するとそれぞれの動詞形について以下のように解説されている。

*Adapt*: make (something) suitable for a new use or purpose;  
modify / become adjusted to new conditions

*Adjust*: alter or move (something) slightly in order to  
achieve the desired fit, appearance, or result / permit  
small alterations or movements so as to allow a desired  
fit, appearance, or be achieved / assess (loss or  
damaged) when settling an insurance claim

この解説では、特に adjust は adapt に比べて小さな変更や変化に関与していると考えられ、環境や状況に対する適合が adaptation であるのに対して、adjustment はその構成要素となる種々の微細な調節に関して用いられるものと理解される。ただし、社会学や心理学関連の辞典の中には、適応の英語表記に adjustment と adaptation を併用しているものもあり、実際の用法においては両者が互換的に用いられている。

広義の適応概念には遺伝的な側面と非遺伝的な側面が含まれるが、遺伝的な側面の代表格には突然変異に代表される生物学的変化がある。これは、遺伝的適応 (genetic adaptation) や先天的適応とも呼ばれ、特定の環境下で外界の刺激によって引き出され、それに適合するような変化を意味する。また、種の特性として自然淘汰の結果備わっている形質も含まれる。この場合、適応概念は、因果関係



によって説明されるある個体の単方向の変化や、結果としての静的な状態を表している。

他方、非遺伝的な側面とは、「個体が一生の間に環境の変化に応じて適合する後天的適応」(国際科学振興財団, 1981, p.934-935)のことである。生物学的適応の目的は個体の恒常性の維持である。個体は、適応によって、環境の変化を受けてもその独自性を保持して生存することが可能となる(荒木ほか, 1985)。非遺伝的適応は、環境の侵襲性因子(低温, 高温など)によるストレスが作用する時、それによる生体機能のひずみを緩和するよう調節的に働く変化である。これは、一過性・可逆性の変化である。

このように適応概念を検討していくと、そこには複数の意味が含まれていることが理解される。つまり、「状態概念」または「過程概念」としての適応(小田, 2004, p.39-43)である。『新版心理学辞典』でも「生活環境に応じて生活体が自らの生存に適した体形や習慣を示したり、生理的变化をするようになる過程、またはそのようにしている状態をいう」(1981, p.604)と記載され、状態概念と過程概念の2つの意味に言及している。状態概念とは、変化の結果として扱われる内容であり、広辞苑では「適合していること」(1998, p.1824)と説明され、他の文献では「個人と環境とが適合・調和している状態」(小田, 2004, p.41)、「選択的な有利性のために個体群内に広まった特性」(山内, 2004, p.8)等と述べられている。さらに、限定的に言えば、高齢期の調査研究等で結果変数として扱われる「健康状態」や「満足感, 幸福感を覚える状態」がここに当てはまる。状態概念についてはこれ以外にも、客観的次元と主観的次元から説明されている(George, =1997)。ここでは、適応の特徴を①個人が環境からの要求に合わせる点, ②個人は環境との関係の中で一般的な幸福感を経験している点, の2つの基準から示している。そして、個人が環境からの要求に合わせている程度は客観的現象であり、幸福の知覚は主観的としている。

一方、過程概念としての適応は、変化のプロセスを指している。先に示した非遺伝的適応がここに含まれる。この場合、ある個体と環境の関係は線形的な因果関係によって説明されるのではなく、相互に作用し合う関係が想定される。ただし、人間や人間社会を対象とした適応を考えると、状態概念と過程概念が必ずしも明確に区別されるとは限らない。つまり、状態概念として示される場合でも、個体と環境の相互作用によって動的な均衡が保たれている状態であり、状態と過程が同時に発生している現象と考えられる。

さらに、状態概念や過程概念以外にも、適応には能力概念としての意味がある。これは、適応プロセスにおける個体の能力であり、適応するための合目的的行動や、適応能に基づく反応、個体からの

作用が能力概念に含まれる。例えば、文献では以下のように説明されている。

「生体が環境の変化に対応してその生存が容易になるような体制の変化を起こすことをいい、生体の適応能（環境の変化に対応して官能の平衡を維持しうる能力）を駆使して異常な刺激にも耐える官能の平衡の乱れを生じない適正な反応ができるのをいう」（国際科学振興財団，1985，p.934）

「行動を調整したり，所与の課題を解決したり，必要なことを学習したり，目標を追求したり，欲求を解消したりする過程もすべて適応するための行動とみなすことができる」（下中，1981，p.215）

この他にも，小田（2004，p.41）によると，欧米における社会老年学のテキストでは「adaptationは，心理学的恒常性（psychological homeostasis）を維持するためのコーピング（coping）や目標設定，問題解決，その他の種々の試みといった様々な行動を含む幅広い概念である」と記載されており，この記載から adaptation が能力概念を含んでいることがわかる。

また，能力概念としての適応は適応行動とも呼ばれている。佐治（1993，p.561）は，適応行動を「意図的あるいは半ば無意図的に，環境に応ずる行動を学習し，さらに自己に適合するように環境に働きかけて変化を生じさせたりすること」と説明している。さらに，個体のもつ目標価値，環境へ何を要請するかという行動目標によって，適応行動が決定される。通常，適応行動は，個体と環境間の不均衡状態に対処する行動として用いられることが多い。つまり，個体と環境間には，環境変化や新しい課題の発生といった問題や課題が設定されている。このような捉え方は，実践的介入を適応概念によって説明する場合に多い（内山，2004）。下中（1981）は，適応過程に含まれる問題として，外的存在によって引き出された問題，社会・文化の要請との問題，自己の内部から生じた問題をあげている。このうち，自己の内部からの問題とは，主として社会的欲求（社会的承認，所属，愛情，独立，成就など）や，幸福感を求め苦痛を回避しようとする基本的欲求の阻止である。

このことに関連し，一般的に適応概念の中には，「良好な個人的適応」（successful personal adjustment）や個人や社会にとって「望まれる状態」（good adjustment）との価値判断が包含されている。Burgess（=2004，p.45）は，良好な個人的適応を「その人自身の必要や欲求を満足させると同時に社会の期待や要望に応えていること」であり，個人的適応の失敗は，新しい状況に適応するように態度や

行動を変化させることができない、あるいはしようとしないうことを意味する」と述べている。また、Haris (=2004, p.45)は、高齢者の good adjustment を促進するものとして、「健康であることや安全が保たれていること、自立行為ができ、集団に所属していること、社会経験や社会的接触が豊富で、やりがいのある活動を行っていること」をあげている。これらの説明から、適応は、社会すなわち環境の要請に対する人々の基準によって判断されるものと理解できる。環境要請には、自然環境や物理的環境との側面以外にも、社会の価値判断といった文化的側面がある。言うなれば、我々の社会には、文化として社会の価値や規範が存在している。人々はそれらを自らの態度や行動の基準にしながら、自らの欲求を充足できると考えるか否かが人々の適応行動を左右する（小田，2004）。さらに、小田は、このような行動を、同調，革新，儀礼主義，逃避主義，反抗の5つの様式<sup>10)</sup>から説明している。そして、この類型化とサクセスフル・エイジングの研究に関連して、興味深い指摘をおこなっている（小田 2004, p.53）。

「サクセスフル・エイジングの研究における従来の適応論，満足感尺度は，みな同調のみを扱っていて，革新，儀礼主義，逃避主義，反抗といった適応様式には目を向けてこなかった。それらは多くの場合，高齢期における不適応的な態度や行動として片づけられてきたとあってよい。しかし，そうした態度や行動は必ずしも不適応とはいえない。なぜならば，いずれも自らの欲求を充足させ，満足感，幸福感を維持あるいは向上もしくは不満感，不幸感を増幅させないようにとする行動だからである」。

この指摘は，サクセスフル・エイジング研究に留まらず，適応論やリロケーション研究にも当てはめることができる。すなわち，社会や文化がもつ価値基準を考慮しないまま適応行動を外在的視点から判断すると，偏って判断する可能性がある。そのため，外在的判断による偏重の危険性や，環境要請における文化的側面にも配慮する必要がある。

以上より，能力概念としての適応は，「目標の追求」（下中，1981，p.215）といった一部の例外はあるものの，その多くが個体と環境間の不均衡状態の前提の上に成り立っていることが理解される。確かに，人は，問題や課題を解決しながら様々な行為や活動を行う存在である。しかし，それだけでは，人を説明することはできない。人は，自己や環境を構築し続ける創造的存在なのである。そこで，人の適応を論じる際には，問題や課題解決の文脈だけではなく，人

特有の創造的側面も含める必要がある。この点に関して、Dubos (=1982, p. x ii) は、適応概念について以下の指摘を行っている。

「・・・人類が適応の現象において、単に受動的に関わっていないことは、経験から示されてきている。応答というのは、通常、個人の創造的行為という形で現れてくる...人間の応答は、表現的な行動であり、環境を利用して自己を現実化することに対応していることが多い。人間についての健康というものは、受動的なやり方で到達された、環境の物理的・化学的条件にうまく適した状態以上のものを意味している。それは個性が創造的な形で表現できるということをも意味しているのである」

この文面では、Dubos は適応概念における人間の応答について強調している。さらに、その応答は単に能動的であることを意味するのではなく、人間の個性が創造的な形で表現できることも含めている。彼の見解は、適応は個体と環境の均衡状態の維持だけではなく、創造-発展的な意味を含有しているものと理解される。Frank (=1999, p.57) も同様の立場から適応を説明し、「適応とは、絶えず変化していく環境の中で、個人や集団の経験を通して生活の機会を改善したり QOL を高めるために、活動を選択したり、組織化する過程である」と述べている。しかしながら、適応に関するこのような見解は、現在においては一般的ではない。適応の説明の中には、環境の変化や新しい課題の発生等の不均衡状態の是正に発揮される能力と創造性を区別し、適応と創造は異なるものとの観点から説明する報告もある(嶋, 1992)。さらに、南(1995, p.21) は、環境の移行に対して、従来用いられてきた適応概念の他に、再構成、再構造化という概念が必要であると指摘している。新しい環境下でストレスの処理や感情の平衡を取り戻すことは、適応上の課題となる。しかし、移行後はこれらの課題以外にも、移行する前の環境への愛着の処理や、過去の生活を現在の生活の中に組み直すことが必要となる。南は、これについて、「状況に自分を合わせていくといった意味での適応概念の範囲を越えた、生活世界の再構成、再統合の作業である」(1995, p.21) と指摘して適応概念とは区別している。

### 3. リロケーション研究と「適応」概念

以上のように、適応概念の意味を確認すると、状態概念、過程概念、能力概念といった大きく3つの意味が含まれることがわかった。ただし、人の非遺伝的な適応を語る上では、一見固定された状態と思われる場合も、人と環境の相互作用によって動的平衡が保たれて

いる状態を指す。そのため、状態概念と過程概念の明確な区別は困難なことが多い。

本節第1項のリロケーション研究のレビューでは、リロケーションの先行研究の中には、研究タイプとしてまず「リロケーションの影響を明らかにするための研究」と「リロケーションの影響とそこに介在する要因を明らかにするための研究」が認められた。これらの研究は、いずれも変化の結果を静的な状態として扱っており、さらに説明変数と結果変数の因果関係を説明していることから、「適応」概念における状態概念に対応するものと考えられる。近年では、Baglioni(1997)が示すように、リロケーションの影響と要因を多角的に捉えた構造モデルも報告されている。しかし、一見複雑な構造をとると思われるこのようなモデルも、変数間の線形的な因果関係の説明の域を超えておらず、状態概念に対応するものと言える。

ところで、第1項でも述べたが、このように状態概念を説明する説明変数や結果変数となる概念は、多くの研究で共通した変数が用いられていることから、大枠はほぼ出揃った感がある。その一方で、これまでのリロケーション研究の中では、リロケーションによって生じる変化は複雑であり、単純な仮設では説明できないことが繰り返し指摘されている(安藤, 1994; 斎藤, 1997, 2000)。また、これに対処するため、斎藤(2000)は、直接影響と間接影響からの検討を行っている。しかしながら、このように介在要因を要素的に還元し、それらの線形的な因果関係を説明するだけでは、要素的な説明に限定されてしまい、異なる性質の要因が複雑に絡み合う実際の現象を説明することが難しい。さらに言えば、生活の質についての個人的な評価や主観的満足度は、現時点での生活環境や状況に対する評価の他にも、それ以前の生活状況の想起や、これからのステージの予期などが背景に浸入した、文脈的な性質をもつ相対判断である(南, 1995, p.13)。そのため、南(1995, p.13)も指摘するように、心理的健康の問題を扱うリロケーション研究には、ライフステージの空間的・時間的文脈を組み入れた研究戦略が必要となる。しかし、状態概念としてのリロケーション研究のように「何が結果に影響を与えるか」を研究設問とする研究では、例え直接影響と間接影響を含めても、空間的・時間的な連続性や「文脈的要因の相互作用」(南, 1995, p.12)を説明することが難しい。リロケーションという実際の現象を説明するためには、リロケーションの結果に影響を与える条件の提示だけではなく、「いかに連続性が生じるか」あるいは「文脈的要因の相互作用がいかになされるか」といった適応プロセスを説明する必要がある。

次に、リロケーション研究と過程概念、能力概念の対応関係を確認する。リロケーション後の適応プロセスを扱った外山(1996,

2003)と小倉(2002, 2005)の研究は, 人と環境が相互作用する関係を取り扱っており, 共に過程概念に対応するものと考えられる。さらに, 外山(1996, 2003)は, 空間性・物・人の相互作用によって, プライベート領域, セミ・プライベート領域, パブリック領域といった施設内領域階層にそって, 「個人的領域」が形成されていくプロセスを示している。このプロセスでは, 主体による「物」の「持ち込み」, 「配置」, 「掲示」によって個室がプライベートなテリトリーとしての領域形成につながることや, 入居者の私物がプライベート領域からセミ・プライベート領域へと「あふれ出し」たり, 「表出」することによって個室に隣接するセミ・プライベートな空間が他入居者と共有される領域へと形成されるプロセスを示している(p.222)。このような「持ち込み」, 「配置」, 「表出」等は, 主体からの行動であることから, 「適応」概念では能力概念に対応すると考えられる。

一方, 小倉の報告は, 特別養護老人ホームへ入所した高齢者の「初期適応期」(2002)と「安定期」の報告(2005)をそれぞれ行っている。「初期適応期」では, リロケーションした高齢者が主体的能動的に新しい環境内のモノ・ケア・人々との接点を見つけ, 「共にいる」という関係を見出していくプロセスを明らかにしている。また, 「安定期」の報告では, 主体が安定している状態や安定を揺るがす環境からの作用について述べている。「初期適応期」に認められる高齢者の主体的能動的な働きかけは, 主体から生じる合目的的行動であり, 「適応」概念における能力概念に対応するものと言える。

以上より, リロケーションの先行研究は, 「適応」概念に含まれる状態概念, 過程概念, 能力概念を全て網羅している。ただし, リロケーション研究のレビューでも触れたが, 先行研究ではリロケーション後の具体的な適応プロセスを扱った研究は非常に少ない。さらに, リロケーションの影響が多様な説明変数と結果変数を用いて示されているものの, これらは因果関係による説明であるため, 状態概念との対応に留まり過程概念に対応するものではない。そのため, 今後も過程概念や能力概念に対する検討が必要となる。特に, 「いかに適応していくか」といったプロセスを明らかにすることが必要である。

さらに, 過程概念や能力概念について検討する際には, 留意すべきことがある。一般的に, 適応によって事象を説明する場合には, 人と環境が適合・調和している状態と考えられる(小田, 2004, p.41)。つまり, 人と環境間の不均衡状態に対する自己の恒常的維持のための機構として語られることが多い。これは, リロケーションの先行研究にもあてはまることであり, 特に死亡率や疾病率の変数によってリロケーションの影響を検討した初期の研究(Aldrich, 1964;

Killian, 1970; Markus et al, 1971; Miller & Liberman, 1965; Wittels & Botwinick, 1974) からも明らかである。その後、心理的変数 (Brand, 1974; 中里ほか, 1988; 安藤ほか, 1995; 平岩ほか, 1997; 斎藤, 1999) や健康状態 (Eckert, 1984; 小野ほか, 1996), 対人交流や行動範囲 (小野ほか, 1996; 斎藤ほか, 2000; 安ほか, 2004) を結果変数とした研究が行われている。これらの研究は、リロケーション前の状態を基準としてリロケーション後の状態を比較・検討しており、不均衡状態や自己の恒常的維持の有無を扱っていることには変わらない。言い換えると、このような研究が主題としているのは、リロケーションによって新しい事態と直面した後、何がストレッサーとなり、どのようなストレスを受けるかである。

しかし、人の特徴を考えると、不均衡状態に対する自己の恒常的維持だけでは語りつくせない側面がある。確かに、新しい事態へと移行した初期の段階では、現在の事態に起きる問題を一刻も早く解消することが主体にとっての当面の課題となる (南, 1995, p.21)。しかし一定の期間が過ぎると新しい生活の場にふさわしい行動を身につけ (竹中, 2000, p.118-119), やがてそれぞれの楽しみや役割などを作り自分のペースを守って自分なりに安定した生活を営むようになる (小倉, 2005)。人が人である所以は、過去と現在や、自己を取り巻く状況を自己のストーリーとして再編する力を有する点にある。このような人に固有の特性を適応概念に含めるか否かは、論者によって異なっている。だが、自己や自己を取り巻く状況を再編する特性が人特有のものであるならば、過程概念や能力概念の検討には、自己を恒常的に維持する過程—つまりリロケーションによって新しい事態と直面した後、ストレスをどのように処理し、感情の平衡をどのように取り戻すか (南, 1995, p.21) といった過程と、状況を再編する過程の両者を含める必要がある。この点について、南 (1995, p.21) は以下のように指摘している。

「環境変化に対する人間側の反応としては、従来『適応』という概念が使われることが多かった……。このような事態では、ストレスをどのように処理し、感情の平衡をどのようにとりもどすかということが大切な課題となる。これも適応上の課題と見ることができよう。しかし、処理事態において重要なプロセスとして、移行する前の環境への愛着をどう処理するか、また前の環境と新しい環境との間にどう折り合いをつけていくかという問題への対処がある…。移行の初期においてはとにかく現在の事態に起きる問題を一刻も早く解消することが移行主体にとって当面の課題となるが、一定期間をすぎてある程度の安定感が得られたとき、主

体は何らかのかたちで『過去』を意味づけ、旧い世界に関わる環境や人々や当事の目標・夢などを自分の生活世界の中に位置づけることを試み始めるのではないか」

上記のような南の指摘は、リロケーション後のプロセスには、新しい事態でのストレスを処理して自己を恒常的に維持するプロセスと空間的・時間的文脈を現在の生活に取り込むプロセスが併存、または交互に存在することを示している。リロケーションの先行研究のうち、外山（1996, 2003）と小倉の報告（2002, 2005）は、過程概念と能力概念に対応するものであった。彼らが報告する過程概念と能力概念に含まれる意味を確認すると、これらの報告では「個人的領域」や、「共にいる」という関係あるいは「つながり」が形成される過程を通じて、安心・安全といった欲求や、自己実現に関わる高次の欲求充足がなされていることを指摘している。そのため、これらの研究は、自己の恒常的維持を示す狭義の「適応」だけではなく、自己のストーリーのもとに空間的・時間的な状況を再編する過程をも含める研究と言える。

ここまでの議論をまとめると、今後の高齢期リロケーション研究では、以下の点を課題にして取り組む必要がある。すなわち、リロケーションを巡る複雑な現象の説明、リロケーションの影響に至るまでの具体的な過程の説明、状況を再編する人特有の過程の説明である。そして、これらの研究的課題に取り組むため、空間的・時間的文脈性を扱ったリロケーション研究が今後必要となる。つまり、人と環境とが空間的・時間的に有機的つながりを形成することによって、物理的・人的環境が個人にとって固有の文脈性を帯びた環境へと移行する過程を研究する必要がある。このような視点をもった先行研究には、外山の報告（1996, 2003）や小倉の報告（2002, 2005）がある。そして、これらの報告は、現在のリロケーション研究の一応の到達点にあると言えよう。そこで、両報告の文脈性の扱いについてさらに詳しく確認する。

外山の報告では、「個人的領域」が、まず「個が守られる空間」、次に「数名の個で共有できる空間」、そして「小規模なグループのまとまりの単位」、さらに「施設全体」といった領域へと段階的に広がっていく過程を示している（外山, 1996, p.222; 2003, p.41-51）。さらにその説明では、主体による「私物」の移動によって個室がプライベートなテリトリーとして領域形成されることや、個室に隣接するセミ・プライベートな空間が他入居者と共有される領域へと形成される過程について説明している（1996, p.222; 2003, p.41-51）。また、セミ・プライベートな領域への「私物」の表出によって、入居者達の間で交流の場が自然発生することも説明している（1996,



p.222). これらの指摘から、外山が含める文脈性は、主に空間的側面に特徴付けられることがわかる。しかし、時間的側面については、「私物」に過去とのつながりを含めている以外に説明はなく、十分取り入れられていると言いがたい。特に、「個人的領域」で営まれる人の行為や活動を画一的に捉えており、個人の歴史性が「個人的領域」形成の過程にどのように含まれるかは示されていない。

これには、外山の理論の背景となった研究方法の選択も影響していると考えられる。外山の「個人的領域」形成の理論は、居室に持ち込まれた「私物」の数や占有割合の報告（1993, 1997）、入居者と職員の間で交わされる言葉の相違についての報告（2003, p.33）、入居者の各空間の滞在先の分布状況の調査（1999, 2001）といった観察を用いた量的研究によって導き出されたものである。しかし、個人の歴史性やその時間的文脈を把握するためには、個人が環境との相互作用の中で、何を経験し、どのような意味付けを行っているかといった主観的経験の過程を検討する必要がある。しかし、外山の報告（1996, 2003）では、理論を導き出すための調査において、調査方法の選択の中に主観的経験の過程を検討する方法が取り入れられておらず、この点が時間的文脈性に課題を残す結果につながったと思われる。また、このような方法論の選択の影響に関連し、外山の報告（1996, 2003）では、「文脈的要因の相互作用」の検討も乏しい。つまり、「私物」は「私物」のまま、「入居者」は「入居者」のまま、そして「職員」は「職員」のまま、捉え方が固定化されている。しかし、「個人的領域」が形成される過程では、相互作用のあり方も変わり、相互作用によって派生するそれぞれに対する個人の捉え方や意味付けも変わっていくものと考えられる。しかし、外山の報告（1996, 2003）では、その点に関する説明がなされていないのである。

他方、小倉は、環境内のモノ・ケア・人々との接点をみつけ、「ホームとのつながり形成」を行う過程を示している（2002）。さらに、「安定期」に関する報告（2005）では、「ホームとのつながり形成」からそれぞれの楽しみや役割などを作り、自分のペースを守って自分なりの安定した生活を構築することを示している。この「ホームとのつながり形成」という行為には、新しい環境に直面した際のストレスに対処し自己の安定性を獲得するという意味がある。それ以外にも、「入居者が新しい環境と自分の生活史との類似性を重ねて、入居前は縁がなかった施設と自分とケアを介して結ぶ」（小倉, 2005, p.77）との意味がある。このことから、小倉の報告は、時間的文脈性を含めていると言える。さらに、半構造化面接を用いた質的研究によって、個人の主観的経験を調査しており、新しい環境と自分の生活史の接点をどのように見つけていくかの過程を捉えている。た

だし、小倉は生活史の接点について「新入居者はホームのケア、食物や自然、宗教などのモノ、職員や他入居者との人間関係を自分とホームとの接点にしている」（小倉、2005、p.77）と説明しており、ここではモノ・ケア・人々がすでに対象化されている。

しかし、先行研究の中には、主観的経験をより詳細に扱った報告（Tuan=1993）や、環境における「行為の可能性：アフォーダンス」として環境が対象化される以前の知覚的な情報を扱った報告がある（佐々木、1994）。例えば、場所と空間の経験をまとめた Tuan（=1993）は、主観的経験を嗅覚、味覚、触覚といったより直接的で受動的な感覚から、視覚による能動的な知覚や、象徴化といった間接的な様式にいたるまでの幅広い側面によって説明している。また、佐々木（1994）は、アフォーダンス理論から行為につながる環境の知覚的な情報を説明している。そこで、リロケーション研究で時間的文脈性を扱う場合においても、「モノ」や「人々」を対象化して捉える以前の感覚・知覚的な主観的経験を含めた、詳細な検討が必要である。

また、小倉の報告（2002、2005）は、外山とは対照的に空間的文脈性に乏しい。小倉の報告は、特別養護老人ホームを1つの大きな領域として捉え、外山の報告に認められたような複数の領域は想定していない。そのため、つながりを形成したモノ・ケア・人々が同じ領域に存在するのか、違う領域に存在するのかも彼女の報告からは理解できない。

以上より、外山の報告（1996、2003）と小倉の報告（2002、2005）は、それぞれ空間的文脈性と時間的文脈性のいずれかを優先して扱っている。ただし、空間的・時間的文脈性は、共に関連し合っただけで文脈性を創っていることから、両面の文脈性を兼ね備えた研究が必要である。

そこで、本稿では、これまでのリロケーション研究で十分に検討されてきたとは言い難い、リロケーション後の過程を、空間的・時間的文脈性の両面から検討する。そのため、従来の自己の恒常的維持の過程を扱う「適応」概念に代わって、状況を再編する過程を「場所」概念を用いて検討する。本稿が扱う「場所」は、人々の経験と一体化した過程であり、感覚・知覚的経験といった主観的経験と、行為や活動による実際の人と環境の相互作用と、そして主観的経験と実際の行為・活動とを結ぶ「意味」といった次元の異なる側面を含んだ過程と捉えている。そのため、「場所」は、人々の態度や価値、これまでの経験、自分が関わる集団的価値や文化が凝結した、空間的・時間的文脈性を帯びた場所である。本稿では、先行して行った質的研究の分析（坂上、2004a）から、個別的で高次の欲求充足を実現する生活には、鍵となる「場所」が存在すると仮定し、その「場

所」の意味と「場所」の構築過程を検討することにした。それにより、リロケーション後の具体的な過程を、空間的・時間的文脈から把握することにつながると考える。次の第3節では、本稿における「場所」概念の定義を行う。

### 第3節 場所論の省察と「場所」の定義

#### 1. 場所概念の多義性

我々の日常生活は必ず場所で営まれ、場所なくしては成り立たない。場所は、我々が行うことやそこで過ごすことの意味に強い影響を与えている (Hamilton, 2004)。しかも、我々の1日の生活が1つの場所で完了することではなく、多くの人々は1日の中で次々と場所を移動している。例えば、朝目覚めると寝室のベッドから抜け出し、整容するために洗面所へと移動する。その後、食卓が配置された食堂で朝食をすませ、学校や職場等のそれぞれの活動の場所へと移っていく。そして、夜になれば再び自宅へと戻り、1日を終える。このように我々の生活は、様々な場所のつながりと共に構築されているのである。

場所という言葉には多くの意味があり、使う人や目的によって様々に用いられている (Hamilton, 2004)。ただし、我々が日常で場所という場合には、地理学的な意味で用いることが多く、地理的な位置や他とは境界付けられるある特定の空間を指していることが多い。哲学者で古典的空間論を論じた Bollnow (= 1978, p.32-44) は、空間が包括的な全体として説明されるのに対して、場所をその内部構造として説明している。彼によると、空間の内部構造には、Ort (場所, 地点), Stelle (位置, 箇所), Platz (席, 空地) が含まれる。Ort は、空間内の固定した一点、とりわけ地表上の固定した一点を表す言葉である。特に、所番地や居住地をあらわす際に用いられる。この言葉は、広がりや何かで充填されている平面とか空間は意味せず、正確に固定されている特定の地点を示している。Stelle (位置, 箇所) もまた、空間内の一定の点をあらわす。これは、ある事象の確定された所在地を意味し、各々のものが自分のあり場所に置かれることである。Ort と Stelle の意味は非常に類似しているが、Stelle はある地点とそこに存在しているものを同時に表しうる点で Ort とは異なっている。一方、Platz (席, 空席) は、一般的に空地や、人間によって占められる空間を意味する。例えば、一定数の客席をもつ劇場とか、あるいは座席などがここに含まれる。また、Platz は境界をもち、何か境界内に収まっている状態を意味する (Bollnow, = 1978, p.39-43)。

このように、場所の概念には様々な意味が組み込まれている。園田 (2003) は、地理学、建築学、心理学の領域で扱われている場所の内容を整理し報告している。それによると、場所には、モノの存在を表す記述 (physical object), 周辺の記述 (context or location), 人間の行動に関する記述 (human behavior), 印象の記述

(impression)の4つの局面がある(園田, 2003, p.89-91). モノの記述とは,モノの存在のことであり,「〇〇がある」と表現される. また, 周辺の記述は,「〇〇から近い」,「回りには〇〇」などと語られる. これらモノの存在の記述と印象の記述には, 物理的構造(physical structure)も含まれる(Cotterell, 1998). 人間の行動に関連する記述は,「〇〇をしている」,「休むのによい」,「見える」などの利用法や身体との関わりで表現され, 行動や行為の他に役割(activities and roles)がここに入る. 最後に, 印象の記述は,「明るく開けた」,「〇〇な雰囲気」,「きれいな」などと表現され, 一連の感情と意味(feelings and meanings)がここに当てはまる. 特に, この印象の記述は, 場所の質感を表しているとも言われ, 場所の性質の違いによって異なる感じ方が扱われている.

この分類と先の Bollnow (=1978, p.39-43) の説明を比較すると, 場所の概念は, Bollnow の古典的空間論で示された位置や物理的構造のような実体的意味の他にも, 近年においては主観的な経験に関わる意味を含めていることが理解される.

ところで,「場所(place)」概念の多義性を巡る議論は, 1970年代以降の欧米における人文主義的地理学(Humanistic Geography)の台頭により活発化された. この代表格には, 地理学者の Tuan や Relph がいる. 人文主義的地理学では, 人間の様々な体験的印象や空間的蓄積, 価値観を通じた環境の読み取りに至るまでの実証的研究が多く出されている. 人文主義的地理学は,「生きられた空間」や「実存空間」の探求を主題とし, さらに人間が関わることによって意味づけ, 周囲の空間から分節された「場所」の探求を目的としている(高野ほか, 1999, p.332-333). 彼らは, 実証されるものと実感されるものとは同値でないとの考えによって場所論を展開している.

心理学においても, 物理的な環境に対して, 個人によって経験される環境を特に心理的環境として論じている. Lewin (=1956) は, 力学的な概念を用いて「場の理論」や「生活空間論」を報告している. 南(1995, p.7) は, Lewin の理論には彼の戦場体験が原点にあることを以下のように説明している.

第一次世界大戦の4年間を塹壕の中で過ごした若いレヴィンは, 兵士が前線に接近してゆくにしたがって, 風景の見え方が劇的に変容することを自ら体験し, その変化の現象を省察した……兵士がまだ前線に近づき, 平原の中の家影に敵と思われる対象を知覚したとき, 彼の目の前に広がる風景は一変する. 風景は前方と後方という明確な方向性をもち, 地平線は「前線」という境界によって分断される. そして, それまで農村の家として

見えていた場所は、敵の隠れる塹壕や、敵の銃弾から身を守る避難所といった特殊な意味をもつ対象領域としてみなされる。そこにあるものはもはや家具ではなく、薪の材料であり、戦闘行為に用いられる「戦闘物」になる。

このように、彼の体験では、状況の変化によって場所やそこに存在するモノの意味が変容することが示されている。しかしながら、彼の理論は、形式化への指向を内包しており、経験からは遠い心理学的力の概念表現と測定に収束していった（南，1995，p.10）。例えば、彼は主体の意識・行動の文脈によって生活領域が区分されることや、領域内における個人の行動の予測を物理・数学の理論の応用によって行えると考えていた。彼の理論の中では、境界や領域、対象物の誘発性、場の力等の概念が用いられている。

環境心理学者の Stokols は、人々の日常活動を構成する環境の文脈を、空間性だけではなく時間性や社会文化性の視点を包括した複雑な様相から説明している（南，1995，p.11-14）。彼は、文脈を捉えるための分析単位として、状況、場面、生活領域、全般的な生活状況を提示し（表 6）、生活状況にかかわるストレスや、生活の質、生活満足度など、成人の心理的健康の問題を扱う場合は、ライフステージの空間的・時間的文脈を組み入れた研究戦略が有効であると述べている（Stokols, =1995, p.13）。

表 6 文脈の分析単位 (Stokols, = 1995, p.13 より 著者作成)

状況 (situation)	特定の時間と場所において生起する個人あるいは集団の活動の連鎖
場面 (setting)	さまざまな個人的, 対人的な状況が規則的にくりかえされる地理的な場所
生活領域 (life domain)	家族, 教育, 宗教活動, 娯楽, 仕事といった個人の生活の中で区別される分野, 領域
全般的な生活状況 (overall life situation)	個人が人生の一定の時期の間で従事する主要な生活領域の総体

Lewin や Stokols らの研究の特徴は、人間を環境と対峙する存在として捉えるのではなく、人-環境は1つの構造をもったシステムとして考えようとしている点にある。ここでは、人は環境にはたらきかけられる一方、環境にはたらきかけることによって、心理的環境を構築する。そして、この心理的環境のあり方によって行動が規定されると説明している。言い換えると、環境は直接人間行動の生起やその変化に影響するのではなく、環境からの情報を認知し、それによって感情を生起させ、環境に関する評価を行った人間の内部に形成された心理的環境によって規定される（岩井，2001，p.24）と考えている。

しかしながら、先に示した心理学や環境心理学における研究は、人文主義的地理学の研究と同様に人間の経験に触れているものの、その扱い方が異なっている。寺本（2003，p.250-251）は、両者の相違について次のように説明している。つまり、心理学では、どのように（How）知覚するのかといった人間の心理作用に注目している。しかし、地理学では、人の心理がどういった空間的な状況に投射されるかという視点、つまり対象側であるモノや場所である「なにを（What）」あるいは「どこで（Where）」知覚しているのかといった視点をより重視している。つまり、前者の研究では、心理的環境について述べる場合、相互作用の結果としての環境を、観察者の外在的な視点によって記述している。そこで述べられているのは、外側から見た環境や外郭的な環境である。そのため、人と環境の直接的な関係は見えてこない。因果関係や均衡の維持といった関係を論じるのみである。他方、Tuan ら人文主義的地理学者が論じているのは、内側から捉える経験であり、感情や思考そして人が働きかけて何かを生み出すといった経験である。そして、このような直接的な関係によって描かれる世界は、意味の世界とも言い換えることができる。

加藤（1995，p.248）は、このような相違について、フランス心理学の「理解される空間（espace connu）」と「生きられる空間（espace vécu）」の区別を用いて説明している。「理解される空間」とは、物理学や数学が生み出してきた物理的空間の性質に関する知識や、経験を通して人が自らの内部に形成・蓄積する空間的知識（表象や操作を含む）のことである。このような空間では、意味や価値は切り落とされている。一方、「生きられた空間」とは、人と空間との生きた場面での直接の関係を示す。人々の感情や価値とともにいきいきとした空間との意味的関わりが浮上する。ここでは、人は空間の中にはめ込まれ、包み込まれている。これらの説明を先に示した研究に当てはめると、心理学、環境心理学の研究は「理解される空間」を扱い、人文主義的地理学の研究は「生きられる空間」を扱



っていたものと考えられる。

さて、ここで明らかとされた理論的立場の相違は、我々が居住支援への応用を考えるうえで重要な視座を提供する。現在の居住施策では、個別的で自分らしい生活の構築を支える「住まい」が1つのキーワードとなっている。このような「住まい」では、行為や活動を通じて実現される人と環境の有機的な関係のあり方や循環的關係で浮上する意味が問われるべきである。そこでは、外在的な観察者の視点から外郭的な環境を論じるだけでなく、内在的な視点から得られる経験も併せて論じる必要がある。さらには、人の経験が投射されながら空間内に分節され、配置されていく「場所」の構築過程の検討がより重要となる。

そこで次に、まず Tuan (=1993) や Ralph (=1999) の空間と場所の経験に関する研究を概観し、内在的な視点、つまり主観的経験から浮かび上がる経験の様相を述べる。続いて、主観的経験と実存的な環境を有機的に結びつける視座を得るため、ここでは特に Uexkull の環世界論 (=2005) について述べる。環世界論は、動物の知覚世界と作用世界を有意味的な総体として捉え、物理的な環境と心理的環境、そして双方の有機的な関係によって浮上する意味を含んだ多元的なシステムと考えることができる。最後にこれらを用い、個別的で継続的な生活の創出を支える「場所」の定義を図ろうと思う。

## 2. 場所と空間の経験

Tuan は、場所と空間の経験 (experiential space and place) という概念をまとめ論じている (Tuan, =1993, p.21-39)。彼は、計量モデルによって空間や場所の特質を記述・分析する研究ではなく、空間と場所に対する人間の感情を理解し、様々な形態の経験 (感覚運動的経験、触覚的経験、視覚的経験、概念的経験) を考慮に入れつつ、空間と場所を複雑な感情の心象として理解しようとしている (Tuan, =1993, p.21-39)。特に、経験を嗅覚、味覚、触覚といったより直接的で受動的な感覚から、視覚による能動的な知覚や、象徴化といった間接的な様式にいたるまでの幅広い経験に言及している。さらに、情動や思考は、人間のすべての経験に彩りを与えると述べている。また、Tuan は、経験とは感情と思考とが複合したものを言い、経験することは学ぶことであり、与えられたものに働きかけて、そこから何かを生み出すことであると述べている (=1993, p.22-23)。

Tuan は、また、環境をつくる要素である空間と場所の関係を論じている (=1993, p.17)。空間は場所よりも抽象性を帯び、開放

性，自由，無限といった感覚をあたえる。空間は，運動する余地があるものとして経験され，対象物や場所の相対的位置として経験されたり，場所と場所を隔てたり結びつけたりする間隔，広がりとして経験されたり，またいくつもの場所がつくるネットワークによって限定される地域として経験される。

他方，場所は価値が凝結したものであり，安全性や安定性，そして愛着の感覚を与える。また，場所はそこに住むことができる対象である。そして，最初はまだ不分明な空間は，われわれがそれをもっとよく知り，それに価値をあたえていくにつれて次第に場所になっていく。藤竹（2000，p.48）や山岸（2001，P.87）も同様の指摘をしており，自分にとって意味づけた，あるいは方向付けられた，価値付けられた空間を「場所」と考えることができると述べている。

「... 人間が空間（スペース）に対して心理的な，あるいは象徴的な意味を見出したとき，そこには人間にとって場所（プレイス）となる。したがって空間は，環境の抽象的な地理的特徴を示すものであり，そこに象徴的な意味を与えたときに，場所となる。つまり，人間にとって意味のある空間が場所である。場所という言葉には，空間とは異なり，人間とその物理的環境との間に一次的であれ，かなり永続的であれ，強い情緒的な結びつきが見られることを意味する」（藤竹，2000，p.48）

Tuan は，この他にも，場所が有する時間性にも触れている。成人にとっての場所は，長年にわたる感性の着実な成長の結果として，深い意味を獲得する可能性があることを指摘している（Tuan，= 1993，p. 65）。このように，空間概念は広がりによって特徴付けられるのに対して，場所概念は価値や意味付与，そしてそれによる空間の区分として特徴付けられる。例えば，我々は初めての土地に来た時，だだっ広い空間の中で方向も目印もわからないまま，立ち尽くすことがある。しかし，そこで過ごしているうちに，やがて自分なりの目印となる建物や風景ができ，それぞれの位置や配置が理解されるようになる。その時，空間が区分された場所となるのである。

ところで，Tuan は経験を感情と思考とが複合したものと言っているが，このような経験を統合体として論じる概念がいくつか報告されている。例えば，場所のセンス，場所づくり，場所の愛着等がここにあてはまる。以下に，それぞれについて説明する。

### 1) 場所のセンス

単なる方向の識別から，異なる場所やそのアイデンティティを識別する能力，さらに，人間存在や個人のアイデンティティの基礎と

しての場所との深い結びつきにいたるまで、幅広い意識の持ち方のことを場所のセンスという。このうち、場所との深い結びつきは、場所との一体感としても説明され、場所のセンスの中で最も注目される意味である。Relph (= 1999, p.159-163) は、場所のセンスについて、個人および共同社会の一員として内側にいて自分自身の場所に所属すること、そしてこのことを特に考えることなしに知っているという感覚であると述べている。

また、Rowles(2003)は、場所との一体感を *sense of being in place* と表現している。我々は人生を通じて個人のアイデンティティの一要素である「場所」を作り続ける。作りながら、過去の要素から脱却したり、新しい環境での経験と融合されたりしている。このような選択的過程によって、自己の連続性やアイデンティティを維持していくことができる。場所のセンスは、こういった自己の連続性やアイデンティティの源泉となるものである。

人は場所をその内側から経験すると、場所に取り囲まれ、場所の一部になる。さらに、個人のアイデンティティは、場所のアイデンティティを有する。我々が、ある土地によって自己を示すとき、単に生活史や、地理的空間について述べているのではなく、自分自身について何かを言おうとしているのである (Zemke, 2004)。

## 2) 場所の愛着

人文主義的地理学では、特定の場所に対する個人の愛着を重視している。場所の愛着とは、場所に対する人の強い思いである。Altman(1992)によると、場所の愛着は土地の所有感や定住意識に基づくことが指摘されている。

Milligan(= 2003, p.92)は、場所への愛着を構成する要素として、*interactional past* と *interactional potential* という概念を使用した。まず、そこで起こった出来事が意味深く、その特定の場所が個人にとって特に意味深いものとなるプロセスを経て *interactional past* , すなわちそこで起こった体験との歴史的な絆(記憶)が創造される。次に、その場所の特定の特徴によって *interactional potential* , すなわちその場所で起こりそうだと知覚される出来事(期待)が同時に形成される。これら2つの要素が織り交ざり特定の場所に対する愛着が形成される。

Tuan (= 1991, p.160) は、場所の愛着を、トポフォリアと述べている。トポフォリアでは、物理的環境と人間の情緒的つながりをすべて含む。環境とのこうした情緒的なつながりは、その強さも微妙さも表現様式もきわめて様々である。例えば、空気や水や土の感触からもたらされる喜びのように触覚的なものから、思い出の場所や生計を立てる場所といった永続的にもつ感覚等がある。トポフォリアは、人間の感情で最も強いものではない。だが、それが人の心

を動かすとき，場所や環境は，感情に満ちた出来事を担ったり，あるいは象徴として知覚される。

### 3) 居場所

居場所の本来の意味は，人が居るところ，いどころといった物理的空間のことであった。最近はそのに安心やくつろぎ，他者の受容とか承認という意味が付与されるようになった(住田, 2003, p.3)。つまり，居場所とは，自分の身の置き所，他者から受容され承認され，自己を確認することができる場所，安らぎとかくつろぎを得られるような安定した場所のことである。居場所は，関係性と空間性が一体的に結び付くことによって，人に安心感やくつろぎ感をもたらしている。

藤竹(2000, p.48-51)は，居場所のタイプ分類を行っている。彼によると居場所には，他人によって自分が必要とされている居場所(社会的居場所)と，自分を取り戻すことができる居場所(個人的居場所)がある。また，自己実現的な居場所，自分が積極的に出て行く場所としての居場所(積極的居場所)や，周囲の人々から自分を遮断する，撤退場所(非積極的居場所)もある。居場所が論じられるようになった背景には，個別化する現代人の激しい社会変動があげられる。個別化の結果として自己不安が生じ，人々は揺るぎない他者との関係や，自己受容と自己承認を求めるようになっている。居場所とは，安定的な，揺るぎない関係性が具象化した空間性と言える(住田, 2003, p.3)。

### 4) 場所づくり

場所づくりとは，場所を創造したり，維持する活動のことである(Zemke, 2004)。例えば，家造りなどがここに含まれる。リロケーションを経験する人は，場所づくりを行う必要がある。場所づくりの過程には，過去の場所とのつながりを継続すること，新しい人との関係づくり，そして快適な習慣が維持されるように空間内のモノを配置することなどが含まれる(Rowles, 2003)。人間の生活は，意味と形態と構造をもつ場所のシステムを必要とする。無意識的な場所のセンスからは，自然的，社会的，美的，精神的，およびその他の文化的要素の全体を反映し，そこから全要素が互いによく適合しあっているような場所が生まれやすい。意識的な場所のセンスは，目標志向的で革新的な問題解決を伴うような設計過程と結びついている。そこから生まれるのは，人間と自然等の関係の概念と可能性の両方が内的に調和し，所与の状況に適合した場所である(Relph, = 1999, p.169)。

ここで示した概念は，全て人と場所がシステム化したことによつて生じるものである。また，それぞれの概念は，互いに関連し合っ

たり、重なり合ったりしている。例えば、場所のセンスのうち一体感として説明されるものは、場所づくりによって生まれる。さらに、一体感としての場所のセンスは、場所の愛着や居場所と大きく重なっている。ただし、場所の愛着は、どちらかと言えば、人と物理的・自然的環境との情緒的で、直接的なつながりを意味する概念と考えられる。他方、居場所は、むしろ人と人との関係性によって説明され、ここでは場所はその関係性を具象化するモノと捉えられている。また、場所のセンスや場所の愛着は、場所が人によってどのように知覚されているのかを主眼においているのに対し、居場所は人が場所から受ける作用に着目していると考えられる。

### 3. Uexkullの環世界とその多元性

Uexkullは、環世界論によって、主体それぞれの固有の世界が構築されることを描いている（河本，1999，p.240）。Uexkullの環世界論は、知覚と行為の複合的な経験や人と環境の直接的な関係のあり方に示唆を与えるものである。彼は、動物と客体の関係を機能環（=2005，p.20）の図で説明した（図5）。

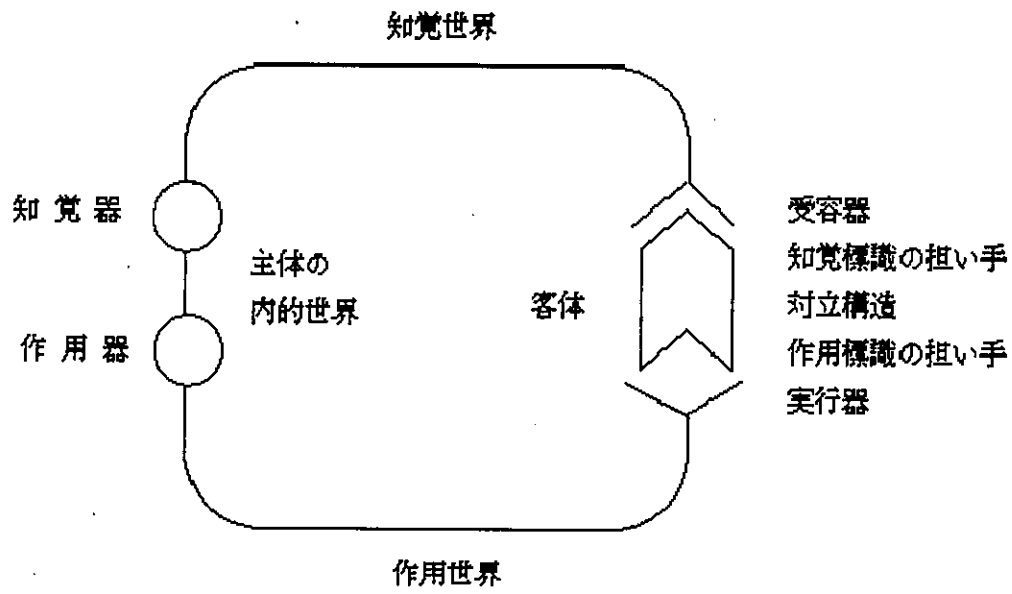


図 5 Uexküll の機能環 (Uexküll, = 2005, p.19 より転載)

Uexkull (= 2005, p.19-20)によると、動物は客体に知覚指標と作用指標を与える。また、客体のある特性が知覚標識の担い手になり、別の特性が作用標識の担い手になる。客体が主体の行動に関われるのは、それが一方では知覚標識の担い手になり、他方では作用標識の担い手になれるという特性をそなえている場合である。ある客体の特性はすべて、その客体の構造を通じて互いに結びついているので、作用標識によってとらえられた特性は、知覚標識を担う特性に客体を通じて影響をおよぼすとともに、知覚標識自体がみずからを変化させるように作用する。

この環世界論は、人々の場所の経験を考える際に1つの示唆を与えてくれる。生物によって環世界が異なるように、人もまた独自の環世界をもっている。しかも、人の場合には、複雑な行為や活動を通して、意味と価値の付与により空間を場所に変えながら独自の世界を構築している。場所論における場所のセンスや場所の愛着を始めとする「場所」に関する概念は、知覚と行為（作用）の複合的結果であり、これもまた外在的な視点によって示されているものである。

他方、Uexkullの環世界論（=2005）は知覚と行為を結びつけながら、動物と環境の直接的な関係について述べている。ここで特徴的なことは、内的な世界を中心に扱いながら、知覚指標や作用指標の担い手としての客体にも触れ実存的な視点も含めていることである。解説書の中には、Uexkullの環世界論は客観的に存在するものではなく、その動物主体によって客観的な全体から抽出、抽象された、主観的なものと説明しているものがある（日高，2003）。確かに、機能環は生物の内的な世界から論じられているが、抽出・抽象先である客観的な全体や、外部からの観察が可能な作用標識を想定していることから、内的な世界と実存する世界の両方の視点を兼ね備えていると考えることができる。

このように検討すると、Tuanの場所の経験論（=1993）が、内的な視点（つまり、主観的経験）から各々の情動的、思考的経験について論じていたのに対して、Uexkullの環世界論（=2005）は感覚・知覚的経験といった内的な世界と、実際の相互作用、そして内的な世界と実際の相互作用を結ぶ「記号」といった次元の異なる側面を含んだ、多元的なモデルであった。そして、このような多元的な視点を持つことによって、「どのようにして『場所』が構築されていくのか」といった、プロセスの説明に接近できると考える。

#### 4. 本稿における「場所」の定義

以上、これまで報告されてきた場所の定義を、特に Tuan と

Uexkull の理論を用いて概観してきた。その結果、場所は多義的な意味を含む概念であり、荒木（2003）も指摘するように、場所には物理的空間としての常識的な理解に基づく場所の意味（以下、物理的な場所）と、そこから発展し、物理的空間を超えた場所の意味（以下、「場所」）があることが明らかとなった。本稿における「場所」とは、このように物理的な場所と、場所と人々がシステムとして一体化することで浮上する意味とを併せ持った現象と考える。そして本稿では、Uexkull の環世界論を用いながら、「場所」を、感覚・知覚的経験といった主観的経験と、行為や活動といった実際の相互作用、そして主観的経験と実際の相互作用を結ぶ「意味」といった次元の異なる側面を含んだ、多元的な過程とする。そして、このような多元的な視点を持つことによって、具体的なプロセスの説明が可能となると考えている。

図 6 には、Uexkull の機能環を使って打ち立てた「場所」の構築過程の定義を示した。



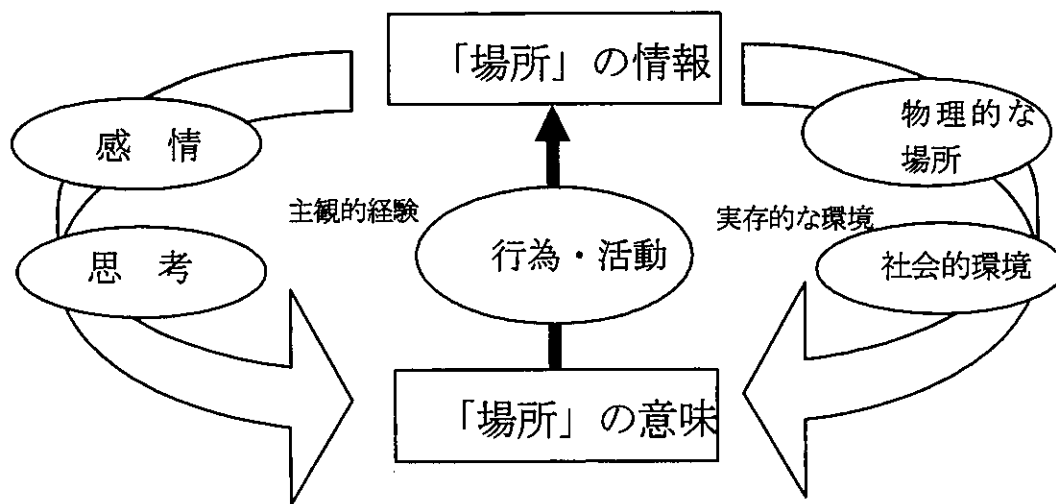


図 6 本稿における「場所」の定義

Uexkull の環世界論は、動物の世界を描くものであり、知覚世界と作用世界によって説明されている。そこで、人々の複雑な生活により対応させるため、ここでは作用に代わって行為・活動として論じることとする。図 6 に示した本稿における「場所」の定義は、実存的な環境と主観的経験の世界によって多元的に構成されている。この図では、実存的な環境と主観的経験の世界の中で循環的に行為・活動を繰り返すことによって、2つの世界を結びつける可能性を持った「場所」情報が浮上し、そして実際に相互作用することにより「場所」の意味が生み出されることを示している。

このように、主体と実存的な環境の相互作用と、主観的経験の世界での感情や思考による「場所」情報の認識が循環的に繰り返されることによって、「場所」の意味が構築されていくと考えている。第 3 章で報告する「場所」の構築過程の質的研究では、この「場所」の定義を参考にして、情報提供者の主観的経験の世界、物理的な場所や社会的環境、行為や活動による実際の相互作用、「場所」の意味、相互作用の可能性としての「場所」の情報、を分析の柱にして検討を行っていく。

これまでの居住施策や支援は、構造的な側面やそれに対する人の評価や印象を探求する形で展開されてきた。そのため、人がどのように過去からの継続性をもった生活をつくっていくかを論じることができなかった。上記で示した「場所」の定義は、構造的支援だけでなく、そこに意味的支援も加えることになると考えている。

第 2 章以降では、本項で得られた「場所」の定義を視座におき、「場所」の意味とその構築過程を探求することを目的に実施した質的研究について報告する。

## 注 釈

- 1) 高度経済成長期には、これまでの自営業に代わってサラリーマンが増加し、仕事の都合上親と同居する必要がなくなると共に、転勤によって移動する者が増えた。このことが、親と子の同居という居住形態を減少させ、核家族化を推進したことが指摘されている（袖井，2002，p.123-124）。
- 2) 報告によると、高齢期に独りになったとき、「子供（夫婦）と同居する」「子供（夫婦）と同じ敷地内の2世帯住宅や別棟住宅に住む」と考える人は、95年調査以降、年々減少しており、03年調査では、同居（同一敷地内に住む場合を含む）を望む人は合わせて24.3%であった（95年調査に比べて4.5%の減少）。代わって、「子供（夫婦）の近隣に住む」と、近居を望む人は増加し、03年調査では16.8%となり95年に比べて4.9%上昇している（加藤，2003，p.180-181）。
- 3) 平成12年の国勢調査における高齢期の移動率の特徴では、70～74歳では移動率が10%を下回っているが、75歳以上では年齢の上昇とともに移動率が上昇しており、85歳以上では2割の者が移動している。
- 4) 移動理由に関する調査に関連して、一部の地域を対象に高齢者の移動先について調べた報告がある。例えば、北海道札幌市に居住する65歳以上の高齢者の調査では、市内で移動した場合（市内から市内）をみると、移動後に借家に居住する者が減少し、代わって老人ホーム入居者が大幅に増加することが報告されている（エイジング総合研究センター，1998，p.71-79）。
- 5) すなわち、法改正により在宅福祉サービスが法律上に位置付けられると共に、市町村及び都道府県に老人保健福祉計画作成が義務づけられるなど福祉サービスの市町村への一元化が行われた。

## 第2章 質的研究方法の選択理由と調査設計

第2章では、質的研究法の特徴を論じながら本稿調査にこの方法を用いた理由と、具体的な調査設計を述べる。質的研究は、1990年代より、人間の心や社会に関わる学問分野の中で注目されるようになっていく。その背景には、人々のライフスタイルやものの見方が多元化し、従来の研究方法では研究対象の多様性に十分対応できなくなってきたことがあげられる（Flick, =2002, p.8）。このような状況に対応するため、日常の具体的文脈との関連で詳しく記述する質的研究法が注目されるようになった。質的研究とは、人間世界の複雑さを理解し、その複雑な世界で生きる人々がどのように考え、行動し、意味づけているかの理解を目的とする研究である。ただし、一口に質的研究と言っても、その中には多種多様な方法論が含まれており（Punch, =2005; Grbich, =2003; 波平&道信, 2005）、代表的なものにエスノグラフィー、現象学的研究、グラウンデッド・セオリー・アプローチ、ライフ・ヒストリー分析などがある。本稿では、「場所」の構築過程というプロセスを研究対象とすることから、特にグラウンデッド・セオリー・アプローチの技法を中心に用いている。第1節では、代表的な質的研究方法と、今回用いたグラウンデッド・セオリー・アプローチの選択理由について述べる。第2節では、具体的な調査設計として、今回実施したデータ収集と分析方法を説明する。そして、この節の最後では、研究成果の質を高めるために用いた方法と本稿調査が目指す到達点について述べる。

### 第1節 質的研究の特徴と選択理由

#### 1. 質的研究の特徴

質的研究は、ある特定の状況や社会文化的文脈の中で人々を理解しようとする研究である。この研究では、人々の世界観、価値観、意味、信念、思考様式、ある出来事の経験様式の解明に焦点をあてている。質的研究は、人間とは何かという問いを發しそれに科学の領域で答えを見出そうとする人文社会科学の領域を基盤としている（波平&道信, 2005, p.4）。質的研究は、提唱する研究者の基盤によって、方法論が多岐に渡っている。しかしながら、質的研究としての共通した特徴もあるため、以下にその点について説明する。

#### 1) 文脈の重視

文脈（context）とは、状況、背景、前後関係と訳される概念であ

る (Holloway & Wheeler, =2006, p.10). 質的研究では, 対象 (現象, 行為, 発話など) は, それらが位置づけられている状況の影響を受ける点を重視する. すなわち, 人の行動や経験は, その人がおかれている時間的な流れや場の状態, そしてその人が所属する文化的背景によって, 変わることが前提とされる. そのため, 実験室のようにコントロールされた人工的な状況で対象を理解するのではなく, 人々が生きる自然な状況, すなわち日常の場のなかで対象を理解することを目指している (Flick, =2002, p.9). そもそも人や人の生き方は, 個人によって異なり, また状況によってその都度変化するものである. 質的研究では, それを数値化や抽象化して捉えるのではなく, 時間的, 社会的な広がりの中で複雑なまま理解することを目指している. 本来の姿に立ち戻り, ある具体的な事例を時間的, 地域的 (Local) に特殊化して捉えるのである. そして, このようなアプローチを取ることにより, 人々の行為や考え方がそこに出現する意味を探求していく. 意味の存在は, 「物質」や「物体」の動きと人の行為や思考が異なる点でもある. 質的研究では, 人の行為や思考は, 多様で複雑な意味の中で成立していると考え, その探求のために, 人の行為や思考の背後にある何かを探り, 理解していくのである (波平 & 道信, 2005, p.3-4).

## 2) 内部者の視点

質的研究が対象とする人々のものの見方や行為は, それぞれの主観的立場によって多種多様である (Flick, =2002, p.10). 質的研究では, 情報提供者の内部からの視点に立って対象を探求することを特徴としている. このような内部からの視点は「イーミックな視点」とも呼ばれている. これは研究者の枠組みによって対象を理解するのではなく, 情報提供者の観点からその経験や状況を理解することである. そして, このような理解は, 「共感的理解」によって行われる (Holloway & Wheeler, =2006, p.11-12). 質的研究では, 研究者自身がデータを得るセンサーの役割をとる (川口, 2002, p.13). 研究者は, 情報提供者を観察したり, 話を聞いたりすることを通して, 情報提供者が経験している世界へと接近していく. 例えば, 次のようなことが内部者の視点によって理解される.

- ・情報提供者はある出来事についてどのように考え, 行為を決めているのか.
- ・ある出来事は彼らにとってどのような意味があると彼ら自身によって理解されているのか.
- ・情報提供者を取り巻く状況は彼らの経験にどのような影響を与えていると考えられているのか.

このような視点の提示は、「真実」や世界の捉え方にも関係している。ここでは、真実は、社会的に構成されたものであり、情報提供者の準拠枠組みの中に身をおいて、彼らの行動、信念、価値観を理解していく過程で現れてくるという考えが前提にある。このように、研究者は情報提供者の生活に溶け込み、研究される現象や出来事を内側から理解することによって、人の生活に織り込まれている意味や真実を捉えることを目指している（Geertz, =1987; Grbich, =2003, p.141-148）。

### 3) 厚みのある記述

質的研究では、対象は文脈のなかで複雑なまま理解される。そこで扱われるデータは、数値化され変数へと分解されたものではなく、豊かな言語によって表現されたものである。そのため、研究成果の記述も、文脈や対象の複雑性を含んだ厚みのあるものとなる。このような記述では、ある現象に関するデータの他に、情報提供者の解釈や、現象の意味に至るまでの解釈が記述されることとなる。厚みのある記述によって、読み手は、情報提供者の生き生きとした現実的な世界を知ることができる。さらに、研究者がたどった道筋を記述された事柄において追うことができ、研究者と読み手との間で知識や分析結果が共有されることとなる。

### 4) データ収集と分析の循環的過程

質的研究は、データから新しい理論的枠組みを引き出す帰納的推論方法（inductive reasoning）をとっている。つまり、データからの「発見」が質的研究の重要なキーワードとなる。この方法によって、研究対象の特殊性や多様性に対応することが可能となる。また、研究のプロセスをみると、データ収集と分析は直線的に行われるのではなく、相互に影響し合いながら循環的に行われる。循環的なプロセスでは、データが集められる都度加えられた解釈を基礎として、次のサンプリングが決定される。ここでは、次に取り入れるべきデータの種類の決定や、場合によってはデータ収集法の変更も行われる（Flick, =2002, p.55-58）。循環的プロセスは、データからの「発見」を目的とする研究においてその強みを発揮する。循環プロセスをとることによって、研究者は自分の側の仮定や構造に縛られずに、データとの対話を続けていく。さらに、研究の進行に応じて研究対象を捉える方向付けに修正を加えながら、対象に浮上する意味を探求する。

## 2. 質的研究の採用理由

本稿調査は、ケアハウスへリロケーションした高齢者が、自分らしい生活を継続する際には、鍵となる「場所」が存在すると仮定し、

その「場所」の構築過程を検討することを目的としている。今回は、以下に示した理由から質的研究を採用した。

まず第1に、本稿調査での検討内容は、過去に研究成果の蓄積がほとんどないため、検証型の研究ではなく、帰納的推論方法による探索が必要と考えた点にある。第1章第2節でも述べたが、これまでのリロケーション研究のレビューによって、今後は、リロケーション後の過程を明らかにすることが重要との示唆を得た。現状ではリロケーション後の過程を縦断的に追跡した報告は非常に限られており、研究成果の十分な蓄積には至っていない。さらに、リロケーション後の過程を扱った数少ない研究も(外山, 1996, 2003; 小倉, 2002, 2005), 「適応」過程の検討を行っており、本稿調査が主題とする「場所」の構築過程を扱った研究ではない。そこで、質的研究による帰納的推論方法によって、新たに研究の糸口を「発見」する必要があると考えた。

第2の理由は、本稿調査の研究テーマが、質的研究に適合すると考えた点である。本稿調査の研究設問は、リロケーションを行った高齢者が「どのように『場所』を構築しているか」を明らかにすることである。そのため、リロケーションを行った高齢者の主観的な経験や、意味付与の過程を明らかにすることを目指している。「場所」の意味と構築プロセスの解釈には、高齢者が経験している主観的な世界に踏み込み、データ収集と分析を行う必要がある。そこで、豊かな言語を使って、情報提供者の主観的な経験へと接近する質的研究が有効と考えた。

第3の点は、質的研究では、自然な状況の中で情報提供者の複雑な経験を、複雑なまま理解できる点である。先行研究では、リロケーションの影響を、説明変数と結果変数の因果関係によって検討する量的研究方法が採用されてきた。しかし、リロケーションに影響を与える要因のメカニズムは複雑であり、因果関係によって説明する方法論ではその複雑性を十分に説明しきれない。本稿調査では、高齢期のリロケーションは、空間的・時間的文脈性を帯びた複雑な過程と考えられ、それら文脈性を含めることができる研究方法が必要と考え、質的研究を採用した。

### 3. 代表的な質的研究方法

冒頭でも述べたように質的研究は、多様な方法論の総体である(Punch, = 2005; Grbich, = 2003; 波平 & 道信, 2005)。それぞれの方法論では、明らかにしようとしていることや、方法の前提となる認識論が異なっている。そこで、質的研究に含まれる代表的な方法論の特徴について、今回研究方法として選択したグラウンデッ

ド・セオリー・アプローチを含めて説明する。最後に、グラウンデッド・セオリー・アプローチを選択した理由を述べる。

### 1) 現象学的研究

現象学的研究は、意味の根源は個人にあり、社会的分析の中心に据えるべきは個人であると考えた Husserl (1859-1938) に始まっている。現象学的研究とは、経験の意味を問い、人の経験を生きたままに記述しようとする研究である (Merleau-Ponty, =1993; Cohen, =2005)。人の意識や感覚などの実態である“事実そのもの”に戻り、当たり前とと思っていることを意識の上へのぼらせ、すでに理解していると信じていることを検証し、人の経験をあるがままの形でとらえ記述していく研究である。客観的な事実把握を目的とする量的研究と異なり、対象とした事象が意識的にどう捉えられるかを研究する。そこでは、経験したことを客観的、概念的、抽象的に話してもらうのではなく、生きた経験や意識体験をありのままに知ろうとする。そのため、既成の概念や先入観をできる限りカッコに入れて、ある特定の焦点に向かって意識を内省的に意識する。お互いの思い込みや先入観が拭い去られて、はじめて「ありのままの人の世界」が見えてくるのである (牧野, 2000, p.11)。こうした内省的な意識によって、日常生活で当たり前とされていることのなかで重要なことは何かについて、批判的意識を高め、それを表現する反省的過程が現象学的研究である。

### 2) エスノグラフィー (民族誌学)

エスノグラフィーは、文化人類学や民族学を基盤としており、文化の探索を行うことを目的としている。エスノグラフィーには、フィールドワークによって行われた研究、あるいはその成果として書かれた報告書 (報告書: モノグラフ) という意味もあり、厚みのある記述によって成果を報告する。エスノグラフィーでは、人の行動を決定づける様々な要因のうち、特に対象となる集団に共有されている文化的な意味が、行動を理解するために決定的に重要であるとの前提に立脚し (Punch, =2005)、研究者が、ある地域・社会に入り込んで、対象の文化的見方から現象の意味を理解しようとする。Atkinson と Hammersley (1995) によれば、エスノグラフィーは、比較的構造化されていない経験的素材や、小規模な事例、記述と解釈に重点を置くものに用いられている。

エスノグラフィーには幾つかのタイプがあり、人類学の分野で行われる詳細な文化研究の他にも、保健医療の分野で用いられるコンパクトなマイクロエスノグラフィーがある (Grbich, =2003; Roper & Shapira, =2003)。マイクロエスノグラフィーは、小集団における特定の文脈の中でみられる特殊な問題に焦点をあてる。また、種々



の技法を併用し、サーベイ調査や量的・質的面接調査などを参与観察と組み合わせて行われる。

本来、文化概念には多様な意味が含まれるが、エスノグラフィーでは、主にコンテクスト（文脈）、信条や態度の共有システム、経済的・政治的・社会的組織、言語、習慣、儀式、社会的支配、出来事、行為、行動などが文化データとして扱われる（Grbich, =2003）。

### 3) グラウンデッド・セオリー

グラウンデッド・セオリー・アプローチは、社会科学をはじめ、看護学、社会福祉学、教育学等の領域で最も広く用いられている質的研究法である（Denzin & Lincoln, 1994, 2000; Holloway & Wheeler, =2006）。グラウンデッド・セオリーとは、対象とする現象に関係のあるデータの体系的な収集と分析を通して、帰納的に発見され、展開され、そして暫定的に立証された理論のことである（Strauss & Corbin, =1999）。このような理論を引き出す方法を、グラウンデッド・セオリー・アプローチと呼んでいる。つまり、グラウンデッド・セオリー・アプローチとは、データに基づいて分析を進め、データから概念を抽出し、概念同士の関係づけによって研究領域に密着した理論を生成することを目指す研究方法である（Punch, =2005; 木下, 1999; 戈木, 2006）。

ただし、ここでの理論とは、従来用いられているものとは意味が異なる。グラウンデッド・セオリー・アプローチにおける理論とは、データから抽出した複数の概念を体系的に関係づけた枠組みのことであり、通常言われるような普遍的法則に基づいた理論ではない。さらに、グラウンデッド・セオリー・アプローチによって生成される理論は、ある特定の領域で応用しやすい領域限定的な理論であることが多い（戈木, 2006）。この研究法は、アメリカの社会学者である Glaser と Strauss によって 1960 年代に考案された。彼らは、死にゆく患者と保健専門職との相互作用についての大規模な研究を行い報告したが（Glaser & Strauss, =1988）、その際考案されたのがこのグラウンデッド・セオリー・アプローチであり、『データ対話型理論の発見』（=1996）の中で方法論的説明がなされている。

グラウンデッド・セオリー・アプローチは、理論や仮説モデルの生成を目的とすることや、データ収集や分析に関する体系的なガイドラインから成り立っている点が特徴的であり（川口, 2002; 戈木, 2006）、この点が他の質的研究方法と異なっている。この手法は、Glaser と Strauss といった異なるバックグラウンドをもつ研究者のコラボレーションによって誕生している。Glaser は、量的研究にかかわる厳密で実証主義的な方法論に精通していたが、Strauss はシカゴ学派のフィールド研究とシンボリック相互作用論を背景としていた。そのため、グラウンデッド・セオリー・アプローチは、実証

主義的側面と解釈学的側面を備えている。

グラウンデッド・セオリーの手法は、過去の研究例がほとんどなく、プロセス、人間関係、意味、適応といったことが分析の焦点となるような、ミクロなレベルの日常生活の状況を研究するのに適すると言われている (Grbich, =2003; Holloway & Wheeler, =2006; 戈木, 2006)。特に、プロセスとして、人間関係や意味付与、そして適応の変化を、その条件とともに現象を描くのに適する。この点は、現象の背後にある本質を捉えることを目的とするエスノグラフィや現象学的研究の適用と異なっている。

この他、グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法的な特徴として、①継続的比較法、②理論的サンプリング、③3段階のデータのコード化過程、④理論的飽和化があげられる。以下に、それぞれの説明を記す。

①継続的比較法 (the constant comparative method)

テキスト中の言葉や形成されつつある概念・現象などを次々と比較し、それを統合する名前を探索することで抽象化したり、現われつつあるカテゴリーを文脈化したりする分析手続きのことである (山本ほか, 2002; Strauss & Corbin, =1999)。

②理論的サンプリング (Theoretical Sampling)

理論を産出するために行うデータ収集のプロセス。それまでの研究、分析状況に基づいて次のサンプリングとデータ収集を決定して行う。この過程では、出現しつつある概念や理論をより明らかにすることができるようなデータを選んで収集する (Glaser & Strauss, =1966; Flick, =2002; 山本ほか, 2002)。

③3段階のデータのコード化過程

3段階のデータのコード化には、オープン・コーディング (Open Coding) と軸足コーディング (Axial Coding)、選択的コーディング (Selective Coding) が含まれる。オープン・コーディングは、データから概念およびその特質、そして特質のバリエーションを発見する分析プロセスである。この過程では、後に説明力の高い概念を作り上げるために、いろいろな可能性に対して研究者の視野をできるだけオープンにすることを目的としている (山本ほか, 2002)。一方、軸足コーディングとは、複数のカテゴリーを詳細に関連付けることによって、データをまとめなおすプロセスである (Strauss & Corbin, =1997; 山本ほか, 2002)。この過程によって、より説明力の高い理論を作り上げていく。3つ目の選択的コーディングは、研究の後期に用いられる分析手法で、主要なテーマの選定とストーリーラインの構築、反証事例の探索とその統合、妥当性の確認を行うプロ

セスである (Strauss & Corbin, =1997; 山本ほか, 2002).

#### ④ 理論的飽和化 (Theoretical Saturation)

カテゴリーを生成していく中で、中心的なテーマを構成するカテゴリーがすべて網羅されていたり、カテゴリー間の関連性がもう新たに見出されない時点と定義されている (Strauss & Corbin, =1997; 三毛, 2003).

また、現在、グラウンデッド・セオリー・アプローチにはおおむね4つのタイプがあると言われている。GlaserとStraussのオリジナル版の他に、StraussとCobinによる著書、Glaser単独による著書、そして我国では木下による著書が出版されている(戈木, 2006; 木下, 2003)。これ以外にも、Charmaz (=2006)が、上記の客観的なグラウンデッド・セオリーに代わるものとして、構成主義的なグラウンデッド・セオリーを提唱している。それぞれのタイプは、認識論やデータ分析技法が異なっており(木下, 1999, 2003; 三毛, 2003)、グラウンデッド・セオリーを用いる研究者は、どのタイプを採用したかについて明確に示さなければならない(三毛, 2003; Grbich, =2003)。

相違について具体的に触れると、まず認識論的違いでは、Glaserの手法が数量的方法論とほぼ同様の実証主義的認識論に立脚しているのに対して、Straussの方法はプラグマティズムとシンボリック相互作用論に基づいていると指摘されている(木下, 1999; Charmaz, =2006)。また、木下(1999, 2003)が提唱した修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチは、Straussと同様にプラグマティズムとシンボリック相互作用論に立脚している。さらに、分析技法の相違では、代表的な違いに「データの切片化」があげられる。Glaserが細かい切片化を基にした緻密な分析を行うのに対し、Straussらは含まれる意味の内容によってGlaserよりも大きく切片化する。さらに、木下に至っては、切片化の必要はないと述べ、代わって分析ワークシートの作成を提案している (Strauss & Cobin, =1997; 木下, 1999, 2003; 三毛, 2003; 戈木, 2006)。切片化の相違は、データをシステムティックに分類、処理するという作業に重点をおくか、あるいは深い解釈に重点をおくかの相違を反映している。木下(2003)によれば、Glaserは、システムティックなコーディングを徹底することで、データに密着した分析を強調している。他方、Straussらは、データの深い解釈を強調している。さらに木下の修正版においては、システムティックなコーディングと深い解釈といった性格の異なる作業を同時に行うことを特徴としている。Glaserの方法は、データに既成の論点や何らかの理論枠組みをあてはめずにデータを収集することを主張しており (Charmaz, =2006; Grbich,

= 2003), 調査開始前の文献研究に対してさえも否定的な立場である(木下, 1999, 2003).

#### 4. 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの採用理由

今回は, グラウンデッド・セオリー・アプローチのうち, 特に木下(1999, 2003)が提唱する修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを採用した. まず, グラウンデッド・セオリー・アプローチを採用した理由であるが, これは本調査が扱う研究テーマが情報提供者の経験の本質ではなく, 「場所」の構築プロセスを明らかにすることを目的としているためである.

木下(2000, p.25-30)は, グラウンデッド・セオリー・アプローチに適する研究として, 社会的相互作用を扱う研究や, 現象がプロセス的性格をもっている研究をあげている. このような木下の説明や, 第3項で示した代表的な質的研究の特徴を概観すると, 質的研究には大きく2つのタイプがあると考えられる. つまり, 経験や事象の本質に焦点をあてた研究と, 経験や事象の構築過程に焦点をあてた研究である. 人の経験には, 判断以前の感性的な知覚(主観)と判断(あるいは思考)といった側面が含まれていると考える. 感性的な知覚は, 本質とも言われるもので, 判断や思考の根拠になっており, 自己コントロールの及ばない過程である. 他方, 判断(あるいは思考)は, その都度構築され, 多面性を持ち, 意識することによってある程度自己コントロールすることも可能な過程である. 質的研究では, これらの人の経験のうち, 主に感性的な知覚を扱うものや, 主として判断(あるいは思考)を扱うもの, そして両者を扱うものがあると考えられることができる.

このように見ていくと, 人の経験の本質を扱う代表的な研究方法として, 現象学的方法があげられる. この方法は, 現象学的還元やカッコいれ等の方法を使って本質に迫っていく. 他方, 判断や思考, 経験の構築過程に焦点をあてた研究方法には, シンボリック相互作用論を認識論的立場とするグラウンデッド・セオリー・アプローチが含まれよう. この方法では, 人々の解釈や, 解釈とともに構築されていく世界が描かれる. さらに, 現象学的方法が, ピンポイントで本質に迫っていくと言うならば, グラウンデッド・セオリー・アプローチは構築された世界全体を鳥瞰図として示す方法論と言えよう. グラウンデッド・セオリー・アプローチの最も重要な特徴は, 理論や仮説生成を目的とする点であるが, これはまた構築された世界全体を描く方法と言い換えることができる.

この他, 前項ではエスノグラフィーも紹介したが, エスノグラフィーは, 人の行動の源としての文化を探求する方法である. 文化を

本質として扱う場合には、前者のタイプに類型される。逆に、文化によって構築されていく世界を扱う場合には、グラウンデッド・セオリー・アプローチと同じタイプに分類されるだろう。

さて、本稿調査は、「場所」の再構築過程の探求を目的としている。ここでは「場所」を、人と物理的な場所、そしてそこで営まれる相互作用による意味付与の過程と捉えている。さらに、「場所」の構築や喪失といった変化の過程や、そこに関わってくる要因を検討することを目的としている。そのため、研究方法の採用にあたっては、プロセスを具体的に示したり、構築された世界の全体を鳥瞰図として示すことのできるグラウンデッド・セオリー・アプローチが適切と考えている。

さらに、グラウンデッド・セオリー・アプローチでは、概念を生成できることも、今回の重要な採用理由である。Punch (=2005) は、グラウンデッド・セオリーの概念や理論の生成アプローチは、データに根拠づけられた概念がまだ存在していない領域や、現在起きていることを記述して説明することができない領域の調査へ用いることを推奨している。概念は、具体的事実そのものではないが、一定の事実に共通したエッセンスが集約された表現である（三毛，2002）。概念を用いることで、他者に自分の考えを伝えたり、ある考えを共有したりすることが可能となる。つまり、未だ説明するための表現方法をもたない領域に対して、生成した概念による説明が可能となる。ただし、質的研究そのものが、仮設も立たないような新しい研究対象へ探索的に接近する際に効果を発揮することが多い。その中でも、現象学的方法やエスノグラフィーは、新しい事象に対して、「そのままの複雑な姿のままに自然な日常の文脈で記述する」（盛山，2004，p.247）のに対して、グラウンデッド・セオリー・アプローチは、新しい事象の鳥瞰図を、「概念」という表現を用いて描いていくことに優れている。さらに、この概念の関連性によって、事象に対する抽象的な理論命題を打ち立てることが可能となるのである。本稿調査にグラウンデッド・セオリー・アプローチを採用することによって、「場所」の構築過程がどのように変化をしていくかを、そこに関わる条件と共に、「概念」によって説明することができるのである。

最後に、グラウンデッド・セオリー・アプローチのうち、今回は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを採用した理由について述べる。採用の理由は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチでは認識論的立場や領域限定性を明確に打ち出している点である。認識論的立場では、シンボリック相互作用論と共に、プラグマティズムに基づいていることを明確に主張している（木下，1999，p.52）。その結果、修正版グラウンデッド・セオリー・ア

ローチはヒューマンサービス領域の研究として、実践への応用を強調している特徴がある。本稿調査は、「場所」の構築過程を明らかにすることによって、高齢期の居住支援の検討に寄与することを大前提としており、本稿調査が目指すことと修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの主張が一致していたことも採用理由の1つである。

さらに、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを採用した理由は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチでは分析ワークシートを用いて分析している点である（木下，2003，p.187-206）。分析方法の中に、分析ワークシートを導入したことにより、データから文脈を切り取らず、さらに方法論的手続きに偏重することなく、データに即した概念化を実施することを可能とした。さらに、研究設問とデータそして概念の整合性を、内省的に進めることができ、研究者の恣意性に陥らないデータの分析が可能と考えられた。

## 第2節 本稿調査における調査設計

### 1. 本稿調査の研究設問

帰納的な研究方法では、仮説の検証を目的とせず、逆にデータに密着した分析から「発見」を得ることを目的としているため、最初から具体的な仮説をたてない。代わって、研究で答えられ、明らかにされるべき研究設問を設定して出発する (Flick, =2002)。仮説は、既存の理論を前提として形成され、「このようになっているのではないか」と考えられる命題のことである (盛山, 2004, p.28)。他方、研究設問 (research question) は、フィールドでのコンタクトによって何が明らかにされるべきかを方向づけるもので、データ収集方法の選択や研究テーマの決断を適切に行うために重要な役割を果たす。適切な研究設問が立てられているか否かが、探求や後の研究報告の意義を左右する (Flick, =2002; 木下, 2003)。

さらに、質的研究は、データに密着した分析を特徴とするため、最初には具体的な設問ではなく、全般的な設問を立てる。そして、研究の進行に伴って練り直され、全般的な設問から、より具体的で、特定の設問へと洗練させていく。ただし、より特定化された段階においても、新しく、予想を超えた発見にも心を開いておくことが重要である (Flick, =2002)。

本稿調査における研究設問も、調査の進行とともに変化していった。最初の研究設問は、著者の側の問題意識から導き出された。その後、データ収集と分析を繰り返す中で、修正されていった。今回、最終的に立てた研究設問は以下の通りである。

- 1) リロケーションした高齢者は、新しい住まいをどのように経験しているのか
- 2) 彼らが、個別的で継続的な生活を送る過程では、どのような「場所」が、どのように構築されていくのか
- 3) このような「場所」は、時間の経過とともにどのように変化するのか
- 4) このような「場所」は、個々の高齢者の生活と、どのように関連するのか

### 2. 本稿調査におけるデータ収集方法

#### 1) ケアハウスの選択理由

Flick(=2002, p.88-92) は、質的研究のプロセスにおけるサンプリングについて、①データ収集するとき、②データ解釈するとき、

③ 研究結果を発表するときの3つの段階に分類している。特に、データ収集時のサンプリングでは、「どの集団から事例を得るべきか（事例集団のサンプリング）」や「誰にインタビューするか（事例のサンプリング）」といった意思決定のほか、どのインタビューをさらに検討すべきか、といった「資料のサンプリング」が存在すると指摘している。ここでは、まず Flick の指摘に従い、今回の調査地やインフォーマントをどのように決定していったかを示す。

本稿調査では、軽費老人ホームの1つであるケアハウス入居者を情報提供者として調査を行った。今回、ケアハウスを対象としたのは、その入居要件に由来する。ケアハウスは1989年に創設された比較的新しい施設であり、入居要件は、「自炊できない程度の身体機能の低下が認められる60歳以上の高齢者」（日本医療福祉建築協会，2005，p.366-368）である。ケアハウスは、一定の身体機能の低下や生活障害への不安があるものの、ある程度自立的な生活が可能な高齢者がスタッフの生活サポートのもとに集まって居住する集住の形式である（伊佐地，2002）。個室を原則とした生活環境のもとで、個人の自立とライフスタイルを尊重し、身体機能に応じた選択的な在宅サービスが用意されており、虚弱期から要援護期まで対応できることが特徴である。

ケアハウスでは、生活相談、入浴サービス、食事サービスの提供を行うとともに、緊急時の対応を行う。居住者は、施設側からサポートを受けつつ、共有空間や外部空間を利用することにより、各々の状況に合わせてながら、自立した生活を過ごすことが目標とされている（伊佐地，2002）。1992年の制度改正によって、所得制限の撤廃、管理費の設定、入居者のホームヘルプサービス事業が認められるようになった。ゴールドプランの見直しによって「小規模ケアハウスの整備促進」と「ホームヘルプステーション・デイサービスセンターの付設」があげられ、その後改正で現在の入所定員は単独設置で20名以上、特別養護老人ホームに併設する場合は10名以上となっている。さらに、平成12年度から始まった介護保険により、「特定施設入所者生活介護」が設けられ、事業指定を受けた場合には介護サービスの提供ができるようになっている（日本医療福祉建築協会，2005）。

今回、ケアハウス入居者を対象としたのは、以下の理由による。

- ① 全員がリロケーションの体験者であること
- ② 入居者の移動能力が比較的保たれ、希望する場所への移動が自律していること
- ③ 施設スタッフの役割は必要時に相談役として関与することが中心であり、入居者は自分自身の生活様式を比較的自由に決定で



きること

- ④ ②と③から，ケアハウス入居者は加齢による生活能力の低下を自覚しながらも，自分自身の能力や資源を最大限使って生活を構築している者と考えられること
- ⑤ ④より，施設スタッフの介入が比較的多い老人保健施設や特別養護老人ホームで，利用者中心サービスを展開する際に，本稿調査の知見を応用することができること

なお，調査期間は，X年8月からX+4年11月までで，4回に分けて実施した。

第1回目：X年7月～X年8月

第2回目：X+2年2月～X+2年3月

第3回目：X+2年11月～X+3年7月

第4回目：X+4年4月～X+4年11月

## 2) 本稿調査の調査地概要

調査は，北海道にあるAケアハウスで実施した。調査地は，①典型的な特性を備えている施設，②フィールドワークの実施に便利である，③調査への協力の良さと比較的自由に調査することへの許可が得られるとの理由から選択した。次に，調査地の概要を述べる。今回は，入居者や，彼らの「場所」の構築過程に焦点を当てるもので，フィールドそれ自体には直接的な焦点はあてていない。しかし，調査地は，「場所」の構築過程の文脈として多大な影響を及すと考えられる。そこで，選択理由との整合性を示す意味でも，以下に施設概要を詳細に示すこととした。なお，今回は，1箇所のケアハウスで調査を実施することとした。これは，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチが示すところの，ミニ版（木下，1999，p.126-130）を前提にしているためである。つまり，研究対象を限定的に設定することで，その範囲の中での理論的飽和化を目指している。本稿調査では，Aケアハウスという限定された文脈の中で，モデルもしくは理論を生成することを目的としている。

Aケアハウスは，X-3年に開設し，定員は40名である。北海道にあるケアハウスの入居定員は15～100名となっており（シニア情報センター，2001），Aケアハウスはその中間の規模にあたる。なお，初回調査は開設から3年4ヶ月の時点で行われた。このケアハウスは，調査当時，高齢者福祉総合施設の一部であり，この他にも特別養護老人ホームと高齢者居宅支援センター（通所介護サービス，在宅介護支援センター，訪問介護ステーションを含む）が併設されていた。調査期間内には，特定施設入所者生活介護は適用されてい

なかった。

構造的には、1階のエントランスホールを挟んで両側にケアハウス部門と特養・支援センター部門が設置されている。ケアハウス部門の1階には、事務所、食堂、浴室があり、入居者の居室は2～5階にある。玄関横には事務所があり、受付窓口から、ケアハウススタッフの姿が見える構造となっている。居室は、一人部屋が25.5㎡、夫婦部屋が51㎡である。現在、全国のケアハウスの居室床面積の平均値は徐々に広がる傾向にあり、2004年の調査では一人部屋で25㎡、二人部屋で44㎡（最低基準；一人部屋21.6㎡以上、二人部屋31.9㎡以上）であった（瀧澤，2004）。Aケアハウスの床面積は、ほぼ平均にあたる。居室内設備は、ケアハウスで設置義務のあるトイレ、洗面設備、ミニキッチン、収納スペース、エアコン、緊急通報装置のほか、電話機、床暖房、照明器具、カーテンなどを備えている。施設によっては、冷蔵庫やベッドを備えている所もあるが（シニアライフ情報センター，2001）、設置状況においても平均的と考えられる。共有スペースは、多目的室のほか、各階には洗濯機と浴室、エレベータ前には椅子が設置されており、自由に使える共有スペースとなっている。

周辺環境は、住宅街のはずれにあり、片側に一戸建ての住宅街が、そしてもう片側には森林が広がっていた。公共交通機関はやや遠く、最も近いバス停留所は徒歩10～15分の所にある。また、繁華街や大型百貨店に出るためには、バスと地下鉄を利用しおよそ40分を要する。徒歩で10分～20分の範囲内に、コンビニエンスストア、美容院、内科・歯科クリニックがある。全国のケアハウスの立地環境を調査した研究（津吹，2003）では、市街化区域内に立地する施設が全体の4割を占め、多くの施設は郊外の「森林」や「田畑」に立地していることが報告されている。さらに、バス停までの距離では250m未満は2割程度で、逆に1km以上離れた施設も2～3割あった。このような調査結果と照らし合わせても、今回の調査地は典型的なケアハウスと言える。ただし、調査期間のおよそ4年の間には、施設の周辺環境は変わり、Aケアハウスの周辺においてもX+3年頃より宅地化が進んでいった。それに伴い、施設のすぐ前にバス停が設置された。

入居者特性をみると、調査開始時の2000年8月は、65～69歳1名、70～74歳10名、75～79歳11名、80～84歳8名、85歳以上10名であった。また、男性6名、女性34名であった。このうち、認知症状が疑われる者が2名、要支援または要介護状態にあると思われる者が3割、訪問介護等の外部の社会資源利用者がおよそ1割いた。これも、全国的な傾向に類似している。全国のケアハウスを対象に行った調査では、ADLをみるとどの項目においても「問題な

し」とする者が大部分を占めたが、何らかの認知症の症状を有する者が1割程度いることが報告されている（伊東，2003）。さらに，保坂（2003）は，入居者の介護認定状況について，自立が54.2%，要支援が13.8%，要介護1～5の者は総数で32.0%であったことを報告している。

職員配置は，調査開始当初は，相談員1名，事務員3名であった。後に，非常勤で看護師が勤務するようになっていく。職員によるサービスでは，茶話会，懇談会，買物・通院送迎サービス，外出行事，血圧測定・健康相談，簡易体操等が提供されている。施設の規則では，外出・外泊時には玄関前の事務所受付簿に外出先と帰宅予定時刻を記載することになっている。また，食事の時間と，1階での入浴時間が決められている。このような施設の規則はあるものの，それらのルールは最低限に留められており，職員は入居者の自由な活動を容認している。また，40名という定員数を活かし，家庭的な雰囲気作りを心がけている。

さて，ここまでの特徴をみていくと，典型的なケアハウスとしての特徴を備えていると言える。ただし，Aケアハウス独特の特徴もある。このケアハウスは，設立主体がキリスト教系の社会福祉法人であり，入居者の2割～3割がキリスト教を信仰している。施設活動では，多目的室で毎日外部から牧師を呼んで礼拝が行われている。なお，毎日の礼拝は，宗教に関わらず参加が自由である。

### 3) 本稿調査のデータ

本稿調査のデータは，情報提供者との半構造化面接，施設内の活動場面や共有スペースでの参与観察，入居者向けに毎月発行されている施設新聞，施設内掲示板に張り出されている情報，職員とのインフォーマルな会話から得た。この中でも特に，情報提供者との面接に比重をおいてデータ収集を行った。これは，本稿調査では，特にケアハウス入居者の経験や，心に刻み込まれている重要な「場所」の探求を目的としているためである。

参与観察は，データの分析に深みや広がりをもたらすと考えられる。そして，観察データからも，ある人の「場所」の重みづけを探ることはできるだろう。「場所」に関わる頻度や，関与時の身体的表現は，その手がかりを我々に与え得る。しかしながら，そのように外在的に観察されることと，人が内在的に経験していることはいつも一致しているとは限らない。何を経験しているのか，何に優先性をおいているかは，面接で語られる内容を丹念に分析することによって理解されるものと考えている。

面接を重視した2つ目の理由は，重要な「場所」の中にはリロケーションやその他の理由によって喪失している場合もあることが想定されたためである。喪失した「場所」は，観察によって観ること

はできない。そのため、喪失した「場所」の理解には、自己と一体化した「場所」を剥ぎ取られたことによって生じる違和感やギャップとして、面接から理解する必要がある。これ以外にも、鍵となる「場所」が、その人固有の生活にどのように関与するかは、観察からはなかなか理解しがたい。これは、観察者の視点からは構造は見えても、「作動」の理解には至らないことと同じである。

ただし、本稿調査の中には、個人ではなく、「場所」に焦点をあてた研究設問もある。このような研究対象には、木下（2003）も指摘するように、一般的にはフィールドワークによるデータ収集が有効と考えられる。しかし、今回の調査では、参与観察は施設内に留め、施設外での実施は行わなかった。これは、調査者の関与によって、「場所」が変容することを避けたためである。結果でも示すが、施設外に構築された鍵となる「場所」は、成員との親和性が非常に高いものであった。そのため、調査者といった第三者の介入によって、全く別な「場所」に変わってしまう恐れがあった。

フィールドワークを重視する研究者の中には、自己の影響を最小限にとどめる戦略を立てながら、調査者が現地の生活に入り込んでいくことを推奨する者がいる（Leininger, =1997）。しかし、本稿調査では、あえてそのような選択は行わなかった。何故なら、情報提供者の中には、低下する心身機能のためやっとの思いでそれらの「場所」へ到着していたり、成員の入院や死亡を経験して、大切な「場所」が次にはもうないかもしれないという不安の中で構築している者がいたためである。今回は、調査者の介入によって、情報提供者に負担をかけることなく調査を行うこととし、この点は本稿調査における限界として提示することにした。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによって得た成果は、ヒューマンサービス領域での応用に関わっている（木下, 1999, 2003）。ヒューマンサービス領域との関係を重視するグラウンデッド・セオリー・アプローチの性質は、データ収集場面にも反映されるべきと考えている。

#### 4) 情報提供者の決定

情報提供者の決定にあたっては、「理論的サンプリング」を用いた。まず、施設開設時から入居していた者（以下、開設時入居者）ではなく、後から入居した者（以下、中途入居者）の調査から開始することとした。この理由は、①入居後の経験が鮮明に記憶されていること、②入居間もない時期から生活が落ち着くまでの経過を縦断的に追うことができること、③面接の中で、開設時入居者にはない語りの内容が認められたこと、以上による。③についてももう少し詳しく説明すると、例えば、入居から1年たった70歳代女性は、面接の中で自分の入居時期に何度かふれ、また開設時入居者の提案に従いながら日々の生活を送る様子について語った。このことから、中

途入居者と開設時入居者では、他入居者との関係のあり方や意味付けが異なることが考えられた。そこで、中途入居者のうち、特にリロケーション時の経験がより鮮明に残っていると考えられた入居後2年未満の者から調査を開始した。その後は、入居してから施設生活が落ち着いたと考えられた入居後およそ5年以上経過している者を対象にし、理論的サンプリングに従いながら選定の条件を変え情報提供者を拡大していった。なお、理論的サンプリングにあたっては、性別、大まかな年齢層、施設内の活動参加状況、外出状況に関する参与観察から得た情報をもとにして、施設職員に状況の確認を取りながら実施した。さらに、情報提供者の中で、質問に対して豊かで重要な情報を提供してくれる「良い情報提供者（キーインフォーマント）」(Flick, =2002; 高橋, 1998)に出会った場合は、面接回数を増やし、より多くの情報を得ることとした。

初回面接時は、初めに職員から情報提供者へ依頼してもらった。2回目以降の面接では、施設内の共有スペースで出会った時に依頼する場合と、職員から依頼してもらった場合があった。その結果、35名(初回面接時69~89歳; 女性29名, 男性6名)から調査協力が得られた。なお、情報提供者は大きく4つのグループに分類された。すなわち、「入居間もないうちに面接した者」(Aグループ)、「施設開設当初から入居している者で生活が安定したと思われる時期に面接した者」(Bグループ)、「Aグループのうち生活が安定するまでの間継続して面接した者」(Cグループ)、「Bグループのうち、2年後あるいは3、4年後に再度面接した者」(Dグループ)であった。

情報提供者の生活能力をみると、外出行動について全く問題が認められない者と、逆に慢性疾患や軽度障害のために屋外の行動が制限されている者が含まれた。なお、施設入居者の中には、面接を予定していても結局実施できなかった者や継続した面接に至らない者がいた。その主な理由をあげると、最も多かったのは外出・外泊中あるいはその直前直後であった。その他に、体調不良や、他者を自室に招くことや面接に対する抵抗感のために辞退する者がいた。

半構造化面接では、現在の生活や、入居理由と経緯、リロケーションに伴う変化の経験について尋ねた。このうち、現在の生活の様子では、「入居当初並びに現在の生活の様子とその変化」、「主な生活・活動拠点とその成員、そこで行っている活動」、「各拠点や生活全般に対する印象とその理由」等を質問した。全員に上記の質問をしたが、情報提供者から湧き上がる語りを重視したため、質問項目以外の内容に広がることもあった。面接では、情報提供者の内在的な経験が引き出されるよう、質問項目の配置や調査者の面接態度を検討して開始した。具体的には、初回面接は、まず「現在の生活の過ごし方を教えてください」という全般的な質問から行い、その後

は情報提供者の語りの内容に合わせてながら質問項目の順番を変えた。また、面接では、米国のソーシャルワーカーである Feil (= 2002) によって提唱されたバリデーション技法の一部である「共感して傾聴すること」、「ほのめかされた、あるいは言葉で表現された感情を復唱する」、「情報提供者の語りで強調された言葉を調査者も繰り返す」、「ソフトなアイコンタクトを行う」などをしながら情報提供者の語りの中に浸っていった。なお、バリデーション技法とは、個人の感情に描かれた現実を受け止め、その感情を認め価値づけていくことに焦点をあてた技法である。また、過去の経験について語ってもらう場合には、できるだけ十分な想起が行えるよう、その時の場面を具体的に語ってもらうようにした。面接は、1回当たり60～90分の面接を本人居室にて、1人につき1～9回実施した。面接は、本人の了承を得て録音し、後に逐語録を作成した。

初回面接の冒頭で調査者は、研究目的の説明とともに、自分自身について「現在大学院生であり、卒業論文を作成している」と自己紹介した。このような説明によって、調査者にとっては未知なる高齢期の生活を、経験者から教えて頂きたいとのスタンスを示した。

この他、面接以外のデータとして参与観察（カラオケサークル、茶話会、食事場面、誕生会、懇談会、レクリエーション活動、宗教活動、面接時の他入居者の訪問場面、エントランスホール、エレベーターホール）と、施設新聞（97年～99年版：職員からの一言、月間行事予定、入退居のお知らせ記事）、掲示板のお知らせ（施設行事・活動について、行事の時の写真、入居者の作品）からデータを得た。

### 3. 本稿調査におけるデータ分析方法

データ分析は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法をメインにしながら、StraussとCorbinの方法も交えて実施した。具体的には、オープン・コーディングと軸足コーディング、選択コーディング、継続比較分析、そして分析ワークシートを用いて分析を行った。今回、両者の方法を併用した理由については、後述する「5. 質を高めるための戦略」の中であらためて述べる。

分析は、最初に「良い情報提供者」のデータからオープンコーディングを実施した。具体的には逐語録にしたデータを一文毎に分類し、文脈を考慮しながら概念（意味の単位を解釈したラベル）をつけた。次に、軸足コーディングとして、生成された概念を、他の概念と比較したり、その概念のもととなるデータに戻って解釈内容の吟味を行いながら、より抽象度の高い概念やカテゴリーを生成した。その後、データと概念、カテゴリーを研究設問と照らし合わせなが

ら再度読み直し，重要と思われる概念やカテゴリーを分析ワークシートに従って記入していった．分析ワークシートへ記入した後は，他の情報提供者のデータと比較し，複数の情報提供者のデータを分析ワークシートにまとめていった．データ分析中は，理論的メモを付け，繰り返し出現する語り，分析中の疑問，概念やカテゴリーの解釈等を思い付いたときに記録していった．また，分析過程で出現した新たな疑問は，次の面接で尋ねていった．このようにデータ収集と分析を循環的に行いながら，情報提供者の語りにも認められる中核的なテーマやストーリーラインを特定し，これに基づき仮説生成としてカテゴリー間の関連図を作成した．

#### 4. 倫理的配慮

どのようなタイプの研究でも遵守すべき倫理的配慮として，説明と同意があげられる．本稿調査では，初回面接時には施設職員から依頼をしてもらった後，調査者が居室を訪問し，調査の目的，データの守秘保持，質問内容の概要，結果の発表と方法について説明し，情報提供者の意向を再確認し，同意を得た者の面接を実施した．さらに，収集したデータは，取り扱いに留意し，他の者の目にふれないように扱った．

これ以外にも，看護者用にグラウンデッド・セオリーの解説書を書いている Chenitz と Swanson (=1992) は，情報提供者と研究者との関係に関連した倫理上の配慮点を指摘している．具体的には，①情報提供者である相手に研究のことを公開すること，②情報提供者と研究者の力関係の差，③情報提供者と研究者との力関係を対等にするための方策があると説明している．このうち，①に関連することであるが，フィールドへの入り方には，身分を伏せた場合と身分を明かした場合があると言われている(Lofland & Lofland, 1995)．今回は，倫理的側面へ配慮し，身分をしっかりと示したうえで調査を開始することとした．また，研究目的や内容については，「高齢者施設の今後のあり方を検討するための生活様式の調査」と説明した．説明は，個別面接の前のほかにも，フィールド調査を開始する前に多くの入居者が集まる朝礼や懇談会の場を使って行った．礼拝後の朝礼の中で，自己紹介と上記に示した簡単な調査目的を説明した．

#### 5. 質を高めるための戦略

研究報告では，その価値を確保するための手続きをとる必要がある．量的研究では，その科学的基準を評価するため，重要性 (significance)，理論—観察の両立性 (theory-observation

compatibility), 一般化可能性 (generalization), 整合性 (consistency), 再現性 (reproducibility), 正確さ (precision), 検証可能性 (verification) があげられている。ただし, 質的研究の基準として, どのようなものを当てはめるべきかについては, 意見が分かれている。

例えば, Cutcliff と Mckenna (1999) は, 質的研究の評価基準に対して3つの立場があると述べている。つまり, ①質的研究も量的研究も同じ基準によって評価されるべきである, ②質的研究は, 質的な研究のために特別に開発された基準によって評価されるべきである, ③判断基準論は認められない, といったそれぞれの立場があることを説明している。ただし, 今日的な傾向を把握するため質的研究に関わる解説書の記載内容をみていくと, 研究の評価基準は質的研究に合うように修正されるべきとの立場をとるものが多いと思われる。Holloway と Wheeler (=2006), Grbich (=2003), Flick (=2002), そして Denzin & Lincoln (1994, =2006) の解説書では, 評価基準に対しては複数の立場があるとしながらも, それぞれの著書の中では質的研究のために修正された基準を具体的に紹介している。

例えば, Holloway と Wheeler (2002=2006) は, Lincoln や Guba らの文献レビューから, 質的研究の真実性を論証するための用語として, ①明解性 (知見が首尾一貫し, 正確であること), ②信用可能性 (研究者の発見が研究している人々の知覚に矛盾しないこと), ③移転可能性 (ある文脈における知見は, 似たような状況や参加者に移転できること), ④確認可能性 (読者が最初の情報源としてデータにさかのぼることができること) をあげている。さらに, 真実性を保証するための方略として, ①情報提供者によるチェックをする, ②反対事例あるいは代わりの解釈を探す, ③専門家による検討, ④トライアングレーション (複数の方法論の併用) の実施, ⑤監査のための足跡あるいは決定に至る足跡の記載, ⑥包括的でわかり易い記述, ⑦振り返りを提案している。

また, Strauss と Cobin は, グラウンデッド・セオリー・アプローチの基準として, 研究プロセスにおける基準と研究の経験的基礎づけにおける基準を報告している。しかし, 彼らの基準に対しては, 実際のプロセスに対応しすぎているため, 自己確認用としては役立つが, 他者の研究報告の評価に使うのは適切でないとの批判もある (木下, 1999)。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを提示する木下は, 評価は内容と分析方法の両面からなされなければならないと述べている (1999)。木下が指摘する内容面の評価項目と分析プロセスの評価項目を以下に示す (1999, p.104, p.118-119)。



【内容面の評価項目】

- ① 報告された理論と現実の対応関係（現実への適合性，理解しやすさ，一般性，コントロール）
- ② 概念とデータとの対応関係（適合性，関連性，説明力，修正可能性）
- ③ 基礎的評価（研究テーマの明確性と意義）
- ④ 総合的評価（全体的な説明力，説得力）
- ⑤ 内容が評価できる適任者の選定（どのように新しい知見が提示されているか，実践的活用はどの程度可能か），である。

【分析面の評価項目】

- ① 研究テーマに照らして，グラウンデッド・セオリー・アプローチの採用は適切であったか。また，タイプの選択は適切であったか
  - ② 解釈プロセスは適切に提示されているか（分析上の概念は定義されているか，抽象的・論理的概念と in-vivo 概念のバランスは適切か，カテゴリーやカテゴリー間関係は定義されているか，説明事例の提示は適切か）
  - ③ 分析の手順は適切に提示されているか。スーパーバイザーが関与した場合は，その役割と範囲は明示されているか，
  - ④ 総合的評価（全体的な論理的構成と説明力），
  - ⑤ 評価適任者の選定，
- 以上である。

本稿調査では，質的研究に合うような基準によって評価されるべきとのスタンスに立ち，上記の木下（1999）の評価項目に照らしながら，調査を実施してきた。データの文脈を重視した本稿調査では，一般化や再現可能性を重視する量的研究の評価基準が必ずしも適用できないと考えている。本稿調査のキーワードである「場所」は，コントロールされた人工的な状況で生じるものではなく，人が当たり前前に生きている自然な状況下で現れてくるものである。そのため，状況のコントロールを前提とする量的研究の評価基準をそのまま適用することは難しいと考える。ただし，グラウンデッド・セオリー・アプローチを始め質的研究に対しては，研究者の恣意性問題やデータと概念の整合性に対する疑念が繰り返し指摘されており，このような疑念に対する姿勢や具体的な手続きを示す必要がある。Wilson と Hutchinson（1996）も，グラウンデッド・セオリーで陥り易い誤りとして，① 研究方法のでたらめな使い方（mudding qualitative methods），② 弱体化した生成（generational erosion），③ 時期尚早な終結（premature closure），④ 軽率な一般化（overly generic），⑤ 概念の取り込み（importing concepts），⑥ 方法的な間違い

(methodological transgression) を指摘している..

そこで、これらの問題への対処や、調査の質を高めるために実施した対応として、特に、トライアングレーションと振り返り（内省）の点から説明する。トライアングレーションとは、複数の研究技法、理論的立場、データ源、研究者などを組わせて用い、研究している現象や課題が吟味される過程のことである（Flick, = 2002; Willig, = 2003; Holloway & Wheeler, = 2006）。これは、研究結果の根拠が広範囲から得られていることを保証する（Pope & Mays, = 2001）。本稿調査では、主にデータ源と研究技法でトライアングレーションを実施した。

まず、データの収集にあたっては、面接データだけではなく、参与観察データや、施設新聞といった記録物、施設内掲示板に張り出されているインフォメーションなども収集した。さらに、入居者だけではなく、施設職員からも情報を得た。

次に分析面でのトライアングレーションであるが、今回は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法をメインにししながら、Strauss と Corbin の方法も交えた。両者の方法を併用した理由は、分析過程における研究者の視点の介入の比重と、概念の収束方法を検討した結果である。修正版では通常切片化は行わず（木下, 1999, 2003）、研究設問に照らし合わせて重要と思われる部分を抽出して解釈していく。これは、研究過程の中に、研究者の視点を明確に位置付けたことと、概念化と収束化（すなわち、概念からより抽象的なカテゴリーを導き出すこと）を同時に行うためである。

他方、切片化は、Glaser (1978) や、Strauss と Corbin (= 1999) によって考案されたものである。切片化によって、データを多角的に捉えることを目的としている。ただし、切片化によって、各々のデータが文脈から切り取られ、質的データが持つ文脈的な豊かさをなくしてしまう危険性がある（木下, 2003）。さらに、オープン・コーディングによって生成された大量の概念を収束化することは大変な作業である。初学者が最もつまづき易い分析過程と言っても過言ではないだろう。初学者は、まさにデータの海に溺れるのである。収束化の方法については、Glaser (1978) は、一語一語丹念に分析することで概念が「浮上」として説明している。また、Strauss と Corbin は、概念の特性を理解するための手続きを紹介し、それに従えば収束化に至ると説明している。しかし、これらの方法には批判がある。例えば、Glaser はどのように「浮上」するかを十分に説明していない。そのため、グラウンデッド・セオリー・アプローチを知らない者には、何故ある概念を得たかは不明のままである。さらに、Strauss と Corbin の方法は、研究者の分析の枠組みをデータに押し当てることや、データの内容よりも分析の手続きを重視するこ

ともなり、データに密着した分析といったグラウンデッド・セオリー・アプローチの趣旨から離れてしまう危険性を有している。そこで、木下は、切片化を行わない、文脈をいかした方法として分析の初期段階から研究設問に沿って分析することや、分析ワークシートの使用を提案した(1999, 2003)。しかし、彼の方法では、最初から研究者の視点を用いることとなり、分析結果の偏りや、情報提供者が伝えたかった重要なポイントを見落とす危険性がある。そこで、本稿調査ではセンテンスごとの切片化による多角的なデータの分析と、研究設問にそった収束化を行うため、2段階の分析手続きをとった。つまり、切片化を行う第1段階と、研究設問に従って分析ワークシートを作成する第2段階を設定し分析を行った。

他方、振り返り(内省)には、今回は分析ワークシートの活用とスーパーバイズの導入を行った。木下(2003, p.177-206)によると、分析ワークシートに含まれる項目は、概念名、定義、バリエーション(概念の根拠となる生データ)、理論的メモである。本稿調査では、これに修正を加え、概念名(検討概念名、類似概念名)、定義、反対例、データ、理論的メモとした。このワークシートを用いながら、データと概念の整合性や、生成概念の抽象度を検討した。さらに、今回は、あえて、反対例の項目を設けることにより、調査者にとって都合の良いデータばかりが集まっていないか内省できるようにした。

木下(1999, 2003)は、スーパーバイズの利点について、データへの着目から最初の概念生成までのプロセスを学びやすいことをあげている。また、スーパーバイズの意義に関しては、調査者の判断に対して「何故か」という問いを立てて考える機会を提供する。それにより、WilsonとHutchinson(1996)が指摘するような時期尚早な概念化を防ぐことができると考えられる。そこで、本稿調査では、データ収集と分析方法の検討や、概念やカテゴリーを生成している段階で、大学生や院生を対象に高齢者福祉と質的研究を教えている教員のスーパーバイズを受けると共に、質的研究を使って論文を作成している院生が集まった研究会でスーパーバイズを受けた。また、論文の応用的意義については、成果を学会や研究会で報告することによって確認を行った。

この他、本稿調査では、結果を示す際に、グラウンデッド・セオリー・アプローチを補う方法をとった。グラウンデッド・セオリー・アプローチは、「概念」を用いて事象の鳥瞰図を描くことに優れている研究方法である。しかしその一方で、切片化によって、各々のデータが文脈から切り取られ、質的データが持つ文脈的な豊かさをなくしてしまう危険性が指摘されている(木下, 2003)。これを補うために、分析の初期段階から研究設問に沿って分析することや、分

析ワークシートの使用が提案されている（木下，1999，2003）。しかし，そもそもグラウンデッド・セオリー・アプローチが，現象から概念を生成し，それら概念の関係性によって現象を説明する立場をとるため，他の質的研究方法に比べて文脈性に乏しいと言える。そこで，本稿の第3章では，グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて得た調査結果の他に，得られた結果の典型的な事例の紹介を加える。事例の「場所」が構築される過程を，空間的・時間的文脈を交えながら事例報告し，グラウンデッド・セオリー・アプローチにおける文脈性の乏しさを補うことにする。

## 6. 本稿調査が目指す到着点

最後に，本稿調査が目指す到着点について述べる。所謂，仮説生成や一般化に対する本稿調査の立場である。一般化とは，広辞苑（第5版）によれば「特殊なもの捨てて共通のものを残すことによって一般的なもの（概念・法則）を作ること。普遍化，概括」（p.169）のことである。一般化はもともと，普遍性を探求する実証主義的研究の概念である。そのため，個々の事例や，非典型事例を対象とする質的研究では一般化の獲得が困難なことが指摘されている（Holloway & Wheeler, =2006）。しかし，グラウンデッド・セオリー・アプローチは，収集されたデータを説明できる中間範囲の理論枠組みを構築するための体系的で，帰納法的なガイドラインから成り立つと説明されており（Charmaz, =2006），この文面から結果の一般化が志向されていることが理解される。さらに，StraussとCorbinも，他の状況への適用可能性を指摘している。

ただし，グラウンデッド・セオリー・アプローチが言う一般化とは，ある特定の条件下での一般化であり（Holloway & Wheeler, =2006），量的研究が目指すものとは本質的に異なっている。質的研究における一般化とは，一連の研究結果が，それとは別の似た状況を説明するのに利用できるということである（Grbich, =2003）。

しかし，ここで1つ疑問として残るのは，「ある特定の条件」や「別の似たような状況への説明」といった場合，どの範囲のことなのか曖昧な点である。本稿調査で得られる結果は，Aケアハウスの入居者だけに当てはまることなのか，それとも，全てのケアハウス入居者に当てはまることなのだろうか。では，老人保健施設や特別養護老人ホームの入所者に対してはどうなのだろうか。あるいは，もしAケアハウスだけに当てはまる研究成果ならば，公表する意義はどこにあるのか，そういった疑問が残るのである。そこで，本稿調査では，一般化の解釈として，研究成果が可能性として開かれた一般化や中間的理論であるというスタンスを採用する。

一般化や理論という表現を使うと、通常は唯一の現実について述べていると考えられる。本稿調査の立場とは、Charmaz (= 2006, p.187) の言葉を借りれば「客観的で不変な現実についてではなく、可能な1つの現実についてのイメージを構築すること」である。つまり、今回の調査期間に A ケアハウス入居者を情報提供者として限定的に得られた成果は、他のケアハウスや施設形態の入居者に対しても、多様な解釈の中の1つとして当てはまる可能性があると考えている。

以上、第2章では、本調査で修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを選択した理由と、具体的な調査設計について説明した。次の第3章では、調査設計をもとに得た結果と考察を論じる。

### 第3章 ケアハウス入居者の「場所」の構築過程

本稿調査は、ケアハウスへリロケーションした高齢者が、リロケーション後も自分らしい生活を継続するために、どのような「場所」をどのように構築していくかといった、「場所」の構築過程を明らかにすることを目的とした。35名の情報提供者から得た情報を分析した結果、そこには鍵となる3つの「場所」が見出された。第3章では、本稿調査で明らかとなった、3つの「場所」の意味と、その構築条件、そして「場所」の構築パターンや時間的変容を示す。

第3章の構成であるが、第1節では3つの「場所」の構築過程の説明に入る前に、情報提供者と施設の概要について、構造的側面から説明する。まず、本稿調査の情報提供者の生活状況の概要を示すために、彼らが日常生活を送っていた生活拠点と活動拠点を示す。ここで、各拠点の説明には、物理的環境と社会的環境によって行われた外山の領域分類（1996, p.219-226; 2003, p.45-51）をもとに、ケアハウス入居者の特性を考慮し、著者が修正した領域分類を用いて説明する。次に、調査を実施した4年間における、Aケアハウスの変化を職員の移動や運営内容の点から簡単に述べる。そして、第2節では、3つの「場所」の構築過程の調査によって得られた、「場所」の特徴と構築条件をあわせて説明する。続く第3節では、3つの「場所」の構築と喪失に関わる過程について、時間経過を追いながら説明する。そして最後の第4節では、グラウンデッド・セオリー・アプローチによる調査結果の文脈的説明の乏しさを補うために、本稿調査で得られた結果の典型的な事例報告を行う。

#### 第1節 構造的側面からみた情報提供者と施設の概要

##### 1. 領域分類からみた情報提供者の場所

ここでは、本稿調査の情報提供者の生活概要を理解するため、面接データと参与観察データをもとに、情報提供者が日常生活を送っていた領域分類を示す。なお、この領域分類は、外山の施設内領域分類（外山, 1996, p.219-226; 2003, p.45-51）に修正を加えたものである。外山は、物理的環境と社会的環境から、施設内をプライベート領域、セミ・プライベート領域、セミ・パブリック領域、パブリック領域に分類している。坂上（2005）は、ケアハウス入居者の行動範囲を加味し、外山の分類に施設外領域を加え、プライベート領域、セミ・プライベート領域、セミ・パブリック領域、近隣領域、その他の広域領域の5つの領域に分類し、ケアハウス入居者

に認められた領域について報告している。各領域の定義と、本稿調査の情報提供者に認められた特性は以下の通りである。

### 1) 施設内領域

- ① プライベート領域：個人が占有する領域であり、入居者個人の所有物を持ち込み管理する領域である。物理的環境では、個室が、社会的環境では本人、家族、友人・知人、一部の親しいケアハウス入居者がこの領域に含まれた。この領域内で行われる主な活動は、セルフケア、私物の整理や管理、個人的な趣味活動、家族や親しい友人との交流であった。
- ② セミ・プライベート領域：プライベート領域の外部にあって複数の入居者により自発的に利用される領域である。この領域では、入居者間の関係が自然に構築される。この領域の管理者は、複数の入居者である。物理的環境では、廊下、浴室、洗濯室、エレベーター、施設の共有園芸スペースが、社会的環境では入居者、ケアハウス職員、併設施設の職員、ボランティアが含まれた。領域内の主な活動は、日常のあいさつ、雑談、施設内移動が行われていた。これ以外にも、廊下の窓辺に置かれた鉢植えへの毎日の水遣り、自分が作った手芸作品の展示、健康維持を目的とした散歩が行われていた。情報提供者の中には、施設への奉仕活動と称して施設周辺や園芸スペース周辺の雑草取りを行っている者がいた。
- ③ セミ・パブリック領域：施設に管理・運営されることにより、他者との関係が構築される領域である。この領域の管理者は、職員である。物理的環境では多目的室、食堂が、社会的環境ではセミ・プライベート領域と同様に入居者、ケアハウス職員、併設施設の職員が含まれた。この領域での主な活動は、施設行事（懇談会、職員が主催するレクリエーション、外部からの訪問者による行事、血圧測定と健康相談、誕生会）や施設が主催する日課（礼拝、体操）、食事等であった。

### 2) 施設外領域

- ① 近隣領域：施設周辺の領域である。本稿調査では、ケアハウス周辺は住宅地であったが、バスを使って10～15分程度の所に商店街があった。物理的環境では周辺民家、近隣にある家族・友人宅、クリニック、中型店舗が、社会的環境では友人、家族、一部の親しいケアハウス入居者がこの領域に含まれた。この領域の管理者は、施設職員の場合と、入居者、地域住民の場合があった。主な活動は、家族・友人宅への訪問、買物、通院、外食、美容院であった。中には、近隣の住宅地で宗教活動を行っている者もいた。

- ②その他の広域領域：近隣領域以外の広範囲に渡る領域で、繁華街や以前の居住地、旅行先である観光地がこの領域に含まれる。領域の管理者は、地域住民である。この領域に関わる物理的環境は飲食店、大型百貨店、施設から離れた所にある家族・友人宅、趣味教室、かかりつけ病院、教会やお寺、日帰り温泉、観光地が、社会的環境は友人、家族、一部の親しいケアハウス入居者であった。この領域で行われる主な活動は、友人・家族との交流、買物やウィンドショッピング、通院、外食、習い事、宗教活動、旅行などであった。

本稿調査の情報提供者は、リロケーション後に複数の領域内で日常生活を送っていた。そこで、主な日常生活領域の組み合わせパターンを検討したところ、施設内の領域を中心に生活を行っている「施設内領域中心型」と施設内の他に施設外の領域でも生活を行っている「施設内外領域型」の2つのタイプに分類された。「施設内外領域型」に分類される多くの情報提供者は、買物、友人宅の訪問、通院等のため週に2、3回ほど外出をしていた。情報提供者の中には、趣味活動や宗教活動のため、平日はほぼ毎日外出している者もいた。他方、「施設内領域中心型」の情報提供者も、完全に施設内で生活しているのではなく、施設行事（夏季で、月1回程度）や通院によって外出の機会を有していた。その他、年に数回程度家族宅等へ外出する機会がある者もいた。なお、35名の情報提供者の内訳をみると、「施設内外領域型」に分類される者が23名、「施設内領域型」が12名であった。さらに、「施設内外領域型」のうち2名は、4年間で徐々に状態が変化し、最終時点では「施設内領域型」に移行していた。

## 2. A ケアハウスの概要と変遷

初回調査は、A ケアハウスが開設してから、3年4ヶ月が経過した時点で行った。本稿調査の窓口的役割を担ってくれた相談員は、この時点でのA ケアハウスの様子について、「開設からしばらく経ち、入居者間の関係も作られ、施設自体も落ち着いてきた」と説明していた。調査を実施した4年間のA ケアハウスの変化を、1) 本稿調査開始以前の状況、2) 本稿調査開始以降の状況に分けて、以下に説明する。なお、ここではA ケアハウスの変遷の中で、ポイントと思われる箇所に下線を付けている。( )内は、内容の補足のため著者が加えた箇所である。

### 1) 本稿調査開始以前の状況

〈A ケアハウス開設時から本稿調査開始直前まで〉



本稿調査を開始する以前の様子を、毎月発行されている施設新聞でみると、楽しい住まい作りや職員・入居者間の関係作りに意識的に取り組んできた様子が見えてくる。施設新聞は、A4サイズ1～2枚で、中にはスタッフからの巻頭言、月間予定、行事のお知らせ、入居者紹介、施設管理上の連絡事項、入居者の俳句等が掲載されている。第1号の巻頭言では、施設長から以下の文面が記載されていた。

おひとりおひとり異なった生活環境、種々の事情で入居されましたが、〇〇〇（Aケアハウスの名称）で新しい素敵な生活環境をみんなでつくっていただければ良いなあと切望しております。暖かい楽しい住まいとしていきましょう。[X-3年5月号]

この文面からも、楽しい住まい作りを施設作りの方針としていることが理解される。安心感とともに楽しさを重視していることは、他の介護職員の巻頭言からも読み取ることができる。

〇〇〇として期待の大きな器が出来上がり、“あとは中身だ”とプレッシャーをかけられ、4月1日にスタートしました。環境の変化に不安な面持ちの方々と、未熟な私達ワーカーとの出会いが始まりました…。入居者の皆さんに育てられ、皆さんと一緒に、楽しく華やかに安心して生活できる場になればよいと思います。[介護主任コメント；X-3年11月号]

また、施設新聞によると、施設開設当初から、ケアハウス職員が担当居室を訪問しており、入居者との関係作りを重視していることがこの様子からもわかる。居室訪問以外にも、半年に一度各階ごとに茶話会を企画し、入居者からの職員への自由な発言や入居者間の相互の交流を促していた。また、職員は入居者の主体的な活動や入居者間の相互交流を重視し、施設新聞を通じて、施設行事のアナウンスと参加の呼びかけ、入居者のサークル作りの呼びかけと支援を行っていた。開設年度は、施設活動として、レクリエーション活動（月に1回）、懇談会、季節の行事（花見、蛍観賞会、鍋の会等）などを月に合計3～4回の頻度で提供していた。この他に、外部から様々な訪問を受け入れており、小学生との交流、三味線・人形劇サークルの公演などが行われていた。また、新聞の中には「サークル活動のすすめ」と称した記事が掲載され、この欄を使って入居者がサークル仲間を募集する機会を提供していた。例えば、以下のような入居者からの呼びかけが掲載されていた。

詩吟のおさそい：先生が来て下さるかどうかわかりませんが、一緒に習いませんか？〇〇子さん[X-3年8月号]  
冬の健康維持のため、知恵をドンドン出し合いませんか。〇〇夫さん[X-3年9月号]

さらに、入居者達の日頃の主体的な活動の様子を新聞に載せ、主体的な活動に関する情報の提供を行っていた。

この頃は、麻雀やオセロなどのゲームや各サークル活動に多目的室が利用されています。皆さんのふれあいの場として自由に活用して下さい。常に前向きで楽しく暮らして頂きたいと思っております。[X-2年3月号 巻頭言]

次年度以降は、サークル作りのための呼びかけの記事はなくなり、代わって入居者1人1人についての詳しい紹介や入居者の俳句が掲載されるようになっていた。

この他、Aケアハウスは入居者達の行動範囲が施設内に限定されることのないように、外出支援サービスを企画していた。初年度から、毎週、病院や店舗方面への送迎サービスが行われていた(2ルート)。翌年には買物専門送迎サービスや日帰りバス旅行が始まり、さらに送迎ルートが2ルートから3ルートへと増設した。その他、この年には施設内活動の中に、毎朝の礼拝が加わった。

職員の移動では、X-3年12月に、施設長の交代があった。新しい施設長からの施設新聞巻頭言には、平安、支えあい、仲良く、といった言葉が連ねられ、この言葉から安定した暮らしの提供を重視していたものと思われる。

開設3年目にあたるX-1年には、給食懇談会の運営方法が変わっていた。これまでは、およそ3ヶ月に1回の頻度で全入居者を対象にして行われていたが、毎月各階ごとで実施されるようになった。このことから、入居者の意見を施設運営の中に積極的に反映させようとする施設職員の姿勢がうかがえる。そして、懇談会や給食懇談会で出た意見と、それに対する職員の回答は施設新聞や掲示板で入居者全体に知らされていた。さらに、この年には公園での昼食会が始まり、この時点で施設活動がほぼ出揃い、調査期間内にも継続して実施されていた。

## 2) 本稿調査開始以降の状況(本稿調査開始から終了まで)

本稿調査を開始した頃には、入居者達の入居当初の緊張感も解け、Aケアハウスが安定期に入っていたものと考えられる。開設時から入居している情報提供者の1人も面接の中で以下のように述べてい

た。

... ここにいて3年4ヶ月かしら、経ってね、そろそろ我が儘もでてきているんじゃないかなって感じる時があるの。みんながね、いわゆる地がでてくるっていうかな。慣れてくるからね... 食事なんかも、ここに入った当時は3食全部その時間は食堂へ行って、40人全員顔をそろえて食べていたのが、今なんか半分くらいがいたりいなかったり... 給食懇談会も初めのうちは一言も言わなかったのが、段々栄養士さんが予期しない発言もできるようになって.. 慣れてっていうのはひどいものだなって【情報提供者 No.31 X年7月】

調査を開始したX年の施設活動では、外部からボランティア講師を呼び、カラオケサークルと手芸サークルが行われていた。その後、のX+2年には、参加メンバーが少なくなったために両方のサークルは廃止された。代わって、X+3年からは、別の外部ボランティア講師による歌のサークルが行われていた。なお、ケアハウスが主催する活動は、X-1年から大きく変わらない。参考のため、本稿調査期間の最終月(X+4年11月)に行われていた施設活動の内容を示す。

#### 《11月》

- 第1週目 文化祭
- 第2週目 日帰り旅行，誕生会，懇談会，給食懇談会，買物送迎
- 第3週目 公園での昼食会
- 第4種目 幼稚園児来園，カラオケ大会，買物送迎

なお、この他の外出支援として、病院送迎が2箇所（それぞれ隔週で実施）、商店街への送迎が2ルート（それぞれ隔週で実施）行われていた。

職員の移動では、再びX+2年と、X+4年にそれぞれ施設長の交代があった。X+2年から着任した50代前半の施設長は、少人数による外出活動の機会を増やし、自らもそこに参加していた。例えば、施設外の飲食店で誕生会を開催し、その月に生まれた者を招待したり、旅行を楽しむクラブを旗揚げした。

〇〇クラブは、△△園（Aケアハウスと同じ法人下にある施設）のつながってる町内会みたいなもんだね。それは私がきたときに始まったばかり。施設長さんがね（作ったの）。1年に2回づつ旅行があるわけ。【情報提供者 No.32 X+2年12月】

X + 3 年には、非常勤看護師が勤務するようになり、看護師による血圧測定と健康相談が実施されるようになった。また、X + 4 年に、施設開設当時の相談員が併設機関に移動となり、代わってこれまで介護スタッフとして働いていた職員が相談員となった。開設当時からの相談員の移動は、入居者の生活にも変化を与えていた。例えば、これまで手書きで書かれていた施設新聞がワープロで作成されるようになり、また礼拝時のオルガン演奏が CD での対応となった。情報提供者の中には、このような変化に敏感に反応している者もいた。70 代の情報提供者は、新聞の挿絵に自分の好きな色を塗り、入居当初から毎号丁寧に綴ることを習慣としていた。しかし、ワープロで作成された新聞を見て「‘ショック’を受け、色塗りや綴るのを辞めた」と語った。また、毎日礼拝に参加する 70 代前半の情報提供者は、礼拝の様子について、CD から流れる演奏のスピードについていけず、前のように歌えない他入居者の様子を「おかしい」と語った。

また、ケアハウスの正職員ではないが、X + 3 年から、整体師が入居者達と関わるが多くなっていった。整体師の情報は、口コミで入居者間に広がり、自分の居室内で定期的に施術を受ける者が増えていった。

この他、X + 3 年末から X + 4 年にかけて、例年になく多くの入居者の入れ替わりがあった。特に、施設開設当時から入居していた人達の退居が目立ち、このことは開設当時からの他の入居者達の間でも、しばしば話題にのぼっていた。

.. 今年が一番代わったんでないだろうか... 今すごく変わってしまったんじゃないかね... 私〇〇さん（入居者）と、ここに入った時の、入れ替わった人勘定したら、半分以上だものね... この前 2 人で数えて 27 人だねって、言ったけど、変わった人が.. だからまだね、それ以上に増えてると思うよ.. 去年から今年にかけてすごく変わったね。[情報提供者 No.9 X + 4 年 11 月]

ちなみに、本稿調査を終了した X + 4 年 11 月の入居者名簿によると、入居者 40 名の中で、開設当時から入居している者は 17 名であった。他方、X + 4 年に入居した者は 8 名いた。

以上、情報提供者と施設の概要を簡単に述べた。第 2 節では、情報提供者に認められた 3 つの「場所」を報告する。

## 第2節 ケアハウス入居者の3つの「場所」

ここでは、Aケアハウス入居者を情報提供者とした、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（木下，1999，2003）を用いた質的研究の結果を述べる。なお、3つの「場所」の構築過程を、概念とカテゴリーを使いながら説明する。文中の「 」内はカテゴリーを、〈 〉内は概念を示した。さらに、下線部は、概念の下位項目である。また、2段下がった箇所は、情報提供者の語りの引用である。情報提供者の語りの引用では、特に、的確な情報を提供してくれた良い情報提供者（Flick， =2002， p.88）の語りを中心に用いている。なお、「良い情報提供者」とは、その事柄や対象に対する必要な知識と経験をもち、面接において省察を行って、それを適切に言語化する能力のある者である（Flick， =2002， p.88）。また、語りの引用箇所での（ ）は語りの補足のために著者が書き加えた内容である。

### 1. 「馴染みの場所」

35名の情報提供者のうち17名は、Aケアハウスに入居する以前から関わりのある「馴染みの場所」を構築し続けていた。「馴染みの場所」とは、何十年もの長い付き合いによって構築され、遠慮せずに自分らしい振る舞いができる「場所」である。自分自身との親和性が非常に高く、そこにいて安心感と共に楽しさや充実感を実感することができる。この「場所」の成員は、娘や息子といった家族の他に、学生時代の同級生、趣味の教室で知り合った仲間、子供のPTA活動で知りあった友人、以前の居住地で隣近所だった友人・知人等が含まれた。これ以外にも、熱心にキリスト教を信仰している情報提供者は、自分が通っている教会の信者を成員とする「馴染みの場所」を構築していた。リロケーション後も「馴染みの場所」を構築していた17名のうち、成員が家族である者は5名で、友人・知人を成員としていた者は12名であった。成員数をみると、多くの「馴染みの場所」は、成員数が3～5名と少人数であった。一部の例外として、構築されて日が浅い場合には、20名前後の成員からなる「場所」もあった。このように比較的少人数で構築されていた「馴染みの場所」であるが、「場所」のルーツを尋ねると、最初から5名前後で始まっている「場所」と、20名程度から始まっている「馴染みの場所」があった。このような成員数は、成員間の高い親和性を形成し、また継続して「場所」を構築していくうえで好都合の条件と考えられた。

また、本稿調査で見出された「馴染みの場所」は、ケアハウスの

個室，家族宅や友人宅そして教会の他にも，繁華街にある飲食店や近隣の日帰り温泉地等に構築されていた。

以下に，「馴染みの場所」の特徴について概念を用いて説明する。まず，初めに成員や，成員と共に行われる活動に関連する特性について述べる。次に，物質的場所や地理的場所に関わる特性について述べ，最後に時間に関連する特性を説明する。表 7 には，本調査で認められた「馴染みの場所」の概念を示した。

表 7 「馴染みの場所」の概念

概念	概念の下位項目
①気のおけない関係	お互いを知りつくす, 話題を選ばない, 気持ちを遠慮せずに出す, 修正できるという自信, 後に引きずることがない, 強い信頼関係, お互いの思いやり, 成員の変更がない
②楽しみの共有	高い同質性, 共通の話題, 共通の活動, 共通の体験
③ためになる, 程良い刺激	ためになる情報, 学べる機会, 小さな異質性, お互いが刺激の源
④私の指定席がある	重要な成員との自覚, そこにいて当たり前, 重要な成員との自信 成員間の強い誘い合い, いない寂しさを感じる機会
⑤外界からの遮断	視線が届かない, 干渉を受けない, 全成員が無理なく到達できる 間接的干渉を交わす方法
⑥「場所」の定例化	頻度の増加, 地理的な場所も同じ, 必然的定例化, 成員が希望しての 定例化, 成員が集まりやすい, 企画や準備に骨を折らない
⑦アクセスビリティの確保	到達可能な距離の設定, 移動手手段の確保, 中間的の場所の設定

### ① 成員間の〈気の置けない関係〉

「馴染みの場所」の第1の特徴は、成員との長い関わり合いの中で構築されてきたことである。特に、友人や知人を成員とする場合は、子育てが落ち着き始めた30歳代後半から40歳代の時に知り合った友人達等と、30年以上の付き合いを続けていることが多かった。情報提供者の中には、成員達と40年以上付き合い続けている者もいた。そして、このような長い年月をかけてお互いを知り尽くすことにより、成員同士の間で〈気の置けない関係〉が構築されていた。

〈気の置けない関係〉とは、お互いが遠慮することなく、自分が思うように振舞える自由な関係である。例えば、〈気の置けない関係〉の中では話題を選ばないで、他の場面では話しづらいようなことも自由に話すことができた。時には、打ち明け話といった個人的な話も話題にあがっていた。さらに、正直な気持ちを遠慮せずに出すことができ、仮に言い過ぎたことがあっても、容易に関係を修正できるという自信を情報提供者達は持っていた。また、情報提供者達からは、何を言われても気にならず、後に引きずることがないと語られていた。〈気の置けない関係〉とは、関係が壊れることはないといった、お互いの強い信頼関係やお互いの思いやりのうえに成り立っている関係と考えられた。

... 人の言えないことも言えるもんね。その人達だったら... 親のことでも、子供のことも... 楽しいんですよ。遠慮しないでしゃべれる.. ここ(ケアハウス内)だったら、一步おいて話さなきゃならない... だけどそういうのがないの... ちょっとしたことでも気にならない... 自分も言ってるし、「今ちょっと言い過ぎた、ごめんね」で終わる.. 他だったら「ごめんね」ですまない時あるからね。[情報提供者 No.27 X年8月]

... 年寄りの話があるでしょう。やっぱり、家庭の話とか、いろいろあるけどね... 他の人方はやっぱり不平不満があるわけなの。いろいろと。それを聞いてやるけれどもね。あけすけに出る所だから。うっぶん晴らしみたいな所だから... [情報提供者 No.32 X+2年12月]

話題を選ばない関係の重要性は、ケアハウスの入居者関係と比較することによって、一層際立っていた。情報提供者との面接では、しばしば〈気の置けない関係〉とケアハウス内の入居者関係が引き合いに出され、自由な振る舞いを許す〈気の置けない関係〉が自己のコントロール感を高めている様子について語られていた。



変な話なんだけど、ここ（ケアハウス）では自分の良い話ができないね。ここにはいろいろな人がいるから、みんな大人で、それまでいろいろな人生を歩んできた人が多い。だから、何も言えない。No.23さんは、よく出掛けるとか言われてしまうし、良い話ができないよ。だから自分はここでは黙っている。何を話したらいいかもわからないのよ。子供の話もできないし...。何も話せないから、ここでは部屋に閉じこもっているわ。私には〇〇の会合があるから。〇〇なら、なんでも話ができるからね。[情報提供者 No.23 X+4年10月]

ケアハウス内の入居者関係では、特に話題の選択に情報提供者達は気を使うことが多い。ケアハウスの中で入居者達は、お互いのことを‘それぞれ複雑な事情があって、ケアハウスに入居している人達’と捉える傾向にあった。そのため、入居者間には、それぞれの事情や過去の生活には触れない方が良いという暗黙の了解があった。あるいは、自分の良い話が、それぞれの事情にふれ、嫉みや拒絶を引き起こしかねないと考え、話題の選択に慎重になっていた。他方、〈気の置けない関係〉の中では、会員同士はお互いのことをよく知りつくしており、話題に対する相手の反応を予測したり、反応に対する適切な応答の仕方が理解されていた。

このような様子から、〈気の置けない関係〉は、ケアハウス内の気を使う関係から、自己を解放するうえで重要な役割を担っていると考えられた。

さらに、1度構築された「馴染みの場所」は、一部の例外を除き、ずっと同じメンバーで継続して構築され続けていた。ただし、会員の転居や死亡等のために、集まる数が減少していくことはあった。ずっと同じメンバーであったことは、〈気の置けない関係〉を維持していくために重要な要因であると考えられた。

本稿調査で認められた「馴染みの場所」の中には、1年程の間に複数の会員がいなくなり、3名だけになってしまった「場所」があった。「馴染みの場所」がいつなくなってもおかしくないという状況の中でも、他の人々を会員として迎えようとはしなかった。むしろ、自分達の代だけで終わらせることを互いに約束し、特別な儀式まで行っていた。その様子から、最後まで、そのままの関係を維持し続けようとするこの情報提供者の姿勢が理解された。

あと3人しかいないから、お互いが死んでも若い者には知らせないことって、3人でお葬式しちゃったの...お葬式しましょうってことになって、子供達には知らせないでって、私らの代で終わらせようと言って、終わらせちゃったの。それでも生き

てる限りは集まるよ。だけど、家は決まりつけておこうって言って、3人で集まって、お互いに勝手に引き出物もってきて、やり取りして、終わらしてね。[情報提供者 No.32 X+3年5月]

この他の情報提供者の中には、自分自身がリロケーションする立場となり、「馴染みの場所」に継続して参加するかどうかを決めなければならない者もいた。しかし、そのような場合にも、できるだけ同じ「馴染みの場所」に居続けようとする姿が認められた。

〇〇地区に住んでいた時から（この趣味の教室に）通っていたもんだから、友達に言われるのさ。「あんたこっちにだっで、そういう所（同じ趣味の教室）があるのに、どうして〇〇地区までいくのさ」ってね。そしたら、私も言うのね。「先生がいいしね、お友達がいいからね。それでね、私ね、遠い、近いは関係ないの。」って言うてるの。[情報提供者 No.27 X年8月]

## ② 成員間での〈楽しみの共有〉

「馴染みの場所」では、成員同士は〈楽しみの共有〉を行っていた。〈楽しみの共有〉とは、成員間が共通の趣味や関心を持っており、「場所」の中で一緒に楽しめることである。〈楽しみの共有〉は、似たような者が集まっているといった、成員同士の高い同質性によって成立しているものと考えられた。楽しみ方には、共通の活動を一緒に行ったり、共通の話題でおしゃべりを楽しむ方法があった。趣味教室や宗教活動での出会いをもとに、「馴染みの場所」が構築されている場合には、もともと関心や趣味が似通った人々が集まっているため、共通の話題を得ることが容易であった。それ以外の「馴染みの場所」では、多くの場合、比較的多数の人々が共通して楽しめる話題や活動が、〈楽しみの共有〉のために用いられていた。例えば、おいしい物を食べながら気軽なおしゃべりをするといった外食活動や、麻雀、日帰り温泉へ行くといった活動は、多くの人々が共通して楽しめる活動であった。実際に、本稿調査ではこれらの活動を共通の活動とした「馴染みの場所」が多数認められた。

こないだ日曜日に集まってね、おしゃべりして、おしゃべりして気がついたら7時すぎなの... あっち行ってお茶飲んで、こっち行って飲んだりするでしょう、そして話がはずむもんだからね。[情報提供者 No.27 X年8月]

同窓会にはよく行くよ。普通は同窓会って1年に1回くらいで

しょう。うちらは、3ヶ月に1回会うの。〇〇で食事するの。  
楽しいよ。【情報提供者 No.5 X年7月】

〈楽しみの共有〉のために選ばれる話題は、趣味や関心事の他にも、  
長年の付き合いを通して構築された共通の体験に関する内容があっ  
た。成員達は、共通の体験を共通の話題として、成員間で回想する  
ことを楽しんでいる場合があった。

... 同じ町で暮らして、子供のころね、暮らしていた連中が集  
まって.... それが今だに続いてね... 昔のね、小さい時の遊ん  
だときの話しをしたり、いろいろあるからね.. 【情報提供者  
No.32 X+2年12月】

この〈楽しみの共有〉によって、「馴染みの場所」が文字通り楽し  
い「場所」となっており、多くの情報提供者は、「馴染みの場所」で  
はよく笑っていると語っていた。

### ③ 〈ためになる、程良い刺激〉

この特徴は、友人や知人を成員とする一部の「馴染みの場所」に  
認められた。成員同士は、〈気の置けない関係〉によって安心感や安  
全感を得るだけではなく、〈ためになる、程良い刺激〉を受けて自己  
の生活を見つめ直したり、自己の生活に小さな変化をもたらす機会  
を得ていた。〈ためになる、程良い刺激〉とは、成員との関わり合い  
を通して、自分が関心を持つことや生活を送るうえでためになる情  
報を得ることである。また、自己研鑽につながる学べる機会をもち、  
負担とならない程度の刺激を受けることもここに含まれる。このよ  
うな〈ためになる、程良い刺激〉は、成員間の小さな異質性をきつ  
かけにして生じていた。〈気の置けない関係〉を結ぶ成員同士は、元々  
互いの共通点が多く、同質傾向が高い者同士が集まっていると思わ  
れる。しかし、完全に同質ではなく、〈気の置けない関係〉を構築す  
るのに阻害とならない程度の小さな異質性も兼ね備えているものと  
考えられた。例えば、共通の趣味をもつという同質性を備えている  
一方で、「馴染みの場所」の成員が多様な年齢層から構成されている  
場合があった。また、年齢も興味も故郷も同じであるが、家族と同  
居している人としていない人がおり、家族関係に異質性が認められ  
る場合があった。このように、小さな異質性は、年齢層や生活背景  
に認められ、自己の生活を見つめ直すきっかけを与えていた。さら  
に、小さな異質性によって、お互いが情報や知識を交換し合うこと  
を可能にしていた。

集まりではね、いろんな人のね、年寄りの世界がわかるし。だから、自分が見習うこともあるし、自分の体験を語ってみんなが喜ぶこともあるし、楽しいですよ。[情報提供者 No.32 X + 2年 11月]

すごい人達が集まっている。〇〇さんは、ピアノがすごい。どの人の誕生日会の曲にも合わせることができるの。それで、25年間も続けているし。他にもピアノができる人はいるけど、〇〇さんのようにできる人はいないわ。他にも才女がいるのよ。誕生日会にはいろいろ自分達ができることをして差し上げるんだけど、才女の〇〇さんは、お料理もできるし、歌もできるし、なんでもものできるの。[情報提供者 No.23 X + 4年 10月]

情報提供者の中には、年齢の違いに基づく情報量の相違を巧みに活用して、他の成員から新しい情報をもらうことを楽しみにしている者もいた。例えば、高齢の情報提供者は、高齢のため疲れ易く、手芸教室に通いたいと思いつつも、これ以上習い事が増やせない状態にあった。そこで、彼女よりも年齢が若く、多数の趣味教室に通っている「馴染みの場所」の成員から、編み物教室で習ったことを教えてもらっていた。

お友達が編み物教室に行ってるの。私教室なんて行かれないでしょう、時間的にもね。行って習ってきて、教えてねって、したら、これコピーしてくれてたんだよね... だから私無駄に（「馴染みの場所」に）行ってないのよ。だから、「今度優しいの教えてね」って言ったら、「こんなの今編んでるよ」っていうから、紙もってきてもらったの。[情報提供者 No.27 X年 8月]

ただし、この情報提供者も、情報を貰うだけではない。彼女もまた、自分が他の成員よりも高齢であるという異質性を活かして、他の成員に別の情報を提供しているのである。

（サークルには）子育ても終わったし、時間もできたっていうような人ばかり。みんな私より若いよ、みんな若い。だからみんなね、一緒におだてるの。ゴマするのよ。No.27さん見本だからね、もうNo.27さん目標にしてね、って。その目標がだめなんだわって、倒れそうなのって笑ってるけどね。[情報提供者 No.27 X + 4年 7月]

この語りからは、情報提供者が若い世代の成員達に励まされて、「馴染みの場所」に参加している様子が理解される。それと同時に、80代後半になっても集まりに参加し続ける、生きた見本として、高齢期の生き方に関する1つの情報を、若い成員に提供していると考えられた。このように、〈ためになる、程良い刺激〉は、成員のどちらか一方が刺激や情報の源になるのではなく、お互いが刺激の源となることで成り立っているのである。

#### ④ 〈私の指定席がある〉

「馴染みの場所」では、成員間が非常に強く結び付いていた。面接からは、成員が全て揃って始めて、1つの「場所」として完成されることが理解された。この時、それぞれの情報提供者は、自分自身が「馴染みの場所」にとって、重要な成員であることを、直感的に自覚していた。〈私の指定席がある〉とは、自分自身が「馴染みの場所」の重要な成員との自覚があり、そこにいて当たり前と考え、それについて何ら疑問を抱くことがないことである。また、このことは単なる独り善がりの考えではなく、他の成員も自分のことを重要な成員と考えているという自信を持っている。

〈私の指定席がある〉との自覚に至る場合の1つには、「馴染みの場所」の中に明確な役割をもっていることがあげられる。例えば、本稿調査では、リーダー的な役割を担い、成員から相談等を受ける情報提供者がいた。彼女は、その役割の遂行を通して、〈私の指定席がある〉ことを自覚していた。しかしながら、必ずしも明確な役割があるばかりではなかった。むしろ、〈私の指定席がある〉という自覚には、成員間の強い誘い合いが重要な要因と考えられた。さらに、誰か他の成員がいない時には何か欠けているような寂しさを感じ、このようないない寂しさを感じる機会によって、全成員が揃って1つの「場所」であるとの思いを深めていた。そして、この思いがまた、成員間の強い誘い合いを引き起こしていた。

（「馴染みの場所」の成員は）みんな〇〇地区の方で、私だけこっちに住んでるの。みんな〇〇地区の人ばかりだからね、会う時は、〇〇地区の人たちで決めているの。私は来るもんだと思ってるからね、「あなたも入ってるよ」っていうの。[情報提供者 No.27 X年8月]

〇〇の会（「馴染みの場所」につけた名前）は、20人って結構大人数なんだけど、ものすごく団結心が強いよね。一人でもいないと寂しいの。寂しいねって言うてる。だから、「今度は、無理してでもなんとかして出てね」って、お互いそう言って集め

⑤ 〈外界からの遮断〉

「馴染みの場所」の概要説明でも述べたように、本調査で見出された「馴染みの場所」は、ケアハウス内の本人居室、家族宅や友人宅そして教会の他にも、繁華街にある飲食店や近隣の日帰り温泉等に構築されていた。成員については長い年月の関わり合いを特徴としていたのに対し、「馴染みの場所」が構築されている物理的場所は必ずしも長い関わりをもっているものとは限らなかった。むしろ、「馴染みの場所」の特徴として重要なことは、〈外界からの遮断〉であった。〈外界からの遮断〉とは、「馴染みの場所」で成員間が交流している間、これまで築いてきた成員との関係を他の人々に邪魔されないように、閉鎖的な物理的場所を確保することである。今回の調査結果では、ほとんどの「馴染みの場所」は施設外に構築されており、Aケアハウスから離れた領域にあるという特徴を有していた。このように、「馴染みの場所」は、成員以外の人々の視線が届かない所に存在していた。そのため、この「場所」がどこで、誰と、どのように構築されているかは、成員以外の人々には見ることができなかった。これにより、「馴染みの場所」は、成員以外の人々の干渉を受けないで存在することができた。

このような〈外界からの遮断〉によって、そこで話された内容がその他の場に伝わり、波紋が広がることを心配する必要がなかった。そのため、自由な会話を楽しめる〈気の置けない関係〉を構築することを可能としていた。情報提供者の中には、長年通っている美容院で「馴染みの場所」を構築している者がいた。施設から離れたこの「馴染みの場所」の様子を次のように語った。

パーマ屋さんは一番いいから。何言ったって、もれるっていうことがないからね、パーマ屋さんに言ってさ。そこに通って、もう 8 年になるんだ。だから、私若い時、こうだったよって、奥さんに話してさ。馬鹿真面目だったよって、もう少し男の人と遊べば良かったねって、そやって言って、笑ってさ。【情報提供者 No.19 X + 4 年 7 月】

また、多くの「馴染みの場所」が施設から離れた所に構築されていたことから、閉鎖性を確保しながら「場所」を継続して構築するためには、全成員が無理なく到達できる地理的場所にあることも重要な条件となっていた。そこで、「馴染みの場所」を構築する場合には、交通機関の利便性の高い地理的場所や、成員の住居の中間地点で会合を行っていた。また、家族が成員である場合は、家族が A ケ

アハウスまで迎えに来ることによって、「馴染みの場所」へのアクセスが無理なくなされていた。

ところで、「馴染みの場所」の構築を阻害する干渉の形態には、幾つかのタイプが想定される。例えば、その1つとして、成員以外の人が「馴染みの場所」に参加するといった直接的干渉があげられる。この他にも、「馴染みの場所」に関して何らかの発言をし、結果として「馴染みの場所」の構築に影響を与えるといった間接的干渉もある。本稿調査の中で、しばしば話題にのぼったのは、ケアハウス入居者からの間接的干渉であった。例えば、情報提供者の中には、自分の外出の様子が入居者達の噂話になっていると考えている者がいた。そして、面接中の会話のトーンや表情から、彼女達が自分の外出の様子を噂されることに不快を感じていると考えられた。

私のことは、お金持ちという話になっている。いろいろ出掛けるから。[情報提供者 No.32 X+4年7月]

〇〇さんは、足が速い、よく出掛けるとか、言われてしまうし、だから、出掛けている話はできないよ。[情報提供者 No.23 X+4年10月]

入居者間の噂になること以外にも、外出先を気にする入居者の存在が間接的干渉になることがあった。本稿調査では、外出時の行き先を毎回尋ねてくる入居者のことが、不満げに語られた。

(入居者の中には) 困る人もいますね。エレベーター前のお部屋にいるんだけど、関所みたいに、一人一人の生活に立ち入るの。部屋のドアがいつも開いていて、同じ階の人が出掛けると、「どこに行くの」っていちいち聞いているのよ。そういう嫌な人もいるわ。[情報提供者 No.31 X年7月]

入居者だけではなく、職員の対応が間接的干渉になる可能性もある。「馴染みの場所」へ向かう際に、管理的な目的から何らかの外出制限を受ける場合は、「馴染みの場所」に到達できず、その構築が妨げられてしまう。しかしながら、本稿調査を実施したAケアハウスでは、職員達は管理上の問題が生じない範囲では入居者の自由な活動を認めており、外出しやすい雰囲気を作られていた。そのため、本稿調査では、「馴染みの場所」の構築に関わる、重大な間接的干渉は認められなかった。ただし、入居者への言葉や、事務所窓口に置いてある外出報告用の事務書類が、小さな間接的干渉になることもあった。例えば、職員からの言葉では、「また出掛ける・・・」、「車

を運転して行って大丈夫・・・」といった心配のために発した一言が、小さな間接的干渉となっていた。

月に半月は出て歩くからね、事務所でも有名になっちゃった。また出て歩くのって、また出掛けるのって言われるんだから、‘また’がつくの。ま、外出するのが、有名になっちゃったってことじゃない。[情報提供者 No.32 X+2年 11月]

長距離運転するんですよ。すると、事務所の〇〇さんが、「大丈夫かい」って言うから、「いやあ、崖から落ちてるかもしれないからね」って、冗談言って。最初の頃は、着いたらすぐ電話してましたよ。無事着いたからねって。最近は気を付けてって言うくらいになったけどね。[情報提供者 No.31 X年 7月]

この他、家族からの間接的干渉も想定されるが、本稿調査ではそのような干渉は認められなかった。むしろ、干渉せずに、遠くから見守ってくれている家族に感謝していると語られることが多かった。

外出報告用の事務書類は、一覧表の形式で、外出先と出発時刻、帰園予定時刻を簡単に記載することになっている。情報提供者の中には、外出先を故意に書かなかったり、外出先や帰園予定時刻を事実と違う内容で記載する者もいた。中には、施設職員から書くように注意を受けても、‘他の人に言っているから大丈夫’と拒否し続ける人もいた。この様子から、この報告書類が、小さな間接的干渉になっていると考えられた。

以上のように、情報提供者は、ケアハウス入居者や職員から間接的干渉を受けることがあった。しかし、間接的干渉を受けるだけではなく、間接的干渉をかわす方法を取りながら、「馴染みの場所」を構築していく姿も認められた。上記のように、外出時の書類を記載しなかつたり、実際とは異なる内容を記載している場合も、間接的干渉をかわしている方法の1つと考えられた。また、職員の発言に対しても、間接的干渉をかわすために、冗談を交えて返答したり、職員が言うより先に自分から話をしている者がいた。

昨日も遅く帰ってきたから、「不良ばあさん帰ってきた」って、自分で言うの。自分で言うんだから間違いないですって。フフ（笑）。「不良ばあさん遅くなつてすみません。今帰りました」ってね。自分で言ってるから間違いないわって。[情報提供者 No.27 X年 8月]



## ⑥ 〈「場所」の定例化〉

上記に示した特性は、「馴染みの場所」に関わる成員やそこで行われる活動、そして物理的あるいは地理的場所に関わる特性と考えられる。それぞれの特性は、お互いに関係し合っており、容易に分離できるものではない。あえて言えば、①～④は特に成員やそこで行われる活動との関係が強く、他方⑤は物理的あるいは地理的場所との関わりが強い特性と考えられる。これ以外にも、本稿調査では〈「場所」の定例化〉といった時間に関わる特性が認められた。〈「場所」の定例化〉とは、「馴染みの場所」へ、毎回決まった期日に定期的に来ることである。頻度は、月に1回といったものが多く、毎月第〇、〇曜日に集まると決められていた。その他3ヶ月に1回といった「場所」もあった。「馴染みの場所」が構築される間隔が加齢とともに短くなる場合が多いようである。以前は、年に1回だったものが、加齢と共に頻繁に集まるようになったと話す情報提供者がいた。また、定例化している「場所」は、集まる地理的場所も同一であることが多かった。今回認められた「馴染みの場所」の中には、時間は定例化されているが、集まる地理的場所が一定しない場合もあった。例えば、毎回違う日帰り温泉に行く場合などである。その場合も、集合先は変えずに、同じ所へ、同じタイミングで成員が集まる形態をとっていた。

〈「場所」の定例化〉には、必然的に定例化する場合と、成員が希望して定例化する場合があった。本稿調査では、必然的に定例化するものとして、趣味教室の後の時間を使って、特に親しい者同士が集まる場合や、定期的に行く美容院で「馴染みの場所」を構築する場合が認められた。成員が希望して定例化する場合とは、成員間で集まる日を予め決めておき、定期的に来る場合である。定例化することによって、「馴染みの場所」が他の活動より優先され、成員が集まり易い状況を作ることができていた。特に、成員数が多い「場所」や、アクセスに問題が生じ易い成員が含まれている場合には、有効な手立てとなっていた。アクセスに関する問題は、体調不良や、天候に左右され易い移動能力、他の活動とのブッキング等で生じていた。例えば、疲れ易い情報提供者は、「馴染みの場所」への参加を考えて、その直前は他の活動を差し控えるようにして体調を管理していた。これ以外の〈「場所」の定例化〉の利点であるが、定例化することによって、「馴染みの場所」の構築の企画や準備に骨を折る必要がなくなっていた。成員達は、当日参加して楽しむことだけに集中することが可能となっていた。

ただし、本稿調査で認められた「馴染みの場所」が、全て定例化されていたわけではない。中には、思いついた時に集まって活動するという「場所」もあった。旅行のチラシを見ていて、最近体調も

良いので行きたくなかったので行った，というような場合である．このような「場所」が構築されるためには，成員間のタイミングが合うことが重要で，いくつかの条件が前提となっていた．つまり，成員数が少なく，日常的に接触し，比較的体調が安定し，すぐに行動できる者が集まっている必要があった．咄嗟の行動を阻害する要因には，他の活動とのブッキングや，体調に対する不安がある．さらに，日頃からなかなか即決しない行動タイプの人，この条件を満たすことが難しい．定例化しない「馴染みの場所」の構築にあたっては，成員間で他の活動とブッキングのないスポットを発見したり，ブッキングした活動の優先順位を即座に判断して調整が図られていた．ただし，この手の「馴染みの場所」は，安定して構築することが難しい．そのため，本調査では，定例化しない「馴染みの場所」を構築する情報提供者は，定例化している「馴染みの場所」を併せ持っていた．

#### ⑦ 〈アクセシビリティの確保〉

本稿調査で施設外に認められた「馴染みの場所」は，リロケーションをする以前に構築されたものであり，リロケーション後も引き続き構築されていた．

これとは対照的に，今回の情報提供者の中には，「馴染みの場所」の構築に至らない者もいた．この理由として，〈アクセシビリティの確保〉の障害があげられる．〈アクセシビリティの確保〉とは，「馴染みの場所」へ継続的に到達できることである．情報提供者達は，〈アクセシビリティの確保〉のために，到達可能な距離の設定や移動手段の確保を行っていた．到達可能な距離の設定とは，⑤の〈外界からの遮断〉でも示したが，全成員が無理なく到達できるように成員の生活拠点の中間点に「場所」を設定し，構築することである．また，移動手段の確保では，情報提供者達は，自分で運転したり，交通機関を使って移動する以外に，「場所」に付随する送迎サービスを活用することや，車を所有する成員の協力を得て送迎してもらうことによって移動手段の確保を行っていた．さらに，経済的負担を少なくするために，複数の成員でタクシーを利用し料金を割り勘にする，地域が発行する敬老パス（公共交通機関の割引：但し，本稿調査以降割引額の変更あり）の利用，入居ケアハウスの送迎サービスの利用が行われていた．

しかしながら，前住居が他県や他の支庁にあり，Aケアハウスから遠く離れた所にある場合は，到達可能な距離の設定を図ることができず〈アクセシビリティの確保〉が困難になっていた．また，移動能力の低下や健康上の問題が生じた場合にも，上記の移動手段の確保で獲得した方法が活用できず，やはり〈アクセシビリティの確

保) が難しい状況に陥っていた。

## 2. 「受けとめられる場所」

「馴染みの場所」の多くは、リロケーションをする以前に構築されており、施設外にある物理的場所を拠点とすることが多かった。これに対し、リロケーション後、施設内に最初に構築される「場所」は、「受けとめられる場所」であった。「受けとめられる場所」とは、保護的な「場所」で、成員からいつも変わることのない受容的な対応を受けることによって、安心感や安全感を得ることができる「場所」である。「受けとめられる場所」の成員は、主に施設職員や家族であった。「馴染みの場所」も家族を成員としていたが、「受けとめられる場所」と「馴染みの場所」では家族との関係性が異なっていた。「受けとめられる場所」では、情報提供者は家族内で積極的な役割をもたず、家族からの保護的な対応を受けることが中心となっていた。他方、「馴染みの場所」では、助言や手助け等、家族内に積極的な役割があり、2つの「場所」ではこのような成員間の関係のあり方が大きく異なっていた。また、本稿調査では、ケアハウス内の個々の居室や、事務所の窓口、併設する通所介護で「受けとめられる場所」が構築されていた。

今回調査を実施したAケアハウスは、入居者を尊重し、家庭的な暖かさで対応することを施設の理念としていた。実際に、フィールドワーク中には、誰に対しても隔てなく挨拶する様子や、事務所内や窓口で相談事をする入居者に対して、丁寧に対応する職員の姿が頻回に認められた。そのような施設の方針によって、ケアハウス内に「受けとめられる場所」が構築され易くなっていたと思われる。実際に、本稿調査では、「受けとめられる場所」の構築が全ての情報提供者に認められた。このうち、2名の情報提供者が家族を成員とする「受けとめられる場所」を構築し、全情報提供者が職員を成員とする「受けとめられる場所」を構築していた。情報提供者達は、リロケーション直後に「受けとめられる場所」を構築することができ、それによってリロケーションから生じる不安定な状況の中でも、ホッと安心できる瞬間をもつことができていた。「受けとめられる場所」を構築することによって、過去の「場所」との分断の危機にさらされても、再び自分らしい「場所」を構築するための力を養うことができるものと思われる。以下に、「受けとめられる場所」の構築特性を示す。ここでは特に、「馴染みの場所」の構築特性と比較しながらその特徴を把握するため、成員、成員と一緒に行う活動、物理的あるいは地理的場所、そして時間に関する特性について順次説明する。表8には、「受けとめられる場所」の概念を示した。

表 8 「受けとめられる場所」の概念

概念	概念の下位項目
①委ねられる関係	管理する成員, 管理される成員, 配慮のある対応, 自分自身を任せられる 専門的な技術, よく訓練された職員, 要望に合わせた柔軟な対応
②施設がつくる活動	施設職員による企画・運営, 施設職員の関与, 職員による参加の呼びかけ 参加が望まれると思う人, 職員による個別のお誘い, 職員からのお願い 施設に協力, 職員の意図を察し, 意図に応える
③開かれた片隅	望む時に容易に関われる, 他からの視線の遮断(他の人かた見えない, 自分の 視線に入らない), オープンな作り, 職員への簡単なアクセス
④偶発的な「場所」	予想がつかない, 対応の依頼を躊躇する, 職員の配置換え

### ① 成員に〈委ねられる関係〉

ケアハウスの中で構築される「受けとめられる場所」は、主に施設職員を成員としていた。さらに、「受けとめられる場所」がどこに構築されるかによって、他の高齢者が成員として含まれる場合と含まれない場合があった。〈委ねられる関係〉とは、その「場所」を管理する成員と管理される成員が存在し、「場所」を管理する成員から暖かい配慮のある対応を受けることができる関係である。本稿調査では、「場所」を管理する成員には施設職員があてはまり、管理される成員にはケアハウス入居者や併設機関の利用者があてはまった。情報提供者達は、職員から配慮のある対応を受けることによって、親切なもてなしで迎えられていると感じたり、受け入れられているという安心感を得ることができていた。さらに、情報提供者達は、職員からの配慮のある対応によって、彼らに自分自身を任せられると感じることができた。今回認められた具体的な配慮のある対応には、常に気配り・目配りをしている、励ましや気の利いた一言を掛ける、困った時にすぐに助けに来る、しっかり話を聴いてくれる、いつも変わらず親切、との対応があげられていた。このような対応によって、情報提供者達は、職員から守られているという思いを抱くことができた。

昼食時になると、事務所にいる人、誰々が食べに来たとか、見てるわけです。飯を食べに来ることができないような体に異常があるかどうかということを見てるわけですよ... 朝8時になったら礼拝があるわけですよ。その時出てこない人は何か異常があるわけだ。だから、部屋に電話したり、部屋に行ってみたりして、どうしましたかって確認してくれる。もし、やばい状態だってことになったら、病院連れていってくれるし、これだけの施設はなかなかないですよ。[情報提供者 No.11 X+2年2月]

また、屋外での歩行が、少々不安定になってきた情報提供者は、徒歩10分の圏内にあるコンビニエンスストアに行った時のエピソードを次のように語った。

一人で行けるのは、近くのコンビニエンスストアだけ。コンビニエンスストアでもね、ちょっと風が吹いたり、雨降ったりしたらね、夜勤のおじさんが心配して迎えに来てくれるの。[情報提供者 No.30 X+4年8月]

このような職員の対応について、情報提供者達は、専門的な技術

を備えたよく訓練された職員として、感心し、その専門性に信頼を寄せていた。信頼に至る過程では、自分自身が職員からの対応を直接受けて信頼に至る場合もあれば、他の高齢者が職員に対応されている様子を眺めることによって信頼感を育てている者もいた。高齢者が対応される様子を眺めることによって、情報提供者達は、‘もしも’のことがあっても大丈夫との思いを強めていた。また、職員の専門性を感じるのは、日頃からの気配りや迅速な対応だけではない。職員の穏やかな対応や言葉遣い、高齢者の個別性を理解した対応、そしてどの職員も同じ態度で関わるといった均一性に対して、情報提供者達は職員の専門性の高さを感じていた。さらに、高齢者が失敗体験をした際に、高齢者に恥をかかせない対応も専門性を感じさせる一面として語られた。

特にここの職員の方々、いろいろな資格のためですよね。年寄りに対する接し方、いろんな勉強の過程を経てきてますから、それなりにどこよりも... 分け隔てがないからね。[情報提供者 No.20 X年8月]

こんなに若いのにね、こんなに気が付くって、大したもんだなって、それだけ教育受けた人が来てるんだなって、感じたけどね.. 気のつくところが、常にこう神経が回ってるからね... そして、一人じゃないんだから、全員するんだから。どの職員もみんな同じ態度で、恥をかかせないように。[情報提供者 No.32 X+1年12月]

さらに、職員は専門性を持ちながらそれを押しつけるのではなく、高齢者達の要望にもできる限り応えようとしており、要望に合わせた柔軟な対応を行っていた。「受けとめる場所」の管理者でありながら、要望に合わせた柔軟な対応を行う職員の姿に、情報提供者達は配慮のある対応を感じ、職員の専門性に信頼を寄せていることがうかがわれた。

栄養士が一人いて1ヶ月に一遍、各階の人を談話室に呼んで、いろいろ注文聞いてね。それで何が好き嫌いだとかね、そういうこと聞いてね、ま、できれば希望に合わせるようにね、食べ物って、年いくとみんな10人いれば10色でね。[情報提供者 No.26 X+4年4月]

(Aケアハウスの)職員さん達は、柔らかいところがあるから、甘えるわけよ、私自身がね、話し易いから。ここの、こうし

てもらえるって言うのと、ちゃんと受け入れてくれて、ちゃんとしてもらえるの。これがね、お友達が入ったところに行くと、何時になったら、何くる、何時にどうする、. 何時になったらこうしなさいって言うことがあるのね。だからね、それなら私に合わないなと思ってね、ここを気楽な気持ちで選んだの。本当にいい所。これで安心してらるんです、私がね。[情報提供者 No.32 X+2年 11月]

以上のような〈委ねられる関係〉によって、情報提供者達は、安心感や安全感を得ることができていた。しかしながら、情報提供者の中には、自分自身がいつも支援してもらおう立場で、自分からは何も返すことができないと考え、〈委ねられる関係〉に少々の息苦しさを感じる者がいた。

頂き物するんですよ。ただ、そんな私頂いたって、やっぱり買物できないから、お返しできないと心苦しいのね。やっぱり3回に1回でも、お返しできないとね、心苦しいけどね。頂いてばかりいますよ。[情報提供者 No.24 X年 8月]

ところで、この項の初めで、〈委ねられる関係〉は、職員と高齢者という成員によって構築されていると説明した。しかしながら、情報提供者の語りを分析していくと、情報提供者全てが自分自身を高齢者に分類しているとは限らないことが理解された。言い換えると、情報提供者の中には、現時点では自分自身は配慮のある対応の対象にならないと考えている者がいた。そのため、彼らは、配慮のある対応が必要と考える高齢者と自分自身の間に一線を引いていたり、中には自分自身を職員側に位置付けている者もいた。このような情報提供者の面接の特徴は、職員と高齢者のやり取りを眺望するような語り調である。このような傾向は、若い入居者や、心身能力が比較的高齢な者に認められ、生活上に障害があつて入居したのではなく、不安の解消や将来の保障として入居した者であつた。〈委ねられる関係〉も現在必要としているというよりは、将来自己の状態が低下した場合の備えと捉えていた。このような情報提供者は、必要な時にいつでも「受けとめられる場所」が得られるという保障によって、安心感や安全感を得る傾向にあつた。

## ② 〈施設がつくる活動〉

A ケアハウスでは、食事や入浴等の日常生活への支援以外にも、日課や月例で様々な活動が職員によって企画され、ケアハウス入居者に提供されていた。〈施設がつくる活動〉とは、施設のサービスの

一貫として、施設職員によって企画・運営され、入居者へと提供される様々な活動の機会のことである。例えば、懇談会等の意見交換会、買物送迎や外食といった外出活動、パークゴルフ会や茶話会といったレクリエーション的な活動、季節ごとに行われる行事活動等が、〈施設がつくる活動〉の中に含まれた。〈施設がつくる活動〉は、入居者への楽しみの提供のほかにも、入居者間の交流の促しや、居室に閉じこもりがちな入居者の生活の活性化等、施設職員が何らかの目的をもって企画・運営していることが多い。職員は、全入居者を対象に、施設新聞や掲示板、直接的な声かけ、当日の館内アナウンスを使って参加を呼びかけていた。居室にすることが多い入居者にとって、外出活動やレクリエーション的な活動は、居室の外へ出る重要な活動の機会となっていた。ケアハウスに入居して間もない情報提供者にとっては、施設の様子を知ったり、職員や他の入居者との交流を深めるきっかけとなり、施設生活に早く慣れるための重要なステップとなっていた。実際に、施設に入居した直後の情報提供者達が、自発的に、あるいは他の入居者に誘われながら、職員達が企画する活動に頻繁に参加する様子が認められた。

また、〈施設がつくる活動〉では、活動がうまく運営されるよう職員達が気配りしている様子が随所に見受けられた。施設職員は、楽しく盛り上がるように、そしてその活動を必要としている人が参加できるように工夫をしていた。また、職員達は、定期的に入居者の要望を聞きその内容を企画にいかしたり、参加が望まれると思う人に個別のお誘いをすることがあった。さらに、職員達は、施設内の入居者交流の活性化にも配慮をしている。そのため、〈施設がつくる活動〉をうまく運営することを目的に、情報提供者達が職員からのお願いをされることがある。例えば、盆踊り会でのカラオケや太鼓叩き、文化祭での作品の出展、施設交流会での踊りの披露等、季節行事の中で、その人の特技を披露するようなお願いをされていた。この他にも、毎月行う茶話会の出席者が少ない時には、参加のお誘いをされることがある。この場合、過去の参加回数が多い入居者や、過去に楽しそうに参加していた者達が参加するよう誘われていた。このように、職員から参加のお誘いがあつたり、お願いされることは、入居者達が「受けとめられる場所」の管理者が職員であることを意識付けられるきっかけにもなっていると思われた。

情報提供者達はまた、職員からのお願いを引き受けることが多い。中でも、リロケーションをして間もない入居者は、職員からのお願いに出来る限り応えようとする傾向にあつた。ただし、お願いを受ける時の気持ちは人それぞれであつた。躊躇しながら引き受けている人もいれば、逆に抵抗感なく引き受ける人、自ら名乗りをあげてできることを行う人がいた。



このレース編みビーズ入れて、ちょっと違うでしょう。ビーズ入れたらね、大分違うの。去年11月、文化の日だったかな、(職員が)私のとこ来て、「出しなさい」ってさ、「私なんてできないわ。なんかわからないよ」って言って、そしてこの色とそれからこの色と、2つ作って、展示会に色違いで出してね、何もできないと思ってたけどね。【情報提供者 No.27 X年8月】

盆踊りの太鼓はやらしてもらっています。小さい時から、やぐらでたたいたりしてましたから。【情報提供者 No.32 X+2年2月】

これ以外にも、〈施設がつくる活動〉がうまく運営されるように、時には職員が遅くまで残ってその準備を行うこともあった。

誤解のないよう言っておかなければならないが、〈施設がつくる活動〉は、決して職員が一方的に企画・運営する活動ではなかった。職員自身は、〈施設がつくる活動〉の企画と運営には入居者の意見や実際の関与が必要不可欠と考えていた。そこで、施設新聞等を通して、入居者の意見や感想を積極的に募集していた。その様子からも、施設の活動には、職員と入居者の双方の参加が必要と職員自身が考えていることが読みとれる。そして、情報提供者は、一生懸命に活動を企画、運営する職員をみて、感心したり、感謝していた。

ただし、〈施設がつくる活動〉への参加態度は、施設で過ごす期間が長くなるにつれ、いくつかのタイプに分かれていった。リロケーション直後の間もないうちは、ほとんどの情報提供者は、〈施設がつくる活動〉への参加に対して協力的な態度を示した。しかし、施設で過ごす期間が長くなるにつれ、〈施設がつくる活動〉に継続して参加する人と、ほとんど参加しなくなる人に分かれていった。参加する場合にも、職員からのお誘いを受けて参加する人、興味のある活動を選びながら自ら楽しんで参加する人、施設への帰属意識によって参加する人がいた。他方、参加しなくなる理由には、体調不良等健康上の問題が生じた場合や、リロケーション以前からこのような活動に参加することが少なかった、個人的な活動で忙しく施設の活動に参加する時間的・体力的余裕がない等が認められた。

また、施設への帰属意識によって参加する人の中には、個人的な楽しみよりも、施設全体の運営を考えて施設に協力していくことを選んでいる人がいた。そのため、気の進まない活動であったも、自分の所属先がうまく運営されることを希望して参加している情報提供者がいた。

いろいろなこと、職員さん達計画立ててくれてね、遊びに連れていってくれたり、公園に連れていってくれて、公園でお昼御飯食べたり。わざわざ公園まで行って、御飯食べて車で帰ってくるっていうことも、私達はいいですよって言いたいくらなんだけど、でもやっぱりホームとしてやって下さることだからね、参加しますけど、ポツンとしている人にしてみればいいんでないですか。そういうふうにならね、引っ張り出してもらえたら。もう、全然町に行く人は、一日おきか、毎日出る人もいるけど、本当に部屋から食事に通うだけの人もいますからね。[情報提供者 No.31 X年7月]

また、情報提供者の中には、施設職員の意図を察し、その意図に応えようと〈施設がつくる活動〉に参加している人もいた。

私ら足が悪いからね、そんないろいろしないけどね、それでもね、事務所ではね、何でもいいから、全員に出てもらいたい、障害があろうと何しよう、出てもらいたいというのが主旨だと思う。私の考えですよ。事務所では何も言わないけどね。[情報提供者 No.27 X+2年2月]

このように施設に協力していくことを選んだり、施設職員の意図を察し、その意図に応えるように活動に参加する人達は、‘施設のために’という考えをもっており、その様子からケアハウスを1つの共同生活単位として捉えていると考えられた。情報提供者は、施設の運営が円滑に進むように働きかけており、その働きかけによって施設が存続し、なおかつ自分自身がそこに所属しているという安心感を得ていた。そのため、情報提供者と施設活動の関係は、双方向の関係と言うことができる。このため、ここでは施設活動という「場所」の意味的変換がなされたと考えられる。つまり、「受けとめられる場所」から、3. で後述する「与え合う場所」への意味の変換がなされていたと考えられる。この場合、情報提供者達は、必要時には「受けとめられる場所」が得られるという保障による安心感と、ケアハウスという共同生活単位に所属しているという安心感を併せもっていたと考えられた。

### ③ 〈開かれた片隅〉

「受けとめられる場所」は情報提供者の居室、事務所の中、事務所窓口、各階のコーナーに置かれた椅子、そしてデイサービスで構築されていた。「受けとめられる場所」が構築されているこれらの物理的な場所を検討していくと、〈開かれた片隅〉という共通の特徴が

浮き彫りになった。〈開かれた片隅〉とは、開放性と閉鎖性という2面性を備えた物理的な場所の特性のことである。〈開かれた片隅〉では、望む時には容易に関わりを求めることができ、より親密な話をしたい時には他からの視線を遮断することができる特性であった。例えば、事務所のドアは、いつも開いており、さらに窓のない大きなカウンターがあるため、外に開かれたオープンな作りとなっていた。このような作りのため、事務所の外から中の様子を簡単に見ることができた。これにより、情報提供者達が、中にいる職員へ声が掛け易い状況が作られ、さらに抵抗感なく事務所の中へ入っていくことができた。また、各階においては、頻回に廊下内を行き来する施設職員を呼び止め、そのままコーナーに置いてある椅子と一緒に座り、職員と情報提供者の二人の「場所」を即座に作れる構造となっていた。このようなオープンな作りによって、情報提供者達は職員へと簡単に接近することができるようになっていた。

また、〈開かれた片隅〉はオープンな作りである一方、必要な時には他からの視線を遮断することが簡単にできる構造ともなっていた。例えば、情報提供者が事務所内の柱の陰や、事務所の片隅に移動すると、事務所の外からは情報提供者の姿が見えなくなった。各階のコーナーにおいても、壁際に身を寄せることによって、他の人から見えづらい位置に座ることが可能であった。この場合、他からの視線を遮断とは、他の人から自分が見えないということと、自分の視線の中に他の人が入らないという両方の意味が含まれている。このような他からの視線を遮断する構造によって、「ちょっと聞いて欲しいこと」、「少しだけ相談にのってほしいこと」といった個人的な会話が言い易くなっていたと思われる。以上から、〈開かれた片隅〉は、忙しく働く職員をある限られた時間独占し、〈委ねられる関係〉作りを可能にする構造と考えられた。本稿調査では、事務所窓口の椅子という〈開かれた片隅〉に身をおき、小さな声でポツリポツリと職員に何かを訴えている情報提供者達の姿を見かけることがあった。職員は、カウンターの中にいるものの、彼らもまた椅子に腰掛け、顔を近づけながら話を聞いていた。事務所窓口を〈開かれた片隅〉にして職員との「受けとめられる場所」を構築するのは、だいたい決まった情報提供者達であった。本稿調査では、最近になって一緒に入居していた夫を亡くした情報提供者や、家族が訪問に来ないことを不満げに語る情報提供者が、〈開かれた片隅〉の椅子に腰掛けて職員と語っている姿を頻繁に見かけた。

#### ④ 〈偶発的な「場所」〉

「受けとめられる場所」の最後の特性は、時間に関わるものである。「馴染みの場所」とは対照的に、「受けとめられる場所」は一部

の例外はあるものの、いつ構築されるかわからない場合が多かった。  
〈偶発的な「場所」〉とは、文字通りその構築がどのタイミングでなされるのか、予想がつかないという特性である。このような特性の背景には、情報提供者側の要因と職員側の要因があると考えられた。まず情報提供者側の要因であるが、本稿調査の情報提供者は比較的狀態の安定した者が多く、〈委ねられる関係〉をいつも必要としているわけではなかった。ただし、情報提供者の状態は不安定であり、そのためある時突然に「受けとめられる場所」が必要となることがあった。一方、職員側の要因であるが、職員は複数の仕事に従事しているため、情報提供者は、必ずしも望む時に望む形で職員との〈委ねられる関係〉が構築できるとは限らなかった。職員達は、日頃から入居者の要望にはできるだけ迅速に対応することを心掛けていた。しかし、複数の業務を担っており、入居者の全ての要望に迅速に対応できるとは限らなかった。彼らは、入居者の個別の相談以外にも、送迎サービスや、施設活動の企画と運営を行っており、事務所の席を外すこともしばしばあった。そのため、「受けとめられる場所」の構築には、職員と入居者のタイミングがうまく合致する必要があり、いつ構築されるか予想がつかなかつた。

さらに、入居者自身も、このような職員の状況を察し、時には対応の依頼を躊躇する場合があった。特に、依頼内容のうち、趣味に関わる相談は遠慮する傾向がみられた。

なかなかCDの使い方が覚えられないのよ... 職員の〇〇君が暇になったらやり方教えてもらおうと思ったり、前の職員さんに一度教えてもらったんだけど、やろうと思ったらできないの。そしたら、また聞きに行くのもあれだしね。忙しいのにと思うし。【情報提供者 No.9 X年8月】

勿論、「受けとめられる場所」は、〈偶発的な「場所」〉ばかりではなかった。デイサービスや、定期的に訪れる訪問看護やヘルパー、そして〈施設がつくる活動〉を基盤とする「受けとめられる場所」は定例化しており、構築の予想がつく「場所」であった。

ただし、一度構築された「受けとめられる場所」も、職員の配置替えや職場の異動によって成員が変わってしまうことがあった。職員の配置替えや職場の異動は珍しくなく、その度に新たな「受けとめられる場所」を構築する必要があった。このような点と、先の偶発的な特性が相まって、「受けとめられる場所」は、不確実性を備えた「場所」と捉えることができよう。そのため、情報提供者のコントロールがなかなか及びづらい「場所」と考えられた。

### 3. 「与え合う場所」

鍵となる 3 つ目の「場所」は、「与え合う場所」である。リロケーションをした後しばらく経つと、ケアハウスの中に「与え合う場所」が構築されてくる。「与え合う場所」とは、成員との互助的な関係によって、自己の社会的位置付けや所属感を実感できる「場所」である。「与え合う場所」によって、情報提供者達は、自分が必要とされていることを自覚することができていた。この「場所」は、ケアハウス内の居室、廊下、洗濯室、浴室、食堂等に認められた。中でも、セミ・プライベート領域で構築されていることが多かった。また、「与え合う場所」の成員は、主にケアハウスの入居者達と職員であった。今回「与え合う場所」を構築していた者の中には、ケアハウスだけではなく、併設する特別養護老人ホーム内でこの「場所」を構築している者もいた。

本稿調査では、「与え合う場所」は、35名の情報提供者のうち23名に認められた。「与え合う場所」の規模は、情報提供者の入居期間、これまでの対人交流の様式によって異なっていた。居室の両隣や、同じ階の入居者と「与え合う場所」を構築している場合や、施設活動で知り合った人同士で「場所」を構築する場合等、様々な規模の「与え合う場所」があった。中には、ケアハウスを1つのコミュニティ集団と捉えて、ケアハウス全体と「与え合う場所」を構築している者もいた。「与え合う場所」の中での活動にも幅があり、顔見知りになった人と挨拶をする程度の関係から、おしゃべりをする、お裾分けをする、出来ないことを代わってしてあげる等の活動が認められた。「与え合う場所」では、成員間の関係は双方向であり、この点は「馴染みの場所」と同じである。しかし、「馴染みの場所」が〈気の置けない関係〉や成員間の同質性を特徴にしていたのに対し、「与え合う場所」では成員の異質性が特徴となっていた。この異質性によって、成員は「与え合う場所」の中で何らかの役割を果たすことができていた。しかし、その一方では、その「場所」を弁えた振る舞いや適切な話題選びを必要としており、この点は思うことを自由に話せる「馴染みの場所」とは異なっていた。以下に、「与え合う場所」の特徴を説明する。表9には、「与え合う場所」の概念と下位項目を示した。

表9 「与え合う場所」の概念

概念	概念の下位項目
①共生する関係	助け合い, 双方向の関係, 共同生活単位, ニーズの合致 以前の住居で行っていた生活習慣, 共同生活単位の規模, 簡単な手助けが必要な人, 手伝う人, 探す, 見つける 負担にならない, 入居者間ですべきこと, 職員がすべきこと, 過度な世話の懸念, 小さな同質性, 成員間の異質性, 緊張感と慎重の要求
②移りゆく成員	成員が変わる, 成員が変わる可能性, 成員のリロケーション 不安定な状況, 新たな成員を探す必要性
③開かれた場所の日常的な接触	共有スペース, いろいろな人が出会える, 開かれた特性, 小さな同質性 コントロールが及ばない, 緊張感と慎重の要求
④活動パートナー	同質性の高い人, 一緒に行動する, 少人数の成員 同じような活動ペース, 同質性・親和性が高い関係, 信頼性

### ① 成員間の〈共生する関係〉

「与え合う場所」では、成員間の助け合いを基本としていた。この「場所」では、他者に対して言葉・簡単な技術・物品等を提供することによって、他者に喜ばれたり、逆に相手から助けられる体験をしていた。〈共生する関係〉とは、他者から一方的に何かを与えられるだけではなく、自らも他者に働きかけるといった双方向の関係をもつことにより、自分自身が役に立っていることや、必要な存在であることが実感できる関係である。〈共生する関係〉は、「与え合う場所」を構築する成員の特性によって2つのタイプに分けられた。1つは、成員を共同生活単位と考えている場合であり、もう1つはお互いのニーズが合致し〈共生する関係〉が作られる場合である。前者の典型的な例は、隣の部屋の入居者と〈共生する関係〉を構築する場合である。本調査では、留守にする際隣部屋の入居者に一言かけ、留守中の訪問者への対応をお願いすることや、手作りのお惣菜や外出時に買って来た食べ物を御裾分けする姿が認められた。また、食事や入浴へ向かう際、隣の入居者を誘い合う様子も見られた。

隣の奥さんなんて、たまに、こんなの煮付けて、だんなさんいるからね。その御裾分けを頂いて食べるけど、それがおいしいの。【情報提供者 No.29 X+2年12月】

この時、御裾分けや誘い合いは、どちらから一方から行われるのではなく、双方から行われることが特徴である。共同生活単位として、成員間でどのような活動が行われるかは、以前の住居で行っていた生活習慣も影響を及ぼしていた。御裾分けは、比較的多くの入居者が行っていた活動であり、今回も複数の情報提供者に認められた活動であった。また、共同生活単位としての思いが強い場合、入浴や食堂へ行く際の誘い合いが行われていた。さらに、以前の住居で行っていた生活習慣には、居住していた地域や居住形態（アパート、一軒家等）が影響していると考えられた。長年、社宅アパートで暮らしていた情報提供者は、隣の部屋にいる入居者を誘って食堂に行っていた。この活動を通して、隣の入居者と「与え合う場所」を構築していた。隣の入居者は、最近物忘れが多くなっており、この情報提供者は社宅アパートでの生活習慣から助け合いと思い彼女のことを誘っていた。

そうやって隣近所と助け合いながら過ごしてきたからね、できることをやるのは当たり前と思っていたのよ。【情報提供者 No.34 X+3年4月】

ところで、共同生活単位の規模をどのように考えるかは、情報提供者によって異なっていた。本稿調査では、両隣を共同生活単位と考えている情報提供者もいれば、ケアハウス全体を1つの共同生活単位と考えている人もいた。

もともと考えていたんだけど、てんでバラバラで生きるより、共同生活の部分があってもいいんじゃないかって、思っていたの... 助け合う、お互いにね、協力し合うっていうかね.. それがここで実現するのかなって。【情報提供者 No.1 7月】

情報提供者の中には、ケアハウス全体を1つの共同生活単位と考え、さらにその中に、より共同性が強い生活単位を設定している人もいた。夫婦で入居しているある情報提供者は、ケアハウス全体を1つの共同生活単位と考え、さらに自分達の居室がある階をより共同性の強い生活単位と捉えていた。そのため、施設が企画する活動に積極的に参加し、活動前後の準備や後片づけも自主的に行っていた。さらに、夫は、施設周辺の草刈りや落ち葉拾いを日課として、‘施設のために’行えることを探して実施していた。同じ階の人に対しては、家族のように捉え、お裾分けを行う他にも、名前で呼び合い親密性を高めていた。

ケアハウスの新聞にね、毎月、俳句とか川柳とか作ってね、出しているんですよ。ばあさんと私とね... 私は朝5時に起きるんで。そして、パークゴルフ場の草むしりとか、虫取りね。それが私の朝の日課です。／みな80代の人でしょう、でも名字言わないの。〇〇さん、△△ちゃんって、みな名前で呼ぶのよ... だからみんな兄弟みたいな感じで... 4階が一番、もうやっぱりね、自分の階ですからね... 4階の人は、殆ど名字呼ぶ人はいない。【情報提供者 No.20 X年8月】

ただし、共同生活単位としてどのような活動を行うべきなのかということや、共同生活単位をどの規模で捉えているかは情報提供者によって異なっていた。その相違が、情報提供者の関係のあり方にひずみを起こすことがあった。例えば、80代後半の情報提供者は、ケアハウスの入居者間では互いの顔と階ぐらいは覚えて欲しいと感じていた。

未だにね、階のわからない人もいるのよ。エレベータの中で、あんた何階だって聞く人いるの。だからね、私もうここに7年いるのに、たまに覚えて頂戴って言うのよ。私なんてね、顔み



たら、あの人だから 5 階、4 階か、3 階かって、こう（エレベーターのボタンを）押してあげるのに。【情報提供者 No.27 X + 4 年 7 月】

このような相手に対する期待は、ケアハウスを 1 つの 共同生活単位 と捉える思いから生じていると考えられた。この他にも、‘挨拶をしない入居者がいる’、‘浴室のスリッパを揃えていたら注意された’等、共同生活単位 の規模や、そこで行うべきと考える活動内容の相違が入居者関係の不満として語られることがあった。そのため、特にケアハウス全体を「与え合う場所」として構築する場合には、お互いの考え方の相違からその構築が阻まれることがあった。

また、ケアハウスを 1 つの 共同生活単位 として捉える情報提供者と、職員の間で考えのズレが生じることもあった。例えば、最高齢の情報提供者は、紙細工を生き甲斐とし、出来た作品を訪問者への‘お土産’として渡すことに喜びを感じていた。最初は個人的な喜びであったが、次第にこの活動をケアハウスの中における自分の‘役割’と感じるようになっていった。この情報提供者は、一人で外出することが困難であったが、材料の買い出しが難しくなった頃、情報提供者と職員の間で、買い出しの方法に関する考え方の相違が生じた。紙細工作りを 共同生活単位 の‘役割’として考える情報提供者と、本人の楽しみや生き甲斐と考えている職員の間で、買い出しを巡って以下のような意見の違いが認められた。

事務所に、月に 1 回でいいから手芸店まで車出してもらえませんかかって言ったら、あんた一人のために車は出すわけにはいかないわって。だってね、私一人のね、慰問に来た人にあげのお土産じゃないでしょう、みんなのために作るのに。子供さんに来てもらって、車出してもらえないのって言うけど、それはできないって言ったの... 私一人の所に慰問に来るんでないのにね。【情報提供者 No.30 X + 4 年 8 月】

これ以外にも、ケアハウスを 1 つの 共同生活単位 として捉えることにより、施設活動への参加態度に影響が及んだ。情報提供者の中には、‘施設活動への参加を期待されている’、‘施設活動へ参加すべきだ’と考えている者もいた。

なんだかんだ行事があるでしょう。今みたいに行事が、引っ込んでばかりいたらね、いけないし。やっぱり何かあると、顔を出さないと。あの人ちっとも出てこないって言われるしね。【情報提供者 No.33 X + 2 年 2 月】

共同生活単位との考えに基づく〈共生する関係〉は、情報提供者に所属感や助け合えるという安心感を与える一方で、上記の情報提供者の語りのように共同生活単位としての期待や成員間の考え方の相違が負担になることもあった。このように、〈共生する関係〉は二面性を備えているものと考えられた。

他方、〈共生する関係〉のもう1つのタイプである、お互いのニーズが合致してこの関係が作られる場合は、成員間の心身状態の相違によってこの関係が成立していることが多かった。つまり、簡単な手助けが必要な人と、その手助けを行う人との間でこの関係が築かれていた。手助けを行う人は、頼まれ事に対して、それを自分の‘役割’として快く引き受け、そこに喜びを感じる人であった。また、頼む側も、快く引き受けてくれそうな人を選び、お互いのニーズが合った場合に〈共生する関係〉が構築されていた。〈共生する関係〉は、必ずしも居室が近い者同士で構築されるとは限らなかった。多くは、食堂や施設活動等で出会った者同士がこの関係に至っていた。成員間で行われる手助けには、買物をする、背中に薬を塗る、外出時の簡単な手助けをする等があった。さらに、〈共生する関係〉では、頼む側もお願いするだけでなく、丁寧な言葉や物品を介して感謝の気持ちを伝えていた。頼まれた側も、感謝されることで喜びを感じ、また、‘頼まれる’という‘役割’を担うことによって、自己の能力を確認する機会を得ていた。このように、〈共生する関係〉では、成員間には双方向の関係が成立していた。例えば、屋外での歩行が徐々に難しくなってきた情報提供者は、他の入居者に買物をお願いしていた。情報提供者自身は、刺繍入りのケープを作り、いつも買物をお願いしている入居者に感謝の気持ちを込めてプレゼントをしていた。

〈共生する関係〉は、ケアハウス内に構築されることが多かった。しかし、情報提供者の中には、ケアハウス以外でこの関係を構築する者もいた。ある情報提供者は、ケアハウス内には、彼女の手助けを必要とする人が少ないと考え、特別養護老人ホームの入居者を成員とした〈共生する関係〉と「与え合う場所」を構築した。

特養の人達は、会いに行くとすごく感激するの。おせんべい一枚持っていても感激するのよ。また、それがうれしいの、私自身がね。だから、行くと飴1つずつ持って、2つずつあげるとそれを喜ぶの。折角、ここのケアハウスにきたんだからね、私がしてやれること、こういうことしかできないと思ってね。

[情報提供者 No.31 X+1年12月]

彼女は、特養入所者ができないことを代わりにしてあげ、彼らに喜んでもらうことに、自分自身も喜びを感じていた。彼女は、日頃から喜んでくれそうな人を意識的に探して、〈共生する関係〉を作っていた。彼女以外にも、意識的にあるいは無意識に自分が役に立ちそうな人を見つけている情報提供者がいた。

この情報提供者とは対象的に、頼み上手な情報提供者もいた。高齢者の彼女は、入居者との日常的な接触の中で、頼みやすい人を見つけており、そこで〈共生する関係〉を作っていた。

ただし、〈共生する関係〉の構築では、双方が負担にならないことが重要であった。多くの情報提供者達は、入居者間ですべき事と、職員に任せることを区別していた。例えば、体調不良の際に、食事を居室まで運んでもらうことがあるが、情報提供者の多くは、それを職員の仕事と考えていた。また、物忘れがひどくなった人のお世話も、職員が行うべきと考えられていた。このような考え方の背景には、ケアハウスの中で行う活動が、入居者の負担にならないようにとのお互いの配慮があった。しかしながら、全ての情報提供者が同じような考えを持っているわけではなかった。リロケーション以前の生活様式や、入居期間（特に、入居後間もない場合）によっては、食事運びやお世話も共同生活単位としての‘役割’の1つと考え、実行しようとする人がいた。その際、‘役割’を遂行しようとする入居者と、職員の‘役割’と考える入居者の間で考えの行き違いが生じることがあった。

さらに、情報提供者達は、過度な世話を懸念する傾向にあった。本稿調査では、情報提供者の多くは、‘できる限り自立して生活すること’を重視しており、面接の中でも多くの情報提供者がその点に触れていた。そのため、必要以上にお世話されることや、他の入居者がお世話を受ける姿を見ることに不快を感じる人がいた

世話好きな人がいるの。わりと後から入ってきた方だけど、目立つの。気付いたら、またすぐ動いてしまう。それが目立ってしまう。世話されて嫌な人もいる。目立たなければ言われないうらんだろうけど。【情報提供者 No.24 X+4年6月】

〈共生する関係〉は、多様なバックグラウンドをもつ入居者を成員としている。また、〈共生する関係〉の構築にあたっては、互いの異質性の中に、共同生活単位を成立させる小さな同質性やお互いのニーズの合致点をみつけ、関係を築いていると考えられた。そのため、〈共生する関係〉は、成員間の異質性を特徴としており、同質性を特徴とする「馴染みの場所」の〈気の置けない関係〉とは異なっている。〈共生する関係〉は、異質性のために緊張感と慎重さの要求さ

れる関係と考えられた。

## ② 〈移りゆく成員〉

「与え合う場所」のもう1つの特性は、成員が変わりうるということである。このことは、〈外界からの遮断〉を特徴とする「馴染みの場所」と大きく異なっている点である。〈移りゆく成員〉とは、「与え合う場所」を構築する成員が、変わったり、あるいは変わる可能性をもっていることである。これは、「与え合う場所」が、主にケアハウスの入居者や職員を成員としているために生じていた。Aケアハウスでは、年に数名程度の入居者の入れ替えが認められた。退居の理由には、病気のため入院する者、特別養護老人ホームへ入所する者、家族宅へ行く者等があった。そして退居者の後には、またすぐ新しい人が入居し、ケアハウスでは入居者が安定しない状況にあった。そのため、一度「与え合う場所」が構築されても、成員のリロケーションによって、新たな「場所」を構築する必要性が生じていた。ケアハウスの中で最も年齢が若い情報提供者は、面接の中で、かつての「与え合う場所」の成員を以下のように懐かしく語った。

〇〇さんとは、音楽の趣味があったので、コンサートにも一緒に連れて行ってあげたの。車椅子だったんですけど、タクシーで行くから、誰かとなら行けるんです…。亡くなった時は、本当にびっくりしました。調子が悪いって言ってらして。それで少し入院するって出掛けていたら、その夜なくなって…。よくご自分でサラダやラーメンを作って持って来てくれたんですよ…。音楽も、映画も趣味も一緒。ああいう人には会えないと思うよ。[情報提供者 No.25 X+4年6月]

フィールドワーク中には、この情報提供者が、玄関先や廊下で、上記の成員の車椅子を押して出掛ける姿をよく見かけていた。この情報提供者は、成員が亡くなった後は、他の成員と複数の「与え合う場所」を構築していたが、一人で喫茶店に行ったり、生涯教育センターのオープンスペースで過ごす時間が多くなっていた。その様子から、落ち着いて居ることのできる「場所」をもたない不安定な状況を垣間見ることがあった。このように、「与え合う場所」の成員がリロケーションした場合には、新たな「場所」の成員を探す必要性が生じていた。

これとは逆に、新しい人が入居することによって、新たな「与え合う場所」を構築する可能性も生じていた。特に、新しい入居者の存在は、比較的長く入居している者に新たな「役割」をもたらし得るものであった。新しい入居者は、知らないことも多く、ケアハウ

スでの生活を構築するための情報や、入居の不安を和らげてくれる人を求めていることが多かった。このような新しい入居者に対し、情報を提供したり、一緒に行動することで、彼らのニーズを満たしている情報提供者がいた。新しい入居者のニーズを満たし、それにより頼りにされることによって、新たな「与え合う場所」が構築されていた。

〈移りゆく成員〉の要因となるのは、リロケーションだけではない。〈共生する関係〉を成立させているニーズが変わった場合も、成員が変わる可能性がある。例えば、新しい入居者も、施設生活に慣れてくると、新しい入居者が求めている人が変わることがある。このように、「与え合う場所」は、〈移りゆく成員〉による成員間のニーズの変化に伴い、「場所」の構築も移り変わっていくものと考えられる。

### ③ 〈開かれた場所の日常的な接触〉

「与え合う場所」は、居室内やその玄関先等で構築されることが多かった。これ以外にも、各階設置の洗濯室、廊下、エレベーター、食堂、多目的室で、〈共生する関係〉が認められた。洗濯室、廊下、エレベーター、多目的室では、〈日常的な接触〉が生じており、それが「与え合う場所」の構築に関係していたものと思われた。〈日常的な接触〉とは、共有スペースで、成員が日常的に出会い、そこで簡単な交流が行われることである。成員達は、外出先や食堂等へ移動する、定期的に洗濯物を洗濯する、毎朝礼拝に出る等といった日課を通し、これらの共有スペースを使っていた。その際、他の成員と出会う機会があった。「与え合う場所」の構築には、このように、いろいろな人が出会えるといった共有スペースの開かれた特性が重要な役割を担っているものと考えられた。さらに、共有スペースによって、成員同士が日常的に出会うことが可能となり、その際のちょっとした〈日常的な接触〉が、成員の顔や名前を‘知る’ことや、どのような人かを‘見極める’ための機会ともなっていた。情報提供者にとっては、このような〈日常的な接触〉が繰り返されることで、お互いに声をかけ易い状態がうまれていた。さらに、〈日常的な接触〉から、お互いの小さな同質性を見つけ、交流を深めるきっかけを得ることもできた。特に、共有スペースでは、行動パターンに共通性の認められる人同士が日常的な接触を重ねることが多い。例えば、同じ活動に参加する人、同じような時刻に移動する人、階段を使う、あるいはエレベーターを使う等移動手段が同じ人、といった行動パターン上の共通性である。このような、行動パターンにおける小さな同質性を手がかりにしながら、情報提供者達は〈共生する関係〉の構築の可能性を‘見極めて’いたものと思われた。

これとは逆に、共有スペースの開かれた特性が、緊張関係を高めることもあった。入居者間の異質性や、共同生活単位に関する考えの相違のため、成員の間で予想や期待と異なる言葉掛けや対応を受けることがあった。このようなお互いのやり取りの行き違いから、緊張関係が高まる場合もあった。さらに、同じような行動パターンの人が接触し易いとはいえ、開かれた特性のため、どのタイミングで、誰と会うかまではコントロールが及ばなかった。そのため、「与え合う場所」での振る舞いには、適度な緊張感と慎重さが要求されていた。情報提供者の中には、所属先があるという安心感と仲間がいる楽しさを感じながらも、ケアハウス内での慎重な振る舞いを心がけている者がいた。

やっぱり、人の対人関係が一番難しい。育ちからなんから、みんな違うし、そういう人が集まっているんだから。いやあ、難しい。特別な友達も作らない方がいいかもしれない。【情報提供者 No.8 X+4年7月】

以上から、「与え合う場所」を構築するためには、個々の入居者について‘知ること’や‘見極めること’が重要な点と考えられた。「与え合う場所」を安定して構築できない情報提供者の中には、入居者個々の特性を‘見極める’ことが十分になされず、自分がこれまで築いてきた関係をケアハウス内でそのまま再現している者がいた。その結果、どの入居者に対しても画一的な関わりを行い、入居者との緊張関係が生じ易い状態となっていた。さらに、このような緊張関係から、居室内にいたことが多くなったり、施設外へ頻繁に出掛ける人がいた。彼らは、入居者と一定の距離を保つことで、緊張関係に対する対処方法をとっていたと思われる。

他方、情報提供者の中には、‘知ること’や‘見極める’ために、積極的な戦略を取っている者もいた。本稿調査では、できるだけ早く入居者を覚えるように、メモ帳に、その日会った入居者の名前、入居している階等を記載している者がいた。また、「与え合う場所」の成員の中で、特に自分との同質性や親和性の高い人を見つけ、大抵2人組で行動を行う人もいた。このような2人組は、〈活動パートナー〉として、次の項で説明する。

#### ④ 〈活動パートナー〉

「与え合う場所」は、バックグラウンドの異なる者により構築されていた。しかしながら、成員の中には同質性の高い人と〈活動パートナー〉を組み、一緒に日常生活を送っている者がいた。〈活動パートナー〉とは、行動パターンや関心事に共通点が多く、日常生活の

様々な活動場面で一緒に行動する2人組または少人数の成員の集まりのことである。〈活動パートナー〉は、セミ・パブリック領域や施設外領域に出掛ける場面で認められ、別の階に住む入居者同士で構築されることが多かった。〈活動パートナー〉となるためには、話題や趣味の共通性、そしてニーズの合致が大切であった。さらに、同じような活動ペースであることが重要であった。例えば、行動範囲と移動スピード、対人関係の持ち方が類似していることが重要であった。ある情報提供者は、ほぼ毎日施設外へ出掛けていたが、体調不良によって施設内にいることが多くなった。以前は、活発に行動していたが、活動のペースが落ち、それが〈活動パートナー〉を見つけるきっかけになったと語った。

近頃、ケアハウスの中に友達ができたの。変な話。自分が衰えて、話が合うようになって。その人も病気持ち。食堂に行くと、私テレビを見て、それを話題にするの。その人は、テレビが自分の後になるから見えないのに、つけておいてくれるの。その人お花を作っていてね。‘あんたにあげるよ’って、言ってくれてね。この人とは話しが合うんだ。いや、自分が衰えて合うようになった。ここにいる方は、体が悪い方が多いからね。[情報提供者 No.23 X+4年10月]

情報提供者達は、行動範囲と移動スピード、対人関係の持ち方が同じ者同士を、〈開かれた場所の日常的な接触〉で‘見極め’〈活動パートナー〉となっていた。そして、〈活動パートナー〉を得ることで、安心感を得たり、1人では行いづらい活動にも参加することができた。これ以外に、一部の情報提供者、特に入居後間もない時期や普段から他の入居者との関わり合いの少ない人の中には、職員によって運営される〈施設がつくる活動〉の場面が、〈活動パートナー〉を‘知る’、‘見極める’ための重要な「場所」となっていた。このような人達は、職員が定期的に行う茶話会や外出行事に参加し、その交流の中で、成員を‘知って’いた。

ところで、〈活動パートナー〉は、同質性や親和性が高い関係であることから、この関係が、長い期間安定して構築されるようになると、「馴染みの場所」の構築へと移り変わっていく可能性があると考えられた。しかしながら、〈移りゆく成員〉でも述べたように、ケアハウス入居者の退居によって、せつかく構築した関係を失い、「馴染みの場所」の構築に至らないことも決して少なくない。あるいは、〈活動パートナー〉であったのが、心身状態の変化によって活動のペースについていけない成員がでて、結局〈活動パートナー〉であることを続けられなくなった人もいた。

やっぱり、動こうったら、ぱっと行けるような人じゃないとね。最初は、〇〇さんもそうだったけど、今動けないでしょう。一緒に連れて行って歩いてても向こうも大変だし、私たちも〇〇さんに合わせようとしたら、動かせないし。そうなるから、一緒に行かなくなっただね。ケアハウスの中では、行ったり、来たりするけどね。[情報提供者 No.9 X+4年7月]

A ケアハウスで調査を行っている時には、施設内で2人組みになっている情報提供者をよくみかけた。しかし、全てが〈活動パートナー〉と考えられるわけではなかった。情報提供者の中には、2人組みになって頻繁に外出していたが、毎回異なる人をパートナーにする者もいた。また、ある情報提供者は、限定された期間だけ2人組みになっていた。新しく入居した人と2人組みになっていたが、彼女が施設に慣れてくると2人組みになることはなかった。

このような2人組は、成員同士の同質性が高い〈活動パートナー〉とは異なるものと考えられた。むしろ「与え合う場所」や〈活動パートナー〉を探索している「お見合い」のような関係であったり、自分のニーズを一時的に満たすための関係と思われた。

私、誰ってということないのさ。こう話しがあったら、誰とでもね。前に、2人で食堂に行ったこともある。〇〇さんが1人でなんか食堂に入らないって言うから。そうかいて、私もちょっと1人だったら、入りづらいねって。そうやって、2人で行ったの。[情報提供者 No.9 X+4年7月]

以上、本調査で情報提供者に認められた「馴染みの場所」、「受けとめられる場所」、「与え合う場所」を示した。3つの「場所」は、空間的特性、社会的特性、そこで行われる活動的特性、そして時間的特性を含んでいた。これらの特性が複雑に絡み合いながら、それぞれの「場所」が構築されていた。3つの「場所」の特徴を説明すると、「馴染みの場所」は長い時間をかけて構築され、空間性をはじめとする4つの特性の高い親和性を特徴にしていた。特に、この「場所」の成員間には、自由に振る舞え、何をしても許されるという信頼性と同質性の高い関係を構築していた。他方、「受けとめられる場所」は、「場所」を管理する成員からの配慮のある保護的な関係が特徴であった。そして、「与え合う場所」は、バックグラウンドの異なる異質な成員達が、互いに社会的な役割を担い合う関係を特徴としていた。情報提供者にとっては、「受けとめられる場所」が、保護という受け身的な関係を特徴としていたのに対し、「馴染みの場所」と



「与え合う場所」は情報提供者達の能動的な、双方向の関係を特徴としていた。また、「与え合う場所」は、空間的にも、社会的にも開かれた流動性を特徴としていたのに対し、「馴染みの場所」と「受け止められる場所」は空間的、社会的に閉じられた固定性を特徴としていた。

さらに、これらの「場所」は、「場所」を構築する情報提供者達へ、それぞれ安心感や安全感を提供していた。3つの「場所」は、情報提供者に所属先があるという安心感を与え、さらにそれぞれ異なる形で情報提供者へ影響を及ぼしていた。「受けとめられる場所」では、保護され、擁護してもらえることで安心感が生まれていた。他方、「馴染みの場所」と「与え合う場所」では、以前と変わらずに自分の力を発揮できるという自己確認を得ていた。さらに、「馴染みの場所」においては、何があったとしても受容できるという自己信頼を得ることができていた。それらが、さらに「場所」の構築を深めていたと思われる。

3つの「場所」は、リロケーション後の時期によって、出現様式が異なっていた。次の第3節では、3つの「場所」の移り変わりとして、「場所」の構築と喪失に関わる過程を説明する。

### 第3節 3つの「場所」の構築と喪失の過程

図7には、3つの「場所」について、時間的経過からみた構築状況を示した。

情報提供者のうち、およそ半数の者が、入居する以前に構築した「馴染みの場所」をケアハウスへ入居した後も引き続き構築していた。リロケーション後、ケアハウス施設内に最初に構築するのは「受けとめられる場所」であった。

そして、リロケーション後しばらくすると、施設内で知り合った入居者を成員とした「与え合う場所」が構築されていった。その後、施設職員が「与え合う場所」の成員に加わっていった。そして、リロケーション後しばらくすると〈活動パートナー〉が構築され始めた。さらに、〈活動パートナー〉が継続して、安定的に構築されるようになると、そこから「馴染みの場所」への移行が認められるようになっていった。以下に、これら3つの「場所」の構築と喪失の過程、さらにそれぞれの「場所」が情報提供者に与える影響について説明する。

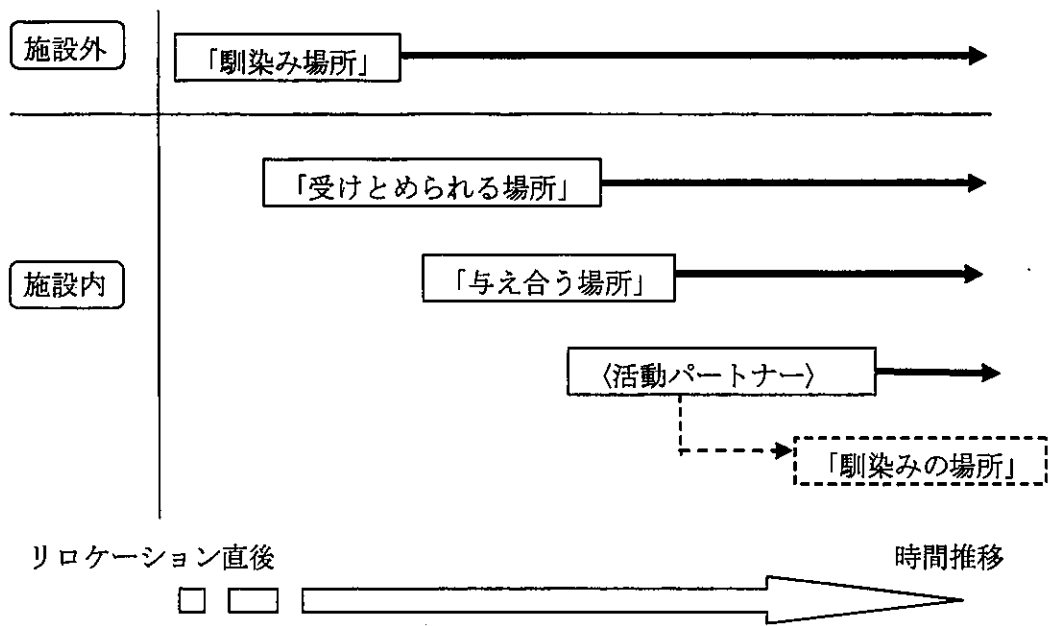


図 7 時間的推移からみた3つの「場所」の構築

## 1. 「受けとめられる場所」における専門的な職員達

17名の情報提供者は、入居する以前から構築している「馴染みの場所」を、リロケーション後も構築していた。リロケーション後、ケアハウス内に構築する最初の「場所」は、主に施設職員や家族を成員とする「受けとめられる場所」であった。リロケーション後間もない者は、〈施設がつくる活動〉に参加し、「受けとめられる場所」を管理する成員である職員と〈委ねられる関係〉を構築していた。情報提供者は、「受けとめられる場所」を構築することによって困ったときに保護を受けたり、あるいは将来何か生じた場合の保障を得ることで、安心感や安全感を得ることができた。

ところで、本稿調査の情報提供者の入居理由をみると、面接の中で明確な入居理由を語った者が20名いたが、その主なものは、同居中の、あるいは今後同居することへの気兼ね(7名)、3度の食事の心配(4名)、買物が大変になってきた(3名)、将来に備えて(4名)、再発への不安(1名)、家族が申し込みをした(3名)であった。この理由では、ケアハウスへリロケーションした時点で職員からの保護的な対応を必要とする者は少なかった。それよりも、日常生活で少しずつ困難なことがでてき、それらの問題が本格化する前に、その備えのために入居している者が多いと考えられた。彼らにとって職員とは、自分の将来を保障する重要なサービスの1つであった。さらに、何かあった場合に、自分自身のことを任せる、責任の担い手であった。情報提供者は、そのサービスの質と、自分の選択の正しさへの確信を得るため、職員の対応や専門的な技術に関心を寄せていた。情報提供者は、援助が必要な高齢者への職員の対応の様子を眺めていた。彼らは、職員の声の掛け方、対応の迅速さ、交わす言葉、トランスファーの仕方を見ていた。さらに、自分自身との直接的な関わりで、話をよく聴いてくれる人達であることを理解していた。そして、その対応方法から、施設職員のこの態度を、よく教育された結果と考え、一般的な若者と一線を引いて捉えていた。さらに、職員の配慮のある対応を受けて、今後何かあっても大丈夫との安心感を得ていた。

さらに、職員の配慮のある対応は、情報提供者達に何かあった場合の安心感を与えるだけではない。職員の対応は、情報提供者達が、〈施設がつくる活動〉へ参加し易い状況を生み出していた。リロケーション後間もない情報提供者達は、施設の状態を理解し、そこに慣れていく必要があった。〈施設がつくる活動〉は、職員や他の入居者達との交流が行えるため、情報提供者達に重要な探索の機会を提供していた。つまり、リロケーション後間もない情報提供者は、〈施設がつくる活動〉への参加を通して、他入居者のこと、入居者の生

活の様子，施設の活動等，新たな生活を構築していくために必要な情報を探索することが可能であった。さらに，「受けとめられる場所」では，情報提供者達は職員からのお誘いや保護的な関わりを受け，参加し易い状態となっていた。リロケーション後間もない情報提供者達は，〈施設がつくる活動〉へ参加することで，施設の運営に一度は自分自身の身を預け，施設の状況を知る機会を得ていたと思われる。この様子は，あたかも，新しい施設を安全な状況で知るために，施設が引くルールに従って施設の活動に参加しているようであった。

## 2. リロケーションによる入居者達のギャップ—自己のゆらぎ

施設職員の配慮のある対応によって，情報提供者達は新しい施設の中でも，安心感や安全感を得ることができた。しかしながら，リロケーション後，情報提供者達は，ケアハウスと以前の住居を比較し何らかのギャップを感じていた。入居生活への戸惑いにつながるギャップには，以前の住居がどこにあったかによって，ケアハウスが所在する地域に関するものやケアハウスに関するものがあった。

このうち，ケアハウスに関するギャップでは，施設全般に関すること（8名）や入居者に関すること（7名）が指摘された。ただし，新しい施設で感じるギャップは，以前の住居状況との比較によって生じるものである。そのため，必ずしも戸惑いにつながるギャップばかりではなかった。情報提供者の中には，交通の便（2名）や暖房設備の良さ（1名）を指摘する者もいた。とは言え，本稿調査で語られたギャップの多くは，情報提供者に戸惑いや不安を生じさせることの方が多かった。

そこで，情報提供者達がギャップを感じる点についてより詳細にみていくと，施設全般に関するギャップには，交通の便（4名；便利になった2名，不便になった2名），信仰関連（2名），食事のこと（2名）があった。他方，入居者に関することでは，勝手なことを言う人がいる（3名），しゃべり過ぎる人や逆に話したがない人がいる（3名）ことを指摘する情報提供者が多く，ケアハウス内での入居者の会話にギャップを感じていた。これまで，1人暮らしや家族と暮らしていた人は，様々な人がいることに驚きや戸惑いを感じていた。ある情報提供者は，認知症の症状が疑われる入居者に会い，‘普通の家庭ではみることがない。自分のこれからが見えてきた’と語った。また，ある者は，‘集団生活をしたことがない。孤独に陥ってしまった’と，リロケーション時の心境を次のように語った。

ケアハウスに来たとき，環境違うでしょう。第一ね，集団生活したこともないからね。集団生活が始めてでしょう。そしたら，

孤独に陥っちゃうの。集団だけど、孤独になっちゃうの... だから、なんとなくもう不安で、情緒不安っていうのかな... 入ってね、2ヶ月や3ヶ月では、わからないでしょう。この方はどういう方だって、わからないし... 最初はわからないからすぐく迷っちゃうの。[情報提供者 No.27 X+4年7月]

情報提供者の多くが、新しい施設に戸惑いを感じる中で、施設職員を成員とする「受けとめられる場所」は、情報提供者が新しい施設に慣れるために有効に機能していたと考えられる。職員からの配慮ある対応によって、情報提供者達は施設生活に関わる情報を探索することができていた。さらに、リロケーション以前に構築していた「馴染みの場所」も、重要な役割を担っていたと思われる。情報提供者の中には、「馴染みの場所」に参加することによって、情緒的に安定すると説明する者がいた。彼女は、「馴染みの場所」が不安な気持ちを和らげる様子について以下のように語った。

ケアハウスに来たときもね、3ヶ月か何かになる時に、「馴染みの場所」の）その人達に本当に助けられたの。別にどうのこうのって言わないけど、おしゃべりして、お茶を飲んでいけば、そうすると案外気持ちが落ち着くよ。帰ってくる頃にはね。ちょっとすっきりするでしょう。[情報提供者 No.27 X年8月]

本稿調査では、彼女のようにリロケーション後の状況と「馴染みの場所」との関係性を明確に述べる情報提供者は他にいなかった。しかしながら、リロケーション後も、以前と変わらない「馴染みの場所」を構築し続ける者が17名いたことから、新しい施設での不安感を乗り越え、そこに慣れていくために「馴染みの場所」の構築は重要な役割を担っていたと考えられる。

### 3. 「与え合う場所」の構築における成員の変化

—入居高齢者から〇〇さんへ—

情報提供者達は、〈施設がつくる活動〉や施設のセミ・プライベート領域での日常的な接触を通して、ケアハウスの入居者とも、顔見知りになっていた。それに伴い、入居者との日常的な接触や施設活動で知り合った入居者を成員とした「与え合う場所」が構築されていた。前述したように、「与え合う場所」には、成員を共同生活単位と考えて構築する場合と、お互いのニーズが合致して「与え合う場所」を構築する場合との2つのタイプがあると考えられる。この

うち、どのタイプの「与え合う場所」を先に構築するかは、入居者との接触頻度にかかっていたと考えられる。多くの場合、同じ階や居室が近い入居者を共同生活単位の成員とする「与え合う場所」が先に構築される傾向にあった。その後、ケアハウス内にお互いのニーズが合致する成員同士が出会い、「与え合う場所」が構築されていた。ただし、入居した階や近隣の部屋に、入居者間の交流を避ける人がいたり、頻繁に外出や外泊を行う人が入居している場合には、入居者との日常的な接触の機会が少なくなる。そのため、共同生活単位としての「与え合う場所」よりも先に、お互いのニーズが合致する者を見つけ、彼らとの「与え合う場所」を構築することとなる。

ところで、本稿調査の結果から、ケアハウスの中には、複数の「与え合う場所」が構築される可能性があると思われた。さらに、様々な規模の「与え合う場所」の構築が可能であった。今回見出された「与え合う場所」は、居室が近い者と「与え合う場所」を構築する場合、居室の階に関わらず「与え合う場所」を構築する場合、そしてケアハウス全体を「与え合う場所」として構築することが可能であった。情報提供者は、入居期間が長くなるにつれ、最初は小規模の「与え合う場所」のみを構築していたのが、次第に、ケアハウス全体を1つの「与え合う場所」とする大規模な「場所」を併せ持つようになっていた。さらに、情報提供者の中には、これ以外にも、小規模の複数の「与え合う場所」を構築している者がいた。

「与え合う場所」の構築を拡大していくためには、入居者との日常的な接触と安定した関係作りが重要な条件となっていた。つまり、日常的な接触を繰り返すことで、顔を知る、名前を知る、生活背景や対人交流の特徴を知る、そして自分との共通点や関係の持ち方を見極めることが重要な要因であった。このように、相手に対する理解が深まることによって、初めは漠然と「入居者」や「高齢者」と捉えていたのが、〇〇さんとして個別的に捉えることにつながっていた。入居者のことを、漠然と捉えているうちは、関わり方がわからなかったり、結局は画一的な関わりになってしまったりしていた。時には、予想外の対応に戸惑うことがあった。しかしながら、〇〇さんと捉えることにより、それぞれの人と関わる際の距離感の理解につながっていた。また、情報提供者によっては相手の関わり方の背後にある意味の理解に至る者もいた。

最初はわからなかったけど、段々みんなの気持ちがわかるからね。あの方は面倒見がいいから、こういうのはあの人にしてもらおうとかね、それによっていろいろして下さるのね... みんなの気持ちがわかるまではね、やっぱり、こんなこと言ってお

うかって、いいんだろうかって、こんなことお願いしてもいい  
んだろうとかね、今はそういうのちゃんと、はかっているよ  
うな感じ。[情報提供者 No.27 X+4年7月]

この情報提供者は、‘知ること’や‘見極めること’によって、入居者との交流範囲を拡大していた。高齢な彼女は、外出することや日常生活を送ることが少しずつ困難になっており、これに伴ってこれまで構築していた「場所」を継続していくことが段々難しくなっていた。このような状況において、入居者との交流範囲を拡大しながら「与え合う場所」の構築を維持していくことは、彼女にとって特別な意味を有していた。しかしながら、他の多くの情報提供者が、彼女のように、‘知ること’や‘見極めること’を通して、積極的に入居者との交流範囲の拡大を図っていたわけではない。むしろ、多くの場合は、入居者をある程度‘知ること’や‘見極めること’を行った後、付き合いの難しい人との距離をとる、何か言われても気にしない・我慢するという、消極的な交流方法を選択していた。これにより、ケアハウス全体を1つの「与え合う場所」とする場合にも、形式的で必要最低限の関わりに留めた「場所」として構築していた。

年取ったら、やっぱり気持ちが変わうし、個人でまたこういうところは違うから。やっぱり、いろいろね。ひとつの御飯食べますからね。なんて言ったらいいかな、我慢だね。人と仲良くしていくには、ある程度の我慢がなかったら、ちょっとつらいでしょう。隣にあんまり行かないし、人の部屋にあんまり行かないね。普通は平均に誰とでも、平均にお話してるわ...なるべく和を、やっぱりこういうところ和ですね。人間の和。やっぱり、中には自分が頭いいと思って偉そうに言う人もいるし、いろいろいるから、知らん振りして、仲いい人は仲いいよ。だけど、仲いいからって、人の部屋にはあんまり行かない。その代わり、皆さんといるときは、話もするし、それから月に何回って集まる時は、申し込むよ。だけど、普段は人の部屋にはあんまり行かない。[情報提供者 No.19 X+4年7月]

このように情報提供者達は、‘知ること’や‘見極めること’を通して、入居者との葛藤を引き起こさない程度の距離感を保っていた。この傾向は、本調査の多くの情報提供者に認められた。情報提供者は、ケアハウスの入居者達と葛藤を引き起こさない距離を保ちながら、ケアハウス全体を共同生活単位としての「与え合う場所」とし、自分の所属先を構築していたものと考えられる。このことは、「与え



合う場所」の構築には、関係が構築できそうな入居者を‘知ること’と‘見極める’ことを行うことと同時に、構築を妨げる直接的干渉や間接的干渉とその対応方法を‘知ること’と‘見極めること’が必要なことを物語っている。直接的干渉と間接的干渉については、「馴染みの場所」の説明の際にも述べたが、「場所」の構築を妨げるような他者からの関与である。本稿調査では、具体的な間接的干渉として、自分の振る舞い方が、他の入居者の間で噂話になることがあげられていた。さらに、直接的干渉では、他入居者や職員から「与え合う場所」の構築のために行っていた活動を中断するよう指摘を受けることがあった。情報提供者の中には、その両立の困難性から、ケアハウス全体を「与え合う場所」とした形式的な「場所」の構築に留め、他の「与え合う場所」を構築しない者がいた。

ところで、‘知ること’や‘見極めること’は、入居者の特性をつかむために行われるだけではない。自分が、役割を担えたり、自分でコントロールできそうな物理的な場所や機会を見つけることにも使われていた。例えば、廊下の出窓や事務所前のカウンターに空きスペースをみつけて自分の植物や作品(手芸作品や生け花)を飾る、施設周辺で放置されている雑草をみつけ草取りを行う、園芸スペースで水やりのされてない箇所をみつけて水やりをする等が、情報提供者によって行われていた。この他、毎朝の礼拝時には椅子の出し入れが行われるが、そこでは、勢いよく片付けを行う多数の入居者の姿が見られた。その姿は、あたかも自分の役割や仕事の可能性に群がっていくようであった。情報提供者達は、これらの場所との日常的な接触や、他の入居者が活動する様子を見ることによって、自分の力が及びそうな物理的な場所や機会の探索を行っていた。

この際、これらの探索が実際の活動の創出へとつながるのは、次のような場合と考えられる。つまり、①すでに何らかの活動を実施しているが、その活動にもっと適切な物質的な場所に巡りあった場合、②過去の活動と同じような場所や成員に巡りあった場合、③他の入居者が行っている活動のうち、自分にも出来ると思えるものを見つけた場合である。例えば、すでに何かの活動を行っていて、さらに適切な場所を見つけた場合については、手芸を行ったり、観葉植物の世話をしている情報提供者の例がある。手芸でたくさんの作品を作っているが、周りにはそれをプレゼントする人もいなくなり、出来上がった作品が誰の目にもとまることなく、自室にあふれている情報提供者がいた。彼女は、作品を他の人に見てもらえるように、さらに居室のスペース不足を補うため廊下に空きスペースをみつけ、そこに作品を飾っていた。また、観葉植物を居室内で世話していた情報提供者は、日当たりの良い出窓スペースをみつけ、そこに植物を移し、世話をを行うようになった。そこで、世話をする際、

他の入居者と挨拶をしたり，植物に関する会話を行ううちに，そこに「与え合う場所」が構築されていった。

他方，過去の活動とつながる例には，次のものがあつた．情報提供者の1人は，特別養護老人ホームに入居している人達を訪問することによって，彼らとの「与え合う場所」を構築していた．そして，その構築の背景となつた認知症の人をお見舞いに行った時の過去の体験について，次のように説明していた．

知っている人のお母さんのところへお見舞いに行つて，いろいろな人を見ているのよ．そしてね，私が手を振ると，向こうも手を振ってくれるの．それがなんとも言えないのね．私が手を降ると，向こうが手を振つて答えてくれるの．それを私が覚えたわけなの．そこで勉強したの．[情報提供者 No.32 X+3年5月]

ただし，他の入居者の活動を見て自己の活動を創出する場合には，他の入居者と場所や機会のブッキングが生じないように配慮する必要がある．ブッキングが，入居者関係の衝突を引き起こす可能性があるためである．情報提供者達は，他の入居者が活動を行っている物理的場所と類似する設定を見つけたり，あるいはその入居者が活動を中断する狭間を見つけることにより，ブッキングせずに新たな活動を開始することができていた．

さらに，活動が提供されている物理的な場所や機会は，その情報提供者が日頃活動を行っている物理的な場所やその導線上に見出されることが多かった．そして，その物理的な場所や機会を共有する入居者ととともに，そこに「与え合う場所」が構築されていた．例えば，園芸スペースではそこを利用している他の入居者達と「与え合う場所」が構築されていた．また，事務所前のカウンターに作品を飾る場合や施設周辺の草刈りではケアハウス全体と「与え合う場所」を構築していた．このように，情報提供者達は，日常的な接触を通して，自分の力が及びそうな，入居者，物理的な場所，機会を‘知ること’や‘見極めること’を行い，さらに過去の活動や他の入居者の活動との照らし合わせによって，「与え合う場所」の構築を行っていた．

ところで，日常的な接触の繰り返しによって，‘知ること’や‘見極めること’といった思考レベルの経験が生じる前に，感情レベルの経験が起きていることに触れる情報提供者がいた．所謂，‘雰囲気’や‘相性’といった言葉を使って，「場所」の経験が語られる場合である．これは，思考レベルの経験より先に感情レベルの経験が起きていることと考えられ，循環的な接触過程によって，思考レベルの経験が創出し次第に「場所」の意味が定着していく可能性を示唆す

るものである。情報提供者の1人は、デイサービスを選択した理由について、初めはその理由が自分でもわからなかったが、次第にその意味を見出していった様子を次のように語った。

いろいろ施設を見て歩いたんですよ。何故かここが気に入って。そして初めは知りませんでしたけど、いるうちに職員さん達の態度がわかってきたわけ。それで、ああ、ここなんだなあって、私が決めたのが始まりなんですよ... あったかいの、なんとなく、雰囲気があったかいの。あったかく感じるの。[情報提供者 No.32 X+2年3月]

この情報提供者は、施設との接触によって、感情レベルの経験が先に起き、それを手がかりにしながら、思考レベルを働かせ、「場所」情報を集め、「選択の理由」としてケアハウスの意味を構築していたものと考えられる。このような、感情レベルの経験は、数名の情報提供者に認められた。

ところで、情報提供者の中には、自分の力が及びそうな、入居者、物理的な場所、機会を「知ること」や「見極めること」を行ったにも関わらず、「場所」の構築に至らない者がいた。その要因の1つとして、関係が構築できそうな条件の探索と、構築を妨げる直接的干渉や間接的干渉の探索との両立に及ばなかった場合がある。例えば、情報提供者が、ある活動を自分の力を発揮できる役割と考え実施していたにも関わらず、他の入居者達はその活動を職員がすべきものと考えて中止するように直接的介入を行ったため、結局「与え合う場所」の構築に至らない場合があった。また、折角自分の役割がとれそうと考えても、他の入居者とのブッキングのために「与え合う場所」が構築されない場合があった。

#### 4. 「受けとめられる場所」の変換—職員から〇〇さんへ

「入居者」や「高齢者」といった曖昧な捉え方から、〇〇さんとして個別的に捉えることによって、「与え合う場所」が構築されていった。そして、類似のことは、ケアハウスの職員にもあてはまる。情報提供者達は、リロケーション後間もなくは、職員を成員とする「受けとめられる場所」を構築していた。「受けとめられる場所」では、ケアハウス職員の保護的な対応によって、安心感や安全感を得ることができていた。さらに、その保護的な対応により、施設の中で「与え合う場所」を構築するための探索を行うことができた。しかしながら、このような関係が、ずっと続くわけではない。日常的な接触によって、職員との関係も変化していくのである。情報提供

者達は、リロケーション後間もない時は、職員のことを述べる際に、  
‘この職員’や‘事務所’と呼んでいた。あるいは、職員がいつもいる物理的な場所（ロケーション）を使って、事務所在1階にあることから‘下の人’や‘食堂の人’等と呼んでいた。さらに、情報提供者達は、職員全てが同じように専門的な技術が高いことや、対応が良いことに触れていた。しかしながら、ケアハウスの入居期間が長くなるにつれて、それまでは職員として1つのまとまりとして語られていたのが、〇〇さんと固有の名前で呼ぶことが多くなっていった。それに伴い、情報提供者達の語りの中に、それぞれの職員の個性や相違が現れていた。例えば、一緒にふざけたり、踊りの相手をしてくれたりする孫のような人、ケアハウス内の窓口的存在で、細かなことまでいろいろ相談にのってくれる人、職員の中では比較的年齢が高く、体調変化時に飛んできてくれる信頼できる人等である。さらに、職員の間でも、年齢層の違いに触れられ、‘若い子’、‘結婚前’、息子と同じ年‘等と語られることがあった。このような職員の個別化は、情報提供者と職員との、日常営まれる具体的な関係によって構築されていた。

今度施設ごとの踊りの披露会があるから、その練習を一緒にやるの。下に〇〇ちゃんって、若い子がいるでしょう。孫みたいなね。あれとやるの。今日はみないけど、休みかな。[情報提供者 No.21 X年8月]

〇〇さんったら、髪ね、こんなとんがった頭できたの。あんたの頭それ何ったら、今の流行だって。いやあ、何さそれって、私ひっぱってやろうと思ったら、そうさせないんだよ... だから、今でも、おはようというよりは、合図。二人で、ポン、ポンってね。どこだって、ポン、ポンだからね。[情報提供者 No.19 X+4年7月]

これらの面接で語られる職員は、「受けとめられる場所」で保護的な対応を期待されている成員というよりも、日常気軽に交流できる遊び相手のような存在であった。さらに、日頃から相談役として身近な存在である職員については、以下のように語られていた。

施設新聞に載せるのに、△△ちゃんに何が好きか聞かれた... お花見には、△△ちゃんに行こう、行こうって勧められていくことにしたの... それからお部屋で転んでしまって。転んだとき、●●さんが来てくれて、病院までついていてくれたの [情報提供者 No.19 X+4年7月]

訪問看護のことは、△△さんに勧められたの... 足りたいの我慢して歩いていたら、△△さんに無理しないで車（シルバーカー）を使いなさいって言われたの。[情報提供者 No.24 X年8月]

これらの面接で語られる職員は、日常生活がうまく運ぶように、何かと気を使ってくれる存在と捉えられていた。そのため、先の遊び相手のような職員とは存在の意味が異なっていたと考えられる。さらに、このような職員の個別化に伴って、これまで「受けとめられる場所」としての意味を有していたケアハウスの意味が変容していたと考えられる。つまり、ケアハウスが、入居者と職員を含めた共同生活単位としての「与え合う場所」へと変容していたと思われる。さらに、この意味の変容によって、職員やケアハウスとの関係にも変化が生じていた。職員が「受けとめられる場所」の成員である時には、情報提供者はケアハウスの方針やルールを尊重していた。それが、「与え合う場所」への変容に伴って、ケアハウスとの向き合い方にも変化が起きていた。例えば、本稿調査では次のような変化がみられた。〈施設がつくる行事〉よりも個人的な活動を優先させる頻度が多くなる、食堂で食事をとらずに、居室で食べたり外食する機会が増える、あるいは時間をずらして食堂へ行く、さらに外出や外泊の増加等の変化が生じていた。

しかし、ケアハウスの意味が、「受けとめられる場所」から「与え合う場所」へと完全に移行したわけではない。情報提供者達の同時期の面接の中では、ケアハウス職員のことを、個別の名称で呼ぶ場合と、「職員」と呼ぶ場合が混在していた。このことから、職員の意味においては、「与え合う場所」の成員としての職員と、施設サービスやその管理者としての職員という二面性を備えていたと考えられる。例えば、体調不良時の居室への食事運び、介護が必要になってきた入居者への対応、入居者間のトラブルの対応について語る場合には、個人名ではなく、「職員」や「事務所」との言葉が用いられていた。つまり、個人へのお願いが躊躇されるような援助では、「職員」と一般化して語られる傾向にあった。ここでは、「受けとめられる場所」の成員として、期待される役割が強調されていたものと考えられる。これにより、個人にお願いをすることが躊躇される場合でも、施設サービスとしての職員には、気軽に援助を求めることが可能になっていた。さらに、「場所」の意味においても、「受けとめられる場所」と「与え合う場所」の両方を併せ持たせることで、必要時にその意味を変換したり、将来の保障を兼ね備えることを可能にしていた。

## 5. ケアハウス内における「馴染みの場所」の構築

リロケーションをした後、しばらくすると〈活動パートナー〉が構築され始めた。この〈活動パートナー〉は、話題や趣味、活動のペースに共通性が認められる成員間で構築される関係である。〈活動パートナー〉は、「与え合う場所」における日常的な接触を通して、お互いの共通点を発見し、構築されるものと考えられた。この関係は、一度構築されたとしても、成員がケアハウスから退去してしまうと、関係が途絶えてしまうものであった。本稿調査では、入居者の退居によって〈活動パートナー〉を喪失したり、入れ替わる様子が幾度となく見受けられた。しかしながら、〈活動パートナー〉は、同質性の高い成員間で構築されているため、この関係が継続した場合には「馴染みの場所」へと発展する可能性がある。本稿調査では、Aケアハウスが開設した当初から入居していた数名が、〈活動パートナー〉を構築し、その後「馴染みの場所」へと移行し始めている様子がうかがわれた。彼らの共通点は、旅行を趣味とすること、決断が早くすぐに行動に移せること、好奇心が高いこと等であった。彼らは、思い立った時に、一緒に旅行や外出に出かける〈活動パートナー〉であった。同じ活動と一緒に繰り返すうちに、共通の話題や活動パターンが生み出されていた。

なんとなく、ぱっと合うからね。みんなで、お正月何もしなかったねって。いやそうだねったら、そしたらみんなでお正月しないかって。それですぐ電話かけてみるったら、空いてて、明日行くって。友達にも一緒に行かないかしたら、いくよって。それで、4人か5人で行ったの。すぐまとまって行くんだよ。みんなすぐ動ける人ね... 1人だったら、やっぱり行けないものね。何人かいればね、お話したり、おいしいもの食べながら行って。ここ入って、お陰で楽しい思いしたわと思っている。

[情報提供者 No.9 X+4年7月]

彼女達の関係は施設が開設した頃から始まり、この語りが情報提供者から聞かれたのは、入居してから7年以上が経過した時点であった。彼女達は旅行を共通の楽しみとしており、行きたいと思ったときに、即決し活動に移せる関係が構築されていた。また、〈活動パートナー〉として、一緒に旅行やその時のおしゃべりを楽しむメンバーがいつも決まっていた。メンバーが決まるまでの過程では、活動ペースが異なる人が成員から外れ、その後成員が固定化するという経過をたどっていた。さらに、成員間の交流は、成員の居室内や

電話を使って短時間に行われ、また即決によって活動が選択されていた。そのため、これら成員の交流の様子は、他の入居者からの視線が届かない状況の中で実施されていた。これにより、〈外界からの遮断〉がなされ、他の入居者からの直接的干渉や間接的干渉を回避しながら、彼らの関係が継続できていたと思われる。そこで、彼らの関係においては、本稿調査の期間では、〈気の置けない関係〉や〈「場所」の定例化〉には至っていなかったが、成員が固定化しており、「馴染みの場所」への移行期にあったものと考えられる。

以上のように、ケアハウスへの入居期間が長くなるにつれて、ケアハウスの中にも、同質性が高い者が集まる「場所」を構築する情報提供者がでてきた。本稿調査では、半数以上の情報提供者が、リロケーション以前に構築した「馴染みの場所」を入居後も継続して施設外に構築していた。しかし、その「馴染みの場所」も、安定して構築されているわけではなかった。入院やリロケーションする成員の存在、情報提供者のアクセシビリティの低下、そして家族を成員とする場合にはその家族の訪問頻度の減少によって、これまで構築してきた「馴染みの場所」の継続が徐々に難しい状況が生じていた。このような情報提供者は、外出頻度が減少し、それとは反対に施設内で過ごす時間やケアハウスの入居者と接触する時間が増加していた。同じような状況は、他の成員にも生じており、これまで接触することの少なかった者同士が出会い、お互いの同質性を‘知る’機会が生じていた。このことがまた、施設内における「馴染みの場所」の構築を促していたものと考えられる。

## 6. 施設からの脱出—〈「場所」の漂流〉

情報提供者達は、日常的な接触を通して、自分との共通点がある入居者や、ニーズが合致する入居者を‘知ること’や‘見極めること’を行い、「与え合う場所」と〈活動パートナー〉を構築していた。しかしながら、全ての情報提供者が、日常的な接触を通して、このような「場所」の構築に至るわけではなかった。その理由として、本稿調査では3つの点が考えられた。まず1つは、先に説明したように、関係が構築できそうな入居者の‘見極め’と、構築を妨げる干渉の‘見極め’の両立がなされなかった場合である。この場合には、結局干渉をうまく交わすことができずに、形式的な関係の構築に留まっていたり、中には他の入居者との接触を出来る限り避ける者がいた。2つ目の理由は、1人で行動することが多く、他者との接触や交流が少ない場合である。これには、リロケーションをする前から一人で行動することが多く他者との交流が少なかった者や、難聴等によって他者との交流が難しい者が含まれた。そして、最後

の理由には、ケアハウスの中に、もともと自分との同質性が高い入居者や、ニーズが合致する入居者がいないか、あるいは非常に少ないために、施設内ではこのような人々と巡り合えない場合である。例えば、このケアハウスには男性入居者や70歳前後の高齢者の割合が非常に少なかった。そのため、男性入居者や70歳前後の人で、先の2つの理由が重なる人は、「場所」の構築に至る入居者と巡り合う機会が少なかった。

実際に、本稿調査の面接では、6名全ての男性情報提供者が、男性入居者が少ないことを指摘していた。

いやあ、みんなどんな生活しているか知りたいけど、体あましてしょうがないのさ。男の人は全部で、5人くらいしかいないのさ。それで、なんかこう、ちょっと見ても、みんな年配の人で、私が一番若いみたいなんだよね。もう体あましちゃって、どうしようもないよ。[情報提供者 No.4 X年8月]

男の人は、5人いるけど、そのうちまともな話ができる人が3人。耳が遠くて、話ができないんだ。[情報提供者 No.26 X+4年8月]

共通の趣味感覚の仲間がいないね。趣味の合う男性がいないよ。集まって何かをするってことがないね。[情報提供者 No.13 X+2年]

6名中4名の男性情報提供者は、男性入居者が少ないために、〈活動パートナー〉や自分と同質性の高い入居者を見つけることが難しい点を指摘していた。そして、このような情報提供者は、夫婦で入居する場合は妻との関係が中心となり、また独身の者は部屋で1人だけで過ごす傾向にあった。ただし、男性の情報提供者の中には、男性が少ないことがうまく作用し、「与え合う場所」の構築へとつながる者もいた。

声がかかるんだ。ばあさん方から。40名の中に男性5人しかいない。男性もてるんです。唄歌えって、みんながそれを気持ち良く思ってくれれば、功德の1つだと思ってさ... ケアハウスの入居者が一番褒めてくれるね。僕の唄を聞いて熱烈拍手だから、はりきっちゃうよ。[情報提供者 No.11 X+2年2月]

この情報提供者は、趣味や対人交流方法の点で、他の入居者と共通点があった。そのため、この同質性を土台として、性別が異なる



という異質性がうまく作用し、「場所」の構築に至っていた。さらに、この情報提供者は、共有スペースで過ごす時間が多かったことも、「場所」の構築に至った要因と考えられる。フィールドワーク中には、この情報提供者が〈施設がつくる活動〉に参加している姿や、施設の共有スペースで時間を過ごす姿を見かけたが、日常的な接触を通し、ニーズが合致する入居者に巡り合えたことが、「場所」の構築につながったと思われる。

他方、年齢が比較的若い情報提供者の中には、入居しているケアハウスが「高齢者」の「場所」であることを指摘し、ケアハウス内に「場所」を構築することが難しい者がいた。

ここって、年寄り相手にしてると、やっぱり年寄り相手だってこと。職員でもね、かばうみたいな感じ。優しくしてるつもりなんだろうけど、そうやって喜ぶ人もいるんだけど、私は嫌なんだ...。ほとんどが上の人でしょう。80歳、90歳代の人もいらっしやるし。だから話が合わない。病気の話とかね、ちょっと沈んだ話。そういう話に限られてしまう...。ここでは、あんまり話をしないの。ほとんど外に出かけるっていうか。[情報提供者 No.12 X年8月]

ケアハウス内の入居者間の話題に偏りがあることは、他の情報提供者も指摘していた。人の噂話、体調不良の話、入院やお葬式の話になってしまうことへの不満を漏らす情報提供者が他にもいた。これ以外にも、入居者の年齢層、高齢者向けの活動、高齢者向けの食事によって、ケアハウスが高齢者の「場所」であるとの印象につながっていた。このような指摘を行う情報提供者達は、施設内では〈ためになる、程良い刺激〉や自分の所属先が見つからず、施設外に自分の「場所」を求めて、外出することが多かった。このような場合には、施設外にある趣味の教室に通う者がほとんどであり、そこに参加することによって、〈ためになる、程良い刺激〉を得たり、自分との同質性の高い人を見つけっていた。

習いに行くよね、若い方ばかりいるでしょう。その雰囲気がいいんですよ。なんかすぐお葬式の話にはならないからね。そういう方達、みなさんね、手を動かしながら、夕食のおかずの話をしたり、くぎりがいいの。ごちゃごちゃ言っていないの。もうはじけるようにお話をして、終わったらば一っとさよならして帰っていくのよ。[情報提供者 No.7 X+2年2月]

卓球教室とか。そんなの行って楽しいの。若い人達とね... 合

唱なんかも、高校生くらいから 80 近い人まで。年齢に関係ない。なんていうかボーダレスっていうか、そういうムード。やがては、(自分が)外に出れなくなることもはっきりしているから、明日になったら出れないかもしれないから... 趣味の仲間って年関係ないから。そのことに集中する機会が多いからね。だから、初対面でも、すぐに仲良くなって、話が合うから楽しいっていうか、そして大笑いして、笑い転げて帰ってくるの。  
[情報提供者 No.12 X年 8月]

これらの情報提供者は、趣味を学ぶという挑戦的な活動とともに、趣味教室の参加者の中に話題や活動ペースの同質性を見出し、刺激をうけることを楽しんでいたものと思われる。また、趣味教室の出会いは、同質性の高い者の集まりや楽しみを共有できる集団であることから、今後「馴染みの場所」の構築へと発展する可能性が高いものと考えられた。しかし、情報提供者の中には、施設外に出かける頻度が高いが、施設外の「場所」の構築につながらない者もいた。外出先が、参加者がある程度固定した趣味教室ではなく、喫茶店や公共施設のオープン・スペースに出かけていた場合である。

あんまりお金もかけられないんです。生涯教育センターに行くんですよ。ホールがあるでしょう。上の方へ行って、パン買って、自動販売機があるから、そこでパンを食べたりしてるの。あんまり長くいると警備員が行ったり来たりするの。食べたら駄目なのかなって思ったり。本当はよくないと思うの。お年寄りが集まって、食べたり、お話をしたり。中の人ならいいけど、外からお年寄りが来て。本当は若い人が勉強しているものね。お年寄りが.. 良くないと思うよ... 何をしてもむなしくなることがある。落ち込むこともあるよ。何をしても楽しいと思わないの。/ 駅前の〇〇(オープンカフェ)にも行くよ。そこに、若い人が多いから。エネルギーもらってね。前ほどは行かなくなっただけ。若い人からエネルギーもらって、おいしいコーヒー飲んで。音楽聴いてコーヒー飲みたいけど、1人じゃ入りづらいんだよね。[情報提供者 No.25 X+4年 6月]

彼女が時間を過ごす施設外の「場所」は、程良い刺激を受けることと、施設内の入居者関係から距離を置くことの、2つの意味があると考えられる。彼女は、施設内では入居者達のことを「お年寄り」と呼び、施設外では自分のことを「お年寄り」と呼んでいた。リロケーション以前には趣味活動を行っていたが、若い年齢のメンバーのペースについていけず、その「場所」への参加とその後の関わり

を一切絶っていた。この情報提供者の面接からは、ケアハウスを高齢者の「場所」として違和感を感じ、生涯教育センターを若い人の「場所」として気兼ねを感じている様子が認められた。この様子から、どの年齢層にも所属できない、不安定な状況が理解された。安定した「場所」を構築できない彼女の状況は、刹那的に「場所」を変える（「場所」の漂流）として理解された。

以上、第3章では、ケアハウス入居者の「場所」の構築過程として、自分らしい生活を送るうえでの鍵となる3つの「場所」、すなわち「馴染みの場所」、「受けとめられる場所」、「与え合う場所」の特徴と構築条件、そして構築と喪失に関わる過程を説明した。3つの「場所」は、物理的な場所と、そこを共有する成員、そしてそこで営まれる活動が互いに織り合うことによって構築されていた。本稿調査の情報提供者の「場所」の構築パターンをみると、表10に示す通りとなった。なお、「場所」の構築パターンの人数の表記は、入居中構築パターンが変化するため、ここでは、それぞれの最終面接時の構築状況から算出している。ただし、それぞれ最終面接時点での入居期間が異なるため、ここで示した数値は分布を知る際の参考程度の扱いに留めている。

表 10 3つの「場所」の構築パターン

「場所」の構築パターン	人数
「受けとめられる場所」のみ	3名
「受けとめられる場所」+「与え合う場所」	9名
「受けとめられる場所」+「与え合う場所」+「馴染みの場所」	21名
「受けとめられる場所」+「与え合う場所」+「場所」の漂流	1名
不明	1名

\*「場所」の漂流とは、安定した「場所」の構築に至らない不安定な状況である

「場所」の構築パターンでは、4パターンが認められた。これらのパターンの構築には、構築条件の相違が影響しているが、本稿調査では、「場所」の構築に関わる要因との日常的な接触を通じた、探索が重要であることが認められた。探索を繰り返すことによって、条件間の親和性を見出し、「場所」の意味を付与できるか否かが、「場所」の構築を決定づけるものと考えられた。さらに、「場所」の構築にあたっては、「場所」の構築に直接関わる条件の探索だけではなく、構築を妨げる干渉の見極めと対応を同時に行う必要があることが認められた。これは、ケアハウスという「場所」が、他の3つの「場所」の構築に重大な影響を与えていたことに起因する。そのため、3つの「場所」の構築には、ケアハウスという「場所」の成員である入居者と安定した関係を構築することが、3つの「場所」の構築にも影響を与えるものと考えられる。

この他、「場所」の構築と喪失の過程の分析では、「場所」の構築条件だけではなく、3つの「場所」そのものも互いに影響を及ぼし合っていることが見出された。例えば、施設外の「馴染みの場所」の構築が難しくなったことで、施設内で新たな「与え合う関係」や〈活動パートナー〉が構築されるきっかけを得た者がいた。また、本稿調査では、情報提供者達は、「受けとめられる場所」で職員からの保護的な対応をうけ、安心感や安全感を得たり、その保障を得ていた。そして、その安心や安全の保障が、自分自身が能動的に関われる「場所」や自分のコントロールが及び「場所」の構築へのスプリングボードになっている情報提供者がいた。

## 第4節 3つの「場所」を構築した典型事例の紹介

### 1. 事例の選択理由とデータ収集・分析方法

第2章第2節でも述べたが、今回研究方法として選択したグラウンデッド・セオリー・アプローチは、生成した「概念」によって現象の鳥瞰図を描くことに優れた質的研究法である。しかしその一方で、分析過程における切片化や、結果を概念やその関係によって示すため、質的データが持つ文脈的豊かさをなくしてしまう危険性がある。そこで、本稿では、文脈性の乏しさを補うため、今回得られた結果の典型的な事例の報告を加えることにした。ここで、典型事例として紹介するのは、荒川さん（仮名）である。情報提供者の中から荒川さんを事例として紹介する理由は、本稿第3章第2節で明らかにした3つの「場所」を構築している典型的な事例であったことによる。荒川さんは入居前より多くの「場所」を構築していた方であったが、2年以上にわたる継続的な面接を通し、彼女の「受けとめる場所」、「与え合う場所」、「馴染みの場所」の構築過程を追うことができた。さらに、多くの入居者が自分自身のことや本音を語ることに慎重になっているなか、荒川さんは自己の経験を率直に語ってくれた。その結果、荒川さんの語りには、新しく構築されていく「場所」や徐々に縮小していく「場所」、変化していく「場所」の様子が詳細に含まれていた。

ここで、方法について若干確認をしておきたい。データ収集は、他の情報提供者と同様に半構造化面接（1回あたり90分～120分）を本人居室にて行った。質問項目は、他の情報提供者と同様に「場所」の構築に関する項目を尋ねた他に、入居以前の生活状況も質問に加えた。データ分析は、能智（2003）の質的分析方法を参考にし、オープン・コーディングと語りデータを再構成する方法を組み合わせた。具体的には、コーディング過程で頻繁に現われる概念のうち、「場所」の意味とその構築に関連する概念を抽出した。その後、抽出した概念から再びその語りデータに戻り、「場所」の意味と空間的・時間的文脈性に従ってデータを再構成した。

まず、結果を示す前に、今回得られたデータの文脈を構成するものと考えられる（能智，2003）、荒川さん（仮名）の生活状況の概略と筆者との関わりについて説明する。

### 2. 荒川さんの紹介と著者との関係

#### 1) 荒川トメ子さん（仮名）の紹介

荒川さんは、80歳代の女性で、荒川さんがAケアハウスに入居し

たのは開設から4年半が経過した時点であった。荒川さんには4人の息子がおり、50歳代からAケアハウスと同じ区域内で長男夫婦と同居していた。同居してから間もなく、自宅でミニ幼稚園を開き10年以上近所の子供達を預かっていた。60歳代後半からはミニ幼稚園を辞め、近所の小学校で教室にお花を飾るボランティアを10年間行っていた。70歳代後半に変形性膝関節症で入院を経験してからは、ボランティアを辞め、手工芸を楽しむにしていた。80歳になってから、夫、長男、次男を亡くしており、その後は長男の嫁と二世帯住居で暮らしていた。

荒川さんは、Aケアハウスへ入居した後も様々な活動の場所を持ち、外出や外泊も多い方である。変形性膝関節症のため長距離の移動にはシルバーカーを使っていたが、痛みやふらつきを訴えることはなく、入居前と変わらない対人交流や活動範囲を保っていた。

## 2) 著者と荒川さんの関係

荒川さんとの最初の面接は、彼女が入居してから5ヶ月たった時点で行われた。出会いのきっかけは、理論的サンプリングにより入居後間ない情報提供者を探していたところ、職員からの紹介を受けたことであった。荒川さんは、面接を依頼するといつも快く引き受けてくれ、面接回数はX+2年3月からX+4年7月の期間に合計9回に及んだ。荒川さんは、著者が居室を訪れるといつも満面の笑顔で迎え、慣れた様子で居室中央に置かれた食卓テーブルの椅子に腰掛けるよう勧めてくれた。面接を行う場合は、面接当日に1階の事務所から荒川さんに電話で都合を確認してもらった。それ以外にも、多目的室や廊下で出会った際に荒川さんの方から「寄っていくかい？」と声を掛けてもらい、面接が始まることもあった。面接にあたっては、著者が予め聞きたいことを用意していくが、居室を訪れるとまず荒川さんの方から最近あった出来事や日頃考えていること等が語られることが多かった。

荒川さんには、本稿調査は大学院の卒業論文を書くための調査であることを説明し情報を提供してもらった。荒川さんは、彼女よりも随分と若い学生からの質問に協力的に答えてくれ、著者が聞き逃しのないよう配慮してくれることも多かった。第7回の面接では、これまでの面接の過程から、特に事例として報告したい旨を話し生活史について詳細に尋ねた。後日、荒川さんの語りを元に作成した生活史表の確認を依頼すると、1つ1つ丁寧に見直し訂正や補足を加えてくれた。

## 3. 荒川さんの「場所」の構築過程

荒川さんの語りの特徴をみると、Aケアハウスの入居に至った経緯が繰り返し、しかも多くの時間をかけて語られた。そこで、まず、Aケアハウスの入居の経緯について示した後、3つの「場所」の構築要因の1つのである〈関係性〉に着目し、時間経過による変化を追うこととする。

1) Aケアハウスへの入居を決めるまで

① 自分も家族も変わらないままでいられる「場所」を求めて

荒川さんの語りによると、入居のきっかけは〈ガスの心配〉と〈長男の死〉であった。荒川さんは、長男が亡くなった後も長男の嫁と一緒に二所帯住居で暮らしていた。しかし、ガスの消し忘れのため鍋を真っ黒に焦がすほどの〈鍋焦がし〉を3回繰り返したそうである。そのため、いつかガスを爆発させたり、嫁のかまどを焼いてしまうのではないかと〈ガスの心配〉をするようになり、このことが入居を決心させたと言う。さらに、〈鍋焦がし〉という出来事は、自分自身がこれまでの状態と違い〈自分が危うくなった〉ことを自覚するきっかけともなった。荒川さんは、〈鍋焦がし〉以降自分に自信がもてなくなると語った。このような入居経緯について、荒川さんは、以下のように述べている。

...二世帯建てたから、上も下も同じペースであるわけよ。それがね、長男死んだら、嫁さん常にお勤めしてるでしょう、そうすると私が、鍋を焦がしたの。みんな捨てちゃったわけなのよ、そしたら自分で反省したわけ。鍋焦がしているうちはいいけど、もしガス消すの忘れて、万が一爆発した場合ね、自分だけ、死んでも焼けてもいいわけだ。ところが、嫁さんのかまどもみんな焼いてしまうことになるわけよ。そこで、私考えたわけ。これじゃ駄目だってね。

このように〈ガスの心配〉から入居を決心したが、入居の意志を家族に告げると、息子達は入居には大反対であり、自分達がいるのにどうしてそんな考えを持つのかと「すごくしかられた」とのことであった。また、同居する長男嫁は一緒に同居し続けることを勧めてくれたそうである。しかし、荒川さんの入居への意志は変わらなかった。その理由は、やはり〈ガスの心配〉だったとのことである。嫁達は皆仕事をもっており、荒川さんは誰と同居をしても日中一人になり、そのため〈ガスの心配〉が解消されることはなかったと言う。荒川さんは、〈ガスの心配〉のための入居であることを息子達や長男嫁に強調して説明し、結果的に数ヶ月かかって息子達の承諾を得ることができたそうである。その様子は、以下のように語られた。



... 随分かかったの。(息子は)俺の家もあるし、他の家もあるし好きな所行けばいいって言うのさ。どこ行ったってガスついてるでしょう。私ガス心配で考えてるんだから。何処行っただって、みんな定職あるもの、うちの嫁さん達。日中いなかったり、忙しかったり、そしたら暇なのは私一人なんだから。うちにいても何か煮て食べましょうかと思ってもガス使わなきゃならないでしょう。で、ガス消すようにすればいいけど、忘れるんだわ..

このように、入居理由の説明には〈ガスの心配〉が強調されていたが、荒川さんの心を入居へと動かしたのは〈ガスの心配〉だけではなかった。〈鍋焦がし〉をするような自己能力の低下によって、これまでの家族関係が崩れてしまうことを危惧している様子が語られた。具体的には、他の息子と同居しても必ずしも嫁や孫とうまくいくとは限らないことや、それを見た息子が嫌な思いをすること、さらに他の息子と同居することによって長男嫁を傷つけてしまうことが危惧されていた。一方、荒川さんは、嫁との関係について「みんな自分(荒川さん)についてきてくれる」、「私は幸せにくるまれている」と語っていた。そして、入居後も嫁や孫がケアハウスへ訪問に来てくれるので、「いいとこ選んだなって、喜んでいいる」と述べていた。これ以外にも、長男嫁が仕事先でもガスのことや荒川さんの体調といった留守宅のことを心配して、精神的な負担をかけることを気にかけていた。家族へ負担をかけないために、またこれまでの関係を保つために、〈関わりのない場所〉としてケアハウスを選んだと以下のように語った。

... 長男の嫁は勤めているから、私一人になるの。そうすると、嫁さんはうちで何してるか心配することになるでしょう。それで、息子の所へ行けばこの嫁が相当のショックを受けることも考えないといけない。だから、息子が同居を勧めてくれても、「はい」って行くわけにはいかないよ。それで、関わりのない場所って、ここ(Aケアハウス)が浮かんだの... 自宅は、やっぱり本家ですよ。何かあると連れていかれるわけだから。ただ、負担をかけないために、別荘にきてるのよ。

ところで、息子達が入居に反対だった理由について、荒川さんは、息子達がケアハウスを‘姨捨山’のように捉えていたためと語っていた。息子達は入居に反対していたが、入居すると言い続けている荒川さんに対して、「本人の悔いのないようにさせてやれ」、「お金が

なくなったら俺達（息子達）がみてやればいい」と、しぶしぶ承諾するに至ったそうである。入居後は、荒川さんが以前と変わらない行動を取り気楽に暮らしている様子を息子達が見て、息子達が「本当に安心している」と述べていた。

## ②初めてみる〈年寄りの世界〉と、

### 変わらない自分でいれる〈職員の肌触りと言葉の力〉

入居先の選択にあたって荒川さんは、自宅近くの複数の施設を見学したり、実際に施設に併設する通所介護を利用したりしながら自分が納得できる施設を選んでいった。さらに、これまでの交流関係が継続できるかどうかを直接施設長に確認していた。荒川さんにとって通所介護は、これまで暮らしていた世界とは異なり、失禁する人や認知症の人達が若い職員達からお世話されている〈年寄りの世界〉であった。荒川さんは、失禁した人や、お風呂に入りたがらない人達に対する職員の対応を詳しく語り、さらに職員達の対応の仕方に感動し、また学ぶことも多いと思ったそうである。

そして、入居の決め手となったのは、併設する通所介護を利用しながら見て感じた職員の態度や暖かい雰囲気であった。荒川さんによると、通い始めてすぐにAケアハウスに併設する通所介護が気に入ったそうである。最初はその理由がわからなかったが、次第に職員の態度であることが理解されたとのことであった。彼女によると、Aケアハウスの職員は、気持ち様が穏やかで、言葉かけが暖かく、誰に対しても優しい返事をする人達であると言う。この点は、他の施設の職員と対比する形で語られた。他の施設では、利用者が棘のある言葉を投げかけられたり、頼み事で呼び止めても応えてもらえず、沈んでいる姿に遭遇したと言う。

荒川さんは、Aケアハウスの職員の接し方について、〈言葉の力〉が暖かい雰囲気を醸し出している様子について、次のように説明してくれた。

...ちょっとした一言なんです。ちょっと待ってて(言い放つ)、って言うのと、ちょっと待ってね(語尾を下げる)って言う言葉とでは違うでしょう。そこなんです、年寄りに接するって言うことは、何も撫で回すんでなくてね。言葉の力ね。尻上がり、尻下がりがあるから、それが一番大事だと思う、この世界では...年を取るに従って、気弱になってくると思うの、年寄りって。だけど、1つ触られることと、ちょっと触るだけで、ちょっと待ってね、って言う言葉と、ちょっと待っててって言う言葉と違うと思うのね。そこが、年寄りの世界には難しい一言だと思うの。見ると、私が胸にちょっと刺さるわけよ。見

てるだけでね。私がされたんでないんだよ。そういう扱いをみてきたのと、ここの扱い方の眺めと雰囲気が違うわけ。

さらに、利用している高齢者に気を使い、(利用者)に恥をかかせず、規則に縛ることがないため、荒川さんも職員に甘えることができたと述べていた。荒川さんは若い職員達がここまでやることに感激し、さらに〈相当な教育を受けた人〉と感じていたと言う。

さらに、荒川さんは通所介護の職員とケアハウスの職員の両方の態度に同じような肌触りを感じたと述べていた。これに加えて、通所介護に通ううちにケアハウス職員とも顔見知りとなり、ケアハウスへの入居にも気楽な気持ちで飛び込めたとのことであった。そのことを次のように語った。

... ケアハウスと通所の事務所と同じところにあるんです。そしたら、通所の事務所の人はみんな私のことわかったの。「トメさん、トメさん」って言うから、事務所の人わかって、そして今度ケアハウスの事務所の人も「トメさん、トメさん」って顔覚えちゃって。行き交って「こんにちわ」って言うからね。みんなもうわかっちゃったのさ。それで親しく話ができるようになって、それでケアハウスの事務所の人も話易いから、じゃあ決めたって感じ。

さらに、顔馴染みや話し易さにこだわった理由について以下のよう

に語っている。

... やっぱ人間対人間が一番難しいわけよ。いろいろ聞くと、私って遠慮なくパツと言葉に出しちゃうからね、人を傷つけたら大変と自分で思うの。昔からの友達同士なら、みんな気心知れているから「本当にあんたは昔と少しも変わらないね」って言われるけど、知らない人は大変だと思うわ。で、そういうところから、ここなら顔馴染みだし、職員さん全部顔馴染みになったからね、それでここって選んだの。

## 2) 自分に合わせた生活の土台作り(入居後半年～1年の面接から)

荒川さんは、Aケアハウスへの入居について、自分に合わせた生活ができるために「ここに来て正解」だったと評価していた。他方、もし他のケアハウスに入居していたら、周囲に合わせた生活を送ることになり、気遣いすぎて自分を孤独にできてしまっていたらと話していた。では、彼女が言う自分に合わせた生活とは、どのような生活であったのか。入居後の時間変化を追いながら記述する。

### ① 私だけのお城住まい，だけど寂しくないよ

荒川さんに入居後の生活を尋ねると，入居後も寂しい思いをすることは無いという。その理由の1つとして，自分の居室は，自宅にある自分の部屋がそのまま移動してきたようなもので，引っ越しした感じがしないためである。彼女の居室には，自分が身近に使っていたものや愛していた物が全部あると言う。例えば，本を入れるためのサイドボード，植木，家族の写真，そしてこれまで自分で作ってきた手芸作品がたくさんある。さらに，これらの配置もほとんど同じだそうである。窓からの風景さえも似ているが，唯一違うと言えば朝日が入ってくる方向だけだと言う。この居室では，読書や手芸，寂しいだろうと息子がセットしてくれたテレビゲームを行っていた。特に，手芸は荒川さんがとても楽しみにしていることであるが，昼間は友人が訪問にくるので，夜に行っているとのことであった。ところで，荒川さんにとって，ケアハウスや居室がどのような意味をもっているかを質問すると以下のように語ってくれた。

... なんていうかお城，自分のお城なんです。私はお城住まい，自分のお城に，みんなのお城じゃないんだ。私だけのお城。私の部屋はお城なんです。だから，別荘っていうことになる。みんなにすれば別荘住まいっていうことになる。1つの別荘があって，その中に住まいしてるって感じでね。私にしてみたら，ここは自分のお城，本家は本家。

荒川さんの語りから入居後の生活の変化を追っていくと，入居間もない時期は施設の行事に積極的に参加している様子について語られていた。例えば，文化祭に出品するための紙細工を作成していること，行事のために他の入居者達と一緒に毎日踊りの稽古をしていること，毎朝礼拝に出て賛美歌を歌っていること，茶話会に参加していることについて語られた。この中でも，賛美歌は，これまで歌った経験がなく，毎朝の礼拝は稽古のようなもので，歌えるように挑戦しているとのことであった。この他，施設の盆踊りの時には，職員が通所介護の利用者の付き添いができるようにと，得意とする太鼓を叩かしてもらったと言う。これ以外にも，多目的室で，他の入居者とカラオケを楽しんでいると説明してくれた。

ところで，荒川さんの特徴として，外出や外泊頻度が多い点が指摘できる。彼女にはたくさんの友人がいること，いろいろな人達が施設を訪れたり迎えに来てくれること，そしてそのような友人達のことを「財産」と捉えていることについて語られた。荒川さんは，入居後の友人関係の変化について，「お友達が変わらない」と述べて

いた。しかし変化したこともあり、「お友達がどんどんきていたのが、私がどんどん出て行くんです」との変化を指摘していた。入居前には、友人との交流が変わっては大変と思ひ、ケアハウスの規則について施設長に直接質問をしてそうである。そして、自由に外出・外泊して良いことや友人がケアハウスに宿泊して良いことも確認していた。実際に、宿泊していった友人もいるようである。しかし、部屋の大きさが自宅に比べ狭いため、自分から出ていくことに変えたと説明していた。また、ケアハウスへ入居した後も自由に外出しているものの、気を使っている様子にも触れていた。「暗くならないうちに帰る」ようにしており、遅くなる時は予め職員に帰宅時間を告げ「門限」の9時までにはケアハウスへ戻るようにしていると語っていた。

## ②お友達は財産、人を集めてお友達に囲まれている

荒川さんの語りの大きな特徴は、外出・外泊先が多いということと、定期的に参加する3つの会合があることであった。これらの会合は、ケアハウスに入居する前から関わっており、このうち2つの会合は40年以上参加し続けていると言う。以下に、それぞれの会合を説明する。

「ついたちの会」(仮名)は、荒川さんが40歳代の時に幼少時代に同じ町で暮らしていた同窓生と再会し、他にも知っている幼友達に声をかけてクラス会を行ったことが始まりだったそうである。発足当時は、声をかけ20名の幼友達が集まり、毎月「一日」に定期的集まっていた。しかし、その後は引っ越し等のメンバーが減り、本稿調査を行った時点でのメンバーは4人であった。「ついたちの会」は、いつも同じ寿司屋で行われ、そこでは食べながら「小さい時の話」や「年寄りの話」を楽しんでいるとのことである。荒川さんの言う「年寄りの話」とは、家庭の話や家族関係についての話で、時には不平不満もでて、荒川さんは鬱憤晴らしみたいな会と言う。荒川さんは、「ついたちの会」では不平不満の聞き役になったり、アドバイスをしているとのことであった。「ついたちの会」について、以下のように語った。

〇〇鮓に行って、食べて飲んで、食べて、3時間くらいはいるね。そして、喫茶店に行って1時間くらいおしゃべりをするの。4人でおしゃべりするのが楽しみなの。年寄りの話があるでしょう。

「11人の会」(仮名)も、「ついたちの会」のように、40年以上参加し続けている会合とのことである。もともとは、荒川さんの夫

の友人達の集まりから、奥さんを伴った同窓会に発展していた。発足当時は、年に一度 22 名で集まり、温泉に泊まりに行っていたそうである。その後、メンバーが亡くなったり入院して、本稿調査を行った時点では 2 名だけになった。そして、「寿命がいつまで続くかわからない」ので、また「女性だけになった」ので月に 1 回の頻度で近くの温泉に行き、ゆっくりしてくるとのことであった。この会合について、以下のように語っていた。

...「11 人の会」は温泉に行っていたんですよ。だけど、段々と男の人がいなくなって、女だけが残ってるの。だから、今度近くの〇〇薬湯だけで集まって、ゆっくりできるからね。泊まったり、自由にしてるの。

3 つ目の会合先である「リンドウの会」(仮名)は、他の 2 つの会合に比べて新しく、発足して 3 年の会である。また、メンバーは、町内に住む高齢者 20 名である。「リンドウの会」では、月に 1 回の頻度で近郊にある日帰り温泉に行っている。「リンドウの会」のきっかけは、荒川さんが同じ町内に住むある高齢者と出会い、「どこかで遊んで歩きたいね」という話になり、知り合いに声を掛けたのが始まりであった。荒川さんによるとメンバーを 20 名にしているのは、日帰り温泉の無料送迎バスを利用するためだそうである。また、「リンドウの会」のメンバーは、だいたい同じメンバーが集まっており、互いにすっかり顔馴染みになり、団結心が強いと述べている。そのため、誰かが欠けると寂しいと感じ、来なかったメンバーには次回に来てくれるようにお互いに誘い合っているとのことであった。また、メンバー以外にも送迎バスの運転手とも馴染みとなり、送迎の際にはお願いをすると名所に寄ってくれるそうである。

...「リンドウの会」は、1 ヶ月に 1 回、20 人の年寄りが集まるの。今度は〇〇温泉行くとか、△△のお風呂に行くとか、いろいろ変わっていくわけ。そして、御飯が出るの。そういう旅行、いえ日帰りの遊びをして帰ってくるの。

荒川さんには、これらの 3 つの会合以外にも、旅行仲間がいたり、友人がいて外出する機会が多いとのことであった。しかし、「ついたちの会」、「11 人の会」、「リンドウの会」は毎月定期的に行われており、荒川さんの生活の特徴付ける重要な会合であった。荒川さんは、これら 3 つの会合を「楽しい場所」と述べていた。また、これらの会合の発足には、共通点も認められた。荒川さんは、会合の発足や名付け親として関わっており、主要なメンバーであった。さらに、

これら会合を通した友人達との関係について、以下のように説明していた。

... 昔からの友達同士だから、腹の中までわかるの。町の中で会って、食事をしながら夕方までおしゃべりをするのが、一番の生き甲斐だと思っている。会って、おしゃべりして、笑っているのがね。

「11人の会」や「リンドウの会」は、ケアハウスや自宅から比較的近い日帰り温泉で行われている。そのため、自宅と同じ町内に住む人と偶然会う機会もあるとのことであった。温泉に行くと、かつて町内で呼ばれていたように愛称で呼ばれることがあり、町内の人と再会することがあるとのことであった。

### ③私を必要としてくれる人、他人同士の共同生活

荒川さんの語りでは、通所介護の利用者とケアハウスの入居者が対照的に特徴付けられていた。荒川さんは通所介護の利用者を総称する際には「年寄り」という言葉を使い、さらに具体的な状態については気が弱くなっていることや身体に障害があること、一人では入浴や着替えが難しいことに触れていた。また、荒川さんは通所介護の職員や利用者とは顔馴染みになっており、1階に降りて行くと荒川さんの姿をみつけた通所介護の人々が手招きをして「おいでおいで」をして誘ってくれるとのことであった。また、通所介護に通っている人々には、一人では手芸を行うことができない人も多く、荒川さんが作った作品を見て「いいね」、「作って」とお願いをされるそうである。そこで、荒川さんが楽しみで作った紙細工を欲しい人にプレゼントしているとのことであった。

一通り紙細工をプレゼントした後は、紙細工作りを「卒業」し、その後は簡易マフラーを作ってあげているとのことであった。紙細工の時は、材料が広告紙で費用がかからなかったが、簡易マフラーは好きな色の毛糸をもってきてもらっていた。TVを見ながら一晩で1本作ることができるそうである。通所介護には、片手が利かなかったり、家庭でお風呂に入れない人が来ているため、作ってあげると喜んでくれるそうである。その顔を見ると、「またしてあげよう」という気持ちになるとのことであった。

さらに、通所介護での交流をきっかけにして、通所介護と類似する関係が併設する特別養護老人ホームにも広がっていた。通所介護の友人の中には特養へと移った人が5名おり、ケアハウスへ移ってからは「折角近くなったので」散歩をかねて会いに行っていた。週に3日ほど通っているうちに、特養の入所者や職員と顔なじみとな

り、どこに行っても「とめさん、とめさん」とみんなから声がかかるそうである。特養の人々は、言葉をかけたりちょっとした差し入れをするととても感激し喜んでくれるそうである。また、特養の人の中には、荒川さんが来ることを楽しみに待っている人もおり、行くと喜んで手を挙げてくれるそうである。相手は十分に話すことができないが、手を握り言葉をかけてあげると自分自身も愛情が深まる感じがすると言う。そして、「また行ってみてやろうかな」という気持ちや、「顔見に行かないと悪いような気になる」そうである。荒川さんは、会いに行ったり言葉をかけるだけではなく、特養の入居者にも簡易マフラーをプレゼントしていた。

簡易マフラーは、もともと特養入居者へのクリスマスプレゼントとして思い付いたものであった。荒川さんが、簡易マフラーを贈ることを思い付いた背景には、職員や家族では気が付かず、自分にできることは何かを考えた結果であった。職員は優しいが、忙しいためちょっとした日常の話し相手が必要と考えた。また、特養の入居者の家族は面会に来る頻度が少ないため、寒さをしのぐためのちょっとしたマフラーが良いと考えた。ただ、欲しいと思う人にあげたいと考え、声かけや挨拶をしながら、「あの人欲しい人かな」と考えたり、「あんたも欲しい」と聞いて「ウンって言ったら作ってやろう」という考えでやっているそうである。荒川さんは、特養の入居者達を、甘える態度をする童心に帰った人や心の綺麗な人と表現し、そのような人達と関わっていることの方がケアハウスよりも楽しいとも言っていた。

…(特養の人達とは)いろいろな話をするよ。わからない話をするから、私もわからないようにしている。わかったって言うてるけど、何もわからないの。そういう人達、純心なの。気持ちは綺麗だから、悪意がなくて。そして、また来るって言うてもわからない。バイバイってこうするとわかる、物言わなくても動作でわかる。そして顔みたら、喜んでるなどか、無視してるなどか、いろいろわかるわけ。

他方、ケアハウス入居者に関する語りは、通所介護の利用者や特養の入所者と対照的に語られていた。ケアハウスの入居者については、希薄な対人交流を示唆する語りが認められた。「通り一遍の話し合い」や「一緒に生活する他人が増えた」という発言があった。さらに、それぞれの人達が趣味を持ちそれぞれの楽しみ方をもっているとも語っていた。荒川さんは、以外な趣味を見つける楽しみがあると話す一方で、ケアハウスには紙細工や簡易マフラーをプレゼントする人はいないことにも触れていた。



…(鶴の紙細工), 置くところないから, 窓, エレベーターの前の窓にも置いたり. 邪魔になってくるの, あまり作っていると. 楽しみで作るんだけど, (ケアハウスには) あげる人もそんなにいないんだわ. 通所介護ならいるの. 自分では作れないから. 「トメさんいいね, 作って」って, それでみんなに一羽づつ作ったの. こっち(ケアハウス)に来たらあんまりそういう人はいないから. 「あげるあげる」とも言えないし, 「頂戴」って言えばあげるけどね. だから, しかたなく, あそこに飾ったの.

さらに, 荒川さん自身と他の入居者とを差異化する発言も特徴的であった. 荒川さんとは入居理由や人付き合いに対する考え方が異なる人が多い点に触れていた. ケアハウスの中には, 孤独を愛し寂しく過ごしている入居者が大勢いることや, 家族関係が嫌になって入居してきた人がいることを指摘し, 自分とは違うと繰り返し語っていた.

入居後半年～1年たった時点での面接では, 希薄ながらも他入居者との関係が落ち着いている様子が語られていたが, 入居直後の事情は違ったそうである. 入居直後には他の入居者から「警戒」や「避けられる」こともあったそうである. 例えば, 入浴すると周りから人がいなくなったり, 「警戒の目でちろっと見られる」ことがあったと言う. これまでの人生で, 人から避けられた経験は全くなかったこともあり, 入居直後は「なんちゅうところだろう」や「こんなはずではなかった」と思ったそうである. その後, 「警戒」や「避けられた」理由について, いろいろな人から話を聞いていきながら荒川さんなりの理由付けに至っていた. その理由は, 同じように警戒されている他の入居者と荒川さんが知り合いであること, 入居者の中には交流したいと思う人と人を避ける人がいること, 荒川さんについて何でも話してしまうタイプの人と誤解されていたためと説明してくれた. このような状況を経て, 入居から1年たった時点の面接では, 40名の入居者全員と話ができるようになり, 部屋に遊びに来たり電話をしたり, お裾分けをするといった親しい人も10名ほどになったと語った. 10名の中には, 部屋に来ると他の入居者から目立つので, 電話を掛けてきたり, こっそり戸を開けて入ってくる人もいるそうである. 他の入居者達は互いの交流関係や噂話を気にしており, 特定の人と親しくしているのが知れると, それが噂の種になるため, 音を立てずにやって来るそうである. 中には, 他の入居者が寝静まった時刻にエレベータを使わずに部屋にくる人もいるそうである.

### 3) ケアハウスが「家」になる〈入居後1年～2年〉

#### ①施設でちょっと顔がきく

入居して1年半から2年たった面接では、通所介護や特養に関する語りでは大きな変化はないが、ケアハウスの中での関係に関する語りが変わってきていた。入居後2年たった時点の面接では、トラブルはなく互いに穏やかに交流していると述べる一方で、言葉遣いが難しい一番悪い年代の集まりであるとも述べていた。さらに、ケアハウス入居者の誤解もようやく解け、2年たってようやく自分のことが理解してもらえたと言う。2年たった時点で特に親しくしている入居者は3名で、同じ時期に入居した西田さん(仮名)と尾形さん(仮名)と最高齢の谷岡さん(仮名)だそうである。

西田さんは、ケアハウスの中でも年齢の若い方であり、荒川さんと同じように外出や外泊の多い人である。西田さんとは、施設行事で一緒に行動することが多いとのことであった。また、谷岡さんは、一人ではお風呂に入ることができないため、西田さんや荒川さんがお風呂に入れてあげているとのことである。荒川さんによると、谷岡さんが他の入居者よりも高齢のために谷岡さんに嫌なことを言ったり、扱いをする入居者がいるそうである。そこで、荒川さんは、誰もが年を取るのだからそのような扱いをするべきではないと考え、ケアハウスにいる時には話し相手になったり、お風呂に一緒に入ったりしているそうである。

また、入居期間が長くなるにつれて、ケアハウス職員との関係も変わっていた。入居後間もない時点では、「事務所(の人)」や「職員さん」と総称し、ケアハウス職員が企画する行事に積極的に参加する様子について語られていた。また、外出時も、門限までには帰ってくることや、外出時には必ず職員に断っていた。しかし、1年半たった時点の面接では、職員を名字で呼ぶことや外泊する頻度が増えたり、外出・外泊時も受付書類に書かずに黙って出掛けることがあると述べられていた。無断で出掛けることについては職員から「事務所で困る」と言われたとのことであるが、「行き先は他の人に言っているので大丈夫」と答えているそうである。また、荒川さんの語りの中には、息子と同じ年の施設長のことがよく出てきた。施設長のことも名字で呼び、いろいろ苦言をしている様子が語られていた。荒川さんが、親しくしている入居者達の要望を施設長に伝えることがあると言う。また、日常会話が施設長への忠告に以下のように発展したこともあったそうである。

...施設長の多田さんなんて私に相当言われたよ。「頭動かなきゃ、しっぽ動かない」って言ったら、通所介護の送迎の時に、

職員と一緒に車椅子を持って走るようになったよ。本当はね、私はうちの息子に例えて言ったの。多田さんが「トメさんの息子部長で偉いんだね」って言うから、「部長なんて全然偉くない。会社のこずかいだ」って言ったの。「私にとってはただの息子、嫁さんにしたらただの親父。会社では上からしぼられるし、下の部下を大事に動かさなきゃならないし、だから頭動かなかつたら、しっぽ動かないんだよ」って言ったら、多田さんビクッとしたんじゃない。それから、車椅子を持って走るようになったよ。自分の息子のこと言ったけど、多田さんに言ったわけじゃないけど、結果的にそうなっちゃって。悪いこと言ったなあって、後で反省したけどね。

これ以外にも荒川さんが職員に忠告する語りが認められたが、そのような自分自身に対して冗談交じりに「私事務所でも1番偉いんだわ」と笑いながら語っていた。施設長との関係は、苦言をするだけではなく、施設長が発足した旅行の会に参加したり、外出行事と一緒に会話を楽しむ様子について語られていた。

入居から2年以上たった時点での面接では、荒川さんの朝帰りが職員の話題になったことや、食堂での食事をやめて自炊にしたことが述べられていた。食堂での食事をやめた理由については、以下のように説明した。

... お金のためじゃなく、自分のためにやめたんだよ。ここ（ケアハウス）の食事は健康管理のための食事。活動のための食事ではない。カロリー計算してくれるが健康を管理するため。活動のためではないのよ。味付けも自分では濃くするけど、その後薄くしたりバランスを取っているよ。朝も野菜ジュースを作って、2回に分けて飲んでいるの。自分にあった食事があるんだよ。朝は10時に、昼は3時に、夜は7時に食べている。昼の3時が一番多いんだ。材料は、嫁達が10日1回ぐらい交代でもって来てくれるよ。

## ② 変わらないまま、少しずつ離れていく「家」

嫁達が冷蔵庫に材料を入れていくのは、入居直後からあったそうである。特に、長男の嫁は、長い間一緒に同居していたこともあり、荒川さんの好きなものをよく理解していて、冷蔵庫に入れて行ってくれるとのことであった。家族関係は、入居前も入居後も変わらず、息子や嫁と時々外出しているとのことであった。外出の時には、店にも寄り、部屋に飾るものやプレゼントの材料を買ってくるそうである。また、長男の嫁は、仕事の休みをぬって、自宅に外泊するよ

う迎えにきてくれていた。しかし、その頻度は徐々に減っていた。入居後間もない面接では月に2回ほど外泊しているとのことであったが、入居から2年以上たった面接では月に1回も行かないとのことであった。長男の嫁は自宅に帰る予定を尋ねてくれるが、荒川さんの予定が入っており行けないことも多いそうである。これと共に、自宅とケアハウスに対する意味付けが荒川さんの中で逆転する様子が認められた。初期の面接では、自宅とケアハウスの意味を尋ねたところ、自宅は〈実家〉であり、ケアハウスは〈別荘〉だと語っていた。家族の負担にならないように〈別荘〉で暮らしているが、何かあった場合には仏壇のある自宅に戻されることから自宅は〈実家〉と説明していた。しかし、1年半たった面接では、友人達がケアハウスに泊まったり食事をしていく様子に触れながら、ケアハウスは〈家〉で自宅は〈別荘〉と語っていた。ただ、家に帰ると自分のベッドにそのまま寝てくるので、家に帰った感じがするとのことであった。

以上、荒川さんの語りから、彼女の3つの「場所」とそれが構築される過程を文脈性とともに述べた。彼女の3つの「場所」とは、ケアハウス職員関係や通所介護を中心に構築されていたのが「受けとめられる場所」であり、家族との関係や代表的な3つの会合が「馴染みの場所」にあたり、併設機関の利用者やケアハウスの高齢の入居者との間で構築されていたのが「馴染みの場所」と考えられる。彼女の語りの特徴は、人との交流であり、古くからの友人関係に留まらず、様々な人々と関係性を構築していけることが、彼女にとって重要であったと考えられる。彼女は、これまでの関係を維持し、また同じような関係を見出していくために、ケアハウスへの入居を決意し、そのための施設選びも十分に行ってきたことが語りから理解された。「場所」の構築過程に関わる文脈性については、第4章の中で、改めて述べたいと思う。

## 第4章 考察と結論

### 一 「場所」の構築過程検討の成果と

#### 高齢期の居住支援への提言

私たちの生活は、複数の舞台を伴いながら成り立っている。本稿では、自分らしい生活を継続する際には、鍵となる「場所」が存在すると仮定し、ケアハウスへリロケーションした高齢者の「場所」の構築過程を検討した。具体的には、鍵となる「場所」の意味、それらの「場所」の構築条件、そして「場所」の構築パターンや時間的変容の検討を行った。これにより、高齢期の個別的でより高次の欲求を支える居住支援への提言を、「場所」の意味の点から行うことを目的としている。

その結果、本稿調査では鍵となる3つの「場所」が見出された。すなわち、「馴染みの場所」、「受けとめられる場所」、「与え合う場所」である。これら3つの「場所」は、主体、物理的な場所、その場所を共有する成員、そして主体と成員達の行為や活動が空間的・時間的文脈性を帯びながら互いに織り合うことにより、次第にそれぞれの意味を獲得していった。

本稿第3章では、3つの「場所」の特徴、構築パターン、時間的変容について報告した。さらに、この報告の中で、情報提供者達が、環境との日常的な接触を通して、「場所」の構築に必要な情報を「知り」、「見極める」ことが重要であることを指摘した。さらに、「場所」の構築にあたっては、このような情報の探索以外にも、構築の妨げとなる干渉作用を見極め、「場所」を構築するための探索活動と干渉作用への対応を同時に行う必要があることを指摘した。

第4章では、調査で得られた知見と先行研究を用いて、「場所」の構築過程に関する成果の確認を行う。さらに、この章の後半では、本稿調査の示唆から、高齢期の個別的でより高次の欲求を支える居住支援への提言を行う。

### 第1節 本稿調査の成果と考察

#### 1. 「場所」の構築過程の特徴

##### 1) 「場所」の類型化と構築条件

(先行研究からみた3つの「場所」の意味)

第3章で述べた3つの「場所」の意味と時間的変容に関わる条件の報告内容をもとに、本稿調査で見出された「場所」の類型化とその移行に関わる条件を図8に示した。

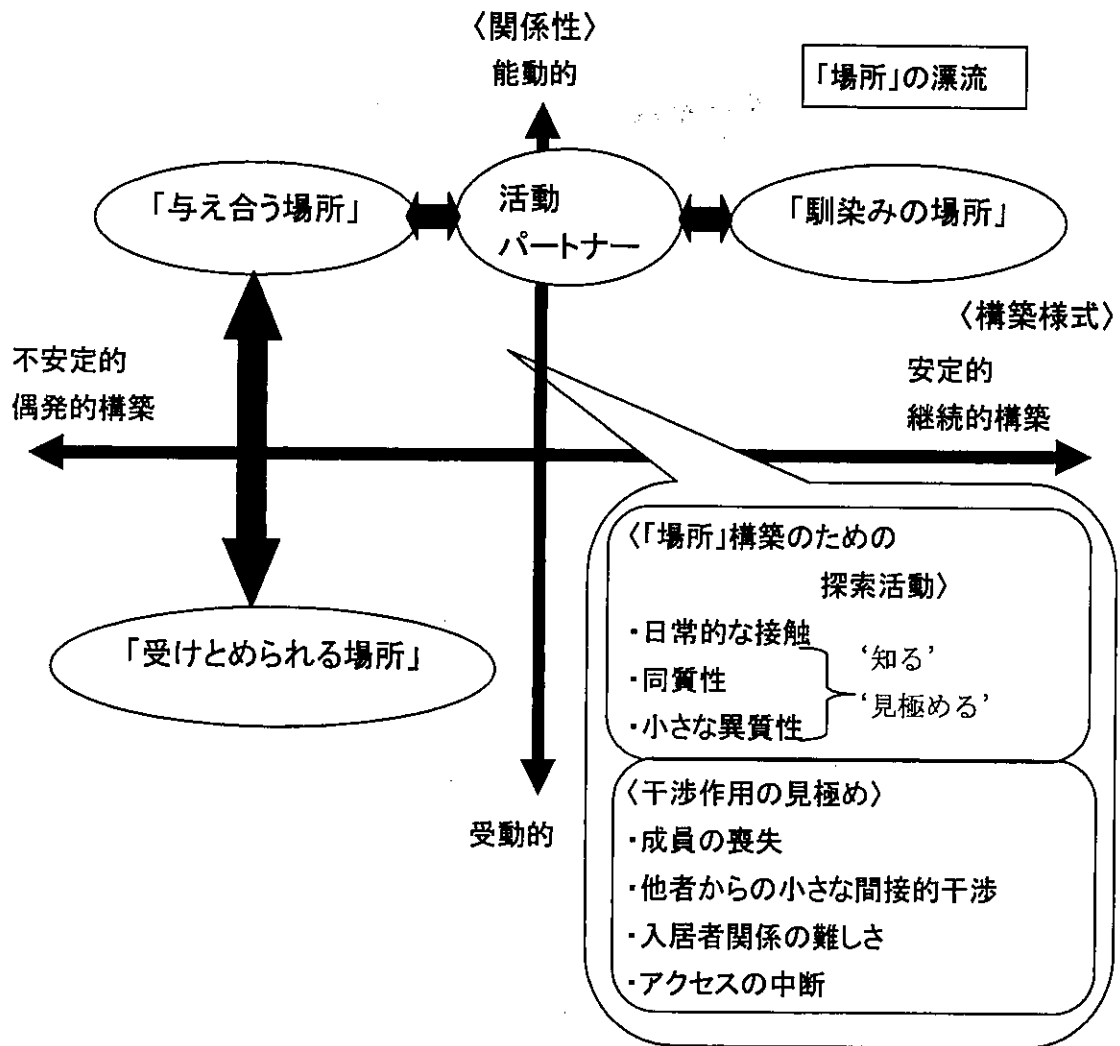


図 8 「場所」の類型化とその移行に関わる条件

リロケーション後の「場所」の構築過程では、まず「受けとめられる場所」が施設内に構築されていた。「受けとめられる場所」では、情報提供者達はこの「場所」を管理する成員（職員や家族）に従いながら活動を行い、受動的な関係を結んでいた。さらに、「受けとめられる場所」は偶然に構築されることが多く、その構築はその「場所」を管理する成員の都合に左右される不安定な「場所」と言える。一方、情報提供者達は管理される立場であるため、この「場所」の構築をコントロールすることができず、「受けとめられる場所」を必要とする時にすぐに得られるという保障はなかった。さらに、ここでは、成員が提供する活動やルールに従いながら、日常生活を送ることとなる。情報提供者達は、成員からの管理と引き替えに保護される立場にあり、安心感や安全感を得ることができていた。

その次に構築されたのが、「与え合う場所」であった。「与え合う場所」は、施設入居者と職員を成員とする「場所」である。「与え合う場所」は、成員間の互酬的な双方向の関係によって成立しており、「受けとめられる場所」とは異なり、情報提供者は能動的な関係を結んでいた。ここでは、他の成員から一方的に何かを与えられるだけではなく、自ら他の成員に働きかけることにより、自分自身が役に立っていることや、必要な存在であることが実感されていた。ただ、「与え合う場所」も「受けとめられる場所」と同様に、情報提供者が構築をコントロールすることができなかった。さらに、ケアハウスの入居者の退居や、職員の移動によって折角構築した「場所」を喪失することもあった。そのため、偶然に構築される不安定な「場所」と言える。

ケアハウスでの入居期間が長くなると、〈活動パートナー〉が構築され、さらにこの関係が長期化することにより、「馴染みの場所」への移行が始まる者もいた。〈活動パートナー〉は、「与え合う場所」の成員の中でも、特に同質性が高い成員との間に見出された。その後、この関係が長期化し、安定しながら継続的に関係が結ばれるようになる、「馴染みの場所」へ移行し始める場合もあった。〈活動パートナー〉と「馴染みの場所」では、その構築に関わる成員全てが能動的な立場をとっている。「馴染みの場所」は、他の2つの「場所」と異なり、その構築が定例化されることにより、継続的な安定した構築がなされていることが多かった。一方、〈活動パートナー〉は、「与え合う場所」から「馴染みの場所」が構築される過程で認められることが多く、〈活動パートナー〉との関係が習慣的に結ばれる場合と、偶然に結ばれる場合があった。〈活動パートナー〉となるためには、話題や趣味の共通性、ニーズの合致が大切であり、さらに同じような活動ペースであることが重要である。元々、これらの点において同質性が高い者同士が、日常的な相互作用を繰り返すこと

により、親和性を高め、相互作用の頻度が定例化してくると、〈活動パートナー〉から「馴染みの場所」へ移行する可能性が生じると考えられる。ただ、この時には、〈活動パートナー〉同士が長期的にAケアハウスに滞在し続けることが必要であり、リロケーションが起きるとその関係は自然消滅してしまう。

本稿調査で見出された3つの「場所」は、先行研究において「居場所」と言われている意味に相応する。「居場所」は、本来は人の居所、人がいるところという一定の物理的空間を意味してきた。しかし、近年では、関係性と空間性が一体化することによって、「安心とか安らぎとかくつろぎ、あるいは他者の受容とか承認という意味合いが付与されて、自分のありのままを受け入れてくれるところ、居心地のよいところ、心が落ち着けるところ、そこに居るとホッと安心して居られるというような意味に用いられるようになってきた」（住田、2003、p.3）。また、「居場所」には、幾つかのタイプが存在することが指摘されている（藤竹、2000；三本松、2000；住田、2003）。住田（2003）は、「居場所」を「社会的居場所」と「個人的居場所」に分類した。そして、前者を、他人によって自分が必要とされている「居場所」とし、後者は自分を取り戻すことができる「居場所」と説明している。さらに、「社会的居場所」は、集団に所属することによって「われわれ意識」や帰属意識、あるいは共属感覚を実感し、安定感や安心感、自己存在感を感じる（住田、2003、p.14）。

このように、「社会的居場所」は、集団内の役割によって所属している感覚を実感したり、成員との一体感を基本としていることから、本稿調査における「与え合う場所」や「馴染みの場所」に相応するものと思われる。他方、「個人的居場所」は、上記の説明以外にも、安らぎを覚えたり、ホッとしたり、心地よさを感じることができ、自己回復的な休息機能を果たせる場所との意味がある（住田、2003、p.14）。この説明から、成員に対して保護的に作用したり、より親密な関係を基盤に構築している「場所」と考えられ、本稿調査の「受けとめられる場所」や「馴染みの場所」に相応すると思われる。このように本稿調査でも、住田の分類（2003）との類似性が認められた。ただし、本稿調査で認められた「馴染みの場所」は、「社会的居場所」にも「個人的居場所」にもあてはまり、どちらかに位置付けることが困難であった。これは、住田と本稿調査では類型化のために用いた軸の設定が異なっていたためと考えられる。住田は空間性と関係性を類型化の軸としていたが、本稿調査では関係性と時間性を軸として用いた。本稿調査の結果からは、これら3つの「場所」の類型化には、関係性と時間性の他に空間性も見出され、本来は3次元によって類型化すべきである。それぞれの「場所」の下位概念には、空間性に関係する概念も見出されている。「馴染みの場所」に



は〈外界からの遮断〉、「受けとめられる場所」には〈開かれた片隅〉、そして「与え合う場所」には〈開かれた場所の日常的な接触〉といった空間性に関わる概念が含まれていた。ただ、類型化に関わる3軸のうち、3つの「場所」の特徴や情報提供者の生活への影響に関連性が高いのは、時間性と関係性であった。例えば、「馴染みの場所」の特性を考えると、長い時間をかけて構築され、それによって人と環境との同質性の高さを特徴としている。さらに、このような時間的特性から、「場所」の中に多数の過去の経験が蓄積され、自己のアイデンティティの連続性を検討するうえでも、意義深い「場所」と考えられる。そのため、他の「場所」との特性の相違を明確にするために、本稿では関係性と時間性の類型軸を採用した。

次に、それぞれの「場所」の構築条件を述べる。「受けとめられる場所」から「与え合う場所」や〈活動パートナー〉、「馴染みの場所」の構築へと移行する時には、情報提供者達が環境との日常的な接触を繰り返すことが重要なポイントとなっていた。彼らは、日常的な接触を繰り返しながら、環境情報やその特性を‘知り’、そして自己との関係を‘見極める’ことにより、「場所」の構築に必要な情報を探索していた。このことが、「受けとめられる場所」といった受動的な関係を結ぶ「場所」から、能動的な関係を結ぶ「場所」の構築へとつながっているものと考えられた。このことは、情報提供者達が、単に「空間のユーザー」ではなく、生活環境の中に様々な「場所」を構築し、居心地良くアレンジする（林田，2004）存在であることを示している。

‘知る’‘見極める’といった探索的な行為が為される背景には、幾つかの要因が考えられる。1つは、情報提供者が意図をもって関係を結んでいる場合である。この場合にも、関係構築に至りそうな成員を積極的に探索している者と、接触自体は偶然に為されるが、関係の構築が速やかに進むようにとメモ書き等を工夫し意識的に他入居者の名前を覚えている者がいた。例えば、第3章4節で紹介した荒川さんは、積極的に成員を探索している事例であり、併設する特別養護老人ホームに出向き、特養入所者の中からプレゼント（マフラー）が欲しいと思っている人を探していた。

一方、探索行為の背景に明確な意図は認められず、日常生活を送る中で、いつの間にか探索に結び付いている者もいた。例えば、情報提供者には、毎回異なる人を外出のパートナーにしている者もいた。そのきっかけを尋ねると「食堂で同じテーブルに座って話をしているうちに買物に行くことになった」（第3章 p.136）等と語られていた。この事例では、他入居者と接触したり、相互行為を行っているうちに一緒に外出する可能性があるというアフォーダンス（佐々木，2001，p.3；茂木，2001）を知覚し、実際の行動に結び

付いたと解釈される。アフォーダンスの知覚と「場所」の構築との関係については、次の項で詳しくふれるが、偶然的な接触から環境が持つ特性によって相互行為の可能性が開けていったと考えられる。そこでは、成員に対する同質性を「知る」、「見極める」ことと、小さな異質性を「知る」、「見極める」ことが相互行為の可能性の知覚につながっていたと考えられる。ただ、本稿調査では、情報提供者の中には、ケアハウスの中に同質性を見出せない者もいた。自分との同質性が高い入居者や、ニーズが合致する入居者が、ケアハウス内に少ない、あるいはいない場合である。本稿調査では、男性入居者や70歳前後の比較的若い入居者は、同質性を見出しづらい傾向にあった。このような者が、施設内だけではなく、施設外にも同質性を見出せない場合は、「場所」の漂流として、どこにも「場所」を構築できない状態に陥ることがあった。

また、茂木(2005, p.90-93)は、我々が「探索」を行うためには、ここまでは確実であるという「安全基地」を確保する必要があると指摘している。本稿調査でも、リロケーション後施設内にまず「受けとめられる場所」という保護的な「場所」、すなわち「安全基地」が構築されてから、探索が行われていることが認められた。このように、「自分の今置かれた状況の認識における心理的な安全基地が、積極的に探索する気分になるための必要条件である」(茂木, 2005, p.92)。

一方、本稿調査の結果では、「場所」の構築にあたっては、情報の探索以外にも、構築の妨げとなる〈干渉作用の見極め〉を行い、「場所」を構築するための探索活動と干渉作用への対応を同時に行う必要があることが見出された。第3章の報告内容から今回見出された干渉作用をまとめると、「成員の喪失」、「他者からの小さな間接的干渉」、「緊張感と慎重さを要する入居者関係」、「アクセスの中断」があった。「成員の喪失」では、職員の移動や高齢者の入院やリロケーションが含まれ、「他者からの小さな間接的干渉」は他入居者や職員のさりげない一言が円滑な「場所」の構築を妨げることがここに含まれた。また、「アクセスの中断」では、外出時の移動手段の確保が行えないことや、自己の移動能力の低下によって行動範囲が縮小している場合がここに含まれた。

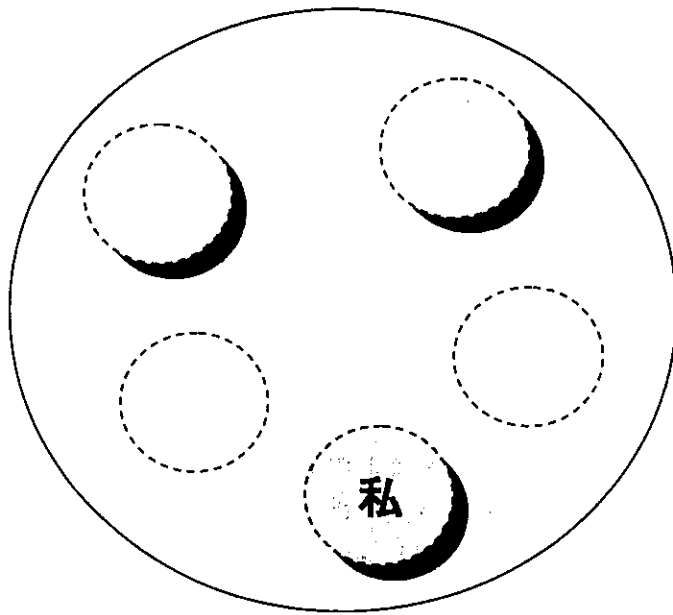
この他特記すべきこととして、本稿調査で見出された3つの「場所」は、それぞれに所属する地理的な場所や成員のもとに構築されていた。「受けとめられる場所」はプライベート領域や施設のセミ・パブリック領域と、「与え合う場所」はプライベート領域やセミ・プライベート領域と、そして「馴染みの場所」は施設外にあるお決まりの近隣領域やその他の広域領域といった具合に、それぞれには実存する所属先が認められた。ただ、意味は変遷していくという特性

があるため、ある領域に付与されている意味が変化したり、ある領域が複数の意味を併せ持つことはある。そのため、図8に示した「場所」の移行も、ある地理的な場所に付与された意味が次第に移り変わっていくのではなく、累積されていくと考えられた。そして、ある地理的な場所に複数の意味が付与されている場合には、その時々優勢になっている「場所」の意味と潜在化している意味があると考えられる。ここでは、他の意味が消去されたわけではない。そして、「場所」を巡る状況が変われば、潜在化していた意味が浮上し優勢になることがあると考える。

第3章第3節でも述べたように、各々の情報提供者達の同時期の面接の中に、ケアハウス職員のことを、名字や愛称で呼ぶ場合と、「職員」または「事務所」と呼ぶ場合が混在していた。例えば、体調不良時に居室へ食事を運んでもらう時や、介護が必要になってきた他入居者への対応を求める時、入居者間のトラブルの仲介役を頼む等の場面について語る時には、それまで名字で呼んでいたのが、「職員」や「事務所」と呼び名を使い分ける様子が認められた。このことから、職員を成員とするセミ・プライベート領域が、その時々で「与え合う場所」になったり、「受けとめられる場所」になっていたと考えられる。この点に関して、「場の意味」の変遷を報告した能智(2006)も類似の報告を行っている。彼は、ある失語症患者が作業所に対して〈風景の場〉、〈容器としての場〉、〈網の目の場〉と複数の意味付けを行っていたことを報告している。そして、それらは単純に段階として区切られているものではなく、重心を変えつつ重層化していくイメージだと説明している。

## 2) 「馴染みの場所」と「与え合う場所」のシステム論的比較

ここで、本稿調査で得られた「馴染みの場所」と「与え合う場所」の相違を明確にするため、システム論的な視点から比較検討したい。「馴染みの場所」や「与え合う場所」は人と環境の相互作用により意味付与されることから、それぞれ1つのシステムと考えられる。さらに、これらの「場所」を構築する成員も、各々の個人システムを作動させて存在していると考えられる。そこで、それぞれの「場所」と成員の個人システム間の関係を検討すると、「馴染みの場所」は「親和性」として、「与え合う場所」は「位置取りと配置化」として、それぞれ特徴付けることができた(図9)。以下に、それぞれを具体的に説明していく。



「馴染みの場所」

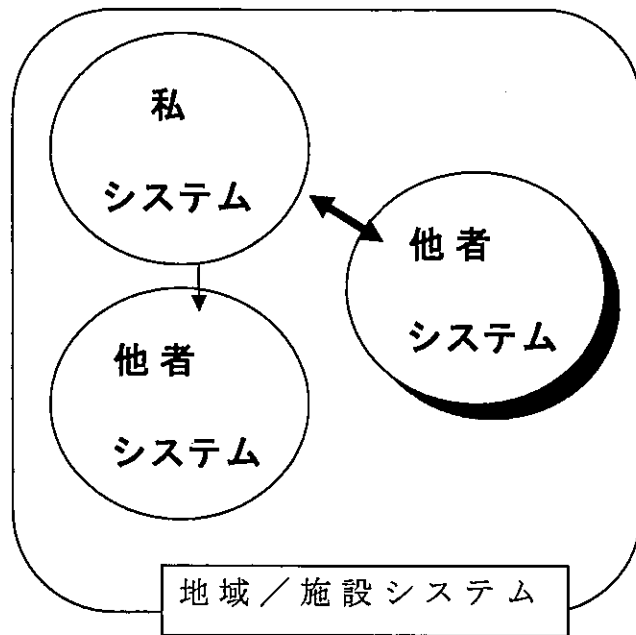
〈親和性〉

「馴染みの場所」を構築する成員もそれぞれ個人システムを構築しているが、「馴染みの場所」の構築に完全に取り込まれて、境界が不鮮明になっている。個人システムの意味と「場所」の意味が共鳴し合っている。

〈位置取りと

配置化〉

情報提供者は、関係構築の可能性を、‘知り’、‘見極め’ながら探索し、互酬的な関係を空間内の座標点としてプロットしながら、自分の日常生活で行われる相互作用や活動を空間内に配置していた。



「与え合う場所」

図9 「馴染みの場所」と「与え合う場所」のシステム論的比較

まず、「馴染みの場所」であるが、高齢期の支援では、特に認知症高齢者を対象とした支援の中で、「馴染みの関係」作りの必要性が度々指摘されてきた。ただし、ここで言う「馴染みの関係」とは、顔見知りの意味で用いられていることが多い。しかし、本稿調査で見出された「馴染みの場所」は、何十年もの長い時間をかけて構築されてきた「場所」であり、その構築が定例化されていた。成員間の関係は、〈気の置けない関係〉を基盤とし、「遠慮なく自分らしい振る舞い」ができることを特徴としていた。また、「馴染みの場所」の構築条件である情報提供者と成員、地理的場所、そしてそこで営まれる行為や活動とが深く結びつき一体化していた。以上より、「親和性」を特徴としている「場所」と考えられる。この一体感は、第1章3節でも引用した「場所のセンス」(Relph, =1999)あるいは sense of being in place (Rowles, 2003)とも言われており、自己の連続性やアイデンティティの源泉となるものである。

また、「馴染みの場所」の構築は、成員に強い情動体験を引き起こしていた。〈気の置けない関係〉による安心感以外にも、「楽しい」、「笑い転げる」、「大笑いして帰ってきた」等の語りが多くの情報提供者に認められた。さらに、楽しいだけではなく、互いの成員に対する思いやりの深さも特徴の1つであった。体が不自由な人がいれば互いを思いやり、会合に参加しなかった人へは電話をかける、さらにお互いを尊重しながらの会話等が認められた。リロケーション後の適応過程を検討した小倉(2005)は、入居者が安心して自分らしく生活をするためには「共にいる」という関係や「つながり」を構築することが重要であると指摘している。そのため、この関係は、本稿調査における「馴染みの場所」に類似する意味と思われるが、小倉の説明だけでは、「共にいる」という関係や「つながり形成」の親密度、さらにこの関係によって引き起こされる情動体験の程度が不明確である。そこで、小倉が指摘する「共にいる」という関係や「つながり形成」と、「馴染みの場所」の構築時期を比較すると、「馴染みの場所」の構築は比較できない程長く、親密度は相当に高いものと考えられる。

清水(2000)は、自分と場所、成員、そこで営まれる活動が一体化している「場所」を、主客非分離的な世界(2000, p.10)として説明している。清水はこのような「場所」を共創の場と呼んでいるが、主客非分離的な場所では、個の生命(創出の働き)が互いに関係し合っって共同体の生命(共同体としての働き)を創出することであると言う(2000, p.19)。これを本稿調査にあてはめると、「馴染みの場所」の構築に関わる条件が、長年の相互作用を繰り返す中で「馴染みの場所」を構築し続ようとする安定的な意味の生成一すな

わち機能的なシステムが立ち上がることと言換えることができる。

「馴染みの場所」を構築する成員もまた、それぞれ個人システムを構築しているが、「馴染みの場所」の構築に完全に取り込まれているため、各々の境界は不鮮明である。つまり、「馴染みの場所」が構築されている時には、個人システムの意味と「馴染みの場所」が構築する意味とが共鳴し合っていると考えられる。このような状態では、成員間は違和感を抱いたり、立ち止まって状況を観察することもなく、お互いが笑い合っって会話が弾むようにして次々と相互行為が展開されていく。情報提供者が、「馴染みの場所」について、「遠慮しないでいい」、「楽しい、沢山笑ってくる」、「食べて、話して、食べて、笑ってくる」と語っており、この様子はまさに「一緒に楽しむ」という成員間の共通の思いによって相互行為が次々生み出されている過程を表現していた。

一方、「与え合う場所」は、空間の「位置取りと配置化」の過程として説明できる。「与え合う場所」は、互酬的な双方向の関係を基盤に構築されていた。この互酬的な関係は、「馴染みの場所」における〈気の置けない関係〉とは異なり、「親和性」によって説明される関係ではない。あくまで、相手に対する期待と実際に返ってくる行為との一致率が高いという関係であり、そこには期待通りにいかないという不確実性や、成員そのものが変わってしまうという不安定さも残されていた。この「与え合う場所」が構築されるまでには、関係構築の可能性を探索する過程が含まれていた。情報提供者達は、可能性を「知り」、「見極め」ながら探索していたが、これは同時に可能性のない関係を見極めることでもある。情報提供者達は、互酬的な関係を空間内の座標点としてプロットしながら、自分の日常生活で行われる相互作用や活動を空間内に配置し、空間を「場所」にしていたと考えられる。配置化に関する先行報告では、物理的な環境に関わる配置化はすでに報告があり、次のように説明されている。

「人は初めて訪れる空間では、最初は案内板や方向版などのサイン情報を手がかりにして目的室を探すが、空間を繰り返し経路探索すると、次第に空間そのものの構成や目印を頼りに探索するようになる。この繰り返し経路探索は一種の環境適応過程とみることができる」(今村ほか, 2006, p.65)。

新しい土地に来て、方向や建物の位置がわからず戸惑った経験のある人は決して少なくないだろう。上記の説明のように、新しい環境に直面した時には、経路探索することにより目印となる建物や物を見つけ、配置することによって自分の認識上の地図を作成していく。そして、このような配置は、物理的環境だけではなく、相互作

用や活動にも当てはまることと思う。新しい環境では、どこで、誰と、どのような相互作用ができるかについて、迷うことが多い。ケアハウスのように、様々な生活史を背景とする人々が共同生活を送る場合は、なおさらのことである。そこで、情報提供者達は、‘知り’、‘見極め’ながら双方向の関係を結べる人を探し、それを空間内に配置化していたと思われた。本稿の面接時には、物理的な場所と、相互行為や活動を関連付けながら話題に上ることがあった。例えば、「廊下では入居者同士の長話をせず、挨拶程度が良い」、「誰か特定の人の個室に出入りしない方が良い」、「親しい関係は、施設外で持った方が良い」と、それぞれ物理的な場所にふさわしいと考える相互作用や活動のあり方が認められた。このことから、相互作用や活動の配置化は、主観的経験だけで説明されるものではない。探索では、環境特性であるアフォーダンスによって、実存する環境の中に行為の可能性を知覚していた。そのため、相互作用や活動の配置化にあたっては、実存する環境情報に対応させながら行われていたと考えられる。

### 3) 「場所」の構築過程における安定と混乱

「場所」が構築される過程では、安定した構築が一様に進むばかりではない。「場所」によっては、その構築過程の中に、混乱や不安定な状況が認められる時期もあった。例えば、本稿調査では、ケアハウス入居者との「与え合う場所」の構築に先立ち、ケアハウス入居者間の交流上のトラブルや葛藤等が認められた。情報提供者の中には、知らない人ばかりであることに戸惑ったり、予想外の言葉や対応を受けて不満を抱く者も少なくなかった(坂上, 2002, 2004a, 2004b, 2005)。対人関係の問題は他の文献(藤ヶ谷, 2004, p.86-87, p.135; 栗原, 2005, p.262-264)でも指摘されており、この他にも入居準備の1つに対人関係の心構えを提案しているものもある(シニアライフ情報センター, 2001, p.6-7; 中村, 2005, p.87-126)。このような入居者間の緊張関係は、「人—環境システムに混乱が生じている状況」(南, 1995, p.15-16)であり、入居者にとっては「どこに何があり、だれに何を頼むといった基本的な構造の学習や、自分の活動をスムーズに行うための関係づくりを新たに始める必要のある問題状況」(南, 1995, p.15-16)と考えられる。山本と Wapner (1992) は、リロケーションによって環境が変化した状況を、「危機的移行 critical transition」と述べ、“人—環境システムの急激な崩壊”(1992, p.17)と説明している。ただし、彼らが示す「危機的移行」とは、破壊へ向かうような危険な状態ばかりではなく、危機を‘分かれ目’として捉えている。人生の中で次々と起こる出来事に対して、適切に対処すれば人間の成長につな

がるし、失敗すると破局につながる（1992, p.17）‘分かれ目’なのである。

このような混乱期に、仮に心理的な測定を行うと、ネガティブな結果になることが予測される。しかし、このような過程も、入居者達が新しい環境との関係を再構築するうえでは必要な過程と考えることができる。つまり、他入居者という新たな環境と直接的に関わることで、試行錯誤しながら新たな関係を築いている過程と解釈することが可能である。このように、「場所」の構築過程の中には、環境との新たな関係構築に向けた「Trial & Errorの時期」が存在すると考えられるのである。山本と Wapner（1992, p 17）は、このような「危機的移行」を‘分かれ目’と表現したが、リロケーションを行った高齢者達は危機的な状況の中で「改善・修正しうる様々な手順や行動」（Bontje, 2006）を試みていると考えられる。そのため、この時期に必要なフォローが為され、新たな人—環境システムの構築へと移行することができれば、入居者との緊張関係が認められるこの過程も、一概にネガティブな過程と言い切ることができない。

本稿調査でも、「場所」の構築に至るか否かの‘分かれ目’が存在し、構築につながる場合と構築に至らない場合といった両サイドのケースが存在していた。例えば、本稿の調査では、毎回異なる人をパートナーにしながら種々な活動に参加したり、自分が付き合い易い人を探索している情報提供者がいた。また、入居直後は他入居者から警戒されたり無視されたりしていたが、自分から挨拶を行い続け、うまく関係が結べそうな人を探索する者もいた。これらは、状況への対応がうまく進んだケースと言える。その一方で、緊張関係に耐えられず居室に引き籠もりがちな生活を送る者や、難聴のため他入居者との関係構築に至らない情報提供者もいた。さらに、ケアハウス内でも施設外でも「場所」が構築できず（「場所」の漂流）を行っている者もいた。このような人々は、新たなシステムの構築に移行しない、あるいは移行上の障壁が大きすぎる者と考えられ、何らかの支援が必要となる。

## 2. リロケーション先行研究との対比からの考察

### 1) リロケーション過程における愛着処理問題

南（1995）は、リロケーションによって環境変化に直面した高齢者は、新しい事態でストレスをどのように処理し、感情の平衡をどのように取り戻すかという課題以外にも、移行する前の環境に対する愛着の処理や、前の環境と新しい環境との間に折り合いをつけていく必要があることを指摘している（p.21）。



このような愛着処理の問題は、本稿調査の情報提供者にも認められた。さらに、本稿調査では、施設ヘリロケーションした時だけではなく、リロケーション後の入居者や職員の移動によって、「場所」を構築する過程の中でも愛着の問題が生じていた。例えば本稿調査の期間内には、施設開設当初から6年以上勤務していた相談員の移動があった。馴染み深い職員の移動は本稿調査の面接時にもしばしば話題にあがった。彼女の移動によって、複数の入居者達が違和感を覚え、中には日常生活にまで影響が及んでいる者もいた。ある情報提供者は、朝の礼拝時のピアノ伴奏がCDでの対応に変わり、礼拝の場の雰囲気が変わってしまったことを口にした。また、ある情報提供者は、施設新聞が手書きからワープロ作成に変わったことにショックを受け、これまで行っていた挿絵の色づけや丁寧に綴って保管するといった活動を辞めてしまった。このような様子から、愛着処理の仕方によっては、これまでの習慣的活動が中断される可能性があることも示唆された。

この他、愛着処理の問題に関連し、本章第1項で触れたケアハウス入居者間の緊張関係（坂上，2002，2004a，2004b，2005）の原因を、愛着処理の問題として捉えることができる。このような対人的な緊張関係は、「人—環境システムに混乱が生じている状況」（南，1995，p.15-16）であり、一般的には互いの価値観、行動様式の相違や、期待と実際の応答のズレから生じるストレスの問題として捉えられている（水島，2004，p.70-89）。事実、ケアハウスでは多様な生活歴を背景とする者が共同生活を送っており、緊張関係が引き起こされ易い状態にある。中には、トラブルメーカーとなる人もおり（松村ほか，2004）、ストレスフルな環境刺激として他の入居者達に影響を与えることとなる。

このような緊張関係への一般的な解決法としては、自分自身のコミュニケーションの特徴や他者の理解を深めること（倉戸，2001；樺，2006）、自分自身のコミュニケーション・スキルの向上（水島，2004，p.70-89；Patterson, K. et al, =2004）等が提案されている。このような解決法は、コミュニケーション・スキルの見直しによって緊張関係の解決を図ろうとするものであり、ストレスを作らないための適応行動を提案するものである。本稿調査の情報提供者にもこのような適応行動が認められ、例えば「適度な距離をもつ」、「注意して関わる」、「誰とでも平均的に関わる」、「友人を作らない」、「外出する」等が行われていた（坂上，2006）。これ以外にも、他入居者との安定した関係を構築することによって対処しようとする情報提供者もあり、日常的な接触を介して他入居者を「知る」、「見極める」ことにより新たな関係を構築する行動が認められた。

しかし、このような入居者間の緊張関係が生じる要因には、コミ

コミュニケーション・スキルの問題だけではなく、愛着処理の問題も関わっていると考えられる。つまり、入居者達が「愛着の対象となっている『今までどおり』の自己と世界との関係」(南, 1995, p.25)をリロケーション後も引きずり、新しい環境と直面しているという現実を受け入れられないでいるとも解釈される。そのため、物理的な側面から見れば新しい環境下にいると思われる者が、その人の主観的経験では依然として前の環境の中に住まい続けていると思われる者もいた。このような状態にある人は、リロケーション後も、以前の行動様式や他者との関係の結び方をそのまま現在のケアハウスの中に持ち込み、思うような反応が返ってこないことに戸惑いながらもその原因を理解することができないのである。

こういった愛着処理の問題が背景にある場合には、コミュニケーション・スキルの見直しを図るだけでは対応が不十分である。さらに、このような愛着処理の問題は、リロケーション過程の時間的文脈に着目したときに初めて理解されるものである。そのため、説明変数や結果変数の因果関係を説明する研究タイプではなかなか把握することができない。場所の愛着を扱った研究は、地理学や人文主義的地理学からの報告があり、阪神大震災被災者を情報提供者にしたライフヒストリー研究(相澤, 2000)等も行われている。しかし、これまでの高齢期のリロケーション研究では、研究の必要性を説いた一部の指摘(南, 1995, P.25)を除き、具体的な検討がなされてこなかった点である。

南(1995, p 25)は、困難な段階を通過するために行われることとして、愛着処理の問題を扱う先行研究をもとに「悲哀の作業」や「記念の作業」(記念物の制作や儀式などの行為によって過去への断ちきりがたい思いを象徴的に封じ込める作業)、または伝統的な社会の通過儀礼によって内的な課題に立ち向かえるための「一人になれる特定の時間と場所の確保」を指摘している。また、先行研究では、入居準備プログラムがリロケーションの結果に影響を与えるとの報告(外山, 1996, p215)もあるが、この理由も上記のような愛着処理との関わりから理解される。

一方、本稿調査の情報提供者には、愛着処理に関連した作業として、自宅処分を含めた身辺整理、入居施設の選択のための相談や見学等が認められた。事例として紹介した荒川さんは、入居に対して否定的な態度をとる息子を2ヶ月かけて説得したと繰り返し語っていたが、その説得の過程も愛着処理の行動の1つと考えられる。ただし、本稿調査では十分な入居準備が出来た人は非常に少なく、ほとんどの人は急に入居が決まり、十分な準備期間もないまま駆け込むように入居していた。こういった事情は本稿調査だけに限らず、特別養護老人ホーム入所者を対象とした小倉の報告(2002)でも同

様の指摘がなされている。

さらに、本稿調査では、年齢が比較的若い情報提供者の中に、十分な心理的準備がなされないままに入居した者が多かった。70歳前後の情報提供者達は、入居までの待機期間が数年あると思ひ、将来に備えて早めに申し込む傾向にあった。しかし、まだ先と思っていた「自分の順番」が突然来て、それに戸惑い、「心の準備ができていない」と思ひながらリロケーションする者がほとんどであった。結局、このような事情から、多くの入居者達は、リロケーションを行った後に愛着処理を行うこととなる。「受けとめられる場所」といった保護的な「場所」で一定の期間を過ごした後、ケアハウス内で「与え合う場所」の構築や〈活動パートナー〉を見出すために向けて行う「Trial & Errorの時期」は、同時に愛着処理の時期でもある。リロケーションの先行研究の中には、リロケーション後の幸福感情や活動性の変化が一様でないとの報告（中里，1988）があるが、このような「Trial & Errorの時期」や愛着処理を行っている過程であることが関連している可能性もある。

そして、本稿調査で認められたリロケーション後に行われる愛着処理の方法は、南（1995，p.25）が指摘する「悲哀の作業」や「記念の作業」とはやや様相が異なっていた。南が指摘するように「過去への絶ちきりがたい思ひを象徴的に封じ込める」（1995，p.25）のではなく、むしろ残存する過去の破片を現在に取り込む過程が認められた。過去の破片とは、これまでの経験の蓄積やその記憶、情動とそこに結び付いた思考パターン、それらが身体化された歴史としての「ハビトゥス」（Bourdieu，=1990，p.11；田辺ほか，2000，p.4-9），そしてリロケーションする以前から構築し続けている「馴染みの場所」である。

情報提供者達は、施設内の環境との日常的な接触を通して、「雰囲気心地良い」、「楽しい」、「相性が良い」といった感情を手がかりに、行動範囲・活動時のスピード・対人関係の持ち方が自分と類似する〈活動パートナー〉や、過去に経験した役割が再現できそうな相手、そして自己のコントロールが及びそうな環境情報を探索していた。また、「馴染みの場所」では、ケアハウス内での緊張関係に巻き込まれ自己を見失いそうになった時も、思ひ存分「自分らしい振る舞い」ができる「馴染みの場所」へ戻ることにより、混乱した気持ちをリセットしたり、自分自身を取り戻したりしていた。そして、その後は「馴染みの場所」での行動や活動を手がかりにして再びケアハウス内の関係と向き合っていた。こうして、安定的に構築されている「場所」と構築途上にある不安定な「場所」を行き来することにより、現在と過去、そして自己の生活を形作る複数の「場所」に意味的なつながりをもたせていたものと考えられる。

以上のように、愛着処理に関する本稿調査の結果と南の指摘が異なっていた理由には、愛着対象の喪失の程度が違っていたことが考えられる。すなわち、南の指摘は、死別等による愛着対象の喪失を研究した Bowlby (= 1981, p.91) の考えに基づいている。そのため、愛着対象の完全なる喪失を前提として指摘がなされていた。一方、特に本稿調査が対象としたケアハウスへのリロケーションは、南の前提とは異なり愛着対象の完全なる喪失とは言えない。第3章でも述べたように、およそ半数の情報提供者が、以前から構築していた「馴染みの場所」をリロケーション後も引き続き構築していた。また、頻度の減少はあろうが、ほとんどの情報提供者はリロケーション後も家族や親族、友人・知人との交流を続けていた。それにより、「場所」の構築過程のいたるところに過去の破片が散在しており、その点が愛着処理の過程に違いをもたらしたものと考えられる。

ただし、本稿調査の情報提供者の中にも、完全なる対象喪失に近い状態の者がいた。第3章第3節で示したある情報提供者は、若くして夫を亡くし、リロケーション後は息子からの連絡や訪問も途絶えがちになっていた。また、リロケーション以前には「馴染みの場所」があったが、成員達のペースについていけなくなり、それ以後の関わりを一切絶っていた。彼女は、ケアハウスの中では一番若く、施設内の様子を「お年寄りばかり」と語り、話が合わないことに不満をもらすこともあった。彼女は、喫茶店や公共施設のオープン・スペースへ頻回に出掛け、大衆の中に紛れ、施設内の入居者関係から距離を置いていた。この情報提供者は、特定の「場所」を構築しておらず、施設外で大衆に紛れることによって「一人になれる特定の時間と場所の確保」(南, 1995, p.25) をしていたと考えられる。そして、このような「場所」を漂流する様子は、南が指摘する愛着処理の過程と考えられる。彼女は、成年期でも老年期でもない自分自身を大衆の中に紛らわせ、過去と現在の接点や、何らかの意味を探していたものと考えられる。

## 2) 「場所」の構築過程における時間的文脈性と主観的経験の様相

リロケーション後の過程と過去の経験の関係については、特別養護老人ホームで調査を行った小倉(2002, 2005)の報告の中にも触れられている。報告では、リロケーション直後はネガティブであったホームとの関係性が、「共にいる」という関係や「つながり形成」に移り変わる過程において、過去の経験が取り込まれていることが指摘されている。具体的には、ホームのケア、食物や自然、宗教などのモノ、そして職員や他の入居者といった人々と、自分の生活史との類似性をみつけ、入居者達はそれらの類似性を自分とホームとの接点にしてホームと結びつけていることが示されていた。小倉の

報告では、自分とホームの「接点」を見つける際の主観的経験が報告されているが、特に象徴化された経験を取り扱っている。しかし、環境における主観的経験には様々な経験が含まれていることが考えられ、象徴化された経験以外のものもあると思われる。場所と空間の経験 (experiential space and place) を報告した Tuan (= 1993, p.21-22) も、主観的経験の多様な視点を指摘している。具体的には、嗅覚・味覚・触覚といった直接的で受動的な感覚運動的経験から、視覚による能動的な知覚経験、象徴化という間接的な概念的経験に至る幅広い視点を提供している。さらに、情動がこれら全ての経験に彩りを与えていることも付け加えている (p.21)。小倉の報告 (2002, 2005) は、このような幅広い経験のうち、Tuan の言うところの概念的経験という一部の経験に限定されてしまっている。

しかし、本稿調査で主観的経験を検討したところ、概念的経験に至る以前の感覚・知覚的経験が「場所」の構築過程では重要な役割を担っていることが明らかとなった。特に、最初から事象を意味によって概念的に捉えて行為・活動を行っているのではないことが示唆された。最初は感覚・知覚による漠然とした経験であったものが、これらの経験が繰り返されたり、これらの感覚・知覚情報にアフォードされて実際に相互作用を行うことにより、次第に感覚・知覚を本人が解釈するという概念的経験につながっていく過程が見出された。例えば、本稿調査では、「場所」の構築過程に関わる情報提供者の語りの中には、「相性がいい」、「雰囲気よかった」、「眺めがいい」等、感覚・知覚的な表現が度々表われた。また、第3章第2節では、入居施設を選択する際に、感覚レベル反応が思考レベルの反応より先に生じていた事例を報告したが、この事例はまさに感覚・知覚的な経験の繰り返しから、その体験を意味付けて解釈するといった概念的経験へとつながっていった典型例と言える。彼女は、その様子を以下のように語った。

(3箇所のカアハウスを) 見て歩いたんですよ。なぜか、ここが気に入って。そして、始めは知りませんでしたけど、いるうちに職員さん達の態度がわかってきたわけ。それで、ああ、ここなんだなあって私が決めたのが始まりなんです... 入ってきて、そしてこっちのカアハウスを研究したの。やっぱり、一番大事なのは職員さんの気持ちですね。穏やかなとこと、年寄りに接する態度... やっぱり、職員さん達ですね。問題はね、年寄りにしたら。だから例え、おたくでも私と接する場合、やはり感じるものがありますよね。だから、こうしてお話して、お話ができる方と、お話ができない方がいるわけよ... あったかいの、なんということなく、雰囲気があったかいの。みんな集

まる話合いの雰囲気はね、それとあつたかく感じるの。[情報提供者 No.32 X + 2年 3月]

この情報提供者の語りでも、始めは‘雰囲気’や‘相性’といった漠然とした感覚が生じ、それらの感覚を手がかりにして、実際の相互作用を行う中で様々な理由付けが行われていたことが理解される。さらに、上記の語り以外にも、他の利用者が介護されている‘眺め’といった視覚的経験や、施設職員の言葉かけや言葉のトーン、優しく触れていくこと等の聴覚的、触覚的経験についても言及されていた。これらの経験が蓄積されることにより、最終的には「ここ（Aケアハウス）から離れられないって気持ちになった」と語られており、この語りから、ケアハウスに対して終の住みかという意味付けがなされたものと解釈される。

この情報提供者以外にも、本稿調査では、様々な感覚・知覚的経験が語られていた。これは、調査者の方からは尋ねていなかったのだが、情報提供者から自発的に語られた。隣の部屋の人の足音やドアを開ける音、シルバーカーを使う入居者がタクシーで外出しようとしている眺め、年上の入居者の生活ぶり、部屋に差し込む朝日等の、感覚・知覚的経験についての語りが認められた。

以上のような調査の結果から、リロケーション後の情報提供者の主観的経験は、小倉が指摘する以上に幅広いものであり、「場所」の構築として環境になんらかの意味が付与される過程では感覚・知覚的経験や概念的経験が蓄積されていることが示唆された。

さらに、近年では、主観的経験の理解が広がり、主観的経験の中に感じられる様々な質感である「クオリア」（茂木，2001，p.39-70）の研究も進んでいる。「クオリア（qualia）」とは、もともとラテン語で質感を表わす単語であり、1990年代の半ばから、物質である脳内の神経細胞の活動から意識が生み出されることの不思議さを象徴する言葉として、研究者に広く使われるようになった言葉である（茂木，2004，p.24-25）。茂木の著書の中では、「クオリア」の例として、朝の森を歩いている時に「私」の中に感じられる草の緑色、朝露のつやつやとした感覚、足の裏から感じる大地の感覚等があげられている（茂木，2001，p.39）。また、「クオリア」には、言語化される以前の原始的な質感である「感覚的クオリア」と、言語的・社会的文脈の下に置かれた質感である「志向的クオリア」があることも指摘されている（茂木，2002，p.47-49，2004，p.79-83）。

このうち、小倉の報告で認められた「接点を見つける」経験や Tuan の概念的経験は「志向的クオリア」に相当する経験と考えられ、そして Tuan の感覚・知覚的経験は「感覚的クオリア」に相当するものと考えられる。「感覚的クオリア」は「志向的クオリア」と関連し

合っており、「感覚的クオリア」を認識する時に立ち上がる質感が「志向的クオリア」とされていることから、リロケーションの主観的経験を扱う研究にはその両者を含めた検討が必要である。小倉の報告では、「ひじきの味付け」といった味覚の経験、つまり感覚的経験からホームと自分との「接点を見つける」経験に至ったとの指摘がある以外に、概念的経験の説明が中心となっている。そのため、概念的経験に至った経過が十分に説明されず、どのような環境情報が引き金となって概念的経験が形成されたのかが十分に理解できない。小倉の報告にあった「モノ・ケア・人々」という提示では、適応過程または「場所」の構築に関わる環境情報を理解するうえで枠組みが大きすぎるのである。

この点に関しては、小倉のようにリロケーション後の適応過程を扱った外山（1996）の報告にも同様のことが言える。外山は、個室に個人的な生活行為を成立させる「物」や馴染みのある「私物」を「持ち込み」、「配置」、「掲示」することによって、個人的領域が形成される過程を説明している。馴染みのある「私物」は、ある個人によって意味付けられた「モノ」であり、概念的経験の視点によって人々に理解される。外山（1996, p.21-26）は、このような「モノ」が他の空間的領域に移動することや、セミ・プライベート領域に集う「人」によって個人的領域が拡大していくと述べている。しかし、これらの「モノ」や「人」の他には個人的領域の形成に関わる環境情報の説明がなされていない。さらに、セミ・プライベート領域に集う人の特性も説明されておらず、どのような人との間で個人的領域が形成されるかが理解できない。

本稿調査では、本章第1項で示したように、「与え合う場所」の構築過程では、「場所」の構築を可能とする成員の探索が「Trial & Error」によって行われていた。このことは、どのような成員とでも「場所」の構築がなされるわけではないことを示唆している。外山の報告は、小倉と同様に主観的経験の多様な側面を扱っておらず、個人的領域の形成に関わる環境条件を極狭い範囲に限定してしまっている。

さらに、これら主観的な経験を幅広く捉えることにより、過去といった時間的文脈がどのように「場所」の構築過程の中に取り込まれているかの理解が変わってくる。小倉の報告に従えば、モノ・ケア・人々といった物質的側面や構造の類似性が時間的文脈性を生み出すと理解される。一方、主観的経験をより幅広く扱う場合には、感覚・知覚的経験を概念的経験へと解釈する過程の中に過去の経験が反映されていると考えることができる。

「クオリア」について述べている茂木も、「感覚的クオリアが、外界の特徴の安定した表現として知覚されるのに対して、志向的クオ

リアは、その時々々の文脈、過去の経験、文化的背景などに依存して、ダイナミックに変化する」(2002, p.51)と述べており、志向的クオリアや概念的経験の中に空間的・時間的文脈性が含まれていることを示している。また、本稿調査では十分な追求に至らなかったが、感覚・視覚的経験の中にも、過去の経験が取り込まれている可能性がある。つまり、過去の概念的経験のフィードバックの結果として、あるいは生来的に備えられた性質が強化されたものとして感覚・知覚的経験の中に過去の経験が取り込まれていることも考えられるのである。例えば、色彩の嗜好を取り上げても、世の中には青が好きな人もいれば赤が好きな人もいる。また、注意していないと、ついつい同じ様な服を買ってしまうこともよくあることである。感覚・知覚的経験は、種の保存として人々に共通する部分と、過去の経験に裏打ちされ、あるいは生来の好みとして個人差が認められる部分があると考えられる。

また、主観的経験の捉え方の相違は、「共にいる」という関係や「場所」の構築を促す「原動力」や「推進力」の説明にも違いをもたらす。ここで、本稿調査と小倉の報告を比較するため、再度小倉の報告をまとめると、以下の知見が示されている。

「新入居者は、主体的能動的に環境に働きかけ“入居者が、ホームの環境や人、モノとの間に安心して自分らしく生活できるような関係を形成すること”という『つながり』をつくり、自分なりの生活を形成していくことがわかった」(小倉, 2002, p.61)

「①入居者の生活は、自分とホームとの関係性をポジティブな関わりあいにする‘ホームとのつながり形成’をしながら、自分なりの生活を構築し営んでいく‘個人生活ルーチン’によって安定している。②ホーム生活のなかで、入居者はいろいろな原因で起きる‘個人生活ルーチン’の混乱に対処する必要がある。③‘個人生活ルーチン’の混乱は、〈職員ペースの援助〉、〈援助を求める迷い〉、〈援助関係の狭まり〉という職員からの援助との相互作用が悪循環するなかで進行し、入居者は不安や不満、生活意欲の低下を強めていく」(小倉, 2005, p.75)

これをもとに本稿調査との比較を行うと、小倉の報告では、「ホームとのつながり形成」や「個人生活ルーチン」を創り出す「力」は、主体である入居者側の「関係を作りたい」あるいは「個人生活ルーチンを築きたい」という目的をもった意志と、そこから生じる行動や活動に依拠すると考えられている。これに加え、「接点」が見つかったモノ・ケア・人々は、対象化して捉えられており、入居者との



相互作用を行った後も本質的には変わらない「モノ」として捉えられている。そのため、入居者によって「接点」の有無が評価された後は、その結果を覆す過程は想定されていない。言い換えると、「接点なし」と評価された後は、無関係な「モノ」として「つながり形成」の文脈から除外され、再度その文脈に立ち現れる時には「つながり形成」やそれをもとに構築した「個人生活ルーチン」の維持に悪影響を与える「刺激」と解釈されることとなる。これを小倉の報告に当てはめると、入居者自身と「接点なし」と評価された職員または職員の援助は、「つながり形成」や「個人生活ルーチン」の構築から外され、安定期に「個人生活ルーチン」の維持を妨げる阻害因子として説明されることとなる。さらに、小倉が描く入居者の世界は、「つながり」と「それ以外」という2つの世界として描かれており、「つながり形成」がなされた後や他の関係についての議論は行われていない。そのため、一旦「つながり形成」が完成した後は、その関係の「維持」とその維持を妨げる作用を説明するだけで終わっている。ここでは、「構築し続ける」といった人の特有の過程の説明がなされていないのである。

一方、本稿調査で明らかになったことは、概念的経験以前に感覚・知覚的経験がなされていることであり、「場所」の構築にあたっては「〇〇の「場所」を作りたい」といった情報提供者の意志が必ずしも先行しているわけではないことである。多くの「場所」の構築過程は、確固たる目的をもった意志の力によって実現されるというよりは、もっと力の抜けた刹那的なものであった。さらに、感じる、意識するといった認識的な世界に留まらず、主体の実際の行為や活動を伴っていた。多目的室に人が集まっていて空席があるから座ってみた、居心地がいいからそこにいた、話し易そうな表情や雰囲気の人がいたから話しかけた、見慣れない物を持っている人がいたのでジッと見ていた。そのような刹那的な行為や活動、すなわち環境との相互作用を繰り返しながら、情動や過去の経験、文化的背景を手がかりにして「場所」の構築という文脈が作り出され、やがて人、(地理的意味での)場所、活動の結び付きが習慣化された時に「場所」が構築されていると考えられた。

また、このような過程では、「場所」の構築要因とならなかった環境情報も、新たな「場所」の構築に向けた「アフォーダンス(行為・活動の可能性)」(茂木, 2001, p.126; 瀬嶋, 2001, p.16))として開かれていると考えるべきである。つまり、初めから対象化して環境を捉えている場合とは異なり、相互作用の度に意味が塗り替えられることにより、新たな「場所」構築の可能性が広がると考えられる。実際に、第3章第3節でも示したように本稿調査では「与え合う場所」や「馴染みの場所」の構築過程で入居者や職員との日常的

な接触を通して、それまで‘入居者’や‘職員’と捉えていたのが‘〇〇の特徴をもった△△さん’との捉え方によっていく過程が認められた。これは、相互作用を繰り返す過程で生じる、意味の変化の典型例と言えよう。そして、このような意味の変化によって、新たな「与え合う場所」や「馴染みの場所」の構築へとつながっていることが認められた。

以上をまとめると、本稿調査では、情報提供者達は、環境を意味付ける以前にも感覚・知覚的経験をしており、それが単なる主体側の主観的経験で終わるのではなく、客観的な環境特性との実際的な相互作用を通して、感覚・知覚的経験に意味が付与された概念的経験がなされていることが見出された。

このように、感覚・知覚的経験を初めとする内的な世界と、行為や活動による実際の相互作用との連関によって環境に意味が付与され、主体それぞれに固有の世界を構築することは、Uexkullの環世界論（Uexkull, =2005, p.18-26; 迫田, 2001, p.52-53）でも指摘されている。環世界とは、「主体が主体として生きる固有の世界」（河本, 1999, p.240）である。環世界では、主体の客体に対する関係を機能環（Uexkull, =2005, p.20）によって説明している。機能環では、「動物は受容器で生じてくる感覚を知覚指標として外界に移し入れ、それを客体の特性として捉える一方で、実行器を通じて客体に作用標識を刻みつける。知覚標識と作用標識は、両者の担い手である1つの統一的な客体のうちでたがいに結びつくことによって、客体に対する主体の関係を可能とする」（迫田, 2001, p.52）というものである。

Uexkullは、著書の中でダニを例にあげながら環世界を説明しているが、眼のないダニの場合は全身光覚、嗅覚、触覚が知覚標識となってダニの世界を構築していることを説明し、固有の世界を構築する際の感覚的経験の重要性を示唆している。さらに、先の機能環の引用では、主体が客体に作用標識を刻むことで客体に対する主体の関係が可能となることを説明しているが、これは両者の関係が結ばれる、つまり意味付与されることを説明している。

さらに、時間的文脈性との関係をみると、環境との相互作用の様式や、その結果の解釈の中に過去の経験が取り込まれていると考えられた。また、本稿調査では「与え合う場所」や「馴染みの場所」の構築過程に入居者や職員との日常的な接触を通して、それまで‘入居者’や‘職員’と捉えていたのが‘〇〇の特徴をもった△△さん’との捉え方によっていく過程が認められた。このことは、人と環境の相互作用は、ある意味の構築で完結する過程ではなく、人と環境の双方が変化を伴いながら作動し続ける過程であることを物語っている。

一方、作動し続ける過程に関連して、時間的文脈性は、過去や現在だけではなく、未来にも開かれている。そこで、「場所」の構築過程において未来を検討する際には、アフォーダンスが参考となる。アフォーダンスは、「環境が動物に提供するもの」(佐々木, 2001, p.3)または「環境が生体に対して持つ行為の可能性」(茂木, 2001, p.126)であるが、アフォーダンスの概念に従えば、我々の主観的経験では、単に色や形といった客観的な環境の特性だけではなく、同時に「行為の可能性」も知覚していると理解される(茂木, 2001, p.126)。この「行為の可能性」の知覚は未来志向的であり、「場所」の構築過程の検討の中にこの概念を加えることにより、「未来」や「予期」という時間特性が含まれることとなる。本稿調査でも、主観的経験の中に「行為の可能性」の知覚が含まれていると考えられる語りが認められた。例えば、第3章4節で示した荒川さんは、入居施設選択時の様子を以下のように語った。

... ちょっとした一言なんです。ちょっと待ってて(言い放つ)、って言うのと、ちょっと待ってね(語尾を下げる)って言葉とでは違うでしょう。そこなんです、年寄りに接するってことは、何も撫で回すんでなくてもね、言葉の力ね。尻上りと、尻下がりがあるから、それが一番大事だと思う..

... こっち(Aケアハウス併設の通所介護)の職員さんたちは、柔らかいところがあるから、甘えられるわけよ。私がね、話し易いから、ここなの、こうしてもらえて、ちゃんと受け入れてもらえる..【X+2年11月】

この語りでは、語尾の上がり下がりといった聴覚的経験や、接し方の柔らかさといった質感の経験が、やがて「甘えられる」といった職員との関係の「期待」につながることを示されていた。彼女はAケアハウスに併設する通所介護を「なぜか、ここが気に入って」利用するようになったが、初めは「雰囲気」や「相性」といった漠然とした感覚が生じ、それらの感覚を手がかりにして、実際に施設の人々と相互作用する中で様々な意味付けを行っていた。ただ、このような漠然とした感覚的経験と同時に、今後職員とどのような関係が構築できるかといった「行為の可能性」も知覚し、それが実際の相互作用をもたらしていたと考えられる。

第3章4節でも述べたように、荒川さんは入居先の選択にあたって、自宅近くの複数の施設を見学したり、実際に併設機関を利用していた。彼女が気にかけていたことは、「これまでの交流関係が維持できるかどうか」という点と、あとは「馴染めるかどうか」という

漠然としたポイントだけで、初めから入居したい施設のイメージがあったわけではなかった。ただし、著者と面接した時には見学した施設の職員や利用者の印象を語っており、そのような印象と同時にどのような相互作用の可能性があるかを知覚し、それがケアハウスに対する期待につながっていたと考えることができる。尻下がりの言葉や柔らかいという感覚的経験で表現されるような職員の態度は入居者からの働きかけや言葉の表出をアフォードし、言い放つ言葉として経験される職員の態度は入居者の働きかけの中断や沈黙をアフォードすると考えられる。以上のように、人々が環境の中に「行為や相互作用の可能性」を知覚することによって、未来に向けた時間的文脈が開けてくると思われる。

### 3) 「場所」の構築過程における空間的文脈性

以上、本稿調査に関わる時間的文脈性について述べた。この他にも、本稿調査では、3つの「場所」に関連し、空間的文脈性も認められた。本項の1)で触れたが、本稿調査の情報提供者にはケアハウス内で他の入居者との緊張関係を経験したり、「与え合う場所」を構築する過程で「Trial & Errorの時期」を経験していた。そして、ケアハウス内の緊張関係に巻き込まれ自己を見失いそうになった時には、思う存分‘自分らしい振る舞い’ができる施設外の「場所」、つまり「馴染みの場所」へ戻ることにより、混乱した気持ちをリセットしたり、自分自身を取り戻したりしていた。その後、「馴染みの場所」での行動や活動を手がかりにして再びケアハウス内の関係と向き合うことができていた。このような様子から、本項の1)では過去の経験を現在の関係に取り込む過程と解釈し時間的文脈性に含めて説明した。しかし、「馴染みの場所」とケアハウスを行き来することは、情報提供者達の生活がある単独の領域内にもみ成り立っているのではなく、複数の領域の絡み合いとともに成立していることを示している。このことは、リロケーション後の過程が空間的文脈性を有することも意味する。

本稿調査では、ケアハウスと「馴染みの場所」を行き来する以外にも、年齢が比較的若い情報提供者がケアハウスを離れて、成年期でも老年期でもない自分自身を施設外の大衆の中に紛らわせることにより、過去と現在の接点や、何らかの意味を探していると思われる事例が認められた。さらに、第3章4節で紹介した荒川さんは、ケアハウスへリロケーションした後は、施設内職員を成員とする「受けとめられる場所」で施設に合わせた生活を行っていたが、その間にも施設外の「馴染みの場所」へ行くことにより、そこで「遠慮しないで言いたいことが言える」といった自分に合わせた生活を行う機会を得ており、それによって自分自身のアイデンティに連続性を

もたせることができたと考えられる。これらは、「馴染みの場所」やかつての生活と類似する地理的場所と、ケアハウスを行き来することで、新たな「場所」を構築する手がかりを得ていることを示している。このことは、リロケーション後の「場所」の構築過程が複数の地理的場所によって成立するといった空間的文脈性を帯びていることを示している。

我々の生活が複数の地理的場所のうえに成立していることは、‘生活空間’やトポロジーの概念図式によって人々の行動を説明した Lewin (=1956) も指摘している。南は Lewin の生活空間概念をまとめ、「生活空間は、そのときの主体の意識・行動の文脈に応じていくつかの領域に分節される。それは、あるときには職場、家、友人宅などの具体的な場所の区分であったり、仕事、家庭生活、趣味といった生活領域の区分であったりする。この空間の中には、その時点での自分自身と自分の行動に大きな影響力をもつ目標対象や他者が位置付けられる」(1995, p.8) と述べている。そして、このような複数の領域の相対的位置が、「移動の基礎的可能性」(Lewin, =1956, p.200) になっていくことを示唆している。

また、環境心理学者である Stokols は、人々の日常活動を構成する環境の文脈を、より広範な空間的・時間的・社会文化的な視野から説明している(南, 1995, p.11)。Stokols は、たとえば家から職場への通勤にかかわるストレスという現象を取り扱うときに、よくなされがちな通勤距離とストレス評定との関係を調べるアプローチに代わり、通勤者の生活状況の全体像を把握することが重要であると述べている(=1995, p.11-12)。ここでは、家庭と職場とのあいだに介在するコミュニティの地理的な環境条件や、それらの空間の中を主体がどのような時間的なパターンで移動し、滞在するのかといったことが、通勤者のストレスの文脈的要因になって影響を与えていることが指摘されている(=1995, p.12)。

以上の指摘は、高齢期のリロケーション後の過程を把握する際にも、単独の領域を扱うのではなく、複数の領域やその領域間の関係を扱う必要があることを示唆する。それにより、「移動の基礎的可能性」のような相互作用の「原動力」や個人の主観的な感じ方が生じる背景要因の詳細な理解につながると言える。

しかしながら、高齢期リロケーションの先行研究では、リロケーション先の住居や施設を全体的に捉えており、空間的文脈性を含めた検討が十分に行われていない。例えば、リロケーションの影響とその要因を捉えることを目的とした研究では、リロケーションの結果に影響を与える環境的な介在要因として、社会活動性(斎藤, 2000; 古賀ほか, 2002)、リロケーション後の生活環境に対する評価(斎藤, 1999)、準備プログラムの有無(外山, 1996, p.215)、

新しい環境の予測可能性とリロケーションに対するコントロール可能性 (Schultz & Brenner, 1977) 等が指摘されている。これらの研究では、リロケーション先の住宅や施設をひとまとまりにして、その属性を扱っている。そのため、リロケーション後の生活が複数の領域から成り立っていることを前提としていない。

ただし、先行研究の中には、検討の一部に複数の領域が存在することを含めているものもある。児玉 (1998) は、建築クレームチェックリストを用いて建築学的視点から説明変数に環境変化を含めて詳細な検討を行っている。彼女の研究では、環境変化の程度を、建築の快適性、レクリエーション設備の充実度、身体機能低下への建築学的配慮、建築内の情報の適切さ、建築の安全性、空間・設備の個別性、規模の適切さ、近隣地域施設の利便性等の8項目から調査している。このうち、複数の領域に関連すると思われる項目は、レクリエーション設備の充実度と近隣施設の利便性である。レクリエーション設備の充実度では、クラブ室や運動設備、ラウンジの不足について評価している。一方、近隣地域施設の利便性では、交通の便、商店や医療施設への便等を評価項目にあげている (児玉, 1998, p.76)。ただし、これらの項目は、施設内と施設外の生活空間領域の快適性や利便性の評価によって、各々の環境特性を扱うものである。しかし、それらの快適性や利便性の評価が、いかにして生まれてくるかはこの調査からはわからない。このような環境に対する主観的評価は、他の領域との比較や、以前の生活状況の想起、その領域と主体との具体的な相互作用のあり方によって当然ながら変わってくる。しかし、児玉の評価では、そういった背景要因は調査されていないのである。

また、リロケーション後の適応過程を扱った小倉 (2002, 2005) や外山 (1996) の研究でも、空間的文脈性を含めた検討が十分になされていない。小倉は、環境内のモノ・ケア・人々との接点をみつけ、「ホームとのつながり形成」を行う過程を明らかにしている (2002)。さらに、「安定期」に関する報告では、「ホームとのつながり形成」をもとに、それぞれの楽しみや役割などを作り、自分のペースを守って自分なりの安定した生活を構築していることを示している。このように、「ホームとのつながり形成」を行う過程に関わる条件をホーム内のモノ・ケア・人々としているが、特別養護老人ホームを1つの大きな領域として捉え、複数の領域を想定していない。そのため、つながりを形成したモノ・ケア・人々が同じ領域に存在するのか、違う領域に存在するのかは彼女の報告からは理解できない。

さらに、つながりを形成する人々とは、職員や他の入居者であると説明されている。しかしその一方では、「安定期」の安定した生活

を崩す要因の中に、職員との関係を含めている。そのため、極端な話、「ホームとのつながり形成」がなされても、職員との関係に一度問題が生じてしまえば、ホーム全体との関係は一転してネガティブなものへと転じてしまうことになる。さらに、領域性の曖昧さと共に、中心概念も曖昧なものとなっている。小倉の報告では、「共にいる」という関係や「つながり」を中心概念としており、論文の中ではそれらの概念を「入居者がホームの環境やモノ、人との間に安心して自分らしく生活出来るような関係を作っていくこと」と定義している(2005)。しかし、「共にいる」という関係や「つながり」の中にも程度の違いや多様な様相が含まれていると考えられる。しかし、これについては報告の中では触れられていない。入居者達の実際の生活を考えると、様々な関係や領域のバランスの中で生活しているものと思われる。たとえば、ホーム全体や生活全般に対する評価がネガティブなものであったとしても、それは多様な関係性や領域の評価を総合的に判断した結果と考えるべきである。

一方、外山の報告(1996)では、段階的な領域設定がなされている。報告では、「個人的領域」が、まず「個が守られる空間」、次に「数名の個で共有できる空間」、そして「小規模なグループのまとまりの単位」、さらに「施設全体」といったように段階的に拡がっていく過程を示している(外山, 2003, p.40-45)。さらにその過程の説明では、主体による「私物」の移動によって個室がプライベートなテリトリー、すなわち「身の置き所」が構築されることや、個室に隣接するセミ・プライベートな空間が他入居者と共有される領域へと構築され、入居者の交流の場が出来上がる過程について述べている(外山, 1996, p.222; 2003, p.41-45)。外山の報告は、単なる物理的な構造による領域区分だけではなく、領域へ付与される意味についても扱っている。さらに、外山の報告では、個人的領域が構築される過程での領域間の関係や、そこにいる人々との相互作用を述べていることから、空間的文脈性を扱った報告と言える。外山の言う「身の置き所」とは、「私物」の「持ち込み」、「配置」、「掲示」によって、自己のアイデンティティを空間内に外面化した、プライベートなテリトリーである。さらに、「訪問する」あるいは「呼び込む」といった入居者間の交流を通して、密度の濃い特定の人間関係が醸成される(外山, 1996, p.222)。

本稿調査でも、3つの「場所」の意味が見出されたが、外山の言う「身の置き所」は、本稿調査の「受けとめられる場所」や「与え合う場所」に対応する意味と考えられた。本稿調査においても、廊下やエレベーターといったセミ・プライベート領域、そして多目的室や食堂といったセミ・パブリック領域で出会った入居者と、個室を中心とした領域で密度の濃い関係を結んでいることが認められた。

また、外山の報告では、セミ・プライベート領域での交流が、選択された入居者との間でなされることにも触れている(外山, 1996, p.222)。この点は、本稿調査の結果と一致している。しかし、その選択過程や、本稿調査で認められた入居者間の緊張関係については述べられていなかった。入居者間の緊張関係については、外山の報告が主に特別養護老人ホームでの調査がベースになっているのに対して、本稿調査はケアハウスを対象としていたため、情報提供者の移動能力の相違等が緊張関係の出現頻度に影響した可能性がある。ただ、特別養護老人ホーム入居者を対象にした他の報告の中には、人間関係に悩んでいることを報告するものもあり(本間, 1998, p.28-29)、入居者間の緊張関係の存在を一概に無視することはできない。

また、本稿調査では、施設内には他入居者との緊張関係が存在するため、入居者と密度の濃い関係を構築する際には、他入居者からの眼差しが遮断できる空間性を必要としていることが明らかとなった。さらに、外山の報告にはなかったが、施設外の領域で密度の濃い関係を結んでいる情報提供者の存在が明らかとなった。

この他、外山(1996)の報告では、個人的領域が個室に代表されるプライベート領域から始まって、セミ・プライベート領域、セミ・パブリック領域、パブリック領域へと段階的に拡大していく様子が示されている。しかし、本稿調査では、「場所」の意味の構築が、領域の規模に従って段階的に構築されるといよりも、初期段階では個室といったプライベート領域と同時に、セミ・プライベート領域あるいはセミ・パブリック領域で職員との「受けとめられる場所」が構築されていることが見出された。そのような「場所」を構築することによって、ケアハウスという新しい環境と直面した時に生じる衝撃を和らげたり、セミ・プライベート領域で他入居者との緊張関係を経験したり、「Trial & Errorの時期」によって探索時の心理的ストレスを和らげている様子が見出された。しかし、外山の報告では、職員等を成員とする「受けとめられる場所」に相応する保護的な「場所」の構築には触れていなかった。

このような見解の相違は、「場所」の構築に関わる環境条件、つまり成員やモノの捉え方が外山と本稿調査では異なることが起因としていえる。外山(1996)の報告では成員や室内のモノを対象化してとらえ、意味的な変化を想定していない。しかし、本稿調査では、相互作用の繰り返しによってそれらに付与された意味が変わっていくことが明らかとなった。こういった成員やモノの認識の相違も、「場所」の構築過程の捉え方に影響していると考えられる。ある構造に対する意味付けが変化することは、失語症患者を情報提供者とし「場の意味」の変遷を扱った能智(2006)の報告にも認めら



れる。

能智（2006）は、「場の意味」が変遷する過程について、新たな環境に出会って「その多義性をもつ環境からある種のイメージを受け取り、あるいはそれに対して別のイメージを投げかけるなどして、場の意味を構成してきたと言える。様々な条件のもとで構成されたそのイメージは、夏川さん（；能智の報告の情報提供者の仮名）の行動を媒介すると同時に、夏川さん自身を変化させ、さらにはそのイメージ自体も変化させていくことになる」(p.62)と説明している。このように、実際の相互作用の中で、意味は変わっていく。さらに、関わる領域が拡大すると、それぞれの領域での相互作用の様相が他の領域の相互作用に影響を与え合い、全体的な相互作用のパターンも変わってくると考えられる。そのため、ある領域に付与していた「場所」の意味も、さらにはその「場所」に関わる成員の意味も変化していくものと考えられる。

この他にも、外山の報告と本稿調査の相違として、領域設定の際に施設外の領域を含めているか否かの違いがある。本稿調査では、施設外における領域を設定し、そこには「馴染みの場所」が構築されていることを示した。「馴染みの場所」の意義を他の領域や「場所」との関連で見ると、情報提供者には、ケアハウス内の緊張関係に巻き込まれ自己を見失いそうになった時には、「馴染みの場所」へ戻ることにより、気持ちをリセットしたり、自分自身を取り戻し、その後は再びケアハウス内の関係と向き合うことにつながっていた。また、「受けとめられる場所」で施設に合わせた生活を行っている間にも、施設外の「馴染みの場所」で自分に合わせた生活を行うことにより、自分自身のアイデンティティに連続性をもたせる者もいた。これらは、施設外の「馴染みの場所」とケアハウス内の領域が関連し合うことにより、施設の中での新たな「場所」の構築へと可能性が広がったことを示している。

他方、外山の報告では、施設外領域の設定はなく、代わって地域の人々が日常的に訪れ、様々な活動を展開する場としてのパブリック領域が施設内領域に設定されている。このように、地域に開かれるという意味をもつ領域を施設内に設定し、施設と周辺地域の間が存在していた「壁」を取り払ったことには意義がある。ただ、本稿調査で認められた「馴染みの場所」には、「地域に開かれている」という意味に留まらず、何十年もかけて構築してきたという重みがある。高齢期支援では、顔見知りという意味をもつ「馴染みの関係」という言葉も用いられている。しかし、「馴染みの場所」が意味することは、過去の経験が蓄積されたアイデンティティの宝庫であり、自分と場所、成員、そこで営まれる活動が一体化した、まさに主客非分離的な世界（清水，2000，p.10）を構築する「場所」である。

主客非分離的な場所では、自己から分離して明在的に表現することができない暗在性を有し、それによって自分と他者がつながっている感覚を気分や雰囲気として感じる（三輪，2000，p.280）。「馴染みの場所」では、何十年もにわたる関係により‘顔見知り’という関係を通り過ぎ、同調と互いの引き込みを特徴とする自己と非自己の境界を越えた関係が築かれているのである。

このような関係を施設内に構築するには相応の時間と条件を要するため、施設外の領域を含めた検討が必要になってくる。ただし、特別養護老人ホームの入居条件を考慮すると、施設外の領域との関わりがケアハウス入居者とは異なることも予想される。そこで、特別養護老人ホーム入居者の「馴染みの場所」の特徴と他の領域や「場所」との関係を改めて検討する必要がある。

ところで、空間的文脈性に関連し、異なる領域から検討することの意義には、アフォーダンスとの関わりもある。アフォーダンスには、「行為の可能性」という意味があることはすでに説明した。この他にも、アフォーダンスは、「知覚者の主観が構成するものではなく」（佐々木，1994，p.61）、「客観的に環境の中に実存する特性」と考えられている（瀬嶋，2001，p.16）。つまり、我々は客観的に環境の中に実存する特性から、「行為の可能性」を知覚していることとなる。

この考えに従えば、物質的、構造的側面と、成員間の相互行為や活動、そしてそれによって生じる意味付与の過程は、特定の地理的な場所内に出現することとなる。通常、ある個人は、様々な人々や他の環境的要素と相互行為を行いながら、社会的存在としての自分自身を構築している。そのため、それぞれの相互行為が宿る先の「場所」が複数存在すると考えられる。本稿調査で見出された3つの「場所」の構築も、完全なる認識的な世界として実存する環境から切り離されたものではなく、地理的な場所や実際の成員と重なっていた。「受けとめられる場所」はプライベート領域や施設のセミ・パブリック領域と、「与え合う場所」はプライベート領域やセミ・プライベート領域と、そして「馴染みの場所」は施設外にあるお決まりの近隣領域やその他の広域領域といった具合に、それぞれには実存する所属先が認められた。

ただ、付与された意味が変化していくため、ある領域に付与されている意味が変化したり、あるいは他の意味を併せ持つことはある。このように、異なる領域には異なる意味が付与され、それらのつながりがパターン化されることによって生活全体が作り出されている。そのため、リロケーション後の過程を理解するには、個々の領域を検討するだけでは不十分であり、異なる複数の領域について検討することに意義がある。また、情報提供者の中には、ケアハウス内に

「場所」が構築できる条件を十分に見出せず、施設外や併設機関にまで足を運んで「場所」を構築している者もいた。こういった点からも、異なる領域からリロケーション後の過程を検討する際には、施設内領域だけではなく施設外領域も含める必要があることが、本稿調査によって明らかとなった。

#### 4) ケアハウス全体に対する象徴的意味付け

以上、特に全体を構成する領域から空間的文脈性について述べた。これ以外にも、本稿調査ではケアハウス全体からみた文脈性が存在していた。調査では、領域に重なるように付与される意味以外にも、ケアハウス全体に付与されている意味が見出され、それが各々の「場所」の構築過程にも影響を及ぼしていることが示唆された。特に、その影響は、「与え合う場所」の構築過程に顕著に現われている。第3章第2節で述べたように「与え合う場所」は、セミ・プライベート領域で構築されることが多く、ケアハウスの入居者や職員を主な成員としていた。また、成員間では、〈共生する関係〉が築かれていたが、これには2つのタイプが存在し、成員を共同生活単位と考える場合と、成員同士のニーズが合致し〈共生する関係〉が構築される場合とがあった。

このうち、ケアハウス全体からみた文脈性と関連するのは前者であり、このタイプではケアハウスを1つのコミュニティ集団と捉えて「与え合う場所」を構築していた。コミュニティ集団としての設定範囲は、入居期間や以前の生活習慣によって異なり、両隣、同じ階の人々、ケアハウス全体と様々であった。さらに、そこで行う相互行為や活動の様相も多数存在し、食事や入浴する際の誘い合い、お裾分け、留守にする時の声かけ等から、草刈りによる施設への奉仕等が認められた。このような人々にとっては、ケアハウスには「共同体」という象徴的な意味が付与されていたと考えられる。

ただ、全ての入居者が「共同体」と捉えているわけではないし、すでに述べた通り「共同体」と捉える場合も規模や、相応しいと考える相互行為の様相が異なっていた。そのため、入居者の間で、実際に行われる相互行為やその解釈を巡って「ズレ」が生じ、それが日常の不満やトラブルへ発展することがあった。例えば、「浴室のスリッパを揃えたら注意された」、「具合が悪かったので隣の部屋の人に部屋に食事を運んでもらったら、他の入居者に文句を言われた」等の語りが認められた。

これ以外にも、ケアハウスに付与されている象徴的意味が認められた。情報提供者の中には、ケアハウスに「お年寄りの場所」と、意味付与している者がいた。本稿調査では、比較的年齢の若い者や、ケアハウス内の入居者関係に違和感を覚える者の語りに、このよう

な意味を見つけることが多かった。ケアハウスが「お年寄りの場所」と意味付与される背景には、ケアハウスの入居者間の話、入居者の年齢層、高齢者向けの活動、高齢者向けの食事、職員による保護的な対応等が見出された。具体的には、人の噂話、体調不良の話、入院やお葬式の話になってしまうことや、毎月行われる公園での昼食会、味付けが薄く肉料理が少ない食事等も「お年寄りの場所」であるとの印象を深めさせていた。

「お年寄りの場所」としての意味付けは、心身状態が徐々に低下してきた情報提供者にはうまく適合することが多かった。その日の調子をみながらではあるが、施設が企画した外出行事にはできるだけ参加したり、看護師による健康相談には欠かさず出席するようにしている者もいた。このような入居者がいる一方で、「お年寄りの場所」という意味がうまく適合しない人もいた。比較的年齢が若い情報提供者の中には、「お年寄りの場所」という潜在的な認識のために自分自身をケアハウスから遠ざけ、頻回に外出や外泊を行っている者もいた。これとは逆に、年齢が高い者や心身状態に問題がある者も施設活動にフィットしないことがあった。このような人々の中には、「迷惑をかけてしまうから」と、外出行事に参加しない者もいた。

また、第3章4節で示した荒川さんのように、数名の情報提供者は、入居前からケアハウスに対して「姨捨山」とのイメージをもっていた。そして、「姨捨山」の言葉の中には、「子どもから見捨てられた人が入居する所」、「一人で暮らしていけない人—身体障害や認知症状のある人が入居する所」といった意味合いが込められていた。「姨捨山」のイメージは、実際にケアハウスで生活をすることによって、徐々に変わっていくことが多かった。親切で優しい職員の対応や充実した設備、自由な活動ができることは、イメージを変えるうえで大きな影響を与えた。その一方で、たとえ自分のイメージは変わっても、「世間」のイメージはなかなか変わらないと思う人もまた、多かった。このような事情から、情報提供者の中には、自分が入居したことを友人や知人に知らせていない人もいた。

さらに、職員によるケアハウスへの象徴的な意味付けも認められた。第3章1節でも示したが、施設新聞に職員のコメントとして、安全や安楽の生活、さらには主体的な活動を続けることの勧めが繰り返し掲載されていたことは、ケアハウス全体への意味付けにも影響を及ぼしていた。と同時に、これらは、職員自身が受けとめているケアハウスに対する象徴的な意味付けを表出したものであると考えられた。職員が考え、期待するケアハウスの象徴的な意味は、入居者が安心、安楽に生活できる所であり、健康状態を保ち続けることができる所であった。そしてこのような意味付けが、各階で茶話会や懇談会を開くことや、各種の活動の企画・運営、入居者交流の

勧めとして具体化されていたと考えられる。

ただし、このような職員の意味付けと、入居者との意味付けが必ずしも一致しているわけではなかった。情報提供者の中には、「共同体」における‘役割’や奉仕と考えている活動が、職員には健康状態を保つための活動と捉えられ、それがお互いの認識のズレになり、互いに期待する行動が噛み合わずに情報提供者のストレスになっていることもあった。第3章第2節で示したある情報提供者は、施設に慰問に訪れた人々へのお礼にと自分で作った紙細工を贈っていた。そして、彼女は、この活動を「共同体」における‘役割’と捉えていた。しかし、職員の捉え方はそれとは異なり、情報提供者が健康維持するための活動や個人の生き甲斐と考えていた。このような認識のズレが、材料の買い出し方法に対する考えの違いにつながった。買い出しのために施設送迎を行って欲しいと訴える情報提供者と、家族が「送迎すべき」と言う職員の間でストレスfulな事態が発生していた。まさに、この事例は、象徴的意味付けの違いがストレスを生み出す過程の典型例と言えよう。

以上から、リロケーション後の過程には、各種の領域に重なるようにして付与された意味付けと、ケアハウスという全体に付与されている意味付けがあることが見出された。このような過程は、「場所の二重構築」と解釈される。ケアハウス全体に対する意味付与は、文脈論を展開した Stokols(1987)が指摘する、文化社会的文脈性に相応する。この文化社会的文脈性に関連することとして、第1章第2節の適応概念のレビューの中でも、環境要請には自然環境や物理的環境以外にも社会の価値判断といった文化的側面があり、それらを自らの態度や行動の基準にしながらか適応行動を行っていること(小田, 2004)として触れた。

このように、適応過程における文化社会的影響の指摘はあるが、リロケーションの先行研究ではこの点に関して具体的な分析がなされてこなかった。リロケーションの結果を検討する際に、説明変数の中に環境変化を含めた児玉(1998)の報告の中にも含まれていないし、個人の時間的文脈性を重視する小倉の報告(2002, 2005)や空間的文脈性を重視する外山の報告(1996)にも認められない。外山は、セミ・パブリック領域の空間計画において、「『その気になってもらえる』場の創出」(2003, p.49)の必要性を唱え、「職員によってつくり出されがちな、幼稚で子どもっぽい雰囲気ではなく、成熟した大人の文化が立ちこめる場ができあがっていかなければ、『やらせ』による活性化の限界を超えられない」(2003, p.49)と指摘している。これが、文化社会的文脈に関連する唯一の指摘である。一方で、本項調査では、「場所の二重構築」が明らかになり、文化社会的文脈性が適応行動に影響する(小田, 2004)だけではなく、「場

所」の構築過程にも重要な影響を与えていることが示唆された。このように、地理的な場所や領域を手がかりにしながら「場所」の構築過程に焦点をあてた質的研究の検討により、空間的・時間的・文化社会的文脈性を含めた示唆を得ることができた。

#### 5) 典型事例荒川さん（仮名；第3章第4節で報告）の

「場所」の構築過程の文脈

これまで、本稿調査で認められた「場所」の構築過程の時間的・空間的・文化社会的文脈性について述べてきた。これらの考察の中には、グラウンデッド・セオリー・アプローチの文脈性の乏しさを補うために実施した、典型事例の報告結果も含めている。典型事例として紹介した荒川さんの面接には、時間的、空間的、文化社会的文脈性の全てが認められた。時間的文脈性では、入居に対して否定的な態度をとる息子を2ヶ月かけて説得したことが、愛着処理に関わる過程と考えられた。また、荒川さんの特徴は、入居施設の選択にあたって、複数の施設を見学したり、併設機関を実際に利用する等して、十分な情報収集のもとに選択を行っていたことである。この過程の中で、職員と言葉遣いや態度によって職員との相互作用の可能性を知覚し、そのことが入居後の生活といった将来への期待や予測につながっていた。

また、空間的文脈性では、入居後間もない頃には施設の活動やルールに合わせるように生活していたが、入居前から長い関わりのある「馴染みの場所」を定期的に訪れていた。「馴染みの場所」によって自分らしい振る舞いができる機会をもつことで、一貫した自己を保っていた。文化的文脈性については、ケアハウスに対して「姨捨山」というイメージがあり、それが入居生活に対する不安につながっていることが伺えた。

荒川さんの「場所」の構築過程には、以上の文脈性が認められ、これらは幾人かの情報提供者にも共有される文脈であった。ただし、第3章で報告した荒川さんの語りを再構成する分析では、彼女の語りの中に一貫して流れる「人との関係性を変えない」や「人と一緒にいる、人に囲まれて生活している」という個別的なテーマが見出された。そして、そのテーマが、様々な文脈性や、その時々振る舞いを作っていたと考える。2ヶ月かけて息子を説得したことも、40年以上に渡って会合を続けていることも、「姨捨山」のような所に入るために寂しい思いをするのではないかと不安に思ったことも、「人との関係性を変えない」や「人と一緒にいる」というテーマにつながっているのである。

さらに、これらのテーマは、彼女にとっての「受けとめられる場所」の意味にも影響を与えていた。第3章では、3つの「場所」の

それぞれの意味を定義したが、それらは人々に共有される意味であり、個々人にはその定義を越えた固有の意味付けがある。そして、荒川さんにとっても、「受けとめられる場所」に固有の意味付けがなされていた。施設に対して抱いている安心感は、職員の配慮ある対応によって自尊心を保てるような関わりをしてもらえることや、理解してもらえるという信頼感と、たとえ自分の状態が変わって介護が必要な状態になっても、尊厳ある対応をしてもらうことが期待できるという安心感であった。

さらに、家族との関係に対しての安心感も抱いていた。ケアハウスへ来ることによって、家族との適度な距離感を保つことができ、自分のために家族の和が崩れることがなく、お互い気兼ねすることなく自分のペースで生活を営んでいけるという安心感であった。つまり、荒川さんにとっての「受けとめられる場所」の意味は、荒川さんと職員との間で構築される安心感、そして荒川さんと家族との間で構築される安心感といった二重の安心感によって成立していた。

ところで、荒川さんのテーマでもあった「人と一緒にいる」というと、まずは所属欲求が頭に浮かんでくるし、基本的な欲求としてどの人にも備わっていることと考えやすい。しかし、「友達に財産、子どもたちは宝物」と語る荒川さんにとって、「人と一緒にいる」ということは、所属欲求以上の意味を有するものであった。これまでの生き様が、この一言の中に凝集されたテーマでもある。「人と一緒にいる」、「関係が変わらない」ことを大切に、誰も傷つけないで済むケアハウスへの入居を選び、自分に合わせた生活ができるような所を選ぶために実際に足を運び、誰もが納得できるようにと反対する息子も2ヶ月かかって納得させたのである。「ガスが心配だから入居した」と繰り返す彼女の語りには、誰も傷付けまいとする信念があった。

このようなテーマは、人それぞれによって異なり、各々のテーマが生成される背景を考えると、概念やカテゴリーによって扱うことが難しい。継続比較 (Strauss & Cobin, = 1999) によって概念を生成するグラウンデッド・セオリー・アプローチでは扱いづらいことも事実である。何故なら、特に Straussらの方法では、特性と次元といった比較のための軸を設定する (Strauss & Cobin, = 1999, p.68-71) ことで、現象の捉え方が規定されるからである。ここでは、軸にならない、比較できない文脈は、分析から切り落とされてしまうことになる。小倉の報告 (2002, 2005) は、「共にいる」という関係が形成されていく過程を示したが、その関係がどのように形成されていくかや、何によって形成が妨げられるかについて説明をすることができた。しかし、「共にいる」という関係が、どのような関係なのかについては、概略的な説明に留まっていた。これは、

継続比較による文脈の切り落としも影響していたと考えられる。グラウンデッド・セオリー・アプローチは、現象を鳥瞰図によって描くため、全体像を見渡す際には非常に有意義な方法論と考えられる。しかし、今回指摘したように、文脈性を切り落としてしまう危険もあるため、特に個別的な文脈も考慮にいれながら分析するためには、データを再構成することによって個々の事例を詳細に理解する方法を併用することが有効と考える。



## 第2節 本稿のまとめと今後の居住支援への提言

### 1. 本稿のまとめ

本稿では、自分らしい生活を継続する際には、鍵となる「場所」が存在すると仮定し、ケアハウスへリロケーションした高齢者の「場所」の構築過程を検討した。その結果、本稿調査では鍵となる3つの「場所」として、「受けとめられる場所」、「与え合う場所」、「馴染みの場所」が見出された。これらの「場所」は、主体、物理的な場所、その場所を共有する成員、そして主体と成員達の行為や活動が相互作用を繰り返すことによって、空間的・時間的文脈性を帯び、3つの「場所」の構築がなされていた。

3つの「場所」は、関係性、時間性、空間性の軸によって類型化し、特徴付けることができた。「受けとめられる場所」は、情報提供者の受動的な関係性を特徴とし、この「場所」を管理する成員によって偶然に構築される不安定な「場所」であった。この「場所」では、情報提供者達は、成員からの管理と引き替えに保護される立場にあり、安心感や安全感を得ることができていた。また、「与え合う場所」は、互酬的な双方向の関係を特徴としているが、「受けとめられる場所」と同様に、偶然に構築されることが多い「場所」であった。「馴染みの場所」は、そこに関わる成員全てが能動的な立場をとり、その構築は定例化していることが多く、安定して構築されていた。これら3つの「場所」以外にも、「与え合う場所」から「受けとめられる場所」への移行時期には、成員同士の同質性が高い〈活動パートナー〉の存在が認められた。

3つの「場所」は、これまで報告されている「居場所」の意味に類似していた。ただし、「居場所」は、先行研究では関係性と空間性によって類型化されていたのに対し、本稿調査で認められた「場所」は時間性を重要な特徴としており、類型化にあたっては時間性を十分考慮する必要があることが見出された。

また、それぞれの「場所」を特徴付ける概念も見出された。「受けとめられる場所」が〈保護〉を特徴としていたのに対して、「与え合う場所」は〈位置取りと配置化〉を、「馴染みの場所」は〈親和性〉をそれぞれ特徴としていた。つまり、「与え合う場所」では、主体である情報提供者は、関係構築の可能性を「知り」、「見極め」ながら探索し、互酬的な関係を空間内の座標点としながら、日常生活で行われる相互作用や活動を空間内に配置していたと考えられた。一方、「馴染みの場所」は、成員達が個別で営む個人システムと「場所」の意味が共鳴し、個人システムが「馴染みの場所」に完全に取込

まれ1つのシステムとして起動している状態と考えられた。「馴染みの場所」では、自己と非自己の区別が曖昧となり、その「場所」を構築している情報提供者は自己と「場所」との強い一体感を得ていた。このような「馴染みの場所」の親和性は、長い時間をかけて構築されてきたものであり、このような「場所」が見出されたことは本稿の重大な成果の1つと言える。

「場所」の構築には、環境との日常的な接触を通して、環境情報を「知り」、「見極める」ことにより、「場所」の構築に必要な情報を探索することが重要であった。このような環境情報の探索は、「受けとめられる場所」から「与え合う場所」の移行期に、あるいは「与え合う場所」から〈活動パートナー〉や「馴染みの場所」へと移行する際に認められた。ただし、探索過程においては、「Trial &

Error」によって、情報提供者には一時的に混乱を引き起こすことがあった。しかし、このような過程も、新しい「場所」を構築するための情報を見極めながら得ていく、重要な移行のプロセスと言える。そのため、単にネガティブな影響を及ぼす過程と捉えるのではなく、移行期にあることをふまえ、フォローの方法も検討する必要がある。

さらに、このような情報の探索以外にも、「場所」の構築の妨げとなる干渉作用を見極め、「場所」を構築するための探索活動と干渉作用への対応を同時に行う必要があった。本稿調査で認められた干渉作用の具体例には、成員の喪失、他者からの小さな間接的干渉、緊張感と慎重さを要する入居者関係、アクセスの中断があがった。このように干渉作用への対応と「場所」の構築が行われていたことから、リロケーション後の過程を説明、検討する際には、自己の恒常的維持を扱う「適応」概念を適用するだけでは不十分であり、「場所」概念を用いて構築、再編する過程を説明する必要があることも明らかとなった。

また、「場所」の構築に必要な環境情報の探索にあたっては、意図的に探索している者もいたが、むしろ多くの人々は、日常的な接触を介した、偶然的探索を行っていたと考えられた。この時、実際の相互作用は、実存する環境特性との間でなされていた。つまり、本稿調査では、情報提供者達は、環境を意味付ける以前にも感覚・知覚的経験をしており、それが単なる主体側の主観的経験で終わるのではなく、客観的な環境特性との実際的な相互作用を通して、感覚・知覚的経験に意味が付与された概念的経験がなされていることが見出された。さらに、感覚・知覚的経験の中には、アフォーダンス（行為の可能性）の知覚もあり、将来に向けた具体的な生活像を作りあげていく際の手がかりにもなっていた。

これに関連し、それぞれの「場所」には、実存する所属先が認め

られた。また、一度「場所」が構築されたり、実存する環境に何らかの意味が付与された後も、相互作用の継続によって、付与される意味が変化し続けていることが本稿調査でも確認された。それによって、「受けとめられる場所」が「与え合う場所」へと移行したり、「与え合う場所」から〈活動パートナー〉が見出されることもあった。

以上より、第1章第3節では、本稿の「場所」の定義として、TuanとUexkullの理論を用いて定義をおこなったが、本稿調査の結果においても、主観的経験、実存する環境との実際の相互作用が認められ、「場所」の構築過程を考える上での重要な視座になるものと考えられた。この他、主観的経験とリロケーション後の過程を扱った報告の中には、小倉の報告(2992, 2005)があるが、本稿調査が捉えた主観的経験は小倉が想定するより幅広く、Tuanの報告により近い経験であったことが見出された。

## 2. 今後の高齢期居住支援への提言

高齢期の居住施策では、量的整備から質的整備へと移り変わり、さらに近年においては個別性を尊重した支援のあり方が最重要課題となっている。これまでの支援の特徴は、物理的環境や社会的環境といった構造的側面からの検討が中心であった(井上, 2004; 石井, 2004; 鈴木, 2001; 児玉ほか, 2003)。さらに、高齢者と居住環境を分離して捉え、居住環境そのものにおいても物理的側面と社会的側面がそれぞれ別個に検討されてきた。まさに、自他分離的世界からの検討であったと言える。

高齢期の支援を検討する際の方法論的側面においても、量的な研究手法が用いられ、高齢者の安全感や安心感にネガティブあるいはポジティブに作用する居住環境の要因が検証されてきた。このようなアプローチによって、高齢期の居住水準の向上が図られ、さらに現在は高齢期居住の小規模化や多機能化が推進されるようになっている。ただし、これまでの居住施策では、居住環境は、固定化されたモノや器として考えられており、高齢者からの作用やそれによる居住環境の変化までは考慮されてこなかった。さらに、従来の検討は、統計学的平均値に基づいた支援の検討であり、多くの高齢者に当てはまる画一的なルールに従った支援が行われてきた。このような支援では、多くの高齢者に安心感や安全感をもたらすと考えられる器としての居住環境が、高齢者に提供される。しかし、実際には、高齢者は多様な存在であり、安心感や安全感を得ることのできる居住環境は個々によって異なっている。また、高齢者自身は、自分に合致する居住環境を得るため、環境に働きかけ、環境の変化を引き起

こすのである。しかし、その視点が十分になかったため、従来の支援策の検討では、高齢者個々がもつ多様性に応えることには限界が生じていた。

これに対し、本稿の主題である「場所」の構築過程の検討では、高齢者が物理的環境や社会的環境をどのように経験し、意味を付与していくかに着目している。本稿の「場所」は、高齢者、物理的・社会的環境、高齢者の活動が互いに相互作用し合う過程である。そして、その複雑な関係性の中で、意味が浮上している過程と捉えている。このように「場所」の構築過程を明らかにすることで、高齢者が安心感や安全感、さらにはより高次の欲求充足に必要な環境情報のあり方や、相互作用のあり方を検討することができる。そして、この過程を明らかにすることによって、居住支援の幅も広がると考えている。つまり、固定した器としての環境を提供する支援から、個々の高齢者の状況に連動しながらカスタマイズされていく可変性をもった住まいの支援へと発展することとなる。これによって、構造的な側面からの支援では十分に果たすことができなかった、高齢者の個別性や多様性への支援が可能となる。さらに、高齢者個々が、自らの生活を生み出す「力の発揮」や「推進力」の支援が行えると考える。

では、本稿調査結果を、どのように支援策に結び付けることができるのか。以下に、その点について示す。

### 1) 親和性を高める介入

本稿調査では、「馴染みの場所」の構築にみられたように、自己との親和性が高い「場所」を構築することの重要性が見出された。このような「場所」を構築するためには、「場所」情報との日常的な接触による探索が、非常に重要である。現在の高齢者支援でも、特に対人交流の促しでは親和性の高さを重視している。しかし、支援者によって提供される選択性のない状況は、親和性が高い「場所」を構築するには不十分である。実際には、日常的な接触を通し、「Trial & Error」が何度も繰り返されて、親和性の高い情報に接近することができるのである。このように、高齢者の自由な探索を可能にする支援が重要である。

### 2) 「場所」と「場所」の関連性

本稿調査では、「場所」の構築には、「場所」同士が互いに関連し合っていることが見出された。ある1つの「場所」を単独で扱うことはできないのである。そのため、生活拠点と活動拠点等、複数の「場所」の有機的なつながりを考慮することが重要である。

### 3) 感覚・知覚的経験の重視

環境情報の探索とも関連するが、本稿調査の情報提供者は、実に様々な感覚・知覚的な経験をしていた。従来の、物理的構造に着目

した支援では、思考や意味付与に至る以前の感覚・知覚的経験にはそれほど注意を払ってこなかった。しかし、本稿調査では、情報提供者は支援者側が考えている以上に主観的な経験をしていることが示唆され、この点をふまえた支援が必要である。さらに、「場所」の構築過程では、主観的経験だけではなく、実際の相互作用も重要な役割を担っており、両者がうまく連動できる支援が必要となる。

以上、本稿調査で得られた結果をもとに、「場所」の再構築過程のモデル生成と、今後の居住支援への提言を行った。現在の高齢者支援では、高齢者に安心感や安全感を与える居住環境や活動の機会の提供を目的としている。しかしながら、物質的な場所、成員、活動をそれぞれ分離して捉えており、それらが相互作用して織り成す親和性は考慮されていない。さらに、高齢者自身が、接触を繰り返すことによって、自分自身にとって親和性の高いものを探索し、自分にふさわしい「場所」を構築することには考慮されていない。しかしながら、ケアハウス入居者の「場所」の構築過程では、まさに、この点の重要性が見出された。そこで、個別性を尊重した居住支援を展開するためには、予め固定化された物質的な場所、成員、活動を提供するのではなく、探索しながら構築していく創出の過程を重視した支援を検討する必要がある。本稿調査で得られた成果が、高齢期の個別的で、より豊かな生活を支える支援につながるよう、今後は支援への具体的な応用方法も検討していきたいと考える。

謝辞：本稿調査を実施するにあたり、調査にご協力を頂きました情報提供者の方々、並びに職員の皆様方にお礼申し上げます。また、論文を指導して下さいました米本秀仁先生、時間作りに協力してくれた哲可さんとお留守番をしてくれた嘉基に感謝いたします。

## 文 献

- 相澤亮太郎 (2001) 「場所への愛着に関する人文主義的地理学的研究ーライフヒストリーとテキスト分析」『神戸大学 2000 年度卒業論文』 <http://kobe.cool.ne.jp/aiai813/soturou.html>.
- Aldrich K. (1964) Personality Factors and Mortality in the Relocation of the Aged, Gerontologist, 4(2), 92-93.
- Altman, Irwin, and Low S. M. (1992) Place Attachment, Plenum Pub Corp Press.
- 安藤孝敏 (1994) 「地域老人における転居の影響に関する研究の動向」『老年社会科学』16 (1), 59-65.
- 安藤孝敏・古谷野亘・矢富直美ほか (1995) 「地域老人における転居と転居後の適応」『老年社会科学』16 (2), 172-178.
- 荒木正見編著 (2003) 『場所論と癒し』ナカニシヤ出版.
- 荒木峻・沼田眞・和田攻編 (1985) 『環境科学辞典』東京化学同人.
- Baglioni, A. J. Jr. (1989) Residential Relocation and Health of the Elderly, Markides Kyriakos and Cooper Cary. Aging, Stress and Health, John Wiley & Sons Ltd, 119-137.
- Bontje, Peter (2006) 「移行的な過程：自らの生活活動へ戻っていく過程 *Transitions :Returning back to participation in everyday occupations*」第 10 回作業科学セミナープログラム集.
- Bowlby, John (1980) Attachment and Loss, Vol. Loss : Sadness and Depression, Hogarth Press. (= 1981, 黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子訳『母子関係の理論 Ⅲ対象喪失』, 岩崎学術出版社).
- Lieberman, Morton, H. (1991) Relocation of the frail elderly, Birren, James, E., Lubben, J.E., and Rowe J.C. eds. The concept and Measurement of Quality of Life in the Frail Elderly, Academic Press (= 1998, 古屋健訳「虚弱な高齢者の移転」三谷嘉明ほか訳『虚弱な高齢者の QOL-その概念と測定』医歯薬出版, 150-175).
- Bollnow, Otto F. (1963) Mensch und Raum, Stuttgart (= 1978, 大塚恵一・池川健司・中村浩平訳『人間と空間』, せりか書房).
- Bourdieu, Pierre (1979) La Distinction, Minuit. (= 1990, 石井洋二郎訳『ディスタクシオン Iー社会的判断力批判』, 藤原書房).
- Brand, Frederick, and Smith Richard. (1974) Life adjustment and relocation of the elderly, Journal of Gerontology, 29(3), 336-340.
- Burgess, E. W. (1950) Personal and Social Adjustment in Old age, Derber, M. The Aging and Society, Industrial Relations

- Research Association, Arno Press. (= 2004, 小田利勝『サクセスフル・エイジングの研究』学文社, 45).
- Charmaz, Kathy (2000) Grounded Theory; Objectivist and Constructivist Methods, Denzin, Norman. K. and Lincoln, Y. S. eds, Handbook of Qualitative Research, second edition, Sage Publication, 509-537. (= 2006, 山内祐平・河西由美子「第7章 グラウンデッド・セオリー—客観主義的方法と構成主義的方法」平山満雄監訳『質的研究ハンドブック 2巻』北大路書房, 169-197).
- Chenitz, Carole & Swanson, J. (1986) From Practice to Grounded Theory, Addison-Wesley Publishing. (= 1992, 樋口康子・稲岡文昭監訳『グラウンデッド・セオリー—看護の質的研究のために』医学書院).
- Cohen, Marlene. Z., Kahn, D., and Steeves, R. H. (2000) Hermeneutic Phenomenological Research, Sage Publication. (= 2005, 大久保功子訳『解釈学的現象学による看護研究—インタビュー事例を用いた実践ガイド』日本看護協会出版会).
- Colsher, Patrica, and Wallace, Robert. (1990) Health and social antecedents of relocation in rural elderly persons, Journal of Gerontology, 45(1), s32-38.
- Cotterell (1998) Behavior settings in macroenvironments : Implications for the design and analysis of places, Grittz, Horloff, Mey et al. Children, cities and psychological theories, Walter de Gruyter, 383-404.
- Cutcliff, John. R. and Mckenna, H. P. (1999) Establishing the credibility of qualitative research findings; the plot thickens, Journal of Advanced Nursing, 30(2), 374-380.
- Denzin, Norman. K. and Lincoln, Y. S. eds (1994) Handbook of Qualitative Research, Sage Publication.
- (2000) Handbook of Qualitative Research, second edition, Sage Publication.
- Dubos, Rene (1980) Man Adapting, Yale University Press (= 1982, 木原弘二訳『人間と適応—生物学と医療 第2版』みすず書房).
- Eckert, Kevin, and Haug, Marie. (1984) The impact of forced residential relocation on the health of the elderly hotel dweller, Journal of Gerontology, 39(6), 753-755.
- Ferraro, K.F. (1982) The health consequences of relocation among the aged in the community. Journal of Gerontology 38 90-96.
- Frank, Gelya (1996) The Concept of Adaptation as a Foundation for Occupational Science Research, Zemke, Ruth., Clark, F.

- Occupational Science: the evolving discipline, F.A. Davis, 47-56. (= 1999. 永井洋一訳「適応の概念—作業科学研究の基礎」佐藤剛監訳『作業科学—作業的存在としての人間の研究』三輪書店, 53—62).
- Feil, Naomi (1993) The Validation breakthrough ; Simple Techniques for Communicating with People with “ Alzheimer’s-Type Dementia “, Health Professions Press. (= 2002, 藤沢嘉勝監訳『バリデーション—痴呆症の人との超コミュニケーション法』筒井書房).
- Flick, Uwe. (1995) Qualitative Forschung. Rowohlt Taschenbuch. (= 2002, 小田博志・山本則子・春日常訳『質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論』春秋社).
- 藤ヶ谷明子『今すぐ役立つ介護シリーズ 4 老後の居場所 一生後悔しない選び方—老人ホーム・施設のことがよくわかる』創元社.
- 藤竹暁・江原由美子・芹沢俊介 (2000) 「座談会 居場所」藤竹暁編『現代のエスプリ別冊 現代人の居場所』至文社, 9—34.
- Geertz, Clifford. (1973) The Interpretation of Cultures, Basic Books. (= 1987, 吉田禎吾訳『文化の解釈学』岩波書店).
- 巖爽・石井敏・外山義ほか (1999) 「痴呆性高齢者のためのグループホームにおける空間的環境と生活構成・介護行為の関わり」『病院管理』36 (3), 67—76.
- Glaser, Barney (1978) Theoretical Sensitivity ; Advances in the Methodology of Grounded Theory, The Sociology Press.
- Glaser, Barney and Strauss, A. L. (1965) Awareness of Dying. Aldine publishing. (= 1988, 木下康仁訳『死の Awareness of Dying 理論と看護—死の認識と終末期ケア』医学書院.
- (1967) The Discovery of Grounded Theory; Strategies for Qualitative Research, Aldine. (= 1996, 後藤隆・大出春江・水野節夫訳『データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか』新曜社).
- Grbich, Carol. (1999) Qualitative Research in Health, Allen & Unwin Pty Ltd. (= 2003, 上田礼子・上田敏・今西康子訳『保健医療職のための質的研究入門』医学書院).
- Ferraro, Kenneth, (1982) The health consequences of relocation among the aged in the community, Journal of Gerontology, 38(1), 90-96.
- 迫田健一 (2001) 「環境世界論」木田元編『現代思想フォーカス 88』新書館, 52—53.
- Hamilton, Toby B. (2004) Occupations and Places, Christiansen, Charles H ed. Introduction to Occupation : The Art and Science



- of Living, Prentice Hall, 173-196.
- Harris, Diana K. (1988) Dictionary of Gerontology, Greenwood.  
(= 2004, 小田利勝『サクセスフル・エイジングの研究』学文社,  
45).
- Hammersley, Martyn and Atkinson, P. (1995) Ethnography :  
principles in practice, second edition, Routledge.
- 早川和男 (2005) 「居住福祉の視点と居住支援の考え方」『OT ジャ  
ーナル増刊号』39 (7), 550-556.
- 日高敏隆 (2003) 『動物と人間の世界認識 - イリュージョンなしに  
世界は見えない』筑摩書房.
- 平岩和美・畑野栄治 (1997) 「転居老人の現状と問題」『総合リハ』  
25 (8), 777.
- 平山満義 (1997) 「第 3 章 エスノグラフィー法による信頼性と妥  
当性」平山満義編著『質的研究法による授業研究』北大路書房,  
50-69.
- 平山尚 (1995) 「2 章 エコロジカル・システム・モデル」平山尚・  
平山佳須美・黒木保博・宮岡京子『社会福祉実践の新潮流 - エコ  
ロジカル・システム・アプローチ』ミネルヴァ, 23-36.
- Holloway Immy., Wheeler S. (2002) Qualitative Research in  
Nursing second edition, Blackwekk Science. (= 2006, 野口美  
和子監訳『ナースのための質的研究入門 第 2 版 - 研究方法から  
論文作成まで, 医学書院]).
- 本間郁子 (1998) 『特養ホーム入居者のホンネ. 家族のホンネ』あ  
けび書房.
- 保坂礼子・瀧澤雄三 (2003) 「ケアハウスにおける介護認定状況及  
び特定施設入所者生活介護の認定状況について - ケアハウスの計  
画に関する研究 その 3」『日本建築学会大会学術講演梗概集 (東  
海)』541-542.
- 池野多美子・長田久雄 (2004) 「高齢者のダム建設に伴う転居後の  
適応: 抑うつに関する要因について」『老年社会科学』25 (4),  
440-449.
- 伊佐地大輔・上野淳 (2002) 「ケアハウス居住者の生活展開と生活  
領域の拡がりに関する研究」『日本建築学会計画系論文集』557,  
149-156.
- 今田高俊 (2005) 『自己組織性と社会』東京大学出版会.
- 今村顕・森一彦・宮野道雄 (2006) 「環境適応における繰り返し経  
路探索と環境要素に関する研究 - 注視行動からみた高齢者施設の  
アンカーポイントに関する研究」『日本建築学会計画系論文集』  
599, 65-72.
- 伊東翔・瀧澤雄三 (2003) 「ケアハウス在所者の入退所前後の居住

- 形態及び身体状況について一ケアハウスの計画に関する研究 その3』『日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）』539-540.
- 岩井眞治（2001）「1章 環境刺激と人間」岩田紀編『現代応用社会心理学講座—2 快適環境の社会心理学』8-28.
- 加藤寛（2003）『2004-05 ライフデザイン白書—新しい生活価値観が変えるライフデザイン』第一生命経済研究所.
- 加藤義信（1995）「第12章 空間認知研究の歴史と理論」空間認知の発達研究会編『空間に生きる—空間認知の発達の研究』北大路書房, 220-249.
- 権且純（2006）『図解 ウマが合う人, 合わない人—「相性」をチャンスに変える心理法則』PHP研究所.
- 川上伊勢子（2001）「子どもの近くに転居し適応した高齢者の特性」『日本看護学会誌』10（1）, 60-68.
- 川口孝泰（2002）『看護研究ガイドマップ』医学書院.
- 河本英夫（1995）『オートポイエーシス 第三世代システム』青土社.
- Killian, Eldon, (1970) Effect of geriatric transfers on mortality rates, Social Work, 15, 19-27.
- 木下康仁（1999）『グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生』弘文堂.
- （2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂.
- 古賀紀江・高橋鷹志・外山義ほか（2002）「環境移行における『もの』の意味に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』551, 123-127.
- 国際科学振興財団（1985）『科学大辞典』丸善.
- 児玉桂子（1997）「高齢者の転居と環境適応—高齢者向け住宅の場合」『日本社会事業大学設立50周年記念論文集 社会福祉システムの展望』中央法規, 237-250.
- （1998）『高齢者居住環境の評価と計画』中央法規.
- 厚生省大臣官房政策課（1997）『平成9年度版社会保障入門』中央法規.
- 厚生労働省（2003）「2015年の高齢者介護」  
(<http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/kentou/15kourei/1.html>).
- （2004）「平成16年簡易生命表」  
(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life04/index.html>).
- 高齢人口移動調査研究委員会（1999）『市川市高齢移動者実態調査研究報告書—21世紀・高齢社会に関する調査研究：平成10年度』エイジング総合研究センター.

- (1998)『札幌市高齢移動者実態調査研究報告書—21世紀・高齢社会に関する調査研究』エイジング総合研究センター。
- 小山剛 (2006)「地域密着型サービスの展開」『総合ケア』16(4), 22-27.
- 工藤禎子・三国久美・深山智代 (1995)「寒冷広域地域における高齢者の死亡前1年間の居場所の変化」『日本看護科学会誌』15(3), 109.
- 倉戸ツギオ編著 (2001)『臨床人間関係論—豊かな人間関係をはぐくむために』ナカニシヤ出版。
- 栗原道子 (2005)『こんな家で死にたい—ヘルパーな探した終の住処』エクスマレッジ。
- Leininger, Madeleine ed. (1985) Qualitative Research Methods in Nursing, Grune & Stratton. (=1997, 近藤潤子・伊藤和弘監訳『看護における質的研究』医学書院)。
- Lewin, Kurt. (1951) Field theory in social science. New York. (=1956, 猪股佐登留訳『社会科学における場の理論』誠心書房)。
- Liberman, Morton, H. (1991) Relocation of the frail elderly, Birren, James, E., Lubben, J. E., and Row J.C. eds. The concept and Measurement of Quality of Life in the Frail Elderly, Academic Press (=1998, 古屋健訳「虚弱な高齢者の移転」三谷嘉明他訳『虚弱な高齢者のQOL—その概念と測定』医歯薬出版, 150-175)。
- Lofland, John & Lofland, L. (1995) Analyzing Social Settings ; A guide to Qualitative Observation and Analysis. 3rd. edn., Wadworth Publishing. (=1997, 進藤雄三・宝月誠『社会状況の分析—質的観察と分析の方法』恒星社厚生閣)。
- Maddox, Geroge.L. and Atchley, R.C. eds The Encyclopedia of Aging, Springer Pub. (=1997 エイジング大事典刊行委員会『エイジング大事典』早稲田大学出版)。
- 前田大作 (1982)「老人のリロケーション・エフェクト—特別養護老人ホーム入所の場合」『社会老年学』16, 3-9.
- 牧野智恵 (2000)「未告知状況下におけるがん患者の家族と看護者の世界—現象学的方法論を用いた面接を通して」『日本看護科学会誌』20(1), 10-18.
- Markus, Elliot., Blenkner, Margaret and Thomas, Downs et al (1971) The impact of relocation upon mortality rates of institutionalized aged person, Journal of Gerontology, 24(4), 537-541.
- Markus, Elliot., Blenkner, Margaret and Thomas, Downs et al (1972) Some factors and their association with post-relocation

- mortality among institutionalized aged persons, Journal of Gerontology, 27(3), 376-382.
- 松村操・永田志津子・布上恭子・佐藤みゆき (2004) 「高齢者下宿の現状と課題—ケアハウス・有料老人ホームとの比較を通して」『高齢者問題研究』20, 7-25.
- Merleau-Ponty, M. (1945) PHENOMENOLOGIE DE LA PERCEPTION, (=1993, 竹内芳郎・小林貞孝訳『知覚の現象学 I』みすず書房).
- 三毛美予子 (2002) 「ソーシャルワークの調査方法としてのグラウンデッド・セオリー・アプローチ」『ソーシャルワーク研究』27 (4), 18-27.
- (2003) 『生活再生にむけての支援と支援インフラ開発—グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく退院援助モデル化の試み』相川書房.
- Miller, David and Liberman, Morton. (1965) The relationship of affect state and adaptive capacity to reactions to stress, Journal of Gerontology, 491-497.
- Milligan, M.J. (1998) Interactional Past and Potential: The social Construction of Place Attachment, Symbolic Interaction 21, 1-33 (=2003, 園田美保・南博文「第3章 『場所』としての居場所の記述的分析—場所の捉え方とその場にまつわる過去・未来」住田正樹・南博文『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版, 83-100).
- 南博文 (1995) 「人生移行のモデル」南博文・やまだようこ『講座生涯発達心理学5 老いることの意味—中年・老年期』金子書房, 1-40.
- 三輪敬之 (2000) 「第3章 共創における生命コミュニケーション」清水博編著『場と共創』NTT出版, p.273-339.
- 水野敏子・高崎絹子 (1998) 「子供の近くに転居してきた『呼び寄せ老人』に関する研究」『老年看護学』3 (1), 79-88.
- 水島広子 (2004) 「第5章 相手とのズレに悩むとき」『自分でできる対人関係療法』創元社, 70-89.
- 茂木健一郎 (2002) 『心を生み出す脳のシステム』NHKブックス.
- (2004) 「第一章 見渡しの形式としての〈私〉」『脳内現象—〈私〉はいかに創られるのか』NHKブックス, 18-47.
- 森永光典・片岡正喜・鈴木義弘ほか (1996) 「ケアハウスへの生活拠点移動 (リロケーション) に関する研究—その1 入居理由」『日本建築学会大会学術講演梗概集』231.
- 森岡清美・塩原勉・本間康平 (1993) 『新社会学辞典』有斐閣.
- 村川浩一 (2006) 「介護保険改革から2015年へ」『総合ケア』16(4),

- 盛山和夫 (2004) 『社会調査法入門』有斐閣ブックス.
- 中村寿美子 (2005) 「part3 失敗しない入居までのプロセス」『月刊 Nursing 別冊 高齢者の住まいと暮らしセレクトガイド』Gakken, 87-126.
- 中里克治・下仲順子・長谷川和夫 (1980) 「ホーム入居と老人の適応 (1) - 認知機能面を中心にして」『社会老年学』12, 59-73.
- 中里克治・下仲順子・小栗龍郎他 (1988) 「施設間移動における老人の心理的適応」『社会老年学』27, 14-21.
- 中里克治・下仲順子・権藤恭之ほか (1994) 「特別養護老人ホーム入所と心理的適応」『社会老年学』39, 35-41.
- 内閣府 (2002) 『高齢者の生活と意識 - 第5回国際比較調査結果報告書 -』ぎょうせい.
- 波平恵美子・道信良子 (2005) 『質的研究 Step by Step - すぐれた論文作成をめざして』医学書院.
- 日本医療福祉建築協会 (2005) 『医療・高齢者施設の計画法規ハンドブック - 建築に関する基準と概要の留意点』中央法規.
- 西下彰俊・坂田周一 (1986) 「特別養護老人ホーム入所1年後のADLおよびモラルの変化」『社会老年学』, 24.
- 新村出編 (1998) 『広辞苑 第5版』岩波書店.
- 能智正博 (2003) 「『適応的』とされる失語症者の構築する失語の意味 - その語りに見られる重層的構造」『質的心理学研究』2, 89-107.
- (2006) 「ある失語症患者における“場の意味”の変遷」『質的心理学研究』5, 48-69.
- 小田利勝 (1991) 「高齢者の適応に関する概念的 - 考察」『徳島大学社会科学研究』第4号, 203-221.
- (2004) 『サクセスフル・エイジングの研究』学文社.
- 小笠原祐次 (1999) 『“生活の場”としての老人ホーム』中央法規.
- 小倉啓子 (2002) 「特別養護老人ホーム新入居者の生活適応の研究 - 「つながり」形成プロセス」『老年社会科学』24(1), 61-70.
- (2005) 「特別養護老人ホーム入居者のホーム生活に対する不安・不満の拡大化プロセス - ‘個人生活ルーチン’の混乱」『質的心理学研究』4, 75-92.
- 小野操・鈴木晃 (1996) 「高齢者の住居移動に関する住宅支援の検討 - 公営住宅建て替え移転の事例をとおして」『日本公衆誌』43 (10), 159.
- 大原一興・鈴木成文 (1992) 「軽費老人ホーム入所に至る要因と入所後の生活 - 高齢者の生活拠点移動に関する研究1」『日本建築学会計画系論文報告集』442, 65-72.
- Oxford University Press (2003) Oxford Dictionary of English.

Oxford University Press.

- Patterson, Kerry, Grenny Joseph and McMillan, Ron et al (2002) Crucial Conversation, The McGraw Companies. (= 2004, 本多佳苗・千田彰訳『言いにくいことを上手に伝えるスマート対話術』講談社).
- Pope, Catherine and Mays Nicholas (1999) Qualitative Research in Health Care (second edition), BMJ Books. (= 2001, 序章 ブラックボックスを開くー保健・医療サービス調査研究部門の廊下での議論『大滝純司監訳, 質的研究実践ガイドー保健・医療サービス向上のために』医学書院, p 1-9).
- Punch, Keith. F. (1998) Quantitative and Qualitative Approaches, Sage Publication. (= 2005, 川合隆男監訳『社会調査入門ー量的調査と質的調査の活用』慶應義塾大学出版会).
- Pope, Catherine and Mays N. (1999) Qualitative Research in Health Care, 2nd edn, BMJ Publishing Group. (= 2001, 大滝純司監訳『質的研究実践ガイド 保健・医療サービス向上のために第2版』医学書院).
- Ropner, Janice, A. & Shapira, J. (2000) Ethnography in Nursing Research, Sage Publications. (= 2003, 麻原きよみ・グレッグ美鈴訳『エスノグラフィー』日本看護協会出版会).
- 戈木クレイグヒル滋子 (2006)『質的研究方法ゼミナールーグラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ』医学書院.
- Relph, Edward (1976) Place and Placelessness, Pion limited. (= 1999, 高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳『場所の現象学ー没場所性を越えて』ちくま学芸文庫).
- 李東熙・片岡正喜・鈴木義弘他 (1996)「ケアハウスへの生活拠点移動 (リロケーション) に関する研究ーその1 入居前後における住宅実態」『日本建築学会大会学術講演梗概集』233.
- 李東熙・片岡正喜・鈴木義弘 (1998)「高齢者生活福祉センターへの生活拠点移動の要因とプロセス」『日本建築学会計画系論文集』511, 115-122.
- 李東熙・片岡正喜・鈴木義弘 (1999)「高齢者生活福祉センターへの生活拠点移動の住生活と問題」『日本建築学会計画系論文集』517, 157-164.
- Rowles Graham, D. (1991) Beyond Performance : Being in Place as a Component of Occupational Therapy, Journal of Occupational Therapy, 45, 265-271.
- (2003) The Meaning of Place as a Component of Self, Crepeau Elizabeth, B., Cohn E. S., and Schell B.A. Willard & Spackman's Occupational Therapy, Lippincott

- Williams & Wilkins, 111-119.
- 佐伯啓思 (2001) 「社会システム論」 木田元編『現代思想フォーカス 88』新書館, 107-109.
- 戈木クレイグヒル 滋子 (2006) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ—理論を生み出すまで』新曜社.
- 坂上真理 (2002) 「居住環境移行した虚弱高齢者が日常意識しているテーマ：予防的作業療法プログラム立案のための予備的研究」『作業療法』21 特別号, 354.
- 坂上真理 (2004a) 「リロケーション後の場所の再構築過程—あるケアハウス入居者の語りから—」『作業療法』23, 特別号, 426.
- 坂上真理 (2004b) 「南カリフォルニア大学のライフスタイル再構築プログラムの日本における実践の可能性」『作業療法ジャーナル』38(9), 845-849.
- 坂上真理 (2005) 「ケアハウス入居者の‘場所’の再構築過程に関する研究」『高齢者問題研究』21, 85-93.
- 坂上真理 (2006) 「予防のための作業療法プログラム実施に向けたニーズ調査—高齢期の健康的なライフスタイルを構築するための課題領域」『日本健康行動科学学会 第5回学術大会大会抄録集』, 52.
- 佐治守夫 (1993) 「適応」加藤正明編『新版精神医学辞典』弘文堂, 561.
- 佐々木正人・三嶋博之編 (2001) 『アフォーダンスと行為』金子書房.
- 齋藤民・杉澤秀博・岡林秀樹・柴田博 (1999) 「別荘地域に転居した高齢者の精神健康とその関連要因に関する研究」『日本公衆衛生』11, 986-1002.
- 齋藤民・吉田亨 (1997) 「高齢者のリロケーションと適応」『保健の科学』39, 226-230.
- 齋藤民・杉澤秀博・岡林秀樹他 (2000) 「高齢者の転居の精神的健康への影響に関する研究」『日本公衆誌』47(10), 856-865.
- 澤岡詩野 (2003) 「シニア住宅と軽費老人ホームにおける自立高齢者の欲求と入居後の適応状況に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』564, 251-255.
- Schulz, Richard and Brenner, Gail (1977) Relocation of the aged: A review and theoretical analysis, Journal of Gerontology, 32(3), 323-333.
- 瀬嶋貞徳 (2001) 「アフォーダンス」木田元編『現代思想フォーカス 88』新書館, 16.
- 嶋信宏 (1992) 「ストレスとコーピング」氏原寛・小川捷之・東山紘久他『心理臨床大辞典』2000, 46-48.

- 清水博 (2000) 「共創と場所—創造的共同体論」 清水博編著『場と共創』NTT出版, p.23-178.
- 下中邦彦編 (1981)『新版心理学事典』平凡社.
- (1981)『世界大百科事典 21』平凡社.
- シニアライフ情報センター (2001)『最新ケアハウスガイド—ケアハウスで介護もできる全国 1289 施設紹介・Q&A 集』中央法規.
- 袖井孝子 (2002)『日本の住まい変わる家族—居住福祉から居住文化へ』ミネルヴァ書房.
- 染谷淑子 (2000)『老いと家族—変貌する高齢者と家族』ミネルヴァ書房.
- 園田美保・南博文 (2003)「第 3 章 「場所」としての居場所の記述的分析—場所の捉え方とその場にまつわる過去・未来」住田正樹・南博文『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版, 83-100.
- 総務省 (2002)「統計局 平成 12 年国勢調査」(<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2000/idou1/00/01.htm>).
- Stokols, D., (1987) Conceptual strategies of environmental psychology. Stokols, and Altman, I. Handbook of environmental psychology, Wiley, 41-70 (=南博文 (1995)「人生移行のモデル」南博文・やまだようこ『講座生涯発達心理学 5 老いることの意味—中年・老年期』金子書房, 1-40).
- Storandt, Martha., and Wittels, Ilene (1975) Maintenance of function in relocation of community-dwelling older adults, Journal of Gerontology, 30(5), 608-612.
- Strauss, Anselm and Corbin, J. (1998) Basic of Qualitative Research : Grounded Theory Procedures and Techniques, 2<sup>nd</sup>, Sage Publication. (=1999, 南裕子監訳『質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリーの技法と手順』医学書院).
- 住田正樹 (2003)「序章 子どもたちの「居場所」と対人的世界」『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版会, 3-20.
- 鈴木敏彦 (2005)「日本の住まいと関連施策の変遷—社会福祉施策と住まい」『OT ジャーナル』557-562.
- 橘弘志・外山義・高橋鷹志ほか (1997)「個別型特別養護老人ホームにおける個室の個人的領域形成に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』500, 133-138.
- 橘弘志・外山義・高橋鷹志 (1999)「特別養護老人ホーム入居者の個人的領域形成と施設空間構成: 個室型特別養護老人ホームの空間構成に関する研究その 2」『日本建築学会計画系論文集』523, 163-169.



- 高野岳彦 (1999) 「訳者あとがき—人間主義地理学とエドワード・レルフ」エドワード・レルフ (高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳) 『場所の現象学—没場所性を越えて』ちくま学芸文庫, 328-341.
- 竹中星郎 (2000) 「第5章 生きる空間が狭まる」『高齢者の孤独と豊かさ』日本放送協会出版会, 107-122.
- 瀧澤雄三・高橋英行・伊藤絢夏他 (2004) 「ケアハウス居室の床面積推移と水廻り設置状況」『日本建築学会大会学術講演梗概集 (北海道)』273-274.
- 高橋順一 (1998) 「第2章 データの収集」高橋順一・渡辺文夫・大淵憲一編著『人間科学 研究法ハンドブック』ナカニシヤ出版, 11-22.
- 田辺繁治 (2002) 「序章 日常実践のエスノグラフィー語り・コミュニティ・アイデンティティ」田辺繁治・松田素二『日常実践のエスノグラフィー語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社, 1-39.
- 寺本潔 (2003) 「第7章 子どもの居場所の地理学的分析」住田正樹・南博文『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版, 247-267.
- 外山義 (1996) 「第11章 高齢者の住生活活動」中島義明・大野隆造編『すまう—住行動の心理学』朝倉出版, 210-226.
- (1997) 「高齢者居住施設における生活領域と環境移行」相馬一郎『高齢者の環境移行と快適環境の形成に関する研究』平成6-8年度科学研究費補助金基盤研究 (A) 研究報告書, 99-108.
- (2001) 「生活空間論⑥ 落差をうめるために (3) 中間領域の重要性」『看護研究』42 (6), 426-429.
- (2003) 『自宅でない在宅—高齢者の生活空間論』医学書院.
- 津吹悠太・瀧澤雄三 (2003) 「ケアハウスの立地環境と周辺希望施設について—ケアハウスの計画に関する研究 その3」『日本建築学会大会学術講演梗概集 (東海)』543-544.
- 特定施設事業者連絡協議会 (2006) 「特定協 Net. 特定協とは」 (<http://tokuteikyoo.jp/about/index.html>).
- Townsend, P. (1962) The last refuge - A survey of residential institution and home for aged in England and Wales, Routledge and Kegan. (= 1980, 中里克治・下仲順子・長谷川和夫「ホーム入居と老人の適応 (1) - 認知機能面を中心にして -」『社会老年学』12, 57-73).
- 富永健一 (1995) 「システム—環境分析のモデルとしての社会システム」『行為と社会システムの理論—構造・機能・変動理論をめざして』東京大学出版会, 168-193.
- Tuan, Yi, F. (1974) Topophilia : A study of environmental

- perception, attitude, and values.(=1991, 小野有五, 阿部一訳『トポフォリアー人間と環境』せりか書房).
- (1977) Space and Place ; The Perspective of Experience, University of Minnesota Press. (=1993, 山本浩訳『空間の経験—身体から都市へ』ちくま学芸文庫).
- 内出幸美 (2006) 「グループホームの実践的課題と質の向上」『総合ケア』16 (4), 28-31.
- 内山靖編 (2004) 『環境と理学療法』医歯薬出版.
- Uexkull, Jakob (1970) Streifzuge Durch Die Umwelten Von Tieren Und Menschen, Fischer Verlag. (=2005, 日高敏隆・羽田節子訳『生物から見た世界』岩波書店).
- Willing, Carla (2001) Introducing Qualitative Research in Psychology, Open University Press. (=2003, 上淵寿・大家まゆみ・小松孝至訳『心理学のための質的研究法入門—創造的な探求に向けて』培風館).
- Wilson, Skodol and Hutchinson, S. A. (1996) Methodologic Mistake in Grounded Theory, Nusing Research, 45(2), 122-124.
- Wittels, Ilene, and Botwinick, Jack (1974) Survival in relocation, Journal of Gerontology, 29(4), 440-443.
- 山田尋志 (2006) 「ユニットケアをめぐる現状と課題」『総合ケア』16 (4), 32-35.
- 山岸健 (2001) 『人間的世界の探求—トポス／道／旅／風景／絵画／自己／生活／社会学／人間学』慶應義塾大学出版会.
- 山本啓太郎 (1999) 「1章 社会福祉施設の展開」小笠原祐次・福島一雄・小國英夫『社会福祉』有斐閣.
- 山本多喜司 (1992) 「第1章 人生移行とは何か」山本多喜司・S・ワップナー編著『人生移行の発達心理学』北大路書房, 2-24.
- 山本則子・萱間真美・太田喜久子他 (2002) 『グラウンデッドセオリー法を用いた看護研究のプロセス』文光堂.
- 安詰寓・小伊藤亜希子 (2004) 「特別養護老人ホーム, 及びケアハウス入所高齢者の生活拠点移動に関する考察」『生活科学研究誌 (居住環境分野)』3, 99-106.
- Zemke Ruth (2004) The 2004 Eleanor Clarke Slagle Lecture ; Time, Space, and the Kaleidoscopes of occupation, Journal of Occupational Therapy, 58, 608-620.

料 : 分析ワークシート例

概念名	与え合う場所 giving & receiving 'place'; giving each others
討概念名	喜ばれる自分を実感する 出来ない人に対して代わりにしてあげるといった他者への貢献により、彼女も他者から喜ばれる経験をする といった「喜ばれる自分を実感する」'場所'. ～デイサービス, 特養  ・支えあう場所?
義	社会的居場所(藤竹)の1つ, 互酬的な関係により構築される 他者への配慮や他者の役に立つ行為によって喜ばれる体験を伴い, 自分が必要とされていることを実感し, 自己確認や自己尊重が生じる場所 高齢者援助のキーワードの1つである'役割'とも関連 例)No32:デイサービス特養 繰り返される依頼があつて, 求められていることが実感できる 自分も気持ちを伝えて, 相手からも同じように気持ちが返ってきて受け取ることができる
連概念	構築条件(要素?)→直接的構成条件・戦略的構成条件, 阻害条件(要素?), 喪失条件 媒介している要素⇒モノ, 言葉(感謝の言葉・冗談を言ってムードメーカーになっている), 行為(技術) 関係している期間, 日常的に接触している きっかけの生成(与えてもらう機会を作る) 自己からの働きかけ, 感謝(対等性の確保)～お願いする人を吟味して自らお願いすることによって受身ではなく能動的な存在になる 助け合いの関係  (構成)成員の特性, 場所の作用, 成員内での立場(経験者・見本)
一タからの発見 特徴	・「与え合う場所」は空間性, 関係性ととも, それもまた各々の「場所」を伴う行為や活動のつながりによって構築され ている。そして, 行為や活動の内容によって, 「場所」が個人にもたらす影響の違いが生じていた。 ・関係では, 全く対等で共同体的なものと, 優劣がある場合がある。それに伴い, 優性側からの語りと, 劣勢側からの語りがある (No32⇔No27) ・劣の場合, 成員の特性による。相手が, 若い, 元気のいい人ということで頼んでも問題のない人→遠慮や自己像の低下を和らげている ・技術や物の提供だけでなく, 「見本」という与え方もある
先行研究	「与えあう関係」: 外山義, 自宅でない在宅 p37, p15
対比概念 証拠例	・迷惑をかけないことで与えらる関係・場所 nothing and receiving ・なるべく子供に負担をかけない～だから子供だって親をね大事にしてくれるしよ(33-1-479~482)
引次元カテゴリー 類似カテゴリー	・受けとめ受けとめらえる場所 ・気のおけない場所 ・自由な場所 ・いたわり合う場所
検討事項	「お風呂に行くときに声を掛け合う」は与え合う関係になるのか? (34-1-380~383)→共同体, 共同生活 No1の部屋(障の入室者): ~たまにとしよっちゃうの間くらい, ~時々(お菓子)あつたらもってって(No34-1-213~219)  ケアハウス全住: あそこで座っておしゃべりしたり, お食事の時もおしゃべりしたりしてますよ。いろんな人達と, 寂しい人も中にはいらつしゃると思うのね, こう胸開いてしゃべれる人, でないとあれかなあ, なるべく私, 声かけるように, もうしてるんだけど, ~いろんな人とおしゃべり, 聞いたりしてるうちには, いろんなものが見えないものが, 見えてきたりしてね, するんじゃないでしようか(No23-1-427~438)
情報提供者	No1, No3, No.5, No.7, No.8, No.9, No.10, No.11, No.14, No.17, No.20, No.21, No.22, No.25, No.26, No.27, No.28, No.29, No.30,

-タ

**舞臺:**家族の人が来るのが少ない(32-3-227)

すごく感激してくれる。おせんべい一枚でも喜んでくれる(32-3-246~247)

愛情が深まるくノンバーバルなコミュニケーションによる全身での喜びの表現(32-3-272~273)

かわいい、童心に返ったみたい(A-3-298)、かわいい、甘えるような態度(32-3-334~335)

私を待っている(32-3-333)

肩撫でると視まなくなる(32-3-339~342)

**QQ金:**いろいろな年寄りの世界がわかる。自分が見習うこともあるし、自分の体験話ってみんなが喜ぶこともある(32-4-240~241)

**(Nさん)**風呂に入れてやる。年寄りはきたないからと風呂と一緒にはいりたがらない人もいる(32-6-101~102)

**(敵馬)**マンションね。~そこに若い奥さんいて、私より一回り以上も若いけど、丁度だんなさんがなくなった頃で、~

~いた時もそうだけど、いっぱい買い物してね、して昨日行ったらねいっぱいお土産買って来てさ、

~そしてここにも来てくれるし、~なんかもってつた以上にもってきたら悪いなと思うけど、お母さん亡くなったりしたの~

今度は私がしてあげる番なのに、遠くて、とか言ってくれるからさ、うれしくて(33-1-691~722)

~仲良くしてくれるからありがたい(33-1-737)

**隣の部屋の病室の人:**ご飯の時、礼拝の時等の出かけるとき一緒に行ってた。自分はお互い助け合いと思っていたし、

そうやって隣近所と助け合いながら過ごしてきたので、できることをやるのは当たり前と思っていた。(33-23F0341)

**舞臺:**隣の入居者が来て豆をおすそわけに来る。Cさんは1番若いから膏薬を塗ったりはったりしてあげる(34-1'-F61~62)

隣組やからね。隣の隣だから、痛いところに膏薬はったりね。(34-1-75~78)

**舞臺:**刺繍の作成。前回できたものは人にあげた。(34-F2-0385)

前回作っていたケープは完成し、(調査者に)見せようと思ったがあげてしまった。(34-F0381)

**孫と孫の室:**孫の誕生日だしね、~(羽根)から魚送ってきたんだってさ、それカジカ好きなもんだからカジカ汁煮て頂戴とか、ちょっと料理してくるんだけどさ、~カジカ汁味付けして頂戴とか電話きてたのさ、~私に味付けにきてって言うのさ~娘が婿さんと孫といふのさ、娘死んじゃったからね~それ(カジカ汁)食べたくて待てるの、ま料理もなんもできないから~それを楽しみにしてくれるんだけど(35-2-106~134)

**ケアハウス周辺:**あそこの草取りしたりさ、草生えたら取ったりしてさ、ちょっとそういうこまい手伝いしてね、~ボランティアってね、自分の体のためにさ、動かさないと太るしよ(28-1-475~483)

**高齢入居者の部屋:**(賛美歌ファイルの)番号がね全然おかしい~順番に並べた~わかりやすいしよ

(28-F0472-354~454)

**ケアハウス全体(サークル?):**みんな本当に神様のお話をしながら、ここで支えあってってということは、素晴らしい願ってもないような気がして(23-1-79)

ほとんど1年中(お花の)奉仕、Tさんっていう方がね、~お花の博士だそうす、次々と咲かせて下さって、~朝早くからいらして、次

から次へと楽しませて下さってね、恵まれてますよね、~ケアハウスの中のKさんって方がいらして、雪を早く融けるようにの心使

いだとか、たまった草を排水口の~そういうのを土とかそういうもんをとって~それから草刈ってそのご奉仕して下さいね、だか

らいろんな人の善意っていうかな、そんな感じですよ~して施設で働かれる皆様もね、やっぱり精神がキリスト教でっていうこと

になってるので、心尽くして下さい~お掃除の方とかみんな一生懸命の姿ですよ、お食事の用意からね、~ほのほのと

「した感じして、ギスギスしたところがないんですよえ、~だからそういう点で、でもわかりませんけど、やっぱり違う煮

えの方もいるかもしれないし(23-1137~162)

**QQ金(賞金活動):**誕生日には、いろいろ自分達ができることをして差し上げる(23-2-116)

**サークル関係:**私なんか何もしないの、みんなしてもらおうの、荷物もちゃんとエレベータまで乗せてもらおうね、何もえぼってるん

だよ、~そういつたら笑ってるの、ここでもえらそう願ってるけどさ、自分だけ内心は小さくなってんですよ、遠慮してるんですよ、

~病人がね、身体障害者の手をひっぱって歩いてるんですからって、「お互いさますよ」って言って(27-1-465~493)

そういう友達がいる私は幸せと思う~ここへきたときもその人たちに助けられた、~別に「どうのこうの」言わないけど、金ってね、

おしゃべりしてお茶飲んでいればその間だけ、そうすると案外気持ちが落ち着くの、帰ってくる頃には、だからちょっとすっきりする

でしょう、~孫みたいな友達が~すごくお世話になったの~今でも病院に行くついでと車でここまで送ってくれるぐらいだからね、

(27-1-496~511)

お天気悪くて、後にしようって言ったの、日にちをかえてね(27-3-186~187)

みんな私より若いよ~27さんが見本だから風邪ひかないでよとか~27さん目標にしてね

~自慢の方が多いけどさ(27-3-692~700)

**?ケアハウス入居者と日常性の中で:**豆好きなの、だから豆煮たり、結構たくさんあるから、みなさんに~親しい人に、

~いきのいい人が、お膳もてないから、ワゴン車持ってきてくれたりね、みなさんにお世話になるんだ~生かせてもらってるようなもの

みんなにねよくして頂いてるからね~自分がこんなんだからね、相手の気持ちもやっぱりわかるの~みんなも痛みをわかってくれる

人が(27-3-159~173)<共鳴性によるつながり??>

面倒見がいいから、これはこういうのはあの人にしてもらおうかね(27-3-484)

麗しい本人の差: なんも気兼ねしないで泊めてもらえる～大工さんがしょっちゅう入ってるの、足悪いものだから～ここにこういうのつけたらいいよとかって～私が見本だからね、こういうところにも手すりつけたらいい～そうそういろんな経験上ね(27-3-266～275)

ケアハウス内: 封筒を事務所に提供している。紙を皆さんからもらっている。～事務所の方が喜んでくれる(22-1-53～56)

ケアハウス内: みんなも「ダビングして頂戴、して頂戴」っていうから、してやるのも簡単でしょ、これね。(9-1-34～35)  
こういうの珍しいものもらったらから配るねって、～みんなで少しづつ珍しいもの食べたりね(9-2-672-675)

読手紙の差: こやってあちからから貰うんですよ、こやって皆さんから～あそこのサンタクロース描いたらねこれを上げる方にたしての～その文章をつけるのがね、また書きながら考えて(7-1-60～75)

